デカメロン

ボッカッチオ著

大澤貞藏譯

デカメロン

天佑社發行

作者の序

親愛なる美しき淑女諸君。猛烈な嫉妬の炎は、只高所に於てのみ其の暴威を振ふのだと私はいつも思つてゐた。賢者が屢々さう云ふのを聞いたし、最善の書物にもそう書いてあるのを讀んだからである。然るに今では自分自身の悲しい經驗に依つて、其の反對なることを知つたから、從つて私の考へも變つて來た。私は眞つ直な道を取り、最も低く且つ最も人目に掛らぬ場所を選んだのだけれ共、それは無駄だつた。猛烈な嫉妬を免れることが出來なかつたのである。私は取るに足らぬ小説を著はし、極めて平明で親み易い散文體でそれを書いたが、それにも拘らず、耳も破れんばかり執念深い怒號を四方八方から浴せかけられた。併し幾ら私に蛇を放つたつて駄目だ。彼等が如何に罵詈嘲弄しても私の仕事を中止させることは出來ない。私は構はず一旦始めた著作を續けた。何の才能も取柄もない作家に限つて無事安泰なのだといふ哲學者の言葉に從へば、斯くも憎惡に滿ちた迫害を受ける以上は、私のこの作は屹度餘つ程いゝ所があるに違いないと思つて、自ら或種の慰めを覺えた程だ。

皆樣には迚も信じられない程だらうと思ふが、私に對する多くの批評家は、私が諸君を美しいと思ふのがいけないといふのだ。そして諸孃を慰め、喜ばし、美しさを讃へるのが不名譽なことだと主張するのだ。併し實際彼等はさういふのだ。もつと考へ深い人達は又かういふ——私程の年配になつてこんな下らぬ事に携はるのが宜しくない、男女の艶事なんかのことを澤山語つたり、始終諸孃方を呼びかけたりするのは、若い青年でなければいけない——と。又或る人々は、私の榮譽と名聲を慮る振りをして、私は皆樣に愚にもつかぬ話をして時を空費するよりも、

詩神達と一緒にパルナス山（ギリシャに於ける詩神の座所）に行つた方がいゝと云つて吳れる。もつと鈍で口の惡い人達は又、馬鹿氣た小說なんか書く暇に生活の稼ぎでもする方がいゝ抔と、平氣な顏していふ。中には私の作物をけなして、諸孃方に下らぬものと思はせ樣として、玆に書いてあることは事實と違ふ、私の筆で全で書換へられて元の形は見えない抔と云つて、それを人々に信じさせようとしてゐる。

こんな具合で淑女諸君、私が皆樣の爲に著作をしてゐる間に殘酷な迫害は四方八方から私に押寄せて來た。併し私はあなた方を滿足させる爲と思つて非常な忍耐と勇敢とを以てそれに堪へた。私の辯護を十分に成遂げ得られるのは皆樣の他にはないけれ共、私とても此の場合默つて居るべきでないと思ふ。と云つて私は正式な答辯を與へたいといふ譯ではないし、そうする價値のある敵だとも思つてゐない。なアに、私がほんの短い卽席的の返答をしてやれば彼等は正氣に返るのだ。私が彼等を恐れて默つてるのだと誤解される心配さへなければ、その手數だつて省くのだ。併し彼等の反對の要目に逐つて回答するに先ち、私の主意に最も適合する一つの物語をさして貰はう。併しお仕舞ひまでは話さずに、必要な一部分丈けを話して、特にあなた方の爲に綴つた物語の中には入らぬ樣にしよう。そこで之から批評家に云ふ。

批評家に與ふ

神父フィリップの鵞鳥

我々の美しき都フロレンスに、昔一人の素性賤しき男があつた。併し身分の割にしては金持で手腕ある商人であ

つた。彼は名前をフィリップ・バルダシといひ、夫婦は互に深く愛し合つてゐた。彼等は至極仲睦じく、互に喜ばし合ふことのみを絶えず考へてゐた。然るに彼の妻が亡くなつて完全な結合は破れた。そして唯つた二歳の息子と二人切り取り殘された夫は、深い悲歎に陷り、世界中の何物よりも愛してゐた人を失つた悲みは如何にしても慰まれなかつた。彼は悲歎の餘り遂に意を決して、人間との交りを全く放棄し、息子と共に全身を捧げて神に仕へることとした。之を實行する爲に彼は所有財産を悉く貧民に分け與へた。そしてモント・アジナリオに隱退して森林の奥の小洞(ほこら)に入つて、他人の御布施に依つて生活しながら祈禱と苦行とに時を費し、息子には俗世間のことは一切知らせず、唯神の道を敎ふるを以て彼の職務としてゐた。俗世のことを知らせれば、息子が天の道を外れるかも知れぬと恐れたのである。彼は永遠の生命のことや、神の榮光や聖徒の祝福以外のことは何にも子供に語らず、永久の門外出も許さず洞の中に留めて置いて、鳥や獸の他は何物も見せなかつた。自分がフロレンスに托鉢に行く時には洞の入口に錠を下して、彼を其の中に監禁して置くのであつた。それ故息子は一度も森の外を見ず、娘とか女とかいふ樣な物が世界にあることも知らずに十八歳に達した。

すると或る時、もう年老ひた父親の隱者が、例の如くフロレンスへ托鉢に出掛けようとすると、青年は御父樣何處へ行くのですかと尋ねた。父親は答へて『俺(わし)は此處から程近いフロレンスといふ都へ托鉢に行くのだ。』と云ふと息子は『いつか私を連れてつて下さい。あなたを援(たす)けて下さる聖(とうと)い慈悲深い人達を私も知りたいんです。あなたはもう御老年(としより)で、身體が衰へて其處へ行けなくなるのも直きでせうが、私は若くつて頑丈なんですから、之からは私が行つてさういふ良い人達に私達の必要品を下さる樣に賴みませう。さうすれば御父樣は此處に靜(じつ)としていらつし

やれるのです。それに若し神樣の思召であなたが亡くなられる樣なことがあつたら、誰も知らない私は一體何うなるでせう？』

老人は此の理屈ある申出は全く尤もだと思つた。そして息子の信仰は十分强固になつて居るから、人生の如何なる誘惑や變化に遭はうとも、精神のぐらつく樣なことはないと思つたので、直ちに承諾して彼をフロレンスに連れて行つた。靑年は恰かも雲から落ちた人のやうに、見るもの總てに驚きの目を見張つた。宮殿、邸宅、敎會堂等を讃嘆しつゝ、父親に向つて種々な物の名前を尋ねた。父親は一々丁寧に云つて聞かした。斯くして今迄見たことも聞いたこともなかつた樣々な物に就て一々父親に問ひ糺してゐる中に彼は、美しい衣服を着た澤山の若い婦人が結婚の祝宴から歸つて來るのを見た。彼は目を据えて彼女等を見てゐたが、あれは何ですかと老人に訊いた。『お前あんな物を見てはいけない。あれは非常に危險な物なのだから』と云つたが、彼はそれでも一體何ていふものですか？』父親は息子の心に少しでも濁れた考へを入れたくなかつた。然るに若し本當のことを話せば子供は尙ほ一層詳しく聞糺して遂に色慾を起す樣になるかも知れないと恐れて、それは鵞鳥だと云つて聞かせた。すると實に驚嘆すべき事が持ち上つて來た！　今まで斯ういふ鵞鳥を一度も見も聞きもしたことのない靑年は、それを見て不思議な感動を受けた。つい今しがた生れて初めて見たばかりの壯大な御殿や、立派な馬や、肥え太つた牛なんかはもう少しも見たくはなくなつて叫んだ『お父樣、どうか私にあの鵞鳥を二三匹下さい。』『何だつて！』と老人は叫んで『あんな物のことは考へなさんな。あれは有害な生物（いきもの）だから。』『お父樣、一體あんな奇麗なものが有害だなんてことがあるでせうか？』『あるともさ、確かに有害なんだよ、お前。』『私にはあなたのいふことが少しも分りません。此の鵞鳥が有害だなん

ていふ譯も分りません。こんな美しいこんな氣持のよい物は生れてから見たことがないんですもの。お父様が私に見せて下すつた天使でも、本當にこの鷺鳥ほど綺麗で可愛らしいか知らんと疑ふ位ゐです。どうにかして一匹私達の小舍へ持つて行けないもんでせうか？　私が世話をして餌(えさ)をやりますよ。』『持つて行くのは止さうよ。何を食べさしとくのか判らないからね。』

父親は之に從つて、凡ゆる敎育や訓戒よりも自然的本能の方が力強いものであることを知り、息子をフロレンスに連れて來た事を後悔した……併し話は之位にして、わざ〳〵此の物語を語つた當の相手に戻らねばならぬ。

私に對する批評家の中の或る人々は、私があんまり美しき淑女諸君に敬意を表し過ぎると云つて私を非難する。だが私は全世界に向つて誓ふ。私は美しき婦人諸君が非常に好きで、諸君を喜ばす爲とならばどんな事でもする、と。彼等が惡いと思へば彼等に取つては一層惡く見えるのだ。併し私は反問し度い。私が婦人達を崇拜するに何も不思議はないではないか、惡いこともないではないか？　と。たとへ私が美しき皆様の戀人の一人であつたにしても、それは寧ろ當然なことではないか。それが惡い抔と云ふ人間は、自然の神から生きた魂を授かつてゐないので、戀の愉快を味ふことも、その力を知ることも出來ない奴で、憐み輕蔑してやるより他仕方がない。

私の年齡(とし)のことなんか云ふ者は、彼等自身の無智を曝(さら)け出してゐる丈けだ。年老つて精力家の澤山あることは誰だつて知つてゐるのに、それを彼等は知らないからだ。最も優秀な人であつて、極めて老年に達する迄、婦人達を樂ますことを喜びとなし名譽となした例を、私は擧げたいと思へば澤山擧げることが出來る。それがどんな人々だか彼等批評家に分らないなら、勝手に御探しなさいだ。私はそんな廻り道をしてゐる暇はない。

パルナス山の詩神等の許へ行けといふ忠告は非常に結構だといふことは私も認める。併し誰でもそこへ行けるとは限らないし、たとひ行けても其處へ行かずに詩の神達に似てゐる人々の所へ行つたつて惡いことはない。詩の神は女性なのだから、諸嬢(みなさん)と似通つた點が澤山あるに違ひない。それ故私が熱心な女性崇拝者であつても、それは許さるべきことだ。そして私が毎日の終りに附けた戀歌を書く時には確かに詩の神が私を訪れて呉れた。從つて本書中の澤山の話を書く時、私は批評家の心配して呉れる程パルナス山から遠ざかつてゐなかつたのだと斷定して差支へない。

私を憐んで、何か他に生活の糧(かて)を得る仕事でも行(や)れと云つて呉れる御親切な人のところへ、若し私が行つてパンを下さいと頼んだら、彼等は何と答へるか、私はよく知つてゐる。彼等は屹度云ふだらう。『彼方へ行つて作話(つくりばなし)からパンでも得給へ。』と。成程昔の詩人は他の多くの人達が勤勉や勞働で得るより以上の所得を作話から得た、が今日そうはいかない。併し神の御慈悲で私は今迄未だ困つたことはない。よし又貧乏したにしても、私はそれに堪ゆる方法を知つてゐるから、私を憐んだり餘計な心配したりすることは御無用に願ひたい。

私の述べた物語が實際あつた事件に形が違つてゐるといふ人には、私が作り歪(ゆが)めたといふ其の原(もと)の形を見せて貰ひ度いものだ。それが出來ないなら勝手に何とでも思つてゐるがいゝ。私は唯、彼等は私の作品をけなす爲めにいい加減な嘘を云つてゐるのだと云ふ丈けだ。

之丈け答へて置けば現在の處十分のやうに私には思はれる。そして私は、皆樣の愛顧の下に始めた此の著作が、神樣及び皆樣の御助勢に依つて、必らず完成し得るものと思つてゐる。私は殘忍なる嫉妬の息吹(いぶき)に依つて中斷され

ることなく、そんな物は見向きもすまい。どんなに非度く迫害されたところで、そんな事は私に取つて風に吹き捲られた砂煙でしかない。私に對する批評家は默つてるのが一番いゝのだ。彼等が幾ら喧しく責めたてても私は止めはしないのだから。彼等の心が冷却してゐて戀が出來ないのなら、知らん顏してゐればいゝことだ。私は僅かな餘命を自分の好むやうに送るんだから、彼等のおせつかいは要らない。…………だがもう之位にして物語に移らう。

デカメロン

デカメロン

ボッカッチオ作

大澤貞藏譯

第一日

（デカメロン第一日の初まり）先づ作者は此の物語の語られし所以を述べ、それよりパンピニアの司會の下に各自面白き物語をなすに至る。

いとも優雅（しとやか）なる御婦人方、私は貴女方が本來憐憫の心厚きことを考へる度毎に、此の書物の初まりを悲しく厭はしくお思ひになるであらうと信ずる。何故なら此の物語は、つい近頃私共の町に恐ろしい死神を齎（もた）らしたあの疫病のことから始まつてゐるので、その暴威を目撃したり、荒廢の有樣を聞いたりした者は誰でもそう感じられるに違ひないからである。

けれ共本書には歎きと悲みの他には何もないと思込んで、之以上讀むことを止められるやうなことは

私の本意ではない。此の恐ろしき初まりも、徒歩で旅をする人に取つての高く險しき山の如きものであつて、それを越しさへすれば美しく氣持の良い野原が開けてゐるので、登り途や下り途が難儀であればある丈け後の愉快は却つて大きいのである。快樂の末が苦痛であることが多いやうに、苦みが歡びを以て終ることも多いのである。

此の短い――實際短い、ほんの一言二言でいゝのだ――不愉快な事が濟むと、すぐに私が前に約束したやうな愉快な樂みが來るのである。それは故さらに私が皆樣の爲に用意して置かなかつたなら、とても此の樣な初まりから豫期し得ない程面白いものである。實際、私の取つたこんな途でなしに、何か他の途を通つて貴女方を私の望む所へお連れすることが出來るなら、喜んでそうしたのであるが、その疫病のことを云はないと實際の事柄(それは後にお分りになるが)を述べることが不可能なので、止むを得ず事實の由來をお話しすることにしよう。

そこで先づ云はねばならぬことは、一三四八年に於てあの疫病が、伊太利中でも最も美はしき有名な都フロレンスに迄やつて來たのことである。此の病氣たるや天の星の仕業か或は我等の不正を怒つて神が人間に與へた罰か知らぬが、兎に角數年前東國に勃發(はつぱつ)して多くの人命を奪ひ、勢ひ抗ふべくもなく西へ々々と蔓延して大騷亂を釀しつゝ遂にフロレンスに達したのであつた。

此都でも人間の能ふ限りの技術と智慧とを用ひて、不潔物を悉く市外に取拂ふ爲に人を雇ふとか、病人は一切市中に入れないとか、其他一般の健康を維持する爲に樣々の手段を講じたり、又信心深い人達は一度ならず再三行列をしたり色々な儀式を行つて虛心な哀願を神に向つて捧げたのであるけれども上記の年の始めには疫病は旣に恐ろしい有樣を呈しかけてゐたのである。それも鼻血を出すと必ず死んだ東邦のとは事變り、此地では男も女も股の附根や腋下に、人に依つて半熟の林檎大のから卵大、其他大小樣々の腫物—普通の所謂瘤が出來て、それが見る間に全身滿遍なく擴がるのであつた。それから今度は病氣の樣子が變つて腕、股、其他全身に黑點や青い所が現はれて、それが大きく散らはつてる事もあれば小さく密着してる場合もある。腫物が出來ても斑點が出來ても程なく死ぬことは確かなのであるが必然死ぬべき病氣なのか或は無智な醫者等にはその病原が分らず從つてそれに對抗すべき手段を知らぬ爲めか、何れにしても之を治療する醫者も藥もなかつた。何等醫學的敎養のない者は單に一般の醫者のみでなく、普通の男女にも多かつたから、其の無能の爲に、癒る者は滅多に無かつたのみならず、遲い速いの差こそあれ、斯かる徵候の現はれてより三日と經たぬ間に殆んど凡ての患者は死亡した。多くの熱とか其他別な徵候は少しもないのである。

此病氣の一層恐ろしいことは、それに罹つた人に少しでも接觸しようものなら、火が脂肪や乾燥した

物に燃え付くが如くに忽ち病が飛移ることであつた。そして猶ほ惡いことには、健康者がそれに罹つてる人と談話をしたり又は觸れたりすると疫病が傳染するといふ計りでなく、唯患者がつけてゐた着物を他に觸れた丈けで直ちにその人に傳染するのであつた。私の云はうとすることは餘りに不思議なことで、私自身以外の人も之を目擊したのでなかつたなら、假令信賴するに足る人がそれを私に語つたにしても、そんなことを信ぜざるは勿論、書かうなぞとは敢てしなかにたであらう。併し誰でも知てゐる事だから云ふが、病氣の傳染性と云つたら非常なもので、人間にうつるのみでなく、たとひ動物でも、病人又は死人の着物や持物に觸れると傳染するは固より、極めて短時間内に死ぬのである。私は前にも云つたやうに自分の目で見たのであるが、或日のこと、病氣で死んだ或る貧乏な男の襤褸着物が通りに放り出されると、二匹の豚がやつて來て、よくやる樣に、鼻でかき探したり齒で啣へておつ振つたりしてゐたが、見てゐる中に恰ど毒でも食つたやうに二匹共苦み出して、襤褸の上に斃れて了つた。こう云つた事や、まだもつと惡いことを見聞きするにつけ、生殘つてゐた人々は恐ろしくて心配で堪らない。遂に彼等は病人や自分達の持物凡てから逃れ避けて銘々自分一人の安全を計らうといふ慘酷な決心をするに至つた。或る人々は疫病を避くるに最もよき方法は節制をして、凡て極端に愼むにありとなして、團體を作り、一人も病人のなかつた家に閉籠つた。彼等は此所で最もよき食物と葡萄酒とを極めて適度に

用ひ、あらゆる感能的快樂を愼み、病人や死人のことには何事も耳を籍さず、他人に面會せず、音樂や其他仲間の中に行はるゝ遊び事をして時を過してゐた。或る人々は又反對の意見を稱へて、斯かる恐ろしき疫病を妨止するに最もよき手段はうんと飮んで、うんと騷いで、唱つたり騷いたりしながら街を練り歩くことだと主張して、其結果がどうならうとそんな事は無視し嘲笑した。そして最善と思ふ通りを實行して、夜晝のお構ひなしに此所彼所の居酒屋で無暗矢鱈に飮んでは亂痴氣騷ぎをし、何か面白さうなことのある噂を聞くと他人の家へでも何でも此の通りにして押掛けて行つた。そんなことが容易く出來たといふのは、誰も彼も(全で自分の命が直きに無くなりでもするかのやうに)絕望の餘り我身も持物も顧みなかつたので、大概の家は誰でも入れるし、知らない人でもまるで自分が其家の主人でゞもあるかのやうに自由氣儘に振舞ふことが出來たからである。併しこんな野蠻な生活は送つてゐても、病人からは出來る丈け避けた。此市のかゝる不幸や歎きの中にあつては、人間の法律や神の掟の尊い權力もそれを實行すべき人がないので全く無力になつて了つた。取締の任にある人々とて他の人と同樣死んだり病んだりしてゐるし、手傳つて吳れる筈の下役達とてもないので、其の役目を果たすことが出來なかつたものだから、誰でも好き勝手なことが出來たのだ。

或る人達は此の兩者の中間を選んで、前者のやうに飮食に嚴格な規律を設けることも無く又、後者の

やうに淫蕩(いんたう)や不節節に走ることがなかつたが、自分達の欲望を滿足さす爲には何でもそれに必要な丈けの量を用ひた。そして家に計り閉籠つてゐないで、或はいゝ香のする花束や草束を手に持ち、或は種々な香料を携へて歩いて、時々それを鼻の所へ持つて行く。何處も彼處も死體や病人の發散物や藥品の臭ひで空氣が充たされてゐるから、頭腦を芳香で守護するにはそれがいゝと思ふからである。非常に多くの男女はかゝる動機に動かされ、自己以外のことは何事も念頭になく、市や家や親戚財產等を凡て置去りにして外國へ逃れるか、少くとも田舍の屋敷へ避難する樣は、恰も、そうすれば此の疫病を以て人間の罪を罰しようとなさる神の怒りが避難所にゐる彼等の所まではやつて來られないで、市の城壁內に閉込められてゐる人達丈けを探し出して之を皆殺しにしやうと目論んでゐると思つてるのか、でなければ、市の破滅の時が來て最早や何人もそこに生存してゐることは出來なくなつたとでも思つてるやうであつた。

斯く人々の意見は區々であつたけれ共、皆々死亡した譯でなく、と云つて皆々生命を助かつた譯でもなかつたので、傳染した者は、先に自分が病者に不親切であつた例に依つて、今度は健康者から放任されて一人で苦み悶えて死ぬのであつた。市民は市民を見棄て、隣の人でも面倒見て吳れぬ計りか、親類同志でも滅多に互に顏を合せることなく、唯遠方から見る丈けといふ始末。傳染の恐怖が人心の奥底までも

浸してるから、兄は弟を捨て、叔父は甥を妹は兄を棄て、中には妻にして夫を捨て、とても信じられない程だが更に激しいのになると父母でありながら子供の傍で看病する事をせず、恰も塵屑同様に之を捨去るのであつた。斯くて罹病した大部分の男女は、友の情けや(そんなのは滅多になかつたが)召使の慾張り(法外の給金欲しさに使はれるのだ)から助力と看護を受けるに過ぎなかつた。ところがこんな婢僕すら極く稀れだし、又あつたにしても氣は利かず仕事にも全く不馴れなので、病人が頼まなければ何も仕ては吳れず、死んだ時に通知をする位るが關の山だ。おまけに慾深の爲に生命を落すことも屢々ある。

病人がこんなに隣人や、親類や、友達等から見離されるものだから、甚だ惡い前例なき弊習が生じて來た。卽ちどんな婦人でも、どんなに若く美しく身分よき婦人でも、老若の關係なく男の僕に侍かれることを何とも思はず、必要な場合には侍婦の前でするのと同じに平氣で裸にもなれば身體の何所でも露出して恥ぢなかつた。そんなのが死を免れた曉、將來貞操なんかを無視するに至るは極めて見易き道理である。加之適當の看護を得れば當然恢復すべき者も澤山死んだ。看病の不足や病勢の猛烈な爲に晝夜の差別なく死亡する人員は非常なもので、見るは愚か聞くさえに恐ろしい程であつたから、生存者は必要に迫られて普通人の習慣に全然反する行爲を爲すに至つたのであつた。

其時分の習慣は(實際今でも我々はそうだが)人が死ぬと親類の婦人達や友人はその家に集まつて極近

親の人と共に悲むのであつた。戸外には男の親類や近隣の人々や市民等が集まつて、死人の身分相應の人類の坊様が來る。そこで死者と同身分の人達が死體を肩に載せて、厳かな炬火(かゞりび)や葬樂の行列を作つて、彼が生前選定して置いた教會へと運んで行くのであつた。然るに疫癘の毒害が增進し始めてからといふものは、多くの儀式は中絶して別な慣はしが之に代つた。死ぬ時に多勢の婦人が身邊に居ないどころか、人つ子一人居て貰へないで死ぬ者が多いのだから、悲歎の哀泣や涙を注がれるやうなことは滅多になく、反對に、笑ひ騒いで酒宴を催すなどのことも屢々あつて、歸人達までが、健康を計るといふ口實の下に本來の柔しい感情などはかなぐり捨てゝ之に加はるに至つた。死體が墓場へ行くのに十一二人以上の隣人が隨行するやうなことは極めて稀れで、そんなのでも品格ある立派な仲間が擔いで行くのではなく、擔ぎ人足とか墓堀りとか云つた特殊な最低階級の疫病人夫と稱する人々が金の爲に屍棺を運ぶので、敎會とても死者が選んだ所でなく何所でも最寄の寺に持つて行くのだ。先導の牧師が五六人に過ぎないことがよくあるし、一人もないことすらある。死體は空の墓穴が見付かり次第直ちに疫病人夫の手を借りて、鎮魂祭の歌も何も無しに埋められる。

平民及び多數の中流階級の慘めなことゝ云つたら尙一層甚だしく、多くは恢復する希望又は貧乏の爲に他の人々と共に家に止つてゐる。それ故日々無數の病人が出來ても、看護人も手傳人も居ないから、

悉く死斃れた。夜晝なく街路で死ぬ者が多く、屋内で死んだ者でも、第一に其の死亡して解體する臭氣で、死んだのが分るのである。近親の人達は普通若し得られゝば數人の擔ぎ人足の手を借りて（それも基督信者らしき同情心に動かされてすると云ふより寧ろ死體の腐る臭ひが恐ろしさにするのだが）屍を屋外に運出して、戸の外に置くものだから、外を歩くと、殊に朝抔は其の數は夥しいものであつた。それから棺を買ふ。若し棺が無ければ死體を只の板に載せる。棺には死骸を二つも三つも積重ねるので、夫婦、親子、兄弟等が一緒に搬び去られることは少しも珍らしくはなく屢々のことであつた。一つの死骸に二人の僧が附添つて行くと、途中から三つ四つ以上の棺が加はつて、最初一つの棺を埋葬する積りだつたものが、六つも七つも或はもつと多くを埋めねばならないやうなこともよくあつた。立派な行列もなく、涙を注ぐ者や蠟燭を上げる者もない。餘りに悲慘なる光景に馴れた目には、人間の死ぬのも平常の時山羊一匹死ぬ程にしか心に響かぬのである。それ故、平時時たま起る小事件位では、最も賢明なる人に對してすら實證せられざる訓戒、即ち大なる災害に打勝つには忍耐に依らねばならぬ、といふことが、一般暗愚の人々に氣付かれず、顧みられないのは寧ろ常然と云はなければならない。

時を選ばず教會に運ばれる死體の數は非常に增加して最早や墓所の餘地なく、而かも古來の習慣に從つて夫々適當な場所に埋めねばならぬので、墓地の外側に深い幾つもの溝を掘り、恰も貨物を船中に積

込むが如くに、無數に積重ねて、唯溝を隱すに足る丈けの土を輕くその上に被せるに過ぎぬ。

併しこの樣に當市の悲慘事を悉く細述するを止めて、他方のことを少し云はう。市を襲ふたる不幸な運命は、それに隣接する村落をも決して見逃さなかつたから、城壁に圍まれた諸市は扨て置き（それらは規模こそ當市より小なれ何れも大同小異だから茲に更めて云ふ要はない）村落及び近接の地方では、貧しく憐れな田舍人等は、夜となく晝となく、家に倒れ野に斃れ、醫者も看護人もなく、家族の者と共に續々と死ぬ樣はさながら人間ではなく獸のやうであつた。こゝらの人々も亦市中の人の如くに、放縱に流れ、財產所有品を顧みず、來る日〳〵を生命の限りと思つて、家畜の子を產むを待たず、作物の收獲を待たず、過去の勞作の實りを待たずして、唯現在所藏の品を使果すに全力を注いだ。牛、馬、羊、山羊、鷄、いつも變らず人間に忠實なる犬までが、家を追はれて、未だ穀物も刈取らぬ畑を思ふ儘にさ迷ひ歩いてゐるのが見える。彼等は終日十分に草を食べて夜になると、恰ら理性ある者の如くに、敢て牧獸番人に追はるゝを待たず自ら家に歸つて來る。

扨て村を去つて再び都に戻る。天の慘酷（病勢の猛烈な爲め）と人間の殘酷（健康者が傳染を恐れて碌々病人を看護せず見捨てた爲め）とが加はつて、三月から七月にかけて、フロレンスの市內丈けで一萬以上の人が死んだ。疫癘發生以前に於てはそれ程の人間が此の都に住んでゐるとは何人も恐らく信じな

かつたであらう。曾ては貴族等の數多く住居せる大なる宮殿、美麗なる邸宅、立派な住居等が、今では上は殿樣夫妻より下は馬丁に至るまで、人つ子一人も住人の無くなつたものがどれ程あることか！賢き人、美しき婦人、ガレンやヒポクラテスやエスクラピアスの如き人ですら之こそ健康の模範であると斷言したであらうと思はれるやうな丈夫さうな若人等にして、朝には親戚、知己、朋友と共に食卓を圍みながら、夕には早や他界の人となつて祖先と席を並ぶる者が如何ばかり多かつたことであらう！

併し私はもう我々の慘狀を悉く繰返すに堪えなくなつたから、差支へなき限りは凡て省略して、必要な一事丈けを述べよう。かくて我が都には殆んど住民とては無くなつた時、或る火曜日の朝丁度法會の濟んだ時（確かなる筋より聞いたことであるが）、七人の若い婦人が新聖母院に集まつて居つた。他に人間と云つては邊りに殆んど見えなかつた。彼女等は皆親類、朋友、隣同志と云つた間柄であつて、十八歲から二十七歲までの年頃で、何れも聰明優雅にして敎育あり、快活な氣象を持つた美しい婦人達であつたが、今は此の悲しき時に適はしいやうに悉く喪服を纒ふて居つた。私は彼女達の名前を揭げることは出來るけれども、理由あつてそれは仕まい。彼等が自分の話した事の爲に赤面するやうなことがあつたり、子孫がそれを聞いたりするとよくないから。現在でこそ此の樣な談笑や娛樂は可なりに制裁があるけれども、疫癘當時に於ては若い人達に限らず相當年齡の人でさへあまり嚴しく云はれなかつたのだか

ら。併し物語を聞くに混亂を生じさせない爲に私は之から、彼等夫々に全然とは行かずとも多少似つかはしいやうな名前を付けて置かう。先づ第一番に最年長者をパムピネア、二番目をフイアメツタ、三番目をフイロメナ、四番目をエミリア、五番目をロウレツタ、六番目をライフイル、最後を(理由あつて)エリザとする。前以て何の約束があつた譯でもなく偶然教會の同じ場所に集合したので一つに環を作り、祈禱を言ふのも忘れて了つて、近頃の樣々な出來事に就て屢々溜呼を吐いた後、皆は談を始めた。すると一寸言葉の途絶えた時パムピネアが云つた。

『諸孃方、正當な方法で自己の權利を使行する人は何人をも侵害することはないといふことは私のみでなく皆樣もご存知でご座いませう。凡ての人は出來得る限り自分の生命を維持し保護すべき當然の權利を持つて居り、それが爲には時として人の生命を奪つてすら罪とは認められないやうな場合さへあつた位るです。そこで若し、人間の平安を監視すべき地位にある法律でさへ之を正當と認めるとすれば、我々の生命を保存する爲には、私共は他人に害を及ぼさない限りどんな手段を用ひてもそれは許さるゝに相違ありません。私は日毎々々に眼に致します數多の悲しむべき光景を考へます度每に、誰でも自分の生命の危險を感じない者はあるまいと思います(これは貴女方とてもご同樣でせう。)それに少しも不思議はありません。寧ろ(名々婦人らしい感情を持つて居りながら)此の恐るべき病に對する何等かの救濟

法を講じようとしないのこそ不思議に思はれます。私達が此所にかうして殘つてゐるのは何の爲でせうか。どれ程數多くの死體が此處に運ばれて埋められるか、それが見たい爲か、又は見る必要がある爲かとも思はれます。或は又、今では殆んど絶滅しかかつてゐる坊樣達が、定まりの時刻にお勤めをするかどうかそれが聞きたい爲のやうにも思はれます。或は又、私達の喪服に依つて、こゝへ來る人々に、私達の悲みの深い度合を示したいが爲に居るのかとも思はれます。併しみなそうではありません。此處から出て行つたところで、見る物と云つては唯、死體が運び出される所や病人の這ひ廻つてゐる有樣ばかりだし、でなければ、彼等の罪惡の爲にとうの昔に殺されてゐていゝやうな人達が、今ではお上の役人が病人夫共が、私達の血に渴えて、歩いたり馬に乘つたりしながら町を横行して我等を侮辱するのを見たり、下等な歌を唱つて人の不幸を嘲るのを聞く丈けだからです。耳にすることと云つては唯、「誰某は死んだ、誰某は死にかかつてゐる」といふことゝ、生殘つた者の歎きの聲ばりなのですもの。家へ歸つたつて、(貴女方も私と同じかどうか存じませんが)私の身内だつた人々は皆な居なくなつて殘るは只一人の下婢のみ、それを思ふと身の毛もよ立つ樣です。何處へ行つても死人の幽靈を見るやうな氣がして、それも平常の容貌ではなく、何所でそんなになつたのか恐ろしい樣子をしてゐるのです。ですから私は此

處に居たつて家に居たつて何處に居たつて落付いてゐられないのです。少しでも金があつて行場所のある者で町に殘つてゐる者は私達を除いては他に無いのだと思ふと一層恐ろしくなります。又幾人か居たにしても、そういふ人は事の善惡當不當に一切頓着なく、夜晝差別なしに、大勢寄つたり又は一人で好き勝手な眞似をしてゐるのを見ます。こんな事をするのは俗界の人計りかと思へばそうでなく、尼寺に居る尼僧達までが、他の人々のすることは自分等もしていゝ抔と信じて淫樂に耽り、誓ひも何も破つて浮氣放埒に陷り、それに依つて生命を維持しようとしてゐるそうでご座います。私達はこれら凡てのことを現在眼に見ながら、此處で一體何をしてゐるのでせうか？　私達は何を待ち夢みてゐるのでせうか？　何故私達は他の人々よりも自分の生命を粗末にするのでせう？　他の人達程自分の生命を大切に思はないのでせうか、それとも自分達の生命は他の人のよりも強固な鎖で以て肉體に結付いてゐるから、危險なんか少しも氣遣ふに及ばぬとでも思つてゐるのでせうか？　それは自己を欺いてゐるのですわ、そんなに思ふなんて何といふ馬鹿氣たことでせう！　隨分多くの若い男女が既に此の疫病に蹂躪せられ盡したことを一寸でも考へれば、此の事は直ぐに分る筈ですから、心次第で逃れることの出來るやうな災難に躊躇（ためらひ）や不注意の爲に陷らぬやうに仕ようではありませんか。それで私は最良の方法として、（若し皆樣がご同意なさるなら、他の人達が日々示して居ります例に傚ひまして、死を逃れ、他人の惡例から逃

れて、直ちに私等が幾らも持つて居ります田舍の住居に行き、そこで決して理性の範圍を超えないで出來る程度の小さな祭ごと、宴會、遊戲なんかを致しませう。其處では鳥の囀りが聞えませうし、草綠りの岡や谷間、海の如く波打つ穀物畑や種々樣々の樹木も見えませう。空は、どんなに怒つてるやうに見える時でも其の永遠の美を我々に隱そうとは仕ないでせうし、荒れ果てた市の城壁に比べれば見飽かぬ美しさがあるでせう。その上、空氣は新鮮ですし生活の必要品は豐富にありますし、悲慘な光景を見ることも少いでせう。勿論田舍の人でも町の人同樣病床に伏してゐる者はあるでせうが、それでも町に比べれば家と家が離れて居りますし、住人も少いのですから不快な印象は減ぜられるでせう。それに私から見れば私達は誰を置去りにする譯でもなく、却つて置去りにされてゐるのです。何故つて、私達の身內は皆死んで了つたが、死なゝい者は死を逃れる爲に、まるで私達なんか他人ででもあるかのやうに、人の困るのを見捨てゝ行つて了つたのですもの。ですから私達が斯やうな決心を致しましても誰も私達を咎むることは出來ません。從つて私達には心配も苦痛もなく、恐らく死そのものからも逃れ得るでせう。ですから、皆樣ご承知なら、下女や必要品を悉く携へて、今日は此所、明日は其處と、都合任せで面白可笑しく、神樣が此の疫病に終末を付けるのを見るまで、そして私達の生命がそれまで保つなら、そうしてゐるようではありませんか?。そして私は、或る人達には此處に止つてゐて放埒な生活をするの

が似つかはしいやうに、私達に取つては立派に此處を出て行くことが確かに適はしいといふことをご注意までに申上げて置きます。』

他の貴婦人達はパムピネアの申出を喜んだばかりか、大層熱心にそれを實行しようとして、直ちに出發の思案を廻らし始めた。けれども人並勝れて思慮深いフィロメナは云ふた、『皆樣パムピネア樣の發案は大變結構と思ひますが、併し貴女方のやうにそう無暗に突つ走つてはいけません。私達は皆婦人ばかりだといふことを考へて下さい。私達が集まれば、そこに忠告したり助言したりする男の人が居なければとても秩序を維持して行く事が出來ないといふことの分らない程お若い方は皆樣の中には居られますまい？　私達婦人は氣が變り易く、氣まぐれ澤山で疑ひ深く、臆病で小膽ですから、私達の他に誰も指導者が無かつたなら、私達の社會は直ぐに崩解して了つて、それは私等の手柄でもなく又本意でもあるまいと思はれます。ですから始める前に此の事を片付けた方がいゝでせう。』

『勿論男子は女子の頭腦ですから、』とエリザが云ふた『男子の力を借らないでは、私共の企てることで旨く成功することは滅多にご座いません。でもどこからそういふ人を探して來たらいゝでせう？　皆樣どなたもご存知の通り、私等の身寄は大部分亡くなつて了ひ、極く僅か生殘つてゐる人も、何處やら分らない所に樣々の群に入つて方々に散らばつて居りまして、私達同樣この疫病から逃れてゐるのです。

と云つて見も知らぬ人を選ぶも好ましくありません。何故と申しまして、私達が若し健康の爲を計らうと望むなら、何處へ行くにしましても氣晴らしと靜養とを求めて、退屈や醜聞の生じないやうに萬事取計らはねばなりませんからね。』婦人達が斯く議論してゐる時、三人の若き紳士が教會に這入つて來た。併し若いと云つても、其中で最も若い男でも二十五歳より下ではなく、彼等の愛の熱情は、當時の不幸も、朋友親戚の死亡も、更に自己安全の願ひさへ、之を消滅せしむるは愚か冷却せしむることすら出來なかつた。一人をパンフイロ、次をフイロストラト、次をデイオネオと呼び、何れも十分敎養ある愉快な人々であつて、彼等の戀人に逢ふのを、斯かる不幸なる時節の唯一の樂みとしてゐた。然るに偶然にもその三人の戀人といふのは皆前に擧げた七人の婦人の中に居り、他の四人の中の或る者は彼等と親戚關係であつた。彼等が婦人達を見たのと同時に婦人達も彼等を認めた。するとパムピネアが微笑(ほゝゑ)みつゝ云つた。『御覽なさい、運命は私達の企てを喜んでゐられるのですわ、三人の分別ある立派な青年を遂つて吳れたのですから。私達が仲間に入れる積りならば彼の人達はきつと私達の先達になり、從順な僕になることを厭とは申しますまいネ。』

イフイルは、若者の一人が彼女の戀人であつたので頰を紅らめて答へた。『どうぞお願ひですから、パムピネア樣、仰つしやることにお氣を付けて下さいな。私は此の紳士方が誰から見ても一つとして非難

の打所のない人々だといふことは十分よく知つて居りますし、こんな仕事より最つと大きな仕事でもすることが出來、又私達よりもつとずつと身分高く美しい婦人方のお伴をする價値のある人達だとも思ひますけれど、併し彼等は此處にお出での婦人方の中の或る方と戀し合つてゐらつしやることは明かなのですから、若しも彼の人達を一緒に連れて行つたなら、私達にも彼等にも何の過失もないのに、醜聞や非難を受けるやうな結果になりはすまいかとそれを恐れるので御座います。』

するとフィロメナが答へて云つた。『私は自ら貞淑に生き、良心の苛責を受けるやうな事さへして居らなければ、人が何と云はうと平氣ですよ。神と眞實とが常に私を護つて呉れますでせう。若し彼の人達さへお出でになるお積りなら、私はパピネアさん同樣、運命が私達の企てを喜んで居られるのだと申しますわ。』

他の婦人達は之を聞くと、最早や何も云はぬばかりか、紳士達を呼んで計畫を告げ、旅行に加はるやうに頼むことに一齊に賛成した。そこでパムピネアは無駄言を云はず立上ると、三人の中の一人と親戚であつたので、此方を見てゐる男達の所へ行き、物柔かな顔を以て彼等に挨拶をなし、扨て彼女等の計畫を語り、全く兄弟のやうな氣持で彼女達の道連れになつて貰ひたいといふことを皆に代つて頼んだ。始めの中紳士達はからかはれてるのだと思つたが、併し婦人の談の眞面目なのが分ると、瞬時も躊躇するこ

となく卽座に承諾して、出發に必要なことを何くれとなく指圖してから別れた。必要なる準備が全部整ふと、それらを集會の場所と定まつた所へ先送りして、次の朝（水曜日）の夜明けに、貴婦人達は侍女を引連れ、紳士等は三人の僕を連れて、都を立出でゝ、先づ最初の地と定めて置いた場所に到着した。其所は都を隔ることほんの一リーグ程に過ぎぬが、小さな岡の上に位し、何れの本道よりも相當離れて居り、種々の樹木生茂り、眼に快き綠の灌木を以て蔽はれてゐた。岡の頂上には宮殿があつて、その周圍には美麗なる庭園、氣持よき牧場、淸涼なる噴泉等があつた。中央は廣く立派な中庭であつて、それを取卷いて美しき繪畫を以て壯麗に飾付をした廻廊や大廣間其他數々の部屋が連なつてゐた。穴藏には最も品質優良な葡萄酒が山程あるが、それは謹嚴にして品位高き婦人よりも、勝れた味覺を有する酒客に適してゐた。彼等が行つて見ると宮殿は淸潔に整頓して居り、寢床の用意も出來て居り、何處も彼處も季節の花を以て飾られ、床には燈心草が振撒いてあつたので、彼等はすつかり滿足した。

皆が腰を下すと、紳士中でも一番愛嬌者で機智に富んだディオネオが云つた。――

『御婦人方、私達が此處へ參りましたのは我々の先見よりは寧ろ貴女方の思慮深きに依るところであります。貴女方は御銘々の心配をどう處置なさるお積りか私は存じませんが、私に於きましては私はもうそんなものはつい先刻都を立出でます時に皆そこへ置いて參りました。ですから貴女方は私と共に笑

つたり唱つたりして時を過す御決心が肝要です（勿論御品位を落さぬ程度に於てですがね）。それがお厭なら私を再び荒廢した都に追返して辛い思ひをおさせになつても構ひませんよ。』するとパムピネアも、心配なんか旣に振捨てゝ了つてあるかのやうに答へた。『ディオネオ樣、貴方のお云ひなさることは本當に賢いことですわ。私達も陽氣に暮そうと思つて居りますの、それが爲ばかりに悲みから逃れてこゝに來たのですからね。ですけれど極端なことは永續しませんから、此の樣に愉快な集まりの發案者たる私としましては、暫らくの間その愉快を續けさせたいと思ひますから、私達の中から一人司會者を選んで、皆は其人を會長として尊敬服從し、その人の方では又我々をして出來得る限り愉快に時を過させるやうに努めることに仕たらよいと思ひます。そこで誰も皆當局者の心勞と優越の喜びを經驗することが出來るやうに、そして又それを味はなかつた爲に經驗した者を羨んだりする者のないやうに、各自が一日宛その勞苦と榮譽とを享受するやうに致そうでは御座いませんか。先づ最初の司會者は皆で選ぶことに致しまして、毎日暮方になると會長は翌る日の會長を指名することにしませう。そして自分の支配權のある間は、我々が何處で何をして一日を過すかといふことを、自分の好むが儘に命令するのです。』

彼女の提案は一同の協賛を博し、滿場一致で彼女を第一日の女王（クイーン）に選んだ。するとフィロメナは一本の月桂樹の下に走り行き、數本の枝を折取つて一つの花冠を作り、それをパムピネアの頭上に冠らせた。

蓋し彼女は、月桂樹といふ者が人々に尊まれ、その葉を頂いた人達が大なる尊敬を受くるといふことを屢々聞いて居つたからであつた。斯くて彼等が共に生活して居つた期間中は、此の花冠が各自に對して君權と偉大との標章となつた。

そこで選ばれて女王となつたパムピネアは沈默を命じて、三人の僕及び侍婢等を呼寄せたる後、皆の沈默を待つて、次の如くに云つた。『私達がよき團體より一層よき團體に進んで、秩序あり愉快なる生活を送り、且つ出來る丈け永く非難なき共同生活を爲し得べき模範を第一番に示すために、私は先づディオネオ樣の僕のパルメロを以て給仕頭に任命し、料理場、穴藏、食堂等家事に關する一切のことを處理すべき責任を委託します。それからパンフイロ樣の僕のシリスコを出納掛(するとうがゝり)に任命し、パルメロの命令に從はせます。パンダロは其の御主人のフイロストラト樣のお世話をする他に、前に擧げた二人の僕を奪はれた紳士お二人にも御奉公なさい。私の下婢のミシアとフイロメナ樣の下婢のリシスカとは臺所で働らいて、パルメノが支給する品を料理なさい。ロウレツタ樣のシメラとフイアメツタ樣のストラチリアとは婦人方のお部屋の面倒を見て清潔に奇麗にして置きなさい。それからお前達皆によく呑込んでゐて貰はねばならぬことは、何處へ行かうが何處から歸らうが、どんなことを見聞きしようが、愉快な報知(しらせ)の外には一切私達に聞かせないやうに仕なければならぬことです、假令そうするのが辛い場合でもで

す。』右の樣な命令を簡單に申述べて一同の承諾を得ると彼女は立上つて快活に云つた。『此處には花園や牧場や其の他氣持のよい場所が澤山御座いますから、皆樣御隨意にお樂み下さい。そして九時になつたら皆な此所に集まつて涼しい所でお食事を致しませう。』

女王が愉快な集まりに散會を命じたので、紳士達や美しき淑女等は華麗な庭園を散歩しながら面白さうに談をしたり、種々(くさぐさ)の花を取混(まぜ)て花環や花束を作つたり、戀歌を唱つたりした。女王の命じた時刻までそうしてゐて歸つて見るとパルメノは大變意を用ひて彼の任務を果したらしく、階下の大廣間には純白の卓布で被はれた食卓に銀の樣に光り輝く玻璃のコップが備へられ、家中殘る隈なく金雀枝(エニシダ)の小枝や花が振撒いてあつた。彼等が差出された水で手を洗ふとパルメノは女王の命を受けて、皆樣席にお着き下さいと云つた。此上なく味良く調理された料理が並べられ、美はしき葡萄酒が持出されて次々と廻(めぐ)らされた。三人の僕は少しも音を立てぬやうに給仕をするし、何から何まで上等で上出來なので人々は大滿足を感じ、面白可笑しく語り合ひ戲れ合ひつゝ食事した。食事が終ると女王は樂器を持つて來るやうにと命じ、彼女の指圖に依つてデイオニオは六絃琴(ルート)、フイアメツタはヸオルを取つて舞踏曲を奏でた。そして婢僕等が食事にと去つた後で、女王も他の紳士淑女に混つて舞踏を舞ひ、それが一しきり濟むと歌を唱つた。かくして樂み居る中女王は最早や晝の休息の時だと思つた。そこで女王の認可を得て紳士達

は名々の部屋に引退いた。それは婦人達の室からは可成り離れてゐて。寢床は極めて良い具合に出來て居り、部屋は他の所同樣花が撒いてあつた。婦人逹の部屋もそれと變りがない。彼等は衣を脫ぎそして床に入つた。

十二時を過ぐるや間もなく女王は起出で、他の人逹をも呼起さした。日中餘り眠るのはよいことではないと彼女は云つた。それより彼等は長く綠の芝草の生へてゐる小さな牧場へ行つた。そこは日蔭になつて居て。柔な微風が戰いでゐた。女王は彼等に命じて圓形に座せしめたる後かく語つた。――

『まだ太陽は高く暑さも嚴しいので、耳に聞えるのは橄欖の木で鳴く蟬の聲ばかりで御坐います。ですから今他の場所を探すのは全く愚かなことです。此處は涼しうございますし、碁盤もあるし碁の名人もゐらつしやるのですから思ふ儘に遊ぶことが出來ます。併し、若し皆樣が御同意なら、對手や見物人にそう大した滿足を與へる譯でもないのに指人の一人は必らず厭な思ひをすると決つてゐるやうなそんな競技は止めにして、各自一同を娛ますやうな物語をして日中の暑さをまぎらすことにしようでは御座いませんか。皆なが話を仕切らない中に日は西に傾き始めて暑さも減ずることでせうから、そうしたら思ふ儘に遊ぶことが出來ますわ。若し此の考へが皆樣の御同意を得ますれば（此の事では私は皆樣の御希望通りに從ふことに決心して居りますのです）直ちに實行に取かゝらうではありませんか。若し御不承な

らば、夕方までは名々御隨意に時をお過しになつて宜しうございます。私に於いては唯喜んで皆樣の御希望に從ひます。』

婦人達も紳士達も悉くお話の方にしたいと云つたので、そこで女王は云つた。『宜しう御座います、皆樣御異議がないとすれば、今日第一日目には銘々御勝手の題目をお選び下さい。』そして彼女の右手に座して居たパンフイロに向ひ、何でもお好みの物語を始めて下さいといふことを極めて慇懃に賴んだ。彼は直ちにその請に應じて次の如く語り始め、人々は熱心に耳を傾けて聽いた。

第一話

キヤペレットは僞りの懺悔をなし僧侶を欺きて死す。すると彼は生存中頗ろの惡漢であつたに拘らず、死後は聖人と尊ばれキヤペレット聖人と稱せらる。

親愛なる淑女方、私達の爲す事は何でも萬物の創造主たる神の高く尊き御名に依つて爲すべきであります。そこで、私が最初にお話をすることになりましたので、先づ神の立派なる奇蹟の一例をお話申上げてそれを聞いてゐると、不滅の存在者としての神に對する我等の信仰が愈强固となり、常に彼を讚美するやうにしたいと思ひます。凡て世の中のことは變り易く滅び易くして、內からも外からも心配や苦

勞や惱みや其他無類の危險に取卷かれて居りますので、其の中に生活して居り、其の一部分である我々は、若しも神樣の特別なる御慈悲に依つて力と智慧とを授けられて居らなかつたならば、とてもそれに堪ゆることもそれから逃れることも出來ないものだといふことは、もう分り切つた事實であります。けれども私達は此の恵が何か我々自身の功績に依つて我々に與へられたものだと思つてはなりません。それは神樣御自身の好意から出たもので、曾ては我々と同じ人間であつたのだけれども併し此の世で神の御命令をよく守つた爲めに今では神と共に不滅の者となり祝福されて居るところの多くの人々の祈禱に依つて護られたものなのです。私達は恐らく斯やうに偉大なる審判者の前に出る勇氣がないものですから、私達が欲しいと願ふものを祈る時にはこれらの代言者に向つてするのです。彼等は彼等自身の經驗に依つて我々の弱點を知つてゐられるからです。併し神樣はそれよりももつと憐み深い御慈悲に滿ちて居られることを信ずることが出來ます。なぜかならば、我々の心の眼は神の御意の奥まで見透す程に明るくないものだから、時々間違ひをなして、神樣が永久に御前を退らしめたやうな者を至高至上の神に對する代言者として選ぶやうなことを仕ますけれども、神樣は代言者の無智や邪惡のことを考へるよりも、歎願者の意向の純粹なことを一層念慮に入れられて、恰かも彼の眼には歎願者の方が神聖なる者ででもあるかのやうに、その願を叶へて下さるのです。此の事は之から私が物語らうとする話に依つてよ

く分りませう。私は神の判斷に依つてではなく、人間の判斷に依つてそれを明言致します。

フランスにミユシシアといふ一人の男がありました。彼は大層金持の商人だつたので貴族になり、そしてフランス國王の弟で、字名をジツクラン本名をシヤルヽと呼ばるゝ方がボニフアス法王に招かれてタスカニイに行幸なされた時、隨行することになりました。ところが商人にはあり勝なことですが彼の取引が大變込入つた有樣になつてゐて直ぐにはそれを處理することが出來ないのを知ると、彼に代つてそれを處置すべき各方面の代理人を雇ふことに決めました。そして何事も極くいゝ具合に取極めが出來たのですが、唯誰に委任したら數人のドアガンデー人に對する貸金を取戻すことが出來るかに就て迷つてゐました。その理由(わけ)は、彼等は頑固で、惡性で、無法な嘘吐きな奴等だつたので、斯かる債務者に匹敵する程狡猾だと思はれるやうな人間を一人も思ひ出すことが出來なかつたのです。彼か此かと思ひ廻らした末に彼は、巴里の彼の家に屢々來たことのあるマスタア・キヤペレット・ダ・ブラトといふ男のことを思ひ起しました。フランス人は彼をキヤペレットと呼んでゐました。そして彼の身丈(せい)が低くつて、多少綺麗に着飾つてゐたものですから、人々はキヤペレットといふ名前の意味が分らずに多分彼はキヤペルロ(即ち花冠(ハナカザリ)のことで佛蘭西語ではシヤペレエといふ)といふのだが然し彼が大變小さいものだからキヤペルロでなくキヤペレットと呼ばれるのだらうと思つてゐました。それで彼は一般にキヤペレットと

いふ名前で知られては居ましたが、彼の本當の名を知つてゐるものは殆んどありませんでした。

彼の性質はと云ふと――彼は公證人でしたが、彼が作成した極く少しの契約書の中にたつた一つでも缺點のないのがあれば彼は非常に恥づかしく思つたでせう。それどころか彼はいつでも必要な場合には喜んで虛僞の證書を作りました。彼は正しい證書を作つて非常に多くの報酬を受けるよりも、無料で以て虛僞の證書を書く方がずつと好きでした。彼は頼まれると頼まれぬとに拘らず、僞證するのが大好きでした。其の當時は誓言といふことが非常に重んじられてゐる所へ持つて來て、彼は少しも逡巡することなく僞誓をやつたものですから、彼が誓言を以て證明することを要求された裁判ではきつと勝ちました。彼は家族や友達や其他の人々同志の間に敵意と分裂とを生ぜしむる爲めに非常に盡力し、それを大變面白がりました。彼の惹起せしめた災害が大きければ大きい丈け彼の感ずる歡びも大きかつたのです。殺人とか又は其他の罪惡に加擔するやうに求められゝば彼は決してそれを拒みません。寧ろ進んでそれに加はり、彼自身の手を以て多くの人々を殺したり傷付けたりしました。彼は神や神に仕ふる聖人逹に對して恐ろしい冒瀆者でした。そして極く些細な事にでも呪ひの言葉を放つた、といふのは彼は多くの人々よりもそゝつかしやだつたからです。彼は一度も教會に行つたことはないし、聖禮なんかは全く侮蔑すべきものであるかのやうに、實に恐ろしい顔付をしてそれを罵りました。之に反して彼は酒場や放

蕩場に行く位ゐ好きなことはありませんでした。彼はまるで犬が棒を嫌ふやうに女を嫌ひました。併しどんな下劣な恥知らずでも不自然な罪惡を好むこと彼の如く甚だしきものは一人もなかつたでせう。彼は强奪や竊盜をやるのに他の人々が聖壇に供物を捧げに行くのと同じ平靜な良心を以て之をやりました。彼は最も不節制で賤劣な大食漢で飲んだくれで、おまけに大の賭博者で、いつも重りを付けた骰子を持つてゐました。つまり簡單に云ひますと、彼は曾て此の世に生れたる人間中最大の異端者でした。ミユツシヤの勢力と富とは永い間彼を保護して來ました。キヤペレツトが怒らした人達や、毎日のやうに憤激の種を與へた朝臣等は、ミユツシヤがあればこそ彼を恐れてゐたのです。

ミユツシャは此の男の生活の樣を十分よく知つてゐたので、彼のことを思ひ出すといふと、これこそあの狡猾なる債務者等に頡頏すべき人間だと思ひました。そこで彼を呼寄せて云ふには、『キヤペレツト、君も知つてる通り私は此の國を立去らうとしてゐるのだ。そこで私は數人のバアガンディ人と商賣關係があるのだけれども、そいつらは全くの惡漢で、君の他には私に代つて請求に遣るに適當な人が思ひ當らないのだ。今のところ君は殆んど何にもすることがないのだから、若しそれをやつて呉れゝば、私は君に宮廷から旅行免狀を貰つてやらう。そして私の爲に君が取戻して呉れた全額の内相當の步合を君にやらう。』

何も用事とてはなく、尙ほ財政上非常な困難に陷つてゐたキャペレットは、彼の唯一の保護者であつたミュッシャが必要に迫られて今出發の間ぎわであるのを知ると、何の躊躇するところなく喜んでそれを承諾しました。そこで條件に付て談が纏まると、ミュッシャは彼に代理人の權利を與へ國王から旅行免狀を貰つて吳れました。かくてキャペレットは誰も知る者なきバァガンデイに行きました。そして彼の習慣に反して靜かに注意深く貸金を集めたり、彼がやつて來た目的の取引を決めたりし始めましたが、自分の財源の方は最後まで保存して置いたのです。その爲めに彼は高利貸をしてゐる二人の兄弟の所へ行つて宿を取りました。彼等はミュッシャに對する斟酌から彼を泊めたのでした。そして彼がそこで病氣になつた時には此の兄弟は直ちに醫者を呼んだり、彼に附添ふべき看護人を雇つたりして吳れました。併しそんなことは少しも役に立たなかつたといふのは、此の優れた男は、もういゝ年にはなつてゐますし、極く不規律な生活をして來たものですから、醫者逹の云ふところによれば日ましに衰弱して行き、ぐん〳〵死に近づきつゝあるといふことでした。之は二人の兄弟に取つては實に面白くないことでした。

或る日のこと、キャペレットの病み臥して居つた部屋の近くで話聲が聞えて、一人の者が對手に向つて云ふのに、『この男をどうしたもんだらうね？　本當に厄介な奴だよ。なぜつてあんな非度い病氣なのに戸外へ放り出すなんていふことは我々の恥辱だからね。それに若し、我々が彼を家に入れてよくもて

なしたり世話したりするのを見てゐた世間の人達に、今突然あんな死病に罹つてゐて我々に何の害惡も加へることの出來なくなつてゐる男を追出すのを見せるといふのは、我々の大馬鹿を示すやうなものだからね。然し一方から云へば、あの男は本當に曲つた人間なんだから、今懺悔を仕たり聖禮を受けたりするのを嫌がるだらうしね。そして若し彼奴が懺悔をしないとすれば彼の死體を受取る敎會はどこにもなくつて死體は犬のやうに土中に埋められるだらう。そしてよし彼が懺悔をするにしたところが、彼は實に甚だしい恐ろしい罪惡を犯してゐるのだから、ちつともよくはならないだらう。なぜつて非俗の僧だつて敎醫僧だつて彼の罪を恕さないだらう、さうすれば彼奴は濠の中へ放り込まれるだらうからね。若しそんなことになると、我々が彼等の大嫌ひな商賣をやつてゐるので我々のことを惡く云つてゐる此の町の人々は、我々の財産を一生懸命奪ひたがつてゐるところだから、「敎會が受入れないやうなこのロムバルヂヤの犬共はもう此所に置いとくことはならん」なぞと叫んで此家を襲ふだらう、そして財産を取るばかりでなく、恐らく我々の肉體にまで暴力の手を加へるだらう。だからどつち道あの男がこゝで死んぢや我々によくないよ。』

このやうに、彼等が談話してゐた場所に近く横臥して居つたキヤペレットは、病人によくある如く非常に耳が速かつたのです。それ故彼に就て彼等の語つてゐたことをすつかり聞いて了ひました。そこで

彼は彼等を呼んで貰つて云ふには、『私は私の爲めに貴方達が難儀に陷るのは望ましくありません。私に就いて談してゐられたことは皆聽きました。そして若しも皆樣が想像してゐらるゝやうな事實になつて來れば、皆樣の心配して居られるやうなことが起ると思ふのも正しいことでせう。けれどもそんなことには仕ませんよ。私は一生涯中にもう幾度となく神樣を怒らせましたから、今墓に入る間ぎわになつて、大きかれ小さかれ、唯一つ位の罪を犯したからつてよくも惡くもなりつこはありません。ですから――若し聖いのを選れて來ることが出來たら――こゝの坊樣の中で最も聖い僧侶を私の所に連れて來て下さい。そして私の思ふ通りにさして下さい。そうすれば貴方達が十分滿足なさるやうに貴方達のことも私の事も甘く取繕めますから。』

實のところ兄弟二人の者は彼の確言を餘り信用しませんでした。けれども彼等は或る僧院へ行つて、誰か一人賢い聖い僧が來て、彼等の家で病んでゐる一人のロムバルド人の懺悔を聽いて呉れるやうにと賴みました。そこで、大層學問のある尊い篤信な一人の老僧で、町の人々全體から非常に尊敬されて居つた人が彼等の家に同行しました。彼はキヤペレットの部屋に這入つて病床の側に腰を下すと先づ始めて極めて優しく彼を慰め、それから彼が最後に懺悔をしてからもうどの位ゐになるかと尋ねられました。生れてから一度も懺悔をしたことのないキヤペレットはかう答へました。『敎父樣、私はいつも一週間

に少くとも一度は懺悔をする習はしでありました。時に依るともつと度々することもありました。ところが實を申しまするど、私が病氣になつてからといふものは、もう一週間になるのですが、身體の具合が悪い爲に、全く懺悔をすることが出來ませんでした。』

『それは大變結構なことです、我が子よ。そしていつもそうせねばなりませんよ。お前さんがそんなに屢々懺悔をする習慣であつたのならば、あんたの云ふことを聽いたり審問したりするには何の苦もないことは分つてゐますよ。』と僧が云ひました。

するとキヤペレツトは答へて、『そう仰せられまするな、愛する御坊さん。私はその位ゐの懺悔では未だ々々、私が生れてから懺悔をするやうになつた時までに犯した罪をみんな、思ひ出し得る限りみんな懺悔して了ひたいといふ希望を止める譯にいかないのです。ですから、どうかお願ひですから、どんな事でも、私が今までに一度も懺悔したことがないお積りで、十分嚴格にお尋ね下さい。私の病氣のことなんかは少しも御斟酌に及びません。私は樂な思ひをして靈魂を失つて了ふよりは、身體を苦めてもそれを救つた方がずつと望ましいのですから、その靈魂の爲めにこそ救世主は彼の尊き血を流されたのですから。』

これらの言葉は篤信な僧侶を大層喜ばしめました。彼はそれを以て最も基督信者に適はしき氣質を現

はしてゐるものと思つて、そこで、自分が非常に嬉しい旨を云つた後、先づ彼が曾て女に對して罪を犯したことがあるかどうかを尋ねました。

キャペレットは嘆息して云ひました。『父よ、私は此の事柄に就て本當のことを申上げるのを恥づかしく思ひます。なぜならそうすれば恐らく私は自慢といふ罪惡に陷るでせうから。』

『云つてお了ひなさい。お前樣が眞實のことを云へば、懺悔の時に限らず何處に於てだつても罪惡を犯すことにはならんのです。』

『ではそのことに就ては私は安心しました。では申上げますが、私は母親のお腹から出た時の儘の純潔を保つて居ります。』

『素晴（すば）らしいことです、我子よ、あんたは本當にいゝ行ひをしました。そしてあんたの功績（いさほし）は私達よりももつと偉大です。なぜなら私や私の仲間の人達は禁じられてゐる爲に純潔なのだが、あんたはそうするもしないも御自分の心次第なのだからな。』それから彼は、大食といふ罪惡で次て神樣を怒らしたことはなかつたかどうかを尋ねました。

『あゝ、情ないかな餘り幾度も怒らせました。』とキャペレットは再び深い溜息を吐きながら云ひました。『なぜつて私は、信心深い人達が年々嚴格に守る大斷食の外に、一週間の中三日づつはパンと水とで

断食する習慣でしたが、然し骨の折れる勞働をした後とかその最中とか又は巡禮の途中とか抔にはよく、まるで呑んだくれが酒を呑む時のやうな快樂を感じながら水を呑んだり、又私は婦人達が田舍へ行くと摘むやうな生菜（サラダ）を食べたいと思つたこともよくありますし、信心から斷食するやうな者は誰でもしてはならない程の歡樂を味ひながら食事したことも屢々ありました。』

『息子よ、此のやうな弱點は全く自然的で些細（さゝい）なことだから、それが爲に良心を惱ますには及ばないのです。なぜなら誰だつても、よしどんなに聖い人であらうとも、斷食の後の食物や過勞の後の一杯の水なんかは樂んで味ふもんだからね。』

『どうか懷しき父よ、私を慰めるためにそのやうに仰せられまするな。人が神を歡ばす爲めにすることは何事に依らず純眞な心を以て、厭がらずにしなければならないので、そうしないものは罪を犯してるのだといふことをお忘れになつてはいけないのですから。』とキャピレットは云ひました。

善良なる敎父は彼の答へに大層滿足して云ふやう。『私はあんたがそう云ふ風に考へるのは嬉しい、それであんたの良心が敏感で優しいことが分る。ではこんどは、あんたが貪慾の罪に陷ちたことはないか、自分の持つてゐる以上を持ちたいと望んだり、自分のものでないものを欲しいと思つたりしたことはないかどうか云つて御覽なさい。』

『教父樣、私が高利貸の所に泊つてゐるといふので私のことを惡くお思ひになれば情なうございます。私は彼等とは何の關係もないのです。私がこゝにゐるのは唯彼等の忌まはしい獲得慾を絕つやうに彼等に警告し訓誡する爲めなのです。そして私は、若しも神樣がこんな風に私を衰へさせなかつたならば、きつと、それを成し遂げたらうと實際思ひます。けれどもかういふことを申上げなければなりません。私の父は澤山の財產を私に殘しました。其の大部分は父が死んだ後に貧乏人に分けてやりました。その後基督の貧しき人々を生かし助けることが出來得るやうにと私は商賣を始めました。商賣では勿論金を作ることを努めましたけれども、併しそれは常に貧乏人と分配しました。所得の半分は自分の用に當て、他の半分は彼等に與へたのです。これが神樣の御心を歡ばせて、私の業務は日一日と發展しました。』

『あなたの行ひは結構です。併しあなたは怒つたことはありませんかな?』

『えゝあります。私は此の感情が隨分屢々私に起つたことを確言することが出來ます。けれども、人々が每日のやうに暗い行爲をなし、神のご命令を守らず、神の審判をも恐れないのを見ては、何人か怒りの感情を押へることが出來ませうか? 若い人々が虛榮を追ひ、誓つたり僞誓したり、酒屋にばかり浸つたりして居て、敎會へは行かず、神の道に從はずして俗世の道に從ふのを見て私は、生きてゐるよりも死んで了つた方がいゝと思つたことが幾度だか知れません。』

『それは神聖なる怒りです、息子よ。それに對して私はあんたを責めることは出來ません。けれどもあなたの怒りに誘はれて、人を殺したり惡口したり、又は誰かを傷けたりするやうなことはなかつたかね？』

『オヽあなた、いや私はあなたを神の人と思つてゐますのに、どうしてあなたはそんなことを仰つしやり得るのですか？　若しそんな考へが一度でも私の頭に起つたら、神樣が私を生かして置くとお思ひですか？　そんなことは唯不德な惡人でなければ出來ないことです。私はそういふ人々に逢ふといつも彼等に向つて云ふのです、『あちらへ行きなさい、どうか神樣が君を改心さして下さるやうに！」と。』

すると僧が云ひました。『立派なことです、我子よ。だがお云ひなさい、あんたは何人かに對して虛僞の證言をしたことはないか、何人かを惡口したことはないか、又は自分の所有でないものを所有主の意志に逆つて取つたことはないか？』

『誰かにあります。私は或人のことを惡口したことがあります。それは曾て私の隣に一人の男が居て、凡ゆる權利も正義も無視して絕えず彼の妻を打擲してゐたのです。それで私は或る時彼の妻の親戚の人達に彼のことを惡く云つたのです。なぜつて私は彼が醉つ拂ふ度毎に全く情け用捨なく打擲するのでその哀れな女を非常に氣の毒に思つたからです。』

『あんたは商賣をしてゐたのだから、商人がよくやるやうに、誰かを欺したことはありませんか？』

『あります。實際、併し私が覺えてゐるのは唯或る日のこと、私が或る男に一片の布を賣つて貸になつてゐたお金を彼が持つて來た時、それを勘定せずに袋の中に入れて置いて、一ケ月經つてから見ると四錢丈け餘計あつたけれども、その男の住家が分らないものだから、一年の後にそれを貧乏人にやつて了つたこと丈けです。』

『それは些細なことです。そして甘くお使ひになりました。』それから彼は尙ほ色々他の質問を彼にしました。それに對してキヤペレットは同じやうなやり方で答へたので、僧が遂に彼を無罪にしやうとした時に彼は云ひました。『父よ、私があなたに懺悔しない罪が未だ一つあります。』

『それは何ですか？』

『私はいつだつたか召使に日曜日に家を掃除さした覺えがあります。そして私はいつも日曜日に對して至當な敬意を拂はなかつたのです。』

『それは極めて何でもないことですよ、我が子よ。』

『それが何でもないことだなんて仰つしやいますな。日曜日は救世主が死から甦られた日なのですから、實に神聖な日なのです。』

『何か未だ別に心に殘ることがあるかね？』

『えゝあります。私は一度敎會の中で唾を吐いたことを覺えてゐます。』

敎父は微笑んで云ひました『息子よ、そのことは心配するに及びません。我々牧師でさへ毎日それをするのだから。』

『それは大變惡いことです。なぜなら聖き犧牲の供へられる神聖なる場所は此の世のいかなる場所よりも清潔にして置かれねばならぬものですから。』簡單に云ふと、彼はかう云つたことを澤山喋りました。そして最後に激しく溜息を吐いたり泣いたりし始めました。彼は何時でも望みの時にそうすることが出來るのでした。

『未だ何かあるのかね？』正直な僧侶は尋ねました。

キャプレットは答へて、『アヽ、まだ私の懺悔しない罪惡が一つあるのです、それはとても恥かしくて出來ないのです。私はそれを思ひ起す毎に、御覽の通り泣かずにゐられないのです。其罪の爲めに神樣は私に何のお慈悲をもお掛け下さるまいかと思ひます。』

『氣を付けて物をお言ひなひなさい、我子よ。曾て世界中で犯された凡ゆる罪、又は之から犯される凡ゆる罪惡が唯一人の人間に依つて犯さるゝとしても、若し本當にお前樣ぐらゐに後悔してゐれば、神樣

の慈悲と情けとは非常に大きいのだから懺悔さへすれば喜んでお赦しになります。だからどんな事だかはつきり私に云つて御覧なさい。』

キャペレットは涙を流しながら答へました。『教父様、私の罪は餘りに大きいので、たとへ貴僧がご祈禱でお手傳ひして下さつても、とても神様が私をお赦しになるとは信じられません。』

『心配しないでお話しなさい。私はきつと汝さんの爲に神に祈つて上げます。』

キャペレットは尙ほ泣き續けて、僧が彼を勸ましたに拘らず言はうとはしないのです。そして長い間斯の如く僧侶を待たして置いた揚句、彼はやつと深い溜息と共に云ふやう。『教父様、若し貴方が私に代つて神様を取なしてやると約束して下さるなら、私はその事をお談し致しませう。つまり、私は子供の時一度自分の母親を呪(のろ)つたのです。』

『でそれがあんたにはそんなに恐ろしい罪と思へるのかね？ 人々は神自身をすら日々冒瀆してゐますよ、それでも彼は心から後悔してゐる者をば喜んでお赦しなさるのです。それでも未だあんたは神があんたを赦さないと信ずるのですか？ 泣かないで安心なさい。よし汝が神を十字架に付けた一人であつたにしても、汝のやうに後悔すればお赦しになります。』

『アヽ、教父様、何といふことを仰つしやるんですか？ 九月(とつき)といふものお腹の中に私を入れて居て幾

度と數へ切れない程胸に私を抱寄せて吳れた母を呪ふなんて、母を侮辱するなんて、何と云ふ惡い事をしたのでせう！　罪は餘りに大きいのですから、貴僧が私の爲に祈つて下さらなければ私は到底赦されないでせう。』

僧はもう彼に云ふことが無いのを知ると彼を恕して祝福を與へました。彼はキヤペレットの云つたことは皆な眞實だと固く信じたから、彼を大層聖き人と思つたのです。死ぬ間際になつて斯く云はれゝば誰だつて信ずるではありませんか？　遂に僧は云ひました。『キヤペンット、神のお助けに依つて君はすぐ治くなるだらう、が若しも神が君の靈を御手許に呼寄せになるやうなことがあつたら、君の死體を我々の教會に葬ることに反對は仕ないだらうね？』

『しませんとも。眞實に貴僧が私の爲に神に祈ると約束されましたので、それ程安心して休息出來る所は他にありません。それに私は常々から貴僧の所を特別に尊敬してゐたのですから。ですからどうか寺院にお歸りになつたらすぐ、今朝聖壇の祭られた誠の基督像を私の所へよこして下さい。と申すのは、私は其價値のない者ですが、それを受けたいのです。それから又最後の塗油式をも受けたいのです、たとへ生きてる間は罪人でも、基督敎徒(クリスチアン)として死にたいからです。』

善良な僧侶は喜んでそうしよう、君の言ふことは尤もだ、自分は行つて儀式の物を持つて來させるや

うにしようと云つて、そうしました。

キャペレットが約束を破りはすまいかと氣になつた兄弟の人達は、彼の室と他の室との境の壁の所へ來て立聞してゐたので彼が僧に云つたことを凡て聞いて了ひました。そして時々は恰も死にそうな思ひをしてやつとのことで笑出すのを堪へてゐたのです。『之は何といふ男だ、彼の年も、刻々迫る死の恐怖も、之から前に出て裁かれようといふ神その者の畏怖さへも、彼の惡心を飜させることは出來ず、生きてゐた通りに死ぬ妨げとはならないのだ!』と互に語り合ひました。併し彼が約束を守つて、教會に葬られることになつたのを知ると、彼等は他のことなんかどうでもよかつたのです。キャペレットは祝福の聖餐を受け、一層容態が惡くなつたので塗油式をも受けると間もなく、此の最も立派な懺悔をなした日の暮合ひに死にました。立派に埋葬して貰ひたいといふ彼の希望に從ひ、兄弟の者は死體のお通夜をするやうにと彼の死をば坊様に通知し、翌朝は擔ぎ出せるやうに樣々準備をしました。キャペレットの懺悔をきいた敬神な僧は彼の死の通知を受けると修道院長の所へ參りまして、僧會が召集せられた時に人々に向つて、自分はキャペレットの懺悔に依つて彼は非常に聖い人であつたことを確信すると告げ、神は彼に依つて多くの奇蹟を現はしになるであらうと思ふから、どうか彼の死體を甚大の崇敬と信仰とを以て當院に引取つて呉れるやうにと賴みました。院長も他の僧達もそれを全く信じて、彼に同意しま

した。そして其夜は皆打揃つてキャペレットの死體の横はれる家に來て、嚴かにお通夜をしました。朝になると彼等は皆白麻の僧衣と長袍を着、手には祈禱書を持ち、前に十字を下げて、死體受取りに參りました。大げさな行列や儀式をして寺院に運ぶ時には殆んど町中の住民が男も女も其後をついて行きました。死體が教會内に安置せられると、キャプレットの懺悔を聞いた坊様が演壇に上つて長い演說をなし、彼の生活の仕方、斷食、無邪氣さ、彼の心の單純なこと等に就て極めて驚くべきことを澤山語りました。就中彼はキャペレットが最大の罪として懺悔した事柄に關して語り、彼が神樣から赦されるといふことを納得させるのは一通りの骨折りではなかつたと云ひました。それから猶ほ進んで聽衆を非難しつゝ云ふやう、『然るに神に拒けられた皆樣は、極く些細なことにでも神を冒瀆し、聖母や天國の聖者達を汚瀆するのです!』彼はキャペレットの正直なことや、道德の純潔なことや、彼の言葉等に就て語りました。その邊に居た人は皆それを十分に信じたので、その集まり全體は死人に對する非常な崇敬の念に充たされたものですから、お勸めが濟むと人々は群をなして彼の手や足に接吻し、彼の衣服の小さな片端でも手に入れたものは大變幸福に思ひました。何人でも彼を見る事が出來るやうに、終日棺を開いて置かねばなりませんでした。夜になると盛大な儀式を行つて彼は大理石の墓に埋められました。翌日になると澤山の人が彼の墓に詣でゝ、禮拜したり誓を上げたり、蠟燭や御像を上げたりしました。彼の

聖いことゝ、彼に對する人々の信仰とに關する噂が非常に高かつたものですから、何か惱みのある人は彼以外の聖人の所へ嘆願に行く者は殆んど一人もない程でした。彼はキヤペット聖人と稱へられ、今でも變りがありません。かくて神は熱心に神に身を委ねる者に對しては種々な奇蹟を行ひなさつたし、今でもそうしてゐられることを立證してゐます。

キヤペレロ・ダ・プラトはこんな風に生きそして死んだのです。それでお聽の如く聖人になつたのであります。私は今彼が神の御前に於て幸福に暮してゐるかも知れぬといふことを否定はしません。何故なら、たとへ彼の生涯がどんなに邪惡であつたにしても、少くとも彼は最後の際に於ては大變後悔したので主の神は彼を憐み給ふて天國に引取られたかも知れないから。けれどもそれは私達には分らない事ですから、私は外觀から判斷して、彼は天國にゐるよりも惡魔の手中に居る方が一層本當らしいと申ます。神で若しそうすれば、そこにこそ却つて我々に對する神の慈悲の偉大なることが認め得ると思ひます。神は我等の過失を氣に止めず、意向の純潔な事のみをご覽になつて、たとへ我等が彼の味方でなしに敵を引張つて來て自分の代言者にしようとも、我々に代つて神樣にお祈りすることを眞の聖人の袖に縋つて賴んだのと同じにしかお思ひにならないことがよく分ります。

それ故此の現在の愉快な社會に於て、釋山の不幸に取圍まれてゐながら、神樣のお慈悲に依つて無事息

災に暮して行けるやうに、神の御名を讃へ崇拜して、私達の願ひの叶ふことを固く信じて、何か困つた時には神樣の御名を呼びませう。

第二話

ユダヤ人アブラハムはジヤンノ・ド・シヴニに勸められてロオマに赴き、其地の僧侶の墮落せる生活振りを見てパリに歸り、基督信者となる。

パムフイロの物語は皆を笑はせ、婦人達の賞讃を博した。熱心に其の話を聽終ると、女王は彼女の次に坐つて居たネイフイルに向つて話をするやうに命じた。ネイフイルは容貌の美しいばかりでなく、溫順であつたので、喜んで御意に從ひませうと答へて、かく語つた。――

パムフイロ樣は、お話の中で私達の無知から生ずる過失をお見遁しになる神樣の慈悲深いお心をお示しになりましたが、私の話ではそれと同じ神樣のお慈悲がもつと明かに現はれるやうにする積りです。言行共に神のお情けの證明者となるべき僧侶達が却つて其の反對のことをしてゐても、ぢつと其の過ちを堪忍しておいでなさるお話を申上げて、私達が一層熱心に各自の所行に依つて信仰の深さを示さうと努力するやうに致したいと思ひます。

扨て諸孃（ゐなさん）、巴里の市にジヤンノ・ド・シヰニと呼ぶ一人の有福な絹商人がありましたが、其の人は立派な正しい人でして、アブラハムと稱する之も亦善良で正直な或る金持のユダヤ人と極く親密にして居りました。ジヤンノは此ユダヤ人が正直で眞つ直ぐな人間である事を知つて居りましたから、之程善良な男の靈魂が唯不信心な爲ばかりに救はれないで滅びることを考へると大層殘念に思ひまして、ユダヤ敎の謬見を棄てて基督敎に改宗するやうにと、角立たないやうに彼に勸告し始めました。基督敎が神聖にして善美な宗敎であればこそ、見らるゝ通り絕えずこんなに增加して行くのだ、然るにユダヤ敎は徐々に減少して今に衰亡しかゝつてるではないか、と云ひました。けれども彼のユダヤ人は、自分はユダヤ敎を除いては神聖にして優秀と思ふ敎義は他に一つもない、自分はユダヤ敎を信じて生き且つ死なう、どんなことがあつたつて改宗はしない、と答へました。ジヤンノはそれでも彼の努力を止めないで、數日經つと又もやその話を持出して、商人相當な簡單な理由を擧げて、基督敎がユダヤ敎に優る所以を證明しました。アブラハムはユダヤの法律に關しては中々學の深い男でありましたが、ジヤンノに對する友情に動かされたものか、それともこんな敎育もない商人の辯舌に神の精靈でも乘移つて說服したものか、兎に角彼にもジヤンノの例證の意味が徐々分つて來ました。それでも未だ强情に改宗のことは拒絕しました。いくら彼が强情を張つてるてもジヤンノは止めずに彼に勸めるので、遂にその執拗（しつえう）に負けて

彼は云ひました。『ねえ、ジャンノ樣。貴下はどんな事をしてゞも私を基督信者にしようと決心して居られるんですな。私も決して貴下の御希望を厭とは申しませんが、併し先づ第一に私は、貴下が地上に於ける神の代理人だと仰せになる法王樣の所へ參りまして其のお姿を拜み、其の生活や統治振りを拜見し、併せて御兄弟分の大僧正樣方の生活の模樣をも知りたうございます。そして若しも、御言葉の如く彼等の行ひも貴方の行ひのやうに、基督敎の方がユダヤ敎に優つてゐることを示してゐるといふ滿足が行きましたなら、お望みの通りに致しませう。けれども若しそうでなかつたなら私は矢張り元々通りユダヤ敎で居りますよ。』

ジャンノは之を聞くと大層當惑して、心中に思ひますやう、『俺は此の男をもう改宗させ得たと思つて旨くやつた積りで居たがすつかり無駄骨折りになつて了つた。若し彼がロオマへ行つて、僧侶の墮落した生活を見れば、基督信者にならぬは云はずもがな、既になつてゐるものなら再びユダヤ敎に返ること疑ひなしだ。』そこで彼はアブラハムに向つて斯う云つた、『親愛なる友よ、何の爲に多大の艱難を冐し費用を使つてロオマに旅行なさる必要がありますか？ 殊に貴下の如きお金持を脅かす危險は無數にありますよ。貴方に洗禮をお授け出來る人が誰か此處に居ないとでもお考へですか？ 若し私の說明してあげた宗敎に疑はしい所があると思召すなら、どんなことでも尋ねることの出來る比類なき立派な學者や賢

人が巴里に幾人も居るではありませんか？　それ故私は貴下の御旅行は全く無駄なこと丶思ふのです。まあ考へてもご覽なさい、ロォマの大僧正だとて此處で見たのと少しも變りはないのです。よし又牧羊者の首長たる法王猊下に近く居る丈けに一層穿いにしても、私の注告を容れて苦しい旅行なんぞはお止めになさい。いつかよい機會があつて、退屈ざましに巡禮にでも出掛けようとなら、其時は多分私もお伴を仕ますから。』

ユダヤ人は答へて云ふに、『お說の通りと信じますがな、ジャンノさん、だが手つ取り早く申しますと、貴方が熱心にお勸め下さる通りにする爲には是非ロォマへ參らうと私は決心しとりますので、そうしませんと折角のお勸めが無駄になりますから。』ジャンノはアブラハムがすつかり決心してゐるのを知ると今はもう無事な旅を祈るより外仕方がありませんでした。併し心の中では、彼がロォマの法王朝を見たら決して基督信者にはなるまいと思ひました。併しそれが爲に彼が別に損する譯でもないので、まあ仕方なしそれで滿足致しました。

ユダヤ人は馬に乘りますと道を急いでロォマに到着するや、其處に住んでゐる他のユダヤ人達から大層歡待されました。そこで彼は滯在中、自分の目的は誰にも知らせずに、法王、大僧正、其他の主敎等及び宮廷に出入する紳士達の生活を凝つと觀察いたしました。そこで自分自身觀察者として視たことや、

他人の語つて聞かした事等を綜合して見て、彼は次のことを發見しました。最高の地位に在る者から最下級の者に至るまで、彼等は悉く淫樂に沒頭し、唯に自然的罪惡に耽るのみならず、最も不自然なる罪惡迄も恥づるところ無く之を犯し、最も重大な事柄に對する認可さへ賣笑婦や侍童の手を經て下されるといふ始末。猶その上に、彼等は皆大食を爲し、泥醉に耽り、凡ゆる不節制を行つて口腹の慾をのみ滿足させることを自ら得意としてゐる樣は恰も畜生のやうな人達でありました。更に彼が探索して見ますと、こんなことも明瞭になつて參りました。彼等は金錢の爲には人間の靈魂であらうが、基督であらうが、精靈であらうが、教會の聖物と寺祿の物品とに頓着なく何でも賣買して、丁度巴里の反物商人其他が使ふぐらゐ大勢の仲買人を雇つて大規模な商業を營んで居るのです。周旋といふ名義の下に公然と僧職賣買を行ひ、自分等の不節制を呼んで肉體を維持する爲と稱して居ります。言葉の意味を知らぬのみか、それに含まるゝ惡心さへ見破ることが出來ないものですから、他の人々と少しも變りなく、言葉丈けに直ぐ瞞されて了ふのです。

これら凡てのこと及び私が省いて述べなかつた多くのことを見聞きするに及び、正直で其上に德高きアブラハムは非常に不快を感じました。そしてもう澤山見たと思つたので歸ることに決心し、巴里に歸つて參りました。ジヤンノは彼の到着を聞くや直ぐ樣訪れて行つて、彼に再會したことを大層喜びまし

た。併し自分の友が基督信者にならう抔とは夢にも思つて居りませんでした。アブラハムが數日休息した時、ジャンノは彼に向つて、君は法王や大僧正、扨ては宮廷の一般紳士達に就てどう思つたかと尋ねました。するとユダヤ人は卽座に答へて申しますやう『あの連中は本當に惡人です、どうか神の適當な報ひが彼等にありまするやう！　それつ切り云ふことはありません。何故と申して、若し私の眼に間違ひがないとすれば、彼等には信心も無ければ敬神の念もなく僧侶の中一人として善行も無ければ模範もないのです。淫蕩、貪慾、贅澤、欺瞞、嫉妬、傲慢、其他之より惡い有りと有らゆる事ばかりです。彼等の間では之等が非常に流行してゐるので、私はロォマ法王宮を以て神聖なる事物を製造する工場ではなく、寧ろ惡魔の製造所と見做します。そして私より見ますれば、貴下の牧羊者の主長たる法王及び之に從ふ僧正等は、基督敎の基礎を固め維持しようとするのでなく、反對に之に恥辱を與へ、地球の表面より之を掃蕩しようと全力を盡して働らいてるやうに思はれます。けれ共彼等がそれ程骨折つても基督敎が滅亡する處か、貴下方の信仰が愈々增進し、日々光輝を增し遠く廣まるところを見ますると、全宇宙に於て最も眞實にして最も神聖なる神御自身が此の信仰の基礎であり支持者であるに相違ないと斷定するのが正當と考へます。それ故、先には私は隨分貴下の御勸告に對して强情を張つて基督信者になるのを欲しませんでしたけれども、今ではもうどんなことがあつたつて基督信者にならずには居られま

せん。ですから私と一緒に教會にゐらして、貴下の神聖なる宗教の儀式に從つて私に洗禮を受けさして下さい。』

ジヤンノは彼が之とは全く異つた決心を告げることゝ思ひ設けてゐたので、かう云ふのを聞きますと此上もなく喜びました。彼は彼を伴ふて急ぎ巴里のノートルダム寺院に赴き、坊樣達に向つて自分の友人のアブラハムに洗禮を授けて呉れと賴みますと、彼等は當人もそれを熱望してゐる旨を聞取るや直ちにそれを行ひました。ジヤンノは彼の名付け親となつて、彼をジヤンと名づけました。其の後彼は多くの學識ある人に依つて彼に基督教の教義を教へ込ましたので、程なく彼はそれを會得して立派な聖い人になりました。

第三話

ユダヤ人メルシゼデクは三つの指輪に關する物語をなして、サラジン王が彼に掛けた罠を逃れる。

ネイフィルの話が一同の賞讃の中に終ると直ちにフィロメナが次の物語を爲した、――

サラヂンは非常に偉いそして勇敢な人であつたものですから、彼は其の智略に依つて、唯にバビロンの王樣たるの榮冠を克ち得たばかりでなく、基督教徒やサラセン人等と戰つて幾度となく華々しき勝利

を得ました。度重なる戰爭の上に、彼は物惜みをせず金使ひの暴い人だつたものですから、程なくして所有の御用金を費ひ果し、或る極めて肝要な場合に金の不足を發見しました。直ぐにお金が必要なのだけれども其の出所が思ひ當らないものですから、アレクサンドリアにメルシゼデクと呼ぶ或る金持のユダヤ人のゐることを思ひ出しました。此の男は利子を取つて金を貸すを習としてゐたので、彼に請ふて此の難局から救つて貰はうと決心しました。唯困つたことには、此の男は自己の利益の他何物をも顧慮せず、當代に比類なき慾深なので、どうしたら金を出させることが出來るかが問題です。併しサラヂンは彼から金を引出すに表立つた暴力を用ひることは好ましくありませんでした。けれども何うしても無ければならぬ金ですし、メルシゼデクは一條繩では中々大事な金を手離しさうにも思はれないので、色々思案の末、或る妙計を案じて、之ならば厭でも出さねばなるまいと思つて、早速彼を呼寄せて云ふには、「メルシゼデクよ、衆人の云ふ處を聞くに君は大層賢くて悧巧とのこと、殊に神學に深い造詣を持つてるさうだな。そこで私は君に聞きたいのだが、ユダヤ教とマホメット教と基督教と、此の三つの宗教の中何れが最も優れてゐて正しい宗教だと思ふかね？」

此のユダヤ人は大層賢い上に用心深い男でしたから、王が自分に罠をかけてゐる事を直ぐ樣觀破し、若し其の三つの宗教の中どれが最も正しいと答へれば必らず罠に陷ることを知りました。そこで彼は狼

狽せず驚くべき沈靜（おちつき）を以つて答へました。『我君樣、陛下が私にお訊ねになつたことは非常に興味ある且つ重大な問題でございます。併しそれはそれと致しまして、私のお答へが滿足にいきまするやうに、先づ第一に短いお話を一つ申上げたいので御座います。どうぞお許しを。

聞及びます處では、何れの土地であつたか存じませぬが、一人の偉い金持がありましたが、珍貴寶玉數有る中に、極めて美しい、價（ね）ぶみの出來ぬ程貴い一つの指輪を持つて居りました。彼は此の指輪に依つて榮譽を永く未來に殘さうと欲したので、それを家寶として子々孫々に傳へそれを以て自分の富の記念品たらしめようと決心しました。そこで彼は遺言を以て、我が男子の中、我が死ぬ時この指輪を授けられたる者は相續者と認め、家族の全員より家長たるの敬意を受くべき者なり、と命令して置きました。指輪を授けられた者は又、父が自分に對して爲したと同じ事をその後繼者に向つて爲しました。かくて程なく此の寶玉は數人の手を通過して遂に三人の息子を有する人の手に入りました。其の息子は三人が三人共美はしく、愛嬌があり、德望があつて父の命によく服しましたので、彼は誰彼の差別なく平等に三人を愛して居りました。兄弟三人は、此の指輪を授けられたる者の享くる特權を知つて居りましたので、何れも相續者に選ばれようと欲しまして、それを獲んが爲に出來る丈けよく父親の世話を致します。父親はもう年老いてゐるのですけれども、三人共同じ樣に愛し何れに輕重もないので、名々に對し

てそれを遣ると約束して了ひましたが、扨て誰れに授けたものか頓と思案に暮れました。彼は三人を皆な満足さしたかつたので、愛の導に依りて其の手段を考案しました。彼は秘かに或る非常に巧妙な金細工人を呼んで、別に二つの指輪を作らせました。それは見本と全く同じに出來たので、自分でも本物と僞物との見分けがつかない程でした。彼は名々に一つ宛與へて亡くなつたものですから、父親の死後三人の兄弟の間に當然恐ろしい爭ひが生じました。名々自分が相續するのが正當たと信じてゐるので、家長として認められ尊敬されることを要求しますから、他の者は之を拒絶するのでご座います。そこで名々自己の主張の根據として指輪を出して見せましたが、三つの指輪は全く同じなので本物と僞物の判別が到底つきません。遂に此の相續爭ひを法廷に持出しましたが、此の裁判は今以て決定しないそうです。

陛下より御質問の榮を給はりました處の、神が三種の人民に與へられた法則に就ても之と同じで御座います。之等三種の異つた信仰の說教者は自分こそ眞實の神の後繼者である、我こそは神の眞の法則をもつてゐる、我こそ神の眞實の御命令に服從して居ると考へて居りまする。けれども何れの宗教が最も强固なる主張をもつて居りまするか、それは今以て決定しないのでござりまする。そして何れの點から見ましても、それは當分の間決定致しますまい。』

サラヂンは此の答へを聞きますと、ユダヤ人奴折角掛けた罠を旨く逃げたな、だがもう之以上かける

のも無駄だ、直接要求を云つてやらう、と思ひましたので、もう遠廻しな言方は止めにして、自分が金に逼迫してゐることを告げて、金を貸して呉れるかどうかと尋ねました。同時に、若し彼が下手な返答をしたらかう〳〵いふ風にする積りであつたといふ事迄話しました。ユダヤ人は王の打解けたのに動かされて欲しい丈け貸して遣りました。王は彼の動機を了解して非常に感謝の意を表しました。彼はユダヤ人に對して借財を支拂つたのみならず、お側近く彼を留置かれまして非常に鄭重にもてなし、常に友愛の榮譽を彼に與へられました。

第四話

罪を犯して嚴罰にも處せらるべき筈の或る僧は、僧正にも同罪あることを立証して罰を逃れる。

フイロメナが話を終るや否や、次席に居つたディオネオは當然自分の順番と思つたので女王の命を待たず、次の如く語り始めた、——

いとも優雅なる淑女方、私の判斷にして間違ひがないならば、私達は面白い話を爲て樂む爲めに此處に集まつてゐるのだと考へます。それ故に私は、此の目的さへ達することが出來れば、どんな話を仕ようとお慰みにさへなればよいのだと思ひます。實際女王樣はそう仰つしやいましたのです。私達はユダ

ヤ人アブラハムがジャンノ・ド・シヸニの尊い勸告に從つて彼の靈魂を救つたお話や、思慮深いメルシゼデクがサラヂンに財を奪はれることを免かれたお話を聞きましたから、茲に私が賢くも嚴罰から身を逃れた靑年のお話を申上げてもお叱りを受くる氣遣ひはなからうと存じます。

扨て當地より程遠からぬルニヂァナの國に一つの修道院が御座いますが、そこの道士達は曾ては敬神と神聖との模範であつたのですが、彼等が墮落し始めた頃の事でした。其處に一人の若い僧が居りました。彼は參籠、斷食其他樣々な難行苦行を致しましても、どうしても肉の慾望を抑制することが出來ませんでした。或る日他の僧侶等が晝寢を仕てゐる正午の頃外に出まして、敎會の附近を步いて居りますと、そこは四邊に家とてもない淋しい所でしたが、ふと彼の眼に近くの或る農夫の娘の姿が映じました。娘は野原で一生懸命摘草を仕て居る處でしたが、其の美しい顏や恰好のよい姿を見ますと、若い僧は大層心を動かされました。そこで側に近寄り、いろ〳〵と甘言を弄しまして遂に娘を納得させ、僧院に引張つて行つて、誰にも見られないやうに自分の部屋に連込みました。彼等が如何なる事を爲して樂んだか御想像に任せますが、兎も角彼等が餘り無中に有頂天になつてゐたものですから、丁度晝寢から醒めた住職が靜かに院內を見廻りになつて其の部屋の前を通り掛りますと、異樣な物音が致します。靜と戶口に近付いて凝つと聞耳を立てますと、確かに女の聲がします。卽座に中へ這入らうと思ひましたけれ

ども、尚ほ熟考の上、何も云はず一先づ部屋に歸つて若僧の外出するのを待つた方がよかろうと思ひました。

若僧の方は自分の仕事に忙はしく、殆んど我を忘れて居りましたけれ共、ふと人の足音を聞いたやうに思ひました。そこで確かめる爲に爪先立をして壁の小穴から覗いて見ますと、院長が立聞してゐるものですから、之はてつ切り聽かれて了つた、もうお了ひだと固く信じました。自分の受くべき懲戒刑罰を考へて見た丈けでも身振ひがする程でした。併し女には心配當惑の樣を氣付かせぬ樣に裝ふて、何とかして甘く此の殘酷な懲罰を逃れる工夫もがなと探求しました。暫く考へた揚句彼は大層賢い巧妙な策を案じました。そこで最早娘をそこに留置くことが出來ないやうな素振りを見せて云ひました。『私は外へ出て、誰にも見られないやうに汝を連出す工夫をして來るからね、騷いだり恐がつたりしてはいけないよ、直ぐ歸るからね。』彼は部屋を出て扉に鍵を掛けると、其足で眞つ直ぐに院長の許に行き鍵を渡して(僧が外出する時には室の鍵を院長に預けるのが習慣でしたので)、ぢつと落付いて云ひました。『森で切つた薪を今朝全部持つて來ることが出來ませんでしたから、之から行つて殘りを取つて來ようと思ひますので、敎父樣、どうぞお許しを願ひます。』

之は住職から見ますと、若僧が發見されたことを少しも氣付いて居らない證據のやうに思はれました。

そうとすればもつと確かな事實を見屆けることが出來ると内心喜びつゝも面色には少しも現はさず、鍵を受取つて森へ行く認可を與へました。若僧が去ると彼は取るべき手段に就て考へました。最初の程は、僧侶全部を呼集め其の面前で罪人の部屋を開き、かくて後に其若者が嚴罰に處せられるのを見ても誰も無理と思はぬやうに仕ようかとも思つたのですが、併し飜つて娘には立派な親があるかも知れない、更に名譽を重んずる夫ある婦人かも知れないと考へて見ますと、先づ行つて女に面談した上で取るべき方法を講ずるのが上策と思ひました。そこで此の美しき囚人を見る爲に、靜かに戸を開いて部屋に入ると後ろの扉を閉めました。

娘は青年の命令通り凝つと靜かにしてゐる處へ住職の這入つて來たのを見るやすつかり面食ひ恥恐れて、何か恐ろしい侮辱でも受けるかと心配の餘り泣き出しました。住職は横目使ひをして娘を見ますと大層美しいので吃驚しました。その上涙を見ると怒りも消えて可愛想になつて來まして、少しも譴責しませんでした。惡魔は常に僧侶の踵を追つてゐますから、此の一時の弱點を利用して住職を誘惑し、彼にいたづら心を起させようとしました。お住持さんは惡魔に唆されて…………………………

……………………………………………………

…………………………………………。誰も知る譯はなし、隱れた罪

…………………………………………………………………………………………するとしようか？』こんな譯で最初這入つた時とは態度一變して娘の側に寄り、心配しないやうにと優しく宥めました。『泣きなさんな、お前は唆かされたのだから、少しもお前を罰しないから安心しなさい。』それから彼は娘の姿、顏形、美しい眼等を賞めて自分の欲情を彼女に呑込ませるやうに仕ました。勿論娘は石や鐵で出來てる譯ではありません。（省略）

ところで若僧の方では森へ行く振りをしたのみ、實は行かずに僧院の片陰に隱れて覗つて居りますと、僧正が自分の部屋へ這入つて行くのが見えましたので、狡猾な自分の罠が効を奏するに違ひないと思つて、もう少しも恐くなくなりました。そこで確かに見屆けてやらうと靜と戸口に近寄り、自分丈けしか知る者の無い小さな穴を通して、信仰篤き敎父と娘との間に起つたことを總て見て了ひました。

住職は……………………………………………、尙ほ將來の手筈をも定めた上そこを出で、戸に錠を下して我が部屋に戻りました。暫らくすると若僧が寺の內にゐる樣子なので、もう本當に森から歸つて來たものと思ひ込み、早速彼を呼びにやりました。來たら非度く叱責した上牢に打込んで、戀敵を取除け、戰利品を自分の獨占めに仕ようと企んでゐました。そこで彼を見るなり嚴めしい顏付をして猛烈に彼を譴責した後、汝を之々の罰に處すと申渡しますと、若僧は少しも狼狽の色無く答へますに、『貴

い御教父様、私はまだ至つて若輩でありまして、當ベネヂクト派の掟を皆な知つて居るといふ譯ではございませぬ。住職様は斷食や御籠（おこもり）に就ては御教示下されながら、當派の僧侶たるものは婦人を絶大なものと崇め尊び、我身を彼等の下に置かねばならぬといふことを御教示下さいませんでしたが、今日只今御尊父様がよき模範をお示しになりましたので之からは常にあの通りに致します。間違つたなら御免下さいませ。』

決して愚かでない神父の住職は、此の若僧がすつかり知つてゐる、俺と娘としたことも總て見たに違ひないといふことが直ぐに分つたので大層狼狽しまして、自分の過失が恥かしくもあり、彼に與へれば自分も受けねばならぬ懲罰を加へることが出來ませんでした。そこで彼を赦免し、あの事に就ては沈默を守るやうにと命じました。彼等は手段を用ひて祕かに娘を修道院の外に出し、恐らくそれから幾度となく又引入れたでありませう。

第五話

モンフエラ公爵夫人は鷄の御馳走と數言の適はしき言葉とに依つてフランス國王の無理な情熱を消止める。

ギオネオが話をしてゐる間始めの內こそ婦人達は、彼等の貞淑の印として面を紅めてゐたが、互に顏を見合せると可笑しさを堪へることか出來なくて、くす〳〵笑ひながら聞いて居た。併し話が終ると、斯のやうな話は淑女達の前でするものではないと言明した。そこで今度は女王は、ヂオネオの次に芝の上に座したフィンメッタに向つて順序だから賴むと云つたので、彼女は嬉し氣に女王を眺めて扨て語り出した、——

私は皆様に、卽座に出る適當な返答がどのやうに効力のあるものだかといふことを御聞に入れた上、婦人といふものは自分より身分の高い人の愛を卻ける丈けの智慧を持つて居ることを證明する爲めに、或る貴婦人が此のやうな愛の申出でを斷つて自分の愛人を保留したお話を致しませう。

モンフェラ侯と申しますのは其の時代に比類のない偉い勇敢な大將でありまして、勳功に依つてローマ敎會旗手の榮位に迄上進しましたが其役目の爲、聖地(西パレスチナ)征服に赴く基督敎徒の大軍隊と共に長い航海に出掛けました。片眼と綽名された佛蘭西王フィリップも此の十字戰爭に加はるべく船出する處でありましたが、或る日のこと彼の宮廷で或る廷臣の語るを聞くに、世界中にモンフェラ侯夫妻程美しい御夫婦はない、そして夫侯爵が其の偉大なる資格に依つて他の凡ゆる戰士に優つてゐる如く、侯爵夫人は又彼女の美貌と淑德とに依つて他のあらゆる婦人に優つてゐるとのことでした。

此の言葉は國王の心に非常な印象を與へましたので、彼は未だ一度も侯爵夫人を見たことが無いのに拘らず、直ちに彼女を戀するに至りました。そして恰も彼はパレスチナに向つて出帆する處だつたものですから、ゼノアから船出することにして陸地傳ひに彼地に赴くことに決心しました。モンフェラを通過すれば機よく美しき夫人に逢ふことも出來やう、そうすれば夫の留守を幸ひ、自分の願ひを叶へることも出來るかも知れぬと自惚れたのです。

フィリップは躊躇なく計畫の實行に取掛り、荷物等は先に送つて置き、自身はほんの少數の人々を從へて出發しました。もう一日の旅行で侯爵夫人の住居に行ける場所迄來ると彼は使を遣つて、明日中に御地に到着し食事を共に仕度き旨を言送りました。愼み深く貞淑な夫人は、御光榮を深く謝します。出來得る限り御歡待申しますと答へました。斯る偉大な君主が、夫の留守を恐らく知つて居ながら、突然訪問に來るといふことは、最初一方ならず夫人には當惑に思はれました。何にしに來るのか分りませんでしたが、少し考へると、之は屹と自分の美貌を聞及びになつて此の樣な殊遇を與へるのだといふ氣がしました。併し夫人は我が身分を辱めざるやう出來得る限りの敬意を表しようと決心致しまして、附近の貴族といふ貴族を悉く呼寄せ、彼等の意見に依つて時宜に適する仕度萬端を整へました。けれども彼女は饗應のことは一切誰にも任せず、出すべき食事の選擇に就ても何人の力も借りませんでした。そして

若い牝鷄を手に入る丈け持つて來させて、何も他の肉は加へずにそれ丈を旨く調理して數種類の御馳走を造(こしら)へるやうにと料理番に命じました。

國王は豫報通り次の日到着しましたので、侯爵夫人は鄭重に迎へました。彼は夫人の歡待を喜び、彼女が噂に聞いたよりも一層美はしいのを見ると、其の魅力に囚はれて愈々彼の戀心は募りました。彼は大層夫人を賞讃しましたが、それは彼の身内に燃えてゐる炎を極く微かに表白したのに過ぎなかつたのです。暫くして彼は彼の爲にと用意された部屋に退いて少し休息しました。食事時になりますと王と侯爵夫人とは同じ食卓に他人を混(まじ)へずして席に着きました。

特別な料理、優れた酒、幾ら見ても見飽かぬ美しき婦人の側にゐる愉快さ等で彼は殆んど有頂天になつて居りましたが、其中に彼は、來る料理も來る料理も、調理法こそ異れ悉く鷄肉の他何にもないのを知つて少からず驚くと同時に、其の地方には他の種類の鳥もゐるし獵獸もゐることに氣付いたので、殊更斯る饗應をする以上は必らず夫人が故意にそうさせたに違ひないと思ひました。併し禮儀の精神(こゝろ)から別に不快の色を示すことなく、却つて一種の肉を以て様々の料理を作る手腕に對して讃辭を述る機會を得たことを喜んで斯う申しました。『夫人、此方(こちら)の國では牝鷄計り榮えて牡鷄は榮えませんか?』牝鷄ばかり澤山あつて牡鷄が見えないものですからそう云つたのです。モンフェラ夫人は彼の質問の意味が

よく分つたので、今こそ自分の性質を了解させるべき時機だと思ひまして、心を引立てゝ直ちに答へました。『いゝえ陛下。女といふものは何處へ參りましても同じで御座います。身分や服裝がどんなに違つて居りましても。』

王は此の返答の眞意を了解すると同時に、夫人が牝鷄ばかり澤山御馳走に出した理由を知りました。彼は之以上挑まうとしても駄目だといふことを直ちに見て取りました。此の樣な婦人に對しては如何に骨折るとも無益だし、まして此の場合暴力を用ひる抔といふことは以ての外だからです。彼は自分があんなに輕卒に熱狂したことを後悔しました。そして自分の榮譽に最も適はしいことは此の情火を消止めて、心に抱いた自惚れた希望を捨てるにあると思案しました。それ以上の鐵砲を食はぬやう、此上試むる欲望を抛棄しました。そこで彼の誤れる訪問の目的を旨く隱す爲め、食卓を立つや否や、侯爵夫人に歡待を謝した上、再びゼノアに向つて出發しました。

第六話

正直な俗人が旨い冗談を云つて僧侶の僞善を責める。

明ら樣な機智を以て佛蘭西國王を窘めた侯妃に對し婦人達が口を揃へて賞讃した後、フィンメッタの

次に座つてゐたエミリアは、女王の意志に從ひ直ちに次の如く語つた、――

私は昔一人の俗人があつて、時に適はしい頓智のある返答をして惡僧を懲らしたお話を致しませう。

左程古いことでは御座いませんが私達の都に一人のフランシス教團の僧が居りました。彼は宗教審問官をも勤めて居りまして、自分では信仰の篤い、熱心な基督信者を裝つてゐましたが。實は斯かる人々の通弊として、異端の臭味を多分に持つた人抔には餘り目を呉れず、お金を澤山持つてゐそうな人間ばかり一生懸命追求してゐたのです。ところが偶然一人の智慧のないお金の澤山ある男に打突かりました。其の男といふのは或る日人の集まつた所で、酒で頭が上せてゐた爲かそれとも度外れな自惚れの爲か知りませんが、俺の穴藏に馬鹿にいゝ酒があるんだ、神樣だつても若し此の世においでになれば召上るに違ひない、と云つたものです。勿論信仰が無い所以なんかではなく、唯人間が足りないからそんなことを云つたのです。程なく此男の言が例の審問官の耳に入りました。彼は此言をなした男が大變金持であることを知つてゐたものですから彼を捕縛させて告發しました。それは云ふ迄もなく其男の信仰を目醒めさせ、篤くさせんが爲ではなく、其奴の懷中から澤山のお金をふん奪る爲めであつたのです。

被告は、審問官の云ふことに間違ひはないかと問はれると、『はい相違ありません。』と答へて、どんな具合に何ういふ意味で云つたかといふことを説明しました。教父なる審問官は、要求する所は金ばかり

なので、直ちに彼に向つて云ひました。『貴樣は神樣を酒客だと思つてるのか？　いつも〳〵酒場に計り入浸つてゐる貴樣等の仲間見たいに神樣が酒の選好みをしたりすると心得とるのか？　醉つたまぎれに口を辷らしたのだ抔と今になつて本官を言くるめ樣としてるに極つてるが、それは無駄だ。若し本官が役目向き通りにするとすれば貴樣は火刑に處せられるのだ。』全で靈魂の不滅を否認したり神の存在を疑つたりした淸敎徒に對するかのやうに、恐ろしい嚴格な聲音で以て斯う脅付けられると、囚人の心は驚愕で一杯になつて了ひました。暫らくの間自己の位置を考へ、恐ろしい判決を輕減して貰ふ方策を思案した揚句、黃金といふ膏藥の力を借り、それを審問僧の手に塗付けることを思付きました。殆んど凡ての僧侶の心を蝕んでゐる貪慾といふ毒を癒すには此の膏藥に限る、金に觸るゝことを敢てし得ないと高言するフランシスコ派の坊樣には特に利目のあることを知つてゐたからです。名醫ガレンも此の藥のことは云つてませんけれ共、非常に有効なものです。此の立派な男が之を用ひますと、案の如く大成功でした。膏藥が素晴らしい利目を現して、恐ろしい火焰が有難い十字架に變りました。彼はそれを掛けました。すると彼等は、彼が聖地巡禮に行くので旗の上に飾るのだとでも云ひ度氣に、黑地に黃色い十字の付いた旗印を彼に吳れました。斯く輕い罰を與へ、後悔の印として每朝聖十字寺院の彌撒に參ずること、晝食時には審問官の所に來ること、其他の命令をなした上、彼を放免して其日の殘りを自由に行動

せしめました。

悔改めた男は命令通り固く履行して居りますと、或る日『永遠の生命に於ては、一つに對し百を受くべし、』といふ福音書中の言葉が唱はれるのを聞くと、それが彼の心を動かし、確りと記憶に刻付けられました。彼は例の時刻に審問僧の所へ來ると彼は既に食卓に着いてゐました。側へ寄ると彌撒を聽いたかと問はれたので躊躇なく『はい』と答へました。『お前の聽いた中に何か疑はしいことか、或は說明して貰ひたいと思ふやうなことはなかつたか？』『御座いません、敎父樣、私の信仰は全く强固になりまして、何事にも疑問を感じません、けれども貴父樣が私に何でも申上ることをお許し下さいましたから申上ますが、來世で貴父方を待つて居る運命のことを思ひきすと、貴父や御同職の皆樣に對してお氣の毒に思ふやうなことを聞きました。』『それは何かな？』『それは福音書中の文句で御座いまして、汝等與へたる百倍を受くべし、といふのです。』『それは實に眞實のことだ。だがそれが爲にお前が私等の爲にそんなに心配する譯が分らんぢやないか？』『ではお話しますが、私が常に貴父方のお寺に參るやうになりましてから見て居りますと、皆樣が澤山お食りになつたお汁のほんの僅かの殘りを、時に依つて一鍋のこともあり二鍋のこともありますが、捨てる代りに貧民に施與なさるやうです。そこで若し鍋一杯宛に對して彼の世で百杯受取るとしたら、それこそ餘り澤山で貴方方はきつと皆なその中に溺死なさるでせ

うからね。」

此の單純な言葉を聞くと審問官の客達は皆笑ひ出しました。併し彼のみは、それが僧侶の貪慾と僞善に對するあてつけであり、彼の行爲に對する間接的の非難であることを感付いて、腸を刺される思ひがして、再び此男を罪に落してやりたい位だつたのですが、最初の時彼の處置を非難した人々を激昂させることを恐れました。併し憤怒の餘り彼は其男を面前より退らせ、將來再び來ることを禁じまして、それから後は思ふ儘に生活することを許しました。

第七話

ベルガミノはプリマッソとクリュニー僧正との物語をなして、カン・デルラ・スカラ氏を極めて巧妙に譴責する。

エミリアの話と其の話し方が面白いので人々は皆笑つて、殊に十字軍といふことを賞めた。そこで今度はフィロストラトの番であつたので、彼は語つた。――

皆樣、或る固定した標的を射當てるといふことも勿論非常に立派なことですが、併し思ひも掛けず突然現はれて來た的を卽座に射止めるといふ事は射手に取つては尙一層偉大なことです。罪惡に充ちた僧

侶の生活は攻撃と非難とに對して不斷の標的を提供して居りますから、豚にでも喰れるか投げ棄てるかするより仕方のないやうな物を貧民に施與するに過ぎない、彼等の僞善的慈善に就て宗教審問官を非難した正直な男は全く正當でありますが、更に右の話に依つて私にカン●デルラ●スカラなる人を想起せしめた點に於て一層賞讃に價します。

カン●デルラ●スカラといふのは、フレデリック二世以來伊太利に在せし貴族中で最も立派なお方であつたといふことを知つてる人は少い樣です。此のお方程運命の神に寵愛せられた人は稀で、又其の財産に依つて榮譽を贏得た人も滅多にありません。或る日のこと彼はヹロナの都に於て盛大な宴會を催す旨を告げ、大げさな仕度をして仕舞つてから、何ういふ動機からか全く不明ですが突然其の意志を飜して、彼の祝宴の噂を聞いてヹロナに集つて來た見知らぬ人達に樣々の贈り物をしました。これは彼が人々に提供する積りであつた見世物や饗應を中止した其の埋合せの爲です。彼はこんなに人々に贈物をしながら、ベルガミノと稱する一人の男を忘却しました。此の男は大層愛想のいゝ巧みな辯舌家で、おまけに機智澤山のいゝ頭腦を持つてゐましたから、彼の器量を知るには是非共彼の喋るのを聞く必要がある程でした。扨て前に云つた貴族の忘却は故意だといふ噂もありました。彼は此んな男は氣に留るに及ばない、だから中止の償ひをやる必要もないと考へたのです。

併し此の祝宴に依つて何等かの利益を得ようと望めばこそヱロナに遣つて來たベルガミノは、自分が少しも顧られないのを知り、自分や召使共や馬等を宿屋に泊めて澤山の宿料を費してゐることを考へると腹が立つて來て、ぷん〳〵に怒つて了ひました。併しデルラ・スカラに暇も告げずに去るのは惡いに違ひないと思つて、尙ほ出發を延引して居りました。處で宿屋の亭主は彼の駄洒落(だじやれ)を聞いて宿料を差引くやうな男ではありませんから、ベルガミノは懷中無一物になつて了ひました。

憐れな男ベルガミノは或る貴族が彼に與へたところの大層美麗で高價な衣服を、饗宴に出る時着るやうにと三組持參して居りましたが、一揃は宿屋の主人に宿料の代に遣りましたが、それでも未だ歸らうとしないので次のも取られて仕舞ひました。遂に何處までも事件の終りを見ようと決心して、もうあとの一組が無くなつたら出發しようとして居ります時、或る日のことデルラ・スカラの食事に參じて極めて悲しさうな打沈んだ樣子をして居りますと、此の貴人はお尋ねになりました。『ベルガミノ君どうしたのかね？ 何か困つてゐるやうだね。何ういふ理由(わけ)だか聞かして呉れないか？』彼が斯う訊いたのは彼を侮辱する爲であつて、彼の返答がどうであらうとそんな事は氣にして居なかつたのです。然るにベルガミノは前以て用意してでもゐたかのやうに、卽座に次の物語を以て之に答へました。

『我公樣、或る所にプリマッソと申す名高い文法學者が御座いましたが、彼は詩を作ることも比類なき

巧妙でございました。如何なる詩人も即興詩にかけては彼に並ぶものなく、彼は題目を問はず何事に就てでもそれを作ることが出來ました。非常な學識に加ふるに此の才能がありますものですから、大層有名になつて、彼が一度も行つたことのない地方に於てすら絶えず彼に就て論議さるゝ程でした。彼は新知識を得んとの望みに驅られて巴里に參りましたが、其所に到着した時は大層貧しい狀態にありました。何故と申して、知識は貧困を救ふことは出來ませんし、偉大が報酬の代用にもならないからです。巴里の都へ參りますと彼は屢々クリュニー僧正の噂を耳にしました。其人はローマ法王に次で最も有福な大僧正であるとのことでした。彼の立派な人物、其の所有する華麗なる宮廷、食事時に宮殿に來る者は誰にでも鄭重な饗應をするといふこと等に就て素晴らしい噂をしてゐます。プリマッソは此の話に感動し、立派な偉い人達を見たい氣が大層強くなりまして、僧正の所へ行つて見ようと決心しました。彼の住居は巴里から餘程遠いかと尋ねて見ますと、約三リーグ計り離れた所にある彼の別莊の一つに滯在中とのことでした。朝極く早く出立すれば晝食時には到着出來ると思つて其道をよく尋ねました。併し若しかして同行の人に逢はず、道にはぐれて了つて食事に有りつけぬやうなことになつたら困ると思つて用心の爲に三塊のパンを携帶しました。水は――彼はそれを好まなかつたけれど――何處でも行く所にあると思つたからです。支度が整ふと彼は出發して、大變急いで步いたし、道にも迷はなかつたものです

から未だ食事の始まらない中に僧正の別莊に到着しました。彼は宮殿に入つて方々調べて見ますと、非常に澤山の食卓が用意され、多くの食器棚には御馳走が充滿し、其他樣々な準備が出來てゐるのを見まして、成程僧正の豪奢の噂は噓ではなかつたと心中感服いたしました。

『彼がこんなことを考へながら誰とも敢へて談話を交さずに、珍らしいのと驚いたのとで四邊凡ての物を眺めて居る中に食事の時刻になりました。執事は手洗水を取寄せて客に手を漱がせた後、皆を食卓に就かしめました。偶然にもプリマッソは大僧正が食堂に這入る時に通られる扉の丁度眞向ひの席に着きました。我公樣、御注意迄に申上て置きますが、僧正の食卓では、僧正自身が着席せられぬ中は誰にも、パン一片と雖も供されぬ習慣でありました。皆の人が着席しますと執事は、皆が食事を始めようとお待ちで御座いますと僧正に申上げましたので、彼はお部屋をお出になりました。ところが彼が大廣間に足を入るゝか入れぬに、未だ一度も見たことのないプリマッソの粗末な服裝が目に入りました。これが最初に彼の眼を捕へた物であつた丈けに、彼の頭には曾て例の無い考へが起りました。『何だこんな奴等が俺の財產を食潰しに來るのか。』と心の中で呟きました。そして食事どころか自分の部屋に歸つて戸を閉めさせ、入口の向側にゐる男を知つてゐるかと侍從共にお尋ねになりました。すると誰も存じませんと答へたのです。

一方プリマッソの方では、長い道中を歩いて來た事ではあり平常の食事時よりずつと遲くもあるので腹が減つて堪らぬのに、僧正が何時までも人々を待たして置くものですから、懷中からパンを一塊取出して禮儀にも何にも構はず食べ始めました。暫時してから大僧正は侍僕の一人に向つて、あの見知らぬ男が未だゐるか何うか見て來いと御命じになりました。『未だ居りまする、そして自分の持つて來たパンを食べてゐる樣で御座います』と復命しました。僧正は憤怒の態を表はして、『持つてゐるならそれを食はして置け、俺の御馳走は今日は食はせないからな。』と答へられました。併し彼は流石に追出せとは命じ兼ねました。それは餘り酷いと思つたのですが、此の男が自分の方から出て行つて吳れることを望みました。プリマッソはそんな事があらうとは夢にも知らず、一片を食べて了つても未だ中々僧正が出て來そうにないので又一片を取出して、それをも最初のと同じ食慾を以て平げて了ひました。大僧正は侍僕の一人に命じて、未だ見知らぬ男がゐるか見させると、未だ居るとの報告でした。プリマッソはもう到底僧正は來られぬものと斷念しましたが、二片では未だ餓えを癒すことが出來ませんでしたので周圍に居る人達の驚き杯には少しも頓着なく三つ目のを取出しました。僧正は之をも亦報告されました。そして其男の執拗に驚くと同時に自己を反省して獨語しました。『俺は一體今日は何を考へてゐたのだらう？何うして俺はこんな强慾な考へを起したり、此の男を侮蔑するやうになつたのだらう？　俺の輕蔑して

ゐる人がどんな人か知りもしないのに。俺は今迄初めて來た人でも貴族か平民かと訊きもせず、貧富をも問はず、商人か惡漢かを尋ねもせずに幾百人となく食卓に連ることを許したではないか？　恐らく彼の男よりも未だ惡いやうな怪氣な多くの人間に對してゞ俺は鄭重であつたではないか。それに若し本當に彼が下らぬ人間ならこんな感じが俺に湧く筈はない。だから俺が考へ直して見て敬意を表そうと決心するに至るからには、彼の男は屹度何か偉い人間に違ひない。』そこで彼は其男が何者であるかを取調べさせますと、彼はプリマッソと稱して、噂に高き大僧正の立派やかなる有様を拜觀に來たのだとのこと、これを聞きますと兼てプリマッソの名聲を聞及んで居りました僧正は自分の態度を甚く恥ぢて、出來る丈のことをして過失を償はうとしました。僧正は彼に對して最大の敬意を表し、能ふ限りの榮譽を與へ、食事が濟むと侍僕等に命じて斯る才智ある人に適はしき衣服數枚を與へしめ、黄金一袋と極めて美麗なる馬一匹とを賜つて、尚ほ幾日でも心の儘に滯在するやうにとのお言葉を下されました。プリマッソの心は歡喜と感謝に滿たされまして、數限りなく僧正に禮を述べた後、先に歩いて來た道を今度は馬上の人となつて歸りました。』

悟りの早いカン・デルラ・スカラは直ちにベルガミノの意を了解して、其上の説明を待たず、笑やかに云はれました。『ベルガミノ君、君は君の缺乏と才能とを大層立派に私に知らして呉れた。お蔭で私にも

自分の强慾が分つたし、君が私に求めることも分つた。私は斷言するが、こんな吝嗇なことを仕たのは君の場合が實に初めてなのだ、だから君が敎へて吳れた通りの方法で過失を訂正しよう。』斯く云つて彼はベルガミノの借財を支拂つた上、最も高價な自分の着物の中の一重ねと、お金を澤山入れた財布と、厩にゐる立派な馬一頭とを賜つて、直ちに歸國するとも或は尙暫時ヹロナに滞在するとも隨意にせよと仰せになりました。

第八話

ギレルモ・ボルジエールは氣轉の利いたことを云つて、エルミノ・ダ・グリマルヂの慾張りを矯める。

フィロストラトの次に座したロウレッタは、ベルガミノの頓智に對する人々の賞讚が一通り濟むと、今度は自分が何か話す番だと思つたので女王の命を待たず優しい聲にて次の如く語り出した、――

皆樣、只今のお話に誘はれまして私は、或る悧發な廷臣が同樣な方法に依つてさる豪商の慾張りを誡めて自分も利益を得たお話を申上げる事に致します。けれどもそれが前のお話と同じ終りになつてゐるからといつて皆樣御不滿にお思ひになるやうなことはあるまいと存じます、終りは目出度いのですから。

昔ゼノアにエルミノ・ダ・グリマルヂといふ大商人の貴族がありました。伊太利切つての大金持の一人と信じられて居りましたが、其の强慾で吝嗇なこと〻云つたら之も國中比類なき程でありました。他人の爲には且て財布の紐を解いたことなく、自分の食物や衣類さへ節減する始末、一文でも費用の掛るのを恐れて居りました――其の點では見得坊で食事の贅澤な一般のゼノア人とは全く違つて居たのです。彼の吝嗇が餘り極端に走つてゐるものですから人々はグリマルヂといふ本名を呼ばずに、慾深エルミノと呼んで居りました。

斯樣にして儉約の上に儉約をして日々財産を溜めて居ります處へ、ギレルモ・ボルジエルといふ佛蘭西の廷臣がゼノアに到着しました。彼は非常に正しい立派な紳士でありまして、機智百出流る〻如き辯舌を持つて居りました。誰に對しても寛大で愛想がよう御座いました。彼の行爲は現今の廷臣達とは正反對でした。今時の人達と來ましては、墮落した生活を送り無知に溺れて居りながら、平氣で自分を紳士と稱し大殿樣と呼んで恥ぢませんが、正しく呼べば驢馬とでもいふのが至當なのです。本當に彼の人達は宮廷に適はしい行儀作法なんかは無くつて、如何にも頓馬らしく根性が捩くれてゐて風儀が惡いのです。昔の紳士はいつも一生懸命になつて、仲違ひしてゐる家族は和解させ、似合ひの結婚は旨く纒まるやうに、友垣は一層固く結ばれるやうにと骨折つて居たものです。彼等は打沈んだ人や悲んでる人達に

は陽氣な話をして浮立たせ、不幸な人を助け、世の凡ゆる階級の人々に力を貸すを彼等の義務と心得て居りました。自分の住居してゐる宮廷に於て有用な興味ある人間にならうとして絶えず自己の精神を練磨して居りました。特に彼等は、彼等より身分低き人々の罪惡や放埒を止めさせることに心を用ひ、正しい訓誡をするにも子供に對する父親の柔しさを以て爲したものでご座います。今時の廷臣は之とは全く別です。互に互を害すること計り考へ、惡口交りに他人の噂を仕たり、面と向つて互に相手の不行跡や罪惡を叫び合つて喧嘩や憎しみを呼起そうと計り仕てゐます。傲慢、卑劣、追從、輕薄、暴虐、不正、惡埒、殘酷、かくて刻々に品位を落し身分を辱めてゐるのが見えます。最も持囃(もてはや)され敬愛される人、最高位にある人々の中でも最も高き報酬を受くる人といふのは、殆んど極つて最も多くの缺點、惡德、時としては罪惡さへも持つてゐる人なのです。之は私共の時代の恥辱です。先づ第一に德を尊び、それを人々の規範とすべき人達自身が、無恥至極にも惡德の泥沼の中に溺れてゐるといふことは、之取りも直さず人間には最早德操の無くなつた證據ではありますまいか？

扨て、現在の道德狀態に對する私の正しい怒りが少し深入りし過ぎた樣ですから、再び物語りに戻りませう。ギレルモ・ボルヂエルの所へはゼノアの貴族といふ貴族が悉く敬意を表しに訪れて參ります。する中彼も程なくエルミノ氏の强慾と慘(みじ)めな生活振りの噂を聞きまして、是非其の男に逢つて見たいとい

ふ氣を起しました。エルミノは吝嗇ではありましたが、未だ良き育ちの踪跡が幾らか殘つて居りました し、其上ボルジニルの大變立派な紳士だといふことを聞いてゐましたので、極めて鄭重に彼を迎へ、樣樣な事物に就て旨く談話の調子を合せて居りました。彼は此の廷臣の作法や才器が大層氣に入つたので、彼が少し以前に建てゝ置いた美しい新邸宅を見せたいと思つて、彼と彼を紹介して吳れたゼノア人とを伴つて行きました。部屋々々を案內して了ふと、彼はボルジエルに向つて云ひました。『貴卿は大變學問のお有りなさる見聞の廣いお方と存じまして御尋ね致しますが、何か未だ誰も見たことの無い物で、お客樣方を御迎へする大廣間に描かせるにいゝ題材がありましたら御敎示を願ひたいのです。』ボルジエルは隨分馬鹿げた質問だと思つて、『うんと大きな噴嚏でも描かせなさい、誰も見たものは無いし、見る者も無いでせうからな。』と答へ、更に、『だが本當に繪に描くことの出來る物で、あんたの知らぬ物を何か敎へて吳れと仰せられるなら御敎示仕ませうかね。』『さう願へれば大變有難うご座います。』とエルミノは答へました。すると全く思掛けない返事『あゝそんなら、慈善の繪をそこへ描かせなさい。』

此の一言がエミルノ氏の心をグツと衝いたので、彼は我身を恥ぢ、直ちに凡ての遣り方を改めて今迄の習慣とは全く別な行動を取らうと決心しまして、未だ多少の狼狽は有りながらもきつぱりと答へていふに、『承知しました、慈善の繪を描かせませう。そしてうんと立派に描かせて、貴殿でも誰でも、如何

なる身分の人と雖も、將來は私が慈善を知らぬ抔と非難することの出來ないやうに致しませう。』

そして事實上エミルノ氏の心も行ひも其の日よりはすつかり一變しまして、當時のゼノアに於て彼は最も物吝みせぬ正しい人となり、他國人や同國人に對して最も禮節ある人となりました。

第九話

サイプラス王はガスコニイの婦人に云込められて、懶惰で無價値な人間だつたのが有德の人となる。

エリザは今度は當然自分の順番だと思つて女王の命令を待たず直ちに斯く語つた、——

皆樣、何の豫謀もなく口から出任せに云つた一言の方が、幾度も繰返して云はれる警告や訓戒よりも一層多大の効力を現はすことは私共の屢々見るところで御座います。此事は只今のロウレッタ樣の話を以ても十分よく分ります。そこで私も、も一つ似寄りのお話を申上げようと思ひます。爲になるお話は談人の誰彼を問はずいつでも耳を傾けて聽く價値がありますから。

ブウィヨンのゴッドフレーが聖地を征服してから後サイプラス島の帝位に卽かれましたサイプラス第一世の御代の時で御座いましたが、一人のガスコニイ婦人が聖墓參詣の爲エルサレムへ巡禮に參りました。其の歸途サイプラスを通過いたしますと、數人の惡漢の爲に凌辱されました。彼女は之を長官に訴

へましたが何等の賠償をも得ることが出來なかつたので、今は國王自身に訴へようと決心しました。併しそんな事をしても時間を無駄に費すのみだ、骨折損だと云はれました。といふのは、此の王樣は實に怠惰で人々から輕んぜられてゐるので、他人に對して加へられた侮辱を處罰せぬは云はずもがな、王自身に對する侮辱でさへ凝つと堪へて身を任してゐるといふのです。更に甚しいことには、誰でも何か不平のある時は、王樣の前に出て實に不敬極まる惡口雜言をして念晴しをしても、何の罰も受けないと云ふのです。

之を聞きますと婦人は、自分の被つた凌辱に對して到底復讐することも無念を晴すことも出來ないと諦めましたが、併し兎に角國王の怠惰と卑屈とは譴責してやらうと意を決しまして、彼の面前に赴き、わつと泣き出しながら云ひました。

『殿下、私は私が殿下の臣民より受けたる侮辱に對して復讐して貰はうと思つて參つたのでは有りません。唯、聞く處ではあなたが每日被つてゐらつしやるといふ無禮と屈辱とを、何うして堪へることが出來るのか、その理由をお伺ひ仕度いと思つて上りましたのです。多分私も殿下の範例に倣ひますれば、自分の受けた恥辱をぢつと堪へることが出來るでせうから。そして殿下は驚くべき忍耐力を持つていらつしやるので御座いますから、出來ることなら私の受けた恥辱をも殿下に獻上したいと思ふ位で御座い

ます。』

今迄は何事にも無感覺のやうであつた王樣が、此の言葉には動かされました。そして恰かも深い眠りから醒めたかのやうに斷然たる處置を取りました。先づ第一に婦人に侮辱を與へた者共を嚴罰に處し、それより後は王位の尊貴を犯すやうな言動は凡て極めて嚴格に之を抑壓なさいました。

第十話

ボロニアのアルバアト公は穩かに或る婦人を赤面させる。彼女は彼が自分に惚れてゐると思つて彼は辱めようとしたのだ。

エリザの話が終ると後に殘るは女王一人となつたので、彼女は女らしい品位を保ちつゝ次の物語をなした、――

淑女達、晴れた晩には星は空に明るく輝きますし、春になると種々樣々な彩色をなした花が牧場を飾りますが、丁度それと同じ樣に、大勢揃つて愉快な話や面白い逸話などを語り合ふのは大變結構なことで御座います。殊に簡短といふ點に於て男子方よりも婦人方に一層適して居ります。婦人は男子の方より一層注意して長談議を避けねばならぬものだからです。確かに今日の婦人で洗練された警句を聞いても

これと理解の出來る人は滅多に御座いません。稀に分る人が有りましても必要な場合に應じて當意卽妙に之を發し得る人はありません。それは私共凡ての恥辱です。當今の婦人方は祖先から受繼ぎました心の働きをば身體の裝飾に計り用ひまして、衣服は多く縫箔を施し、金糸の縁飾や裾飾等をして我こそ比類なく偉い者のやうに思つてゐます。そんな物を澤山着たり負ふたりする競爭なら驢馬こそどんな婦人よりも餘計運搬出來るでせうが、それかと云つて他の驢馬より偉い譯でも何でもないといふことを忘れてゐるのです。私は自分自身も一般の例を漏れ得ないのですから、こんな告白を仕なければならないのを恥かしく思ひます。斯樣に飾立て塗立てたお人形達は全で無感覺で口なしの大理石像か何かの樣につくねんと立つてる計り、若し又人が何か尋ねやうものなら其の間の抜けた返答振りと來ては始めから何も言はぬ方が遙かに增しな位なのです。其の癖御當人は、物の分つた男子や婦人と談話の出來ないのは無邪氣で純な證據だ抔と實際自惚れて居ります。そして自分等の下らぬ愚鈍さを淑徳と稱して居ります。恰かも淑女とは自分の下婢とか洗濯女とかパン屋の主婦とか云つた者相手で無ければ口の利けないやうな婦人に限るかのやうに。私達は何事に依らず誰と談話を交すにしましても其の時と場所とを顧慮し、談の相手にも氣を付けねばなりません。そうしませんと男女何れを問はず、何か鋭い奇警な言葉を放つて相手を窮地に陷れる積りでゐながら、自分の力量も相手の力量もよく測らなかつたが爲めに、

自ら馬鹿面を洒すことにならぬとも限りませぬ。

「あなた方が此の様な過失に陷らぬ爲、そして婦がいつも馬鹿を見る」といふ能く聞く諺通りに皆樣がならぬやうに、今日のお話の最終として私は、皆樣が理性に於て他の人達に勝れておいでの如く、道德に於ても優つてゐらつしやることをお示しになる方法を御教授申しませう。

近頃のことボロニアにアルベルトの公と申す大層賢いお醫者がありました。此の人は六十歲になりましても、心は未だ若々しく元氣に充ちて居りました。肉體の自然的熱力の消失して居たことは容易に想像出來ますが、それでも未だ優しい愛の心を起すことはあつたのです。彼は或日のこと、大層美しい一人の寡婦を窓の所から認めました。其の婦人の名はマルゲリダ・ド・ギソリエリといふのだそうです。此の婦人を一目見ますと彼はすつかり心を奪はれて終ひまして絕えず彼女のことを思つて居ります。まるで血氣盛りに返つたかの樣に、彼女を見なかつた日には夜も眼が合はない有樣です。それだもんですから始終女のゐる窓下を、或時は徒步で、或時は馬に乘つて通つて居ります。程なく當の寡婦も、それから彼女の知合の婦人達も彼の習慣を知るやうになりまして其の動機が分ると、あんなに歲を取つてあんなに嚴格そうな樣子をしてゐながら無中に戀をしてゐるのが可笑しいと云つて皆で笑ひました。大方此の婦人達は、若い世間知らずの人々でなければ戀愛なんか感じもしないし、又感じてはならぬものとでも

思つてゐるのでせう。

お醫者樣が相變らずギソリエッリ夫人の家の前の散歩を續けてゐますと、或日のこと夫人は他の數人の婦人等と入口の所で椅子に掛けて居りました。若い未亡人は彼の姿がずつと遠くの方に見えると、直ちに皆と相談して一つの策略を案じまして、彼を極く鄭寧に呼迎へた上、よき機を見て彼の戀をからかつてやらうといふことになりました。そこで彼等は皆立上つて彼に挨拶をなし、是非お庭の中に這入つて涼しい空氣をお入れなさるやうにと勸めて引入れ、砂糖漬、果物、美味な酒等を饗應しました。小宴が終りますと婦人達は極めて鄭重な愼深い言葉つきを以て、何うして貴方のやうな方が、大變立派で氣持のよい若い愛人を幾人も持つてゐる婦人なんかに心を寄せなさるのですかと尋ねました。

醫者は婦人達が自分を嬲つてゐるのが明かに分つて腹を立てましたが、同樣の鄭重さを以て未亡人に向ひ、莞爾かに答へました『奧樣、物の分つた人なら私が戀をしてゐるのを見ましても誰も不思議と思ふ者はありますまい。殊にあんたの樣に戀慕はれる價値のある方を戀してゐるのであつて見れば。老齡は愛の職分を果すに必要な精力を奪ひますが、眞實に愛慕する價値のある者を見分けんとする望みを奪ひもせず、又其の能力をも奪ひませぬ。寧ろ反對に、歳老いた人は經驗を積んで居る丈けに、眞に愛慕の價値ある者を見分ける力は一層勝れて居りまする。貴女に數人の若い崇拜者のあることを知りつゝ、

私があんたを愛し、私の目的を遂行しようと決心した理由をお話しせよとお望みのやうですな？　では申しますが御婦人、私は時々方々で婦人方が羽團扇豆と韮を食べてゐるのを見たことがあります。韮その物は甘くはありませんが、韮の頭は一番いゝ部分で、決して不味くはご座いません。ところが私は、これらの淑女方の中の二三の人が、婦人に有勝ちの氣まぐれから、韮の頭を掴んで莖を食べるのを見ましたが、莖と來ては迚も堪らん程味の惡いもんですからな。して見ると御婦人、あんたとても戀人に就て同様の氣まぐれを持つて居られて、他の若い連中の代りに私を選まぬとも限らんと私が思つたに無理はありますまい。』

此の言葉は全く豫期しない處だつたものですから、寡婦も他の婦人達も少からず狼狽しました。そして、ギソリエリ夫人は醫者に向つて云ふやう、『先生、私共は本當に不躾であつた爲に當然の罰を被りました。何卒貴下御心安く思召せ、先生が私共をお罰し下さつたからと云つて決して氣を惡く抔致しませんから。それどころか私をお思ひ下さつたことを大變嬉しく思ひますの。貴方の様な非常に御立派なお方と親密になれますことは大變光榮と存じますわ。それが分らない婦だと私をお思ひ下さいますな。先生は立派なことの外には何もお求めにならないことを私はよく存じて居りますから、何でも出來る事ならお言葉に従ひませう。』

アルベルト醫師は未亡人に對して彼女の好意を謝し、立上つて皆の者に暇を告げて立去りつゝ、心の中では笑つてゐました。夫人は其後碌に知合でもない、そして人を嬲ることに掛けては彼女なんかよりもずつと腕の勝つてゐるあんな人を揶揄しようとした自分は本當に馬鹿だつたと、屢々後悔しました。賢い皆様は、此の夫人の不謹愼を見て將來御注意なさるでせう。

*　*　*　*

三人の紳士と婦人達との物語が終つた時には、太陽は既に西に傾き、炎熱も餘程減じてゐたので、女王は快活に云つた。

『扨て淑女達(みなさん)、私の王位にある間に爲すべき事と云つては最早や新らしき女王を指名すること丈けでご座います。新女王は適當な方法で私共凡てを樂ませて呉れさへすれば、萬事を自分の隨意に指圖して宜しいのです。まだ寢(やす)む迄には餘程時間が御座いますが、充分時間の餘裕が有りませんと明日の事を何彼(なにか)と準備することが出來ませんから、新女王の必要と御考へになることは皆な明日直ぐ間に合ふやうに、之からはいつでも、丁度今時分にすつかり極めて了つた方がよいと思ひます。そこで、萬物に生命を與へ給ふ創造主の爲に、そして我々共一般の幸福の爲に、フィロメナ様を明日の女王に指名致します。』

斯う云ひつゝ彼女は立上つて、自分の頭上より月桂冠を取外し、滿身の敬意を表してそれをフイロメ

ナに被らせた。そして彼女自身先づ女王に敬禮をすると、若き淑女達や紳士達も皆その例に倣つて、喜んで新らしき主權者の支配に從つた。フィロメナはこんなに王冠を頂かせられると最初の程やゝ顔赤らめて居たが、パンピネアのたつた今云つた事を思ひ起すや、見苦しい樣を見せてはならないと直樣氣を取直して、先づ第一に婢僕等の樣々な任務をパムピネアの指定通りに皆任命し、それから翌日の晝食及夕食に就て萬端命令し置き、今皆の居る此の場所で食事をする旨を述べて、扨て次の如く語つた。

『皆樣、パムピネア樣は私を女王に御指名下さいましたが、それは私に其の德があるからではなくパムピネア樣の御好意に依ることなので御座います。で、私は明日の娯樂法の選擇に就きましては自分丈けの判斷に依らず、皆樣と御相談の上決定致したいと思ひます。そこで私の計畫を簡單に申述べますから、皆樣の御好み通りにそれを御訂正下さいまし。若し私の判斷にして間違ひ御座いませんならば、私は今日のパムピネア樣のお探りになつた方法は全く結構で立派だと思ひますから、餘り永く續けて倦きるとか其他の理由が生じない限りはそれを變更したくありません。で此の通り繼續することが決りましたらば何處か別の場所へ行つて暫らく時を過さうでは御座いませんか。日暮になりましたら此處へ參つて晩餐を頂いて、それから暫時歌でも唱つたら何か遊び事でもしてゐる中に寢む時間になりませう。明朝は早く起きて、思ふ儘に娯むことの出來る場所を選定致しませう。定刻になりましたら今日の樣に御晝食

をして、それから踊つて晝寢をした後で又此處に集まつてお話を仕合ひませう。お話は一番面白くて爲になると思ひますから。併し私は、パムピネァ樣は餘り速急の間に女王に推されなさつた爲に御失念遊ばした一つの規則を設けたいと思ひます。つまり毎日或る一つの題目を定めて、皆の話が總てそれに就て話すことにします。さうすれば皆な適當な、主意の通つた話を用意して置くことが出來ますから。人間といふものは抑々世界の初りから、樣々な運命の變化に弄ばれ、世界の終りまでそれに變りはないでせうから、明日の話は、樣々の困難の中を潛り拔け遂に凡ゆる困難に打勝つた人々のことを述べることに致しませう。』

一同の紳士淑女は此の定めに滿足を表し、それに從ふことを約束した。唯ディオネオ一人は、皆が默つて了つた時口を開いて云つた。『婦人、私も他の皆樣同樣、此の定めは大變結構だと思ひますが、併しお願ですが、私共が一緒に居ります間の特權と致しまして、私丈けは定まつた題目を守らないでもよいことにして頂いて、何でも自分の好きなことを話すお許しを得たいのです。ですが私が面白い話を知らない爲にこんな斟酌を願ふのだと思はれないやうに、之からは順番の最終にお入れ下さつて宜しうございます。』

女王は彼が快活で頓才のある男であることを知つてゐたので、彼が此の許しを乞ふたのは、人々が同

じ題目計りで飽きが來た時に何か面白い話をして皆の氣を引立てんが爲であることを了解して、他の人人の同意を得た上、彼の求むる許しを與へた。

頓て婦人達は嶮しい岩壁の間の、花咲く牧場の樹蔭深き谷間を通つて緩かに歩を運び、小山より流れ落ちる水晶の樣な小川に至り、手足を水に浸して、互に戯れ合つた。

夜になると邸宅に歸り、陽氣に晩餐の席に着き、それが濟むと樂器を取寄せ、女王はロウレッタには舞、エミリアには歌、ヂオネオには立琴を命じた。ロウレッタは直ちに舞を始めた。するとエミリアは柔しい表情もて次の歌を唱つた。

小唄

一

ほんにわたしは、縹緻よし、
ほかのことなぞ何うでもよい。
いくたび見ても、縹緻よしに、
變りないのでいつも嬉しい。

むかしの情火(ほのほ)も未來の戀も、
この喜びを消しはせぬ。

二

わたしの持つてるよい縹緻、
いつまで見ても減りはせぬ。
いやいや――わたしの感ずる喜びは、
心も言葉も及びはせぬ。
その喜びの大さの、分るは柔しい心根に。
永く焦れた人ばかり。

三

ぢつと見れば見るほどに、
嬉しい感情(こゝろ)は湧上る。
どう考へようと、どう望まうと、
未來の祝福(さいはひ)わたしのもの、

今の希望(のぞみ)は、やがて大きな喜びよ。
わたしほど、幸運(しあはせ)なひ女他にあろか？

歌は終つた。歌の言葉は或る事柄に反省を呼起したけれども、皆それに和した。猶ほ暫時舞踏した時、短夜は早や更けかけたので、女王は之で最初の日を終りに仕ようと思つて、燭を燈させ、皆様明朝までお休みなさいと云つたので、人々は銘々の部屋へと退いた。

二日目

太陽は既に光を放つて新しき日を齎らし、鳥は愉快に木立に囀つて夜の明けたことを告げたので、紳士淑女等は夫々寝床を起きて庭園に出で、露深い芝生をあちこちと散歩した。彼等は昨日と同じ様に新鮮な草花を以て花環を作つたりしながら樹蔭で遊んでから、食事を濟まし少し踊つて暫時休息した後立上つて、女王の命令通りみんな牧場の席に着いた。月桂冠を頂いた非常に美しく品位ある婦人は、しばし一同を見廻して居たが、頓てネイフルを指名して新たに面白い物語を始めるやうにと求めた。ネイフィルは直ちに服従して、斯く語つた、――

第一話

マルテリノは躄の眞似をし、アリゴの死體に觸れた爲にそれが癒つたといふ振をする。それが露見して擲られた上牢に入れられたが、危くも絞罪を免れて、逃亡する。

未だ左程古い事ではありませんが、トレヸゾにアリゴといふ一人の獨逸人が居りました。大層貧乏な爲に擔夫(かるこ)即ちかつぎ人足をしてやつと生計(くらし)を立てゝ居りましたが、此の樣に卑しい稼業を仕てゐたに拘らず、德の高い聖い生活をしてゐたものですから皆の人から尊敬されて居りました。そして彼が死んだ時には、方々の大きなお寺の鐘が自然(ひとりで)にガン〳〵鳴つたと町の人達は言觸らし――それが實際であつたかどうか私は存じませんが――これは奇蹟だと云つて、人々は皆彼の死體の橫はれる家に遣つて行き、彼は確かに聖人だと云つて、恰(まる)で彼が聖徒の列にでも加へられたかのやうに、盛大な儀式を行つて彼の死體を中央教會に搬びました。おまけに彼等は、此の新らしき聖徒の死體に觸つた丈けで必らず何んな病氣でも癒るに違ひないと思込んで、跛(びつこ)、盲目、躄(いざり)、其他有りと有ゆる病に罹つた者を教會に引張つて來ました。

彼の成した奇蹟の噂を聞いて、附近一帶の善良な人達が我も我もとトレヸゾに押掛けてゐた時に、三

人のフロレンスの住人が矢張り其處に到着しました。ステッキ、マルシェズ、マルテリノといふのが彼等の名前でした。彼等は或る偉い殿樣の衣服を着て居りました。殿樣は彼等の馬鹿げた仕業を面白がり、どんな種類の人間でも巧妙に眞似るのが御意に召してそれを賜はつたのでありました。此の三人の新來者は、トレヸゾには初めて來たのでしたが、人々が群をなして街を急いで行くのを見て、此の騷ぎは何事かとその理由を聞くに及んで、彼等も皆がこんなに興味を惹かれてゐる物を行つて見たくなりました。とある宿屋に荷物を下すなり、マルシェズは仲間に向つて云ひました。

『此の聖人の遺骸を見に行きたいものだね、だがどうしたら旨く見られるか全く見當が付かないのだ。市長は騷擾を防止する爲に附近の辻々には一杯護衞を配置してあるそうだし、おまけに敎會は全く澤山な人で迚も這入り込めないそうだしね。』

すると他の二人よりも一倍此の新聖人を見たいマルテリノが云ふやう、『それは僕に任せ給へ、群集を押分けて死體の安置してある所へ到達する手段を見付けるから。』

『どうするのだ？』マルシェズが尋ねました。

『まあ聞き給へ。僕は躄で歩けないやうな振りをするからね、君は片方から僕を支へて呉れ給へ、そしてステッキ君は別の方からね。僕は自分では歩けない振りをしてゐるんだから、君達は僕の躄を癒して

やる爲に、僕を聖徒の死體の所へ連れて行きたい樣子をしなければいけない。君等を見れば誰でも、通さうと思つて側(わき)へ寄るだらうからね。』

二人の友は彼の旨い考案を喜んで、それ以上愚圖つかずに直ちに出かけました。人通りの無い街角に來ると彼は自分の手、腕、足、口、顏全體を思ふ樣捩歪(ねぢゆが)めたものですから、見る間に嫌らしい恐ろしい相貌に變つて、誰が見ても彼の全身が引歪んでゐることを疑ふ者はない位になりました。之が出來上ると、二人の友は兩脇から彼を支へて、教會に向つて進んで行きました。非常に苦難の樣子を作(つく)つて、彼等は途中逢ふ人毎に、何うか神の愛の爲に通して吳れと歎願するものですから、誰でも喜んで通して吳れました。そして彼等は忽の中に萬人の視線を集め、人々は至る所、「病人に道を明けてやれ」と叫んだので、容易にアリゴ聖人の死體迄行くことが出來ました。教會中は眞にひつそりと成つて了ひ、見物人は皆身動きもせず、どんな事が起るかと凝(ぢ)つとマルテリノを見詰めて居ります。彼は非常にお芝居の上手な男でありましたから、自分の身體を死體の上に載せて貰つて、數分間その儘ゐたかと思ふと、先づ一本の指を伸し、それから又一本又一本遂に手を伸し、腕を伸しといふ風にして、徐々に四肢五體を皆な伸して了ひました。其處に居合せて之を見た人々は皆歡聲を擧げて教會を鳴響かせました。直ちに無數の聲は高らかにアリゴ聖人を讚美します。其の歡呼の聲は實に高く幾度も繰返されまして、恐ろし

い雷鳴でも耳に入らない程で御座いました。

ところが運悪くも、もうずつと以前からマルテリノを知つてゐる一人のフロレンス人が死體の近くに居たのです。最初彼が這入つて來た時には餘り樣子が變つてゐるので氣が付かなかつたのですが、不常の顏付になると忽ち見付けて叫びました。『何といふ罰當り！　之では誰だつて此の惡漢を本當の躄と思ふも無理はない。』

すると數人のトレヸゾ人が之を聞付けて、『何だつて、此男は中風病みぢやなかつたのですか？』

『そうぢやありませんとも、彼奴は生れた時からずつと我々と同じにシャンと伸びて居たんでさあ。だが彼奴はどんな山師でも敵はない程旨く何にでも變裝出來るんです。』

此の言葉を終るか終らぬ中に、數人のドレヸゾ人が、それ以上を聞くに及ばず、群集を押分けて突進し來り、マルテリノの處へ行つて怒鳴りました。

『神と聖徒を瀆しに來やがつた此の畜生をふん捕へろ！　躄でもない癖に、態々躄の眞似なんか仕やがつてアリゴ聖人と俺達を嘲弄しやがつたのだ！』

彼等は直ちに彼に跳り掛つて擲り倒し、髮の毛を引拔き着物を引裂き、そして滅茶々々に彼の頭を打ちました。人々の怒りは非常なもので、有難屋でないものや、極く溫和しい人達迄が、彼を蹴飛したり

擲つたりしました。一言で申しますと其處に居合せた人は悉く彼を打つのが自分の義務だと思ひました。

マルテリノは赦しを乞ひ、慈悲を願ひましたが無駄で、彼等はいつまでも彼を撲つて居ました。

ステッキとマルッエズとは事件が全く思ひも掛けぬ結果になつて來て、大變風向きが惡くなつて來たのを知ると、自分達も同じ目に逢つては堪らぬといふ恐れから、マルテリノを援けに行く所か反對に、他の者と一緒になつて、「こん畜生打殺して了へ！」と叫び出したものです。併し彼等は何うしたら一番旨く彼を群衆の手から援助することが出來るかと思案しました。幸にもマルシズッがいゝ工夫を考へて彼を救ひ出したからよかつた樣なものゝ、若し放つといたら死んで了つたに違ひありません。彼は警官が皆教會の入口に居ることを知つてゐましたから、出來る丈け速く其の隊長の所へ行つて叫びました、

『閣下！　唯つた今私の紙入を盜んだ惡漢が彼處に居ります。百圓入つてゐたのです。何卒御生ですから彼奴を捕縛して私の金を取返して下さい。』

すると直ちに十二人の警官は不幸なマルテリノが半殺しにされ掛つてゐる所へ押寄せ、やつとの事で群衆を押除けて其場に來り、血だらけ傷だらけになつてゐる彼を怒れる人々の手から救ひ出して、裁判所へ引張つて行きました。

マルテリノが彼等を笑草に仕ようとしたのだと思つた人々はみんな急いで彼の後から蹤いて行きまし

た。そして彼は掏摸(すり)をやつて捕へられたのだと聞くと、いゝ復讐の機會を得たと思ひまして皆口を揃へて私もマルテリノに財布を摸られましたと云つたのです。

此の訴へを聞きますと、正しい代り極めて嚴酷な署長は、直ちに彼を密室に入れて審問に取掛りましたが、マルテリノの方は拘留されても恐れ入るどころか、冗談交りに返答する始末です。判事も彼の所作に腹を立てまして、吊刑臺に彼を縛付けさせて、暫らくの間吊上げたり引ずり下したりして盜罪を自白させようとしました。自白したら絞罪に處する積りだつたのです。此の樣に苦めてから判事は再び訊問を開始して、汝(おまへ)は訴へられた樣な罪を犯したのか犯さないのかと幾度も繰返して訊きました。不幸な惡漢は、拒んだつて何の役にも立たないことを知りまして、『閣下、若し私を訴へた人達が皆、私に摸られた時と場所とを申述べれば、喜んで事實を自白致しまする。そうすれば自分の致しましたことを明白に申上げまする。』

判事は、快く承諾して數人の告發者を召喚して、別々に尋問しました。一人は八日前に盜られたと云ひ、一人は六日以前の事だと云ひ、或る者は四日以前、或る者はつい今日のことだと申立てました。マルテリノは彼等の返答を聞きますと判官に向つて云ひました『旦那、彼奴等はみんな大嘘つきでご座います。それはどんなにでも證明することが出來ます。私はつい數時間前に此の町へ着いた計りなんです

からね。今まで一度も此處へ來たことはありませんし、一度も來なければ良かつたと思ひまさあ。運惡く私あ到着するなりすぐ、新聖徒の死體が曝してある敎會へ行つたんで、其處で私がどんな非度い目に逢つたか、私の全身に付いてゐる傷や裂目でお分りになりませう。私の申立を疑ひなさるなら、市長樣のお役人に訊いて御覽なさい。新しく來た者は皆役所へ行つて帳簿に記名されるんですからな。それから宿屋の亭主だつて證明するでせう。そして是等をすつかりお調べになつた上で、私のいふことに相違ないとお分りになりましたら、閣下のやうな正しい方が、こんな惡漢共の爲に、私に不當な罰をお被せにはならないでせう。』

一方ではマルシェズとステッキとは、嚴格な判事がマルテリノを吊刑臺に付けたと聞いて友の運命を大層心配し、何うにかして彼を難儀から救出す方法はないかと途方に暮れました。『これは飛んだことをしちまつたね。釜うでを助けようと思つて火の中へ放り込んで仕舞つた樣なものだ。』そこで宿屋の主人の所へ行つて有樣を話しますと、亭主は腹を抱へて笑ひました。けれども彼は二人を連れてアレッサンドロ公といふ人の所へ參りました。此の人はトレ井ゾの住人で、市長に對しても非常な勢力を持つてゐたのです。彼等がマルテリノの不幸を殘りなく彼に告げますと、彼も大笑ひをしましたが、頓て市長の許に赴いて、マルテリノを呼寄せるやうに說服しました。使者が行つて見ると彼は襯衣一枚になつて判事

の前に跪き、非常に驚愕の態(さま)を呈して居りました。といふのは、マルテリノが幾ら辯明しても、全(まる)でそれに耳を貸さうとしなかつたからです。此の判事はフロレンスの人間全體に對して特殊の憎惡を抱いてゐまして、どうにでもして彼を絞罪に仕ようとしてゐたので、市長の命令にさへ中々服從しなかつたのですが、幾度も正式な命令を受けるに及んでやつと讓歩するに至りました。

マルテリノは市長の前に出ると何の包み隱しもなく自分の仕たことを全部物語りまして、どうか特別のお慈悲を以て一刻も早く過去をお許し下さい、あんまり酷い目に逢つて絕えず首に繩が捲付いてるやうな氣がしますから、と歎願しました。市長も幾度となく笑つて、三人銘々に一揃宛の衣服を賜はつたので、彼等は恐(おそ)ろしい危險を逃れたことを大層喜び合ひつゝ、直ちに出發しました。

第二話

リナルド・ダスチは盜難に遭ひ、カステル・ギグリエルモに來り、美しき寡婦に厚遇され、損失を充分に償はれて、安全幸福に歸宅する。

紳士も淑女もマルテリノの災難を聞いて大笑ひをした。殊にフィロストラトは高笑ひしたが、彼はネイフィルの隣席に居たので次を始めるやうに女王より命ぜられて、直ちに承服し斯く語つた。——

美しき孃樣方、私の之から申上るお話は、宗教と悲劇と戀愛とを織交ぜたものでありまして、聽く人には何かの爲にならうかと存じます。殊に、ジュリァン聖人の「我等の父よ」の祈禱を上げないよ、良い寢床には有附いても、安らかな眠りを得られないといふ、不安な戀の道をお歩きなさる方にはお役に立つ節も多からうと思ひます。

フェラのアッヅ侯の御世に、リナルド•ダスチといふ一人の商人が、商用に赴いて居つたボロニアの地より故鄕に向つて歸途に就きました。ところがフェララを立ちましてヹロナに行く途中、馬に乘つた數人の人々に逢ひました。彼はそれを商人だと思つたのですが、實は彼等は盜賊で追剝であつたのです。彼は何の氣遣ひもなく彼等と言葉を交し、一緖に旅を續けることになりました。惡漢共は彼が商賣に係はつてゐるを見て、金を澤山持つてゐるであらうと推測し、いゝ機會の有り次第ふん奪つてやらうと心を極めました。併し少しでも彼に疑念を起させまいと、名譽とか廉直とかの談話をして、非常に道德感念の高い振りを示し、出來る丈け鄭重に彼をもてなして何くれとなく世話を燒きました。

リナルドは彼等の態度を喜び、唯つた一人の召使は自分と同じに馬にこそ乘つてゐるけれども、惡漢でも出た時は何の助けになりそうもないので、此の道連れの出來たことを仕合せと思ひました。惡漢との談話の題目は樣々に變つて、ふと神に捧げる祈禱のことに移りました。すると盜賊の一人がリナルド

に向つて云ふに、『貴下は御旅行なさる時はどんな祈禱をなさりますな？』

『正直な話、私は澤山祈禱を知つてゐる顔付なぞは致しません。何故と申して私は舊式な人間でして。極く簡素な生活をしてゐるのですからな。だがお聞き下さい、私は旅を仕てゐる時には毎朝宿を立出でる前に、ジュリアン聖人の御兩親の御靈の爲に「我等の父よ」と「慶しマリアよ」の祈禱を上げまして今日も良き宿を與へ給へと祈るので御座います。本當にこの御祈禱の爲に隨分利益を得ましたよ。幾度も非常な危險に遭ひながらいつでもそれから逃れて、夜になると安全な良い宿に有り附いたのです。それが爲に私はジュリアン聖人樣を非常に信仰するやうになりまして、お聖人の爲に此の二つの短いお祈りを上げるのです。神樣が私に此の樣なお惠みを授けなさるのは皆ジュリアン樣のお蔭なのですからね若し此の二つの祈禱を云はない時には、日中でも安心出來ませんし、夜の宿が得られるとも思へないのです。

『で今朝もいつもの御祈禱をしたんですな？』と初め問ふた奴が訊く。するとリナルドは。『えゝ仕ましたとも』と答へました。

『そんなら結構。御祈禱したのならば、若し晩の泊りが恐ろしく惡くつても俺のせいぢやありませんからな』と惡漢は云つて、更に聲を張上げて云ふには『私も確かに貴下に劣らぬ程旅をしました。そして

私あ大層効力のあるといふ貴下の御祈禱には一度も用ひたことがありませんが、それでも惡い宿に當つたことは一度もありませんや。貴下が今日お祈りをなさつたにしても、俺の方が晩にはいゝ寢床に有附くことを賭をしてもようがすよ。俺の祈禱は貴下のとは違つて、「懸崖」とか、「當惑」とか、「どん底から」とかいふ讃歌をいつも繰返すのですが、それは實に驚くべき靈驗あらたかなものでしてな――少くとも俺が祖母さんはよくそう云つて聞かしたもんでさ。』

こんな談話をしながら彼等は旅を續けて行きましたが、三人の惡漢は一刻も其の計畫から目を離さず實行に良き時と場所とを待つて居りました。キャステル・ギグリエルモといふお城を通り越してから淋しい場所に來ると、小川の淺瀨で馬に水を呑ませるのだと云つて馬を止めたかと思ふと突然リナルドを襲つて馬や衣類を奪ひ取り、露足に襯衣一枚の裸にして了ひました。そして行掛けに、『見ろ、汝の守護神のジユリアン聖人が今夜いゝ宿を當てがつて呉れるかどうか。どう見ても俺達の宿は飛切り上等らしいな』と氣持のよいことを云つたかと思ふと、河を渡つて行つて仕舞ひました。

リナルドの僕は少し後から進んで來ましたが、御主人が盜賊にやられてゐるのを見るなり、救助に行くどころか、卑怯なのか惡人なのか知りませんが、急に方向を換へてギグリエルモ城へと疾走しました。夜になつて城壁内に入り、主人のこと抔少しも心配せず最上の宿屋に泊り込みました。

リナルドの方では、恰で裸に近い有樣で、大束に降りしきる雪の(冬のさ中だつたのです)寒い中に曝されて、自分の運命を呪ひました。併し暗くはなるし、何うしてゐゝか分りません。寒さは骨まで浸んで、歯をがたがた震はせながら、どつか近所に一夜を過す宿はないかと四邊を見廻しました。此の地方は未だ戰禍の跡を止めて居て、悉く灰燼に歸した儘です。リナルドは家も小屋も見えぬものですから寒さに凍え死ぬよりもと、僕もそちらへ行つたとは知らず、キャステル・ギグリエルモへの道を行くことにしました、若し運よく其町に這入れたら、何かの助けが得られるで有うと思つたのです。然るに情け無いかな！彼は遲く着いたので市の城門は閉り、橋は引上げられてゐました。誰にも判る通り彼は非常に困りました。併し何事でも絶望して役に立つものではありませんから、彼は兎も角も降りしきる雪を避難すべき場所を探さんとして方々驅廻りました。すると幸にも城壁から少し突出て微かながら雪よけになりそうな家が一軒見付かりました。早速そこへ行つて、夜の明けるのを待たうと心を極めました。此の屋根の下に小さな扉があつて、附近に少し計りの藁があつたので、彼は念入りにそれを寄せ集めて寢床を作りました。彼はそこにちゞかんで、寒さに凍へた兩手をふうふう吹きつゝ自分の境遇を歎き、あれ程信仰してゐるジュリアン聖人が自分をこんな目に逢はせたと云つて口小言を云つてゐました。併し有難い聖人は彼を見捨てゝは居なかつたので、哀れに思はれまして、程なく彼に遙かに良い避難所を

與へて下さいました。

扨てリナルドが暫時の蔭を得た此の家の中には、世にも稀な美しい愛らしい一人の寡婦が住んで居りました。彼女は城の知事であるアッゾ侯の囲者(かこひもの)でありまして、侯は大層彼女を愛せられ何時でも誰にも見られずに訪れることが出來るやうにと此家に圍つて置かれたのでした。丁度其の夜も侯が御光來になる筈であつたので、婦人は風呂の支度をし美事な晩餐の用意をもしてすつかり歡待の準備が整つた時になつて、侯の召使の一人が來て、特別に急を要する手紙が來た爲に侯は直ちにフェララに向つて出發せねばならぬ旨を告げました。婦人は折角の準備が全く無駄になつたので氣を惡くして、兎に角侯爵の爲に用意して置いたお湯に入らうと心を決めました。風呂場は憐れな凍えた男の居る戸口の近くにあつて丁度リナルドがそこへ宿を求めた時に婦人は湯から出たものですから、彼の悲歎の聲と齒のガチャ〳〵鳴るのが聞えたので、何事か行つて見ておいでと召使に命じました。娘は二階に上つて窓から外を見ますと、微かな明りで、シャツ一枚の男が入口に坐つてゐるのが見えます。彼は自分の名を名乘るさへやつとの事で、極く簡單に彼の不幸の顚末を語りました。

此の娘は大變感じ易い子でありましたから直ちに主人の許に走つて行つて、不幸な男に憐みを掛けて下さいと頼みました。すると婦人も之に劣らぬ情深い人だつたので、侯爵が秘かに入る時通る其の扉の

鍵を持つてゐたので、早く行つて開けて遣るやうにと少女に命じ、氣持よく寢させて夕食をも上げやうと云ひました。少女は主人の善良な心を讃へ、急ぎ彼を引入れますと、恰で凍え死に掛つてゐるものですから、すぐ溫いお湯に這入ることを勸めたので、彼は二度勸められる迄もなく喜んでそうしました。憐れな男は氣持よいお湯の溫か味に浸つてゐると生き返つた樣な心持がしました。かうして彼が元氣と精力を恢復してゐる間に、慈悲深い婦人はずつと前に亡くなつた夫の着物を彼に探出してやりますと、それは彼の爲に仕立てた物のやうにシックリ合ふ。彼がこんな立派な着物を着て、情け深い女主人の命を待つてゐる間に、此の樣に思ひ掛ない助けを彼に賜はり、かかる氣持よき場所に彼を導いて吳れたことに對して、神樣とジュリアン聖人とを讃へ始めました。

婦人は暫時休息すると、階下の部屋に降りて參りまして、澤山火を起させ、商人はどうしてゐるかと尋ねました。すると召使は、彼は衣服を着てゐるそして樣子のいゝ立派な紳士に見えると云ひました。『では此方へお連れしなさい。ゆつくり暖つて、私と一緒に夕飯をお上んなさいつて。きつと隨分お腹が空いてるでせうからね。』

リナルドは部屋に入ると立派な敎養ある者の如くに婦人に對して充分の敬意を表し、彼女の親切に對して出來る丈け深い感謝の心持を述べました。あなた樣は非常にお美しいから、御親切が一層尊く感じ

られると云ひました。婦人の方でも、彼の容貌と談し振りとに依つて、本當に召使のいふ通りだと思つたので、大變鄭重に彼をもてなし、自分の側へ來て火に當らしめ、あなたのお遭ひになつた不幸を話して下さいと云ふと、彼は詳しく物語りました。婦人は少しも彼の話を疑ひませんでした。何故なれば彼の僕はギグリエルモに到着すると主人が一團の盜賊に襲はれて、多分殺されたらうと言ひふらして、其の噂が既に婦人の耳にも達してゐたからです。そこで婦人は彼に僕のことを物語り、明日になれば容易に彼を見付け出すことが出來るであらうと告げました。

二人が話してゐる中に少女は夕食を出したのでリナルドは食卓に就くやうに云はれました。彼は喜んで席に就き、大層旨く食べたことは云ふ迄もありません。婦人は絶えず彼の顔を打眺めて居りましたが見れば見る程彼が氣に入りました。侯爵が來る筈であつて來なかつたのが彼女の感情を昂せたのか、それともリナルドの美しい容貌や、若々しい、立派な態度等に魅せられたのか分りませんが、彼に對して情熱を抱くに至つたことは確かです。そこで獨り思ふやう、『わたしが假りに此の場合を利用したとしても、それは唯侯爵が私に與へた侮辱に復讐する丈けだ』そこで食卓を離れると直ぐ召使を側に連れて行つて、自分の爲さんとすることを告げました。娘は主人の氣質を知つて居りますから、彼女の意向をすつかり呑込みまして、お望み通りになさいましと云つて、少しも憚らせないやうにしました。

そこで婦人は再び火の傍に行つて腰を下しました。リナルドは一人爐端に殘つてゐたのですが、彼等の談話の題目を充分了解して、其の日いつもの祈禱を上げるのを忘れなかつたことを獨り秘かに祝して居りました。彼女は彼に向合つて坐り、幾度も好もしげに彼を眺めてから云ひました。『何故そんなに考へ込んでゐらつしやるの？　馬や着物を失くしたのを悲んでゐらつしやるのですか？　氣をお引立てなさいな、こゝはいゝ家で私はあなたの味方だといふことをお忘れにならないやうにね。それに、あなたが其の着物を着ていらつしやると、あんまりよくお似合ひなさるので、亡くなつた夫を見てゐるやうな氣が致しますわ、それは夫の着物なのですからね。あんまりそういふ氣がするものですから私は、今にもあなたを抱擁して接吻しそうになる位ですわ、もつと進んで云へば、私はあなたが氣を惡くする心配さへなければ、自分の思ふことを實行したい氣さへしますわ。』

この言葉は極めて熱烈な感情を表はしてゐましたから、坊樣でも何でもないリナルドは美しき婦人に近寄り、天に向つて兩手を差上げながら云ひました、『御婦人、あなたに生命（いのち）を助けて貰ひながら、あなたのお喜びになることに氣を惡くするやうなことがあれば、私は何といふ恩知らずでせう！　ですから何卒御存分に遊ばして下さい。』それ丈け云へば澤山です。あとは御想像に任せますが、唯ジユリアン聖人の御祈禱が、素晴らしい奇蹟を現はしたと丈け云つて置きませう。

夜が明け掛つたので婦人は商人に暇をやることになり、誰も彼等の冒險を感付かないやうにと、わざと彼に古いぼろ着物を着せました。その代りには一杯お金を入れた財布を持たせました。是非前夜のことは秘密にして呉れといふことをよく彼に云い含めた後、彼女はお城に行くべき道を數へ、そこへ行けば必らず僕に逢へるだらうと云つて、城の外に向いた小さな戶口から彼を出してやりました。

全く夜が明放れて城門が開くと、リナルドは如何にも遠方から遣つて來た樣な振を裝ひつゝキャステル・ギグリエルモに這入りました。そして僕の泊つてゐる宿が判ると、鞄に入れてあつた他の着物を出して着ました。彼が僕の馬に乘つて今や出發しようとしてゐる時、前日彼を襲ふた三人の盜賊が、何か他の罪で捕縛されて今城塞の牢獄に投ぜられる處であるといふことを聞きました。彼は判官の許へ行つて面會を求めると、既に盜賊共は凡てを自白してゐたものですから、馬も、衣服も、お金もみんな戾つて、失くした物と云つては、一對の靴下留丈けでした。それは盜賊も失くしたのだそうです。そこでリナルドは、冒險の結末の斯くも仕合せのよいことを神樣とジュリアン聖人とに感謝しつゝ、馬に跨つて安全に故鄕に歸りました。三人の盜賊は次の日に絞罪に處せられました。

第三話

三人の紳士が財産を蕩盡して貧窮に陷る。甥の一人が絕望して歸鄕する途中一人の方丈と親しくなる。後にそれが英國王姬なることが判る。二人は結婚して叔父達の損失を總て埋合し以前の繁榮に返らしむ。

紳士淑女達は驚きと同情とを以てリナルドの冒險の話を聽き、彼の信仰篤きことを賞讃し、彼が非常に困つてゐる時に救つて吳れた神樣とジュリアン聖人とに謝した。そして心の中では、天が與へ給はつた美果を有難く頂戴した婦人は決して愚かではなかつたと思つた。リナルドが寡婦の家で過した愉快な晚に就て人々が尙ほ談り合つてゐる間に、フィロストラトの次に坐したパムピネアは、今度は自分の番であらうと思つたので、彼女の物語るべき事柄を考へてゐたが、女王の命を受けるや直ちに次の如く語つた。——

皆樣、私共が互の身上を考へて見れば見る程、運命の浮沈變遷をいくら語り合つても迚も語り盡すことは出來ないので御座います。それに無理がありませうか。人々が愚かにも自分の爲した業だと思ふことも其の實は運命の手に導かれてゐるのですもの。ですから人間は運命の不可解な命令に依つて絕えず變化を受けて居りますので、何の定つた順序も規則も見分けることは出來ないのです。此のことは樣々な仕方で日々明かに私共に證明されて居りますし、之までのお話の中にも現はされてゐますけれども、

此の定まつた題目に就てみんな何か話せよとの女王樣の御命令でございますから、私も私流のお話を一つ申上げませう。お聽きになつて爲にならぬこともありますまいし、皆樣のお讃めにも預り得ると思つております。

昔わたくし共の都フロレンスにテバルドといふ一人の紳士がありました。此の人は、有名なラムバルチ家の者だといふ人もありますし、いやアゴランチ家の者だといふ人もあります。アゴランチ家だといふ理由は、テバルドの子供達の生活振が、凡てのアゴランチ族の生活振と全く同じだからといふのです彼の出身が此の兩家の何れであらうがそんなことは大した關係はありません。唯私は、彼が當時に於る最も富有な紳士の一人であり、彼には三人の息子があつて、長男をラムベルト、二男を父と同じテバルド、三男をアゴラントと呼んで皆美しい立派な若者であつたといふことを知つて居ります。父親が亡くなつた時長男が未だやつと十八歳になり掛つてゐる時で、彼等は莫大の財産を相續しました。

若い兄弟達は急に澤山の土地やお金を持つやうになりますと、全然自制力を失ひまして、全く下らない用にお金を撒散らし始めました。彼等は非常に多くの婢僕を使ひ、澤山の高價な馬を持ち、一群の獵犬を飼ひ、鷹籠には數多の鷹を入れ、豪奢な宴會をして誰でも饗應すると云つた有樣で、一口に申しますと、高い身分に適はしい物は恐く豐富に持つてゐたのです。それだのに尙ほ、巨大の代價を拂つて、

若い人々の好き放題の物を買込みました。毎日新らしく祝宴を開いて、贈物も毎日する。時々武術仕合を催すなどは云はずもがなです。

こんな贅澤な暮しが彼等の相續した財産を忽ちの中に減らしたことは當然です。收入は支出に足りませんから所有地を抵當に入れる、債權者を滿足させる爲にそれから次々とそれを賣拂ふ。財産が全く無くなる迄は全く破滅に氣が付かず、貧乏になつて初めて富の爲に晦まされた眼が明きました。本性に戻つて見て初めて自分等の愚かしさがよく分りましたが、もう取返しは付きません。此の憐れな狀態の中にラムベルトは秘かに二人の弟に向ひ、父親は社會に於て立派な地位を占め我等に莫大な財産を殘して吳れたのに、我々は愚な濫費をなし家政に何の秩序も無かつた爲斯く貧困に陷つたのだといふことを告げ、此の上は少しばかりの破産の殘り物を賣つて何處か外國に身を避け、自分等の不幸な狀態を世間の眼から隱そうではないかと熱心に勸めました。

二人の弟は彼の云ふことに從つたので、三人は誰にも暇をも告げず、極くこつそりとフロレンスを立去りました。途中何處でも滯在せず眞直ぐに英國へと志し、ロンドンに到着するや一軒の小さな家を借りて、極く儉約をしながら、高利貸をすることに極めました。すると大變仕合せよく、數年の中に多額の金を蓄積しましたので、一人々々にフロレンスに歸ることが出來ました。歸ると其の金で元の領地の

大部分を買戻し、其上新らしい土地をも幾所が買つて、遂にフロレンスに住居を定めて結婚しました。併し彼等の爲に同一の稼業を繼續させる爲に甥の一人でアレッサンドロといふ者を英國へ送りました。

再びフロレンスに居付くやうになりますと、以前の浪費の爲に貧乏に陥つたこと抔は何時の間にか忘れて了ひました。又も見得張りの氣が強く起つて參りまして、今は何れも妻子ある身にも拘らず、昔通りの暮しを始めて何事も顧慮しなかつたので、日々に借金の淵に深く陥り込みました。アレッサンドロが金を送つて呉れゝばこそ債權者を宥めて、どうにか遣つて行けたのですが、この出口も止つて仕舞ふことになりました。といふのは、アレッサンドロは英國の紳士や貴族に對して地所や城を抵當に金を貸して多大の利益を得て居たのですが、此三人の無考へな人達が彼の送金ばかりを當てにして、彼等の放埒な生活を繼續する爲に愈々借金の深みに沈んでゐた時に、全く思ひ掛けもなく、英國王と一人の王子との間に戰爭が勃發したものですから、國王に味方する者、王子に味方する者といふ有樣で國中は大騷動になりました。こんな具合で憐れなアレサッンドロは全く收入が無くなり、資本缺乏の爲に稼業を止めねばならぬことゝなりました。併し程なく此の戰爭もお仕舞ひになれば、取るべき金を取ることが出來るであらうと、彼は尙ほ英國に殘つて居りました。

ところがフロレンスの三人の方では少しも例の費用を節減せず、毎日新たな借金を作つてゐました。

しかし數年經つても商人に對する約束を履行しないものですから、遂に全然信用を落したのみでなく、債權者の爲に告訴され捕縛されました。所有物を皆賣られても借金を拂ふに足らないものですから、殘金を皆濟するまでと牢屋に入れられまして、妻子は最も悲慘な貧困に陷つて四方八方に離散して了ひました。

アレッサンドロは金を取返す積りで英國に待つてゐたのですが餘り永いので待疲れてゐる所へ、中々平和になりそうもないばかりか自分の生命が危いので、遂に伊太利に歸る決心をして、ネザランドを旅して居りました。彼がブルージュの町を出ようとすると、丁度市の城門の所で、白衣を着た一人の若い方丈に逢ひました。彼には數人の僧侶と、數多の附人と、澤山の荷物とが從つて居りました。附人の中にはアレッサンドロがロンドンの宮廷で見たことのある二人の老騎士が居りましたが、彼等は國王の身內であることをも彼は知つて居りました。彼は彼等を呼止めて、鄭重に迎へられると、彼等と共に步を運びつゝ、こんなに澤山の附人を從へて行かれる此の坊樣達は一體誰ですかと極めて丁寧に問ひました。すると士爵の一人が『此の騎馬行列の先頭に居られるのは私達の身內の者でして、つい近頃英國でも最も裕福な僧院の方丈に任ぜられたのですが、教規に依りますと、この樣な地位に就くには年齡が足らないものですから、そこを法王から特別に恕して頂いて、任命の堅信禮をも受けたいと思ひまし

てロオマにお伴するところなのです。だが之は誰にも秘密に願ひます。』

アレッサンドロは彼等と共に旅を續けました。すると澤山のお附を從へた殿樣によくある樣に、方丈は後になり先になりしてゐましたが、或時偶然このフロレンスの男と馬を並べてお進みになりました。方丈は彼を見ますと體格の立派な、容貌の美しい、柔和な、全く氣持のよい若者だつたものですから、大層彼の顏と樣子が氣に入りまして、もつと傍へ來るやうにと彼を招き、それからは側を離しません。彼に種々な事を語つて、程なく或る程度の心安さを持ちながら、あなたは何誰で、何處から來られて、何處へ行くところであるかと訊きました。アレッサンドロは一々の問に對して詳に答へ、尙ほ現在の自分の狀態をも少しも隱すところなく物語り、何でも自分に出來ることならお役に立ちませうと言葉を結びました。

方丈は彼の心安い快活な話振が氣に入つて、彼の氣持よい聲は心の底まで響くやうに思はれました。そして最初アレッサンドロに對して抱いた興味の愈々募るのを感じて、一層心を附けて彼を觀察した結果、彼はロンドンであんな卑しい稼業を營んでゐたに拘らず實際は立派な人間に相違ないと思ふに至りました。方丈は彼の不幸に動かされて彼を慰める爲めに、何事も絕望なさるなと云ひました。更に『いつも善人を見捨てなさらない天の神樣が、あなたの今まで占めてゐらした樣な地位、否恐らくもつと上の地

位を、あなたの爲に保存して置いて吳れないと、誰に保證が出來ませう。』と附加へて云つた言葉の中には、彼が彼に對して抱いた絕大の興味を表はして居りました。終りに、自分はタスカニィに行くところであるし、あなたもそこをお通りになるのだから御一緖に參りませう、と云ひました。アレッサンドロは自分の不幸に同情を寄せられたことを謝し、どんなお望みでも喜んで從ふ旨を述べました。

斯くて共に旅を續けてゐる間に若き英國の僧侶は大變考へに沈んでゐる樣子で、數日も夢の中にゐる人の樣でありました。彼の夢想はアレッサンドロに就てでありまして、日を經るに從ひ益々彼に惹付けられて、或る目的を抱いて彼を凝つと眺めて居たのです。彼が尙ほ其の事に心を沒してゐる時、數日の旅をなした後彼等は或る小さな町に着きましたが、そこには碌な宿屋がありませんでした。併し方丈は大層疲れてゐたのでどうしてもそこで泊らなければなりませんでした。そこで、他の附人よりも其國のことをよく知つてゐるといふので、最初の日から宿屋の選定を委ねられてゐたアレッサンドロは、以前彼の召使であつた男のやつてゐる一軒の旅宿の前で彼を馬より下し、方丈の爲には最も良き部屋を用意させましたが、其の宿は大變小さかつたので他の從者等は皆別の適當な宿に泊らねばならぬことに成りました。

方丈の夕食が濟むと皆な退いて時刻も遲くなつたので、アレッサンドロは、自分の寢る所は何處かと

亭主に尋ねました。『困りましたな、私にも分りません。なにしろ御覧の通り何處も彼處も一杯でして、家族の者や私は板の間に寢なければならない始末です。併し方丈樣のお部屋には小さな床の間がありますから、そこへ御案内しませう。どうにかして寢床を入れて、今晩のところはそこでお寢みが願ひたいんですが。』

『方丈樣の部屋は餘り狹くて、お附の坊樣の寢床を一つこしらへる場所さへなかつたのに、何うして俺が這入つて行けるものか？』

『申上げた通り小さな引込みの間がありますから、そこへ蒲團を敷けば譯ありません。』

『寢室の用意をする時にそれが判つてゐたら誰か坊樣にそこへ寢て貰つて俺は別の部屋を取つといたんだがな。』

『今となつちや駄目でさ。ですが確かに氣持は惡く御座いませんよ。方丈樣はもうお寢みになつて帳が引いてありますから、私は極く靜かにそこへ行つて蒲團を敷きます。よく眠れますよ。』アレッサンドロは、方丈を起す樣な騷をさせないで出來るのを知ると、それを承知して、出來る限り靜かに床に就きました。

方丈は自分の感情も理性も奪ひ去つたアレッサンドロのことを考へて未だ眠つては居なかつたので、

彼が床に就く物音ばかりでなく、彼が亭主に云つた言葉をもすつかり聞きました。『今自分の望みを遂ぐべき機會が來てゐる、若し之を取逃せば、又やつて來るかどうか迚も分らない。』そこでそれを利用することに決心をして、諸人の眠靜まつたのを幸ひに、極く小聲を以てアレッサンドロを呼び、自分の寢床へ來て側に寢るやうに云ひました。彼は禮儀の心からそれを斷りましたが、尙ほも方丈が云張るものですから、暫時躊躇した後遂に彼の强情に從ひました。

彼が方丈の寢床に行くと恰で娘が戀人に對するやうに彼は、アレッサンドロを扱ひます。最初の中彼は非常に驚きました。之はきつと方丈樣は最も不自然な罪惡を犯さうとなさるに違ひないと思つたからです。併し方丈の方では彼の態度に依つて彼の心を讀みまして、『愛するあなた、何卒妙なお考へはお捨て下さいな。私が何だかよく氣を付けて御覽なさいまし。』アレッサンドロの手に、二つの小さな、丸い、固くつて象牙の球のやうに柔い胸が觸つた時の彼の驚きを想像して御覽なさい。方丈の裝をしてゐたのは婦人であつたのです。アレッサンドロは本當のことが分ると今度は、自分は少くとも僞の男なんかではないことを云ひますと………、僞の方丈は彼を止めて云ひました。『まあお靜かになさいませ。私の傍に寄る前に私のいふ事をお聽き下さい。もう私が婦人であることが分つたのですから云はねばなりませんが、私は未婚なのです。そして夫を見付けて貰ひに法王樣の所へ行く途中なのですが、私に取つ

ては幸か不幸か、いつぞや初めてあなたを見ました時からあなたに心を奪はれて、その愛はずん〳〵增して、誰でも私があなたを愛する程に强く人を愛することは出來ない程になりました。それで私は凡ての人の中からあなたを選んで結婚する積りになりましたの。私を一生の妻として下さるかどうか決心して下さい。若しお厭なら、私の寢床を去つて御自分の所へお歸り下さい。』

彼はそんなに卽座に心を極める程に此の婦人をよく知つて居りませんでしたけれども、從者の非常に多いことや、附人の身分等よりして、彼女は裕福で貴い身分の者であらうと思つたし又、大變愛らしく美しいと思つたので、何の躊躇もなく、何んなにしてでも彼女の欲する通りになる旨を答へました。

そこで婦人は床の中に坐り直し、その儘十字架の前で、信賴と相互誠實の印として、アレッサンドロの指に指輪を嵌めました。……………………………………た。彼等は之から後の旅行中同一の愉快を享樂すべき手段に就て相談して、やがて夜が明けるとアレッサンドロは自分の小さな寢床に戾つたので、誰も夜中の出來事を知りませんでした。

斯くて彼等は屢々結婚の愉快を味ひつゝ互に滿足な旅を續けて、多くの日を經た後ロオマに到着しました。數日の後方丈は、アレッサンドロ及び英國の貴族等を從へて法王に謁見して、式の如く挨拶が濟してから云ひました『法王貎下、貎下は何よりもよく御存じで御いませうが、私共は譽ある生活をなす爲に

は、それと反對となる凡ゆる機會を出來る丈け避けなければなりません。それが爲にこそ私は我父英國王の財寶を少しばかり持つて逃亡して參つたのでございます。そして貌下の御手より一人の夫を頂戴致す考へで御覧の如き衣服を身に着けて參上いたしました。私の父は、私がこんなに若いのに、もう寄る歳に腰の屈つたスコットランド王の所へ無理に嫁入りさせようとするので御座います。併し、私が逃亡いたしましたのはスコットランド王の老年故ではございません。唯、若し私が彼と結婚しますれば、私が餘り若い爲に後に至つて、私の高き身分にも神の掟にも背く様な行爲に陷りはせぬかと恐れたからでございます。私が貌下の許へ參りますす旅行の未だ半分も進まぬ時、人々の要求を唯一人御存知の天の神様が、私の夫となるべき運命の人を私にお引合せ下さいました。それは此處に居ります此の紳士でございます。』と彼女はアレッサンドロを指示しつゝ言葉を繼いで『此の人は私の様に王家の生れではございませぬ。併し彼の德と高貴な人格とは世界で最も立派な王女を娶る價があるのでございます。それで私は彼を夫に致しました。私の尊敬する父を始め、何人が私の仕た事を非難しませうとも、私は決して他の夫を持ちませぬ。私は既に自分で選擇を行ひましたから、もう此處へ參らないでもよかつたのかも知れませんが、併し貌下、私は最後まで旅を續けて、基督敎世界の主都である此の聖地を訪づれ、貌下に敬意を表したる上、此の紳士と私とが既に神の前で取結びましたる結婚契約を、貌下に依りて世間一

般に告示して頂かうと思つたのでございます。ですから何卒貎下、勝手かも知れませぬが、既に天に記された私共の結婚を御承認下さいまし。私の凡ゆる幸福はそこに懸つてゐるのでございますから。貎下は神の御身代りでございますから、天の祝つて呉れた此の取結びを一層堅固に致します爲、貎下の嚴かなる祝福が賜り度うございります。』

自分の妻が英國王姫であると聞いた時のアレッサンドロの喜びと驚きは御想像に任せます。併し二人の士爵の驚きは更にそれ以上に甚しかつたのです。彼等は殆んど怒りを抑へることが出來ず、若し法王の面前でなかつたら此の伊太利人を撲つた上、王女をも侮辱したでせう。法王に於ても委細を聽くと大變驚いたらしく、彼女の變裝の變つてゐる如く夫の選擇も變つてゐると思ひましたが、既に決心して實行してゐる事を妨げることも出來ないので希望通りすることを承諾せられました。そこで彼は士爵等を宥め、彼等と王女及びアレッサンドロの間を調停して、結婚の日を定め萬事の準備を命じました。結婚式は盛大なものでした。樞機官全部と數人の貴顯列席の前で執行されました。法王は盛大な饗應の用意を命じ、姫は王女の服裝を召して臨席なされたので人々は皆彼女の美に魅せられ、祝辭と賞讃の言葉を浴せ掛けました。アレッサンドロとても同じこと、立派な衣を着て、其の態度の高雅なことゝ云つたら、誰が見ても抵當を取つて金を貸した人間なんかとは見えず、何處かの王子のやうでありました。

頓て新婚の夫妻はフロレンスに向つてロオマを立ちました。フロレンスには既に彼等の結婚の噂が傳はつてゐたものですから、彼等は凡ゆる尊敬を以て迎へられました。姫は三人兄弟の借財を拂つてやりましたから、彼等は出獄して、元の領地も姫が買戻してやつたのですつかり又手に入りました。それより彼女は夫と共に佛蘭西へ行きましたが、フロレンスの都の尊敬と哀別とを負ふて去つたのでした。彼等はアレッサンドロの叔父の一人アゴランチを伴つて、巴里に着くと佛蘭西王は大變鄭重に彼等を迎へました。それ迄一緒に連立つて來た二人の士爵は彼等に別れて英國に歸り、父王を說得して姫に對する愛情を取戻し得たので、婿に對しても敬意と親愛とを抱かせることが出來ました。後に王は非常に喜んで彼等を迎へて、到着後間もなく婿を最高の貴族となし、コーンチールの伯爵としました。アレッサンドロは極めて賢明なる政治家となつて、未だ戰ひを續けてゐた王と王子との仲直りをさせることが出來ました。かくて彼は英國に對して目醒ましい働きをしたものですから國民全體の愛と尊敬を受けました。叔父のアゴランチは二人の兄弟と自分との取るべき筈の物を凡て囘收し、甥の力に依つて幾多の高い位を授けられた後、資産を荷ふてフロレンスに歸りました。

コオンチール伯と夫人とは常に圓滿幸福に暮しました。そして彼の深慮と勇敢とに依つて、スコットランド征服に非常に盡力した後其國の王樣と戴かれたそうであります。

第四話

ランドルホ・ラッホロは極貧に陷り海賊となつてゼノア人に捕はれ、難船して寶石の充ちた箱に縋つて生命を助かり、コルフにて或る貧しき婦人に救はれ、富人となつて歸國する。

パムピネアの次に坐したロウレッタは、人々の稱讃の中にパンピネアが話終るのを認めるや、命令を待たず語つた。

皆樣、パムピネア樣のお話のアレッサンドロのやうに、最も酷い、貧困から王位に迄立身するといふ、これより大きな運命の變化は迚も想像することが出來ませぬ。そして私共は皆今日の題目として限定された範圍内で何か話を仕ようとすれば、どうしても右の二つの兩極端の間の所で致すより外仕方がありません。併し私は、私の之から申上る話が、多分不幸の點に於てはアレッサンドロ以上であつても、終りがそれ程華やかでないといふことを別に恥とも思ひません。若し皆樣がその事にばかりに重きを置くなれば私の話をそう面白くお思ひにならないかも知れませんが、私は他に一層此の題目に適當なものを知らないものですからお許しを頂いてそれを申上げます。

レッギョからガエタに至ります海邊地方は當伊太利の國でも最も美しい部分だとは一般の定評でござ

います。そこに、サレルノに近く、普通住民等がマルフィ海岸と稱して居る一帶の海岸がありまして、小さな幾つかの町、庭園、豪商の邸宅と云つたやうな物が散在して居ります。其の中ラヹルロといふ町は現今では最も繁華な所でございますが、此處に、左程古い談ではありません、ランドルホ・ラッホロと呼ぶ非常に金持の男が住んで居りました。併し貪慾といふものは飽くことを知らぬものでして、此の男も御同樣に自分の財産を殖さうと思つて、飽くなき野心の爲に自分の所有物凡ては愚か彼の生命まで失はうとしたのです。

ランドルホは商人らしく充分に自分の企業を熟慮した後、一艘の大きな船を買求め、自分一個の出資で種々樣々な商品を積載して、サイプラスに向つて出帆しました。ところが其處へ行つて見ると彼と同じ商品を滿載した船が非常に澤山入港してゐたものですから、極く安く賣らねばならぬばかりでなく、貨物の處分をする爲には殆んど無料で呉れてやらねばなりませんでした。彼は此の莫大な損失の爲に僅かの間に殆んど破滅狀態に陷つたので大層心を傷めました。寧そのことに死んで了ふか、さも無ければ損した丈け他の奴等からふん奪つてやらうと決心しました。國を出る時にはあんなに金持だつたのに何うして貧乏して歸れるものかと思つたのです。そこで彼は持船を賣拂つて、それから得た金と商品を賣つた金とを以て一艘の輕船を購つて、之に依つて海賊を働くことにしました。十分の武裝と支度とを整へ

た後、全く海賊業に身を捧げて、海を掠め、手當り次第に掠奪を行ひましたが、中にも主としてトルコ船を目掛けました。商業よりも此の新らしい稼業に運が向いて來まして、トルコの貨物を澤山捕獲したものですから、一年後には啻に商人時代の損失を凡て恢復したのみならず、以前の倍も金持になりました。そこでもう十分安樂に暮して行く丈けの財産は溜つたのだから、又もや災難に遭はぬ中と思ひまして、此の邊で慾を打止にして、掠奪品を持つて國に歸ることに決心しました。もう商賣の失敗には懲り懲りしてゐますから、二度と再びそんなことをする氣にはなりません。

そこで此の樣に澤山の財産を得させて呉れた例の輕船に乘つて、ラヱルロに向つて出航しました。併し彼が、沖に乘出すや夜中に至つて大暴風が起つて海は暴れ狂ひ波は高く上るので、ランドルホは自分の小船が迚も永く暴風雨の怒りに堪えられぬと知つて、遠く避難しようと決心し、或る島の小さな港へ行つて暴風を避けました。

間もなくコンスタンチノープルを發つて來た二艘の大きなゼノアの船が、矢張り同じ港へ暴風を避ける爲に這入つて來ました。ゼノア人は其の小船がランドルホの物だと聞くと、彼が大した金持であることは兼々噂に聞いてゐたものですから、本來金に目の無い、他人の財産を奪い度い連中丈けあつて直ちに彼の富を掠奪する計畫を立てました。先づ第一に港の狹い出入口を閉塞し、數人の乘組員は弩と矢を持

で上陸し、對手の船から逃出すものがあれば容易に射殺すことの出る所に陣取りました。他の乘組員等は小舟に乘つてランドルホの船に漕付け、難なく船を手に入れ、一人も逃しませんでした。正直なゼノア人等はランドルホの船中の物を悉く持去つた後、船底に穴を明けて沈めて仕舞ひました。そして彼を彼等の船の一艘の中に捕へ置き、身には少しのボロを纏はせたのみです。次の日風は變つて、ゼノア人は西方に向つて出帆しました。其の日中は大層順調に航海しました。ところが夜になると又もや恐ろしい大風が起つて波が非常に高くなつたものでから二艘の船は分れ分れになつて仕舞つたのです。不幸なランドルホが乘てるた方の船は、スファノリア島沖の岩に猛烈な勢を以て乘上げ、滅茶々々に破碎して了ひました。見る間に海は商品、箱、船の破片を以て被はれ、泳ぎの出來る乘組員は悉く、黑闇の中で何かに摑りつゝ、助かる術もあらうかと荒浪と戰つて居りました。ランドルホは前の日所有物を皆奪はれた時には死にたいと思つたのですが、今死の前に立つては非常に恐ろしくなりました。運よく一つの小さな板を見付けて、神の助けを望みつゝそれに摑まりました。出來る丈けいゝ具合にそれに乘つて、右に搖られ左に搖られて、風と浪の玩具になつて居りながらも、何うか斯うか夜の明けるまで持堪へることが出來ました。徐々明るくなるにつれて、四圍を見廻しましたが眼に入るものは海と空ばかりです。唯波のまに〳〵漂ふてゐる一つの小さな箱がありまして、時々は押流されて彼に打突かりはしないかと思

ふ程近くへ來ます。それで餘り傍へ寄つて來ると微かに殘つてゐる力を出してそれを押し遣るのです。斯く彼が箱と戰つてゐる時に恐ろしい旋風が捲起つて浪が荒れたので遂に箱が彼の乘つてゐる板に衝突しました。ランドルホは放り出されて、手を離すと水にどぶんと沈みました。力は無くなつても恐ろしさの爲に無中に泳いで、やがて浮上つて見ますと板はずつと遠方へ行つてゐます。とても其處へ行けないと諦めて彼はそれより近い箱の方へ泳いで行きまして、それに出來る丈けしがみ付いて、蓋の上にかぶさり兩手で調子を取りました。彼は相變らず浪のまに〱彼方此方に押流されてゐましたが、食物と云つては何にもないのに水は厭になる程呑まされるし、こんな有樣で其の日と續く夜とを過しました。陸地に近いのか何うか分りません、見える物は空と海ばかりです。

翌る日になりますとランドルホの身體はもう恰で海綿みたいに水膨れになつて、それでも溺れかゝつた者の如くに箱に縋り付いてゐましたが、風の力か神の惠みか、コルフ島の一つに漂着しました。丁度其の時一人の貧しき婦人が濱で砂を以て皿を洗つて居りましたが、ふとこの難船者を見ると、まるで人間とは見えないものですから、恐怖に襲はれて高い叫びを擧げて走り去りました。ランドルホは一言も聲を發する力さへ無い程へと〱に疲れてゐます。其の女を碌に見も仕なかつた位です。併し浪は徐々と彼を岸近く連れて來たので、婦人はやつと箱を見分けることが出來ました。一層近付くと二本の腕が差

出されてゐるのを見、次に顔を認め、頓てそれが人間である事が分りました。氣の毒になつて彼女は水ぎわに寄つて行つて、今はもう浪も全く靜かなので、ランドルホの髪の毛を掴んで彼と箱とをやつと地上に引揚げました。女は固く箱を掴んでゐるランドルホの手を離し、箱を同道の少女の頭上に載せ自分はまるで子供か何かを扱ふやうにランドルホを背負つて町の我家に運び行き、彼を風呂に入れて、熱い湯で磨擦したり洗つたりして遣りますと、身體の溫まりもも戻つて彼は元氣を恢復しました。もう入浴は充分と思ふと彼女は彼を風呂から引出して、美味な葡萄酒や糖菓等を與へて充分に精力を恢復せしめました。一言で申しますと彼女は大層よく彼を世話したものですから彼は常の狀態に復して、遂に自分のゐる所も判る様になりました。そこで彼女は彼の箱を返すと云ひ、不幸を忘れるやうにと言葉の限りを盡して彼に勸めました。

ランドルホは箱の事抔すつかり忘れて居たのですが、どうせ大した價はあるまいけれど兎も角二三日生活して行く位の物はあるかも知れないと思つて、それを受取りました。併し取つて見ると大變輕いものですからそんな望みもなくなつて仕舞ひました。併し中身を見たくて堪らないので、婦人が家に居らぬ時それをこぢ明けました。すると寶石が澤山入つてゐるのです。中には美しく象眼してあるのもあります。彼は寶石の眼利きでありましたから、それが非常に高價なものであることを知り、自分を見棄て

て吳れなかつたことを神に謝し、すつかり元氣を恢復しました。それにしても二度迄不幸な眼に逢つて又三度遭つては堪らぬから、此の寶石を持歸るに餘程注意して遣らねばならぬと思ひまして、それをば古い布片に包んで、もう箱は要りませんから取つといて下さい、其の代り袋を下さいと云ふと婦人は喜んでそうしました。婦人に對して非常な世話を謝した後、包みを入れた袋を首に掛けて出發し、ブランヂ行の船に乘つてそこに上陸し、それよりトラニに來ると數人の同鄕人に逢ひました。彼等は絹商人です。彼は彼等に自分の危難の話をしましたが、箱のことは云はぬが安全と思つて省きました。それでも此の人達は慈善の心から彼に着物を着せてやり、馬まで貸して吳れて、彼がラヱルロに行きたいと云つたので其處へ行く道連れを探して吳れたりしました。

彼は故鄕に歸り、天の惠みに依つて安全の地に着くと、早速袋を空けて、裕（ゆつく）りと寶石を調べて見ますと、澤山のダイヤモンドがありました。相當の値段で寶石を賣れば、最初國を出る時の財產の倍にはなると思ひました。それを賣拂つた後彼は、彼を海中より引揚げて吳れた婦人に澤山の金を送り、トラコで彼に助力を與へて吳れた商人達にも酬ひをして、餘命を安樂に送りました。

第五話

ペルギアのアンドルッチョは馬を買はんとネープルスに來り、一夜の中に三つの不幸な災難に逢ひ、運よくその總てを逃れ、非常に高價な紅玉(ルビー)を獲て歸る。

フャンメッタは語つた。

ランドルホが寶石を獲た話を聞きまして私はそれと同じ位災難の多い一つの物語を思ひ起します。唯違ふ處は、ロウレッタ樣のお話では、幾年もの間に起つた冒險ですが、私のお話し仕ようと思ひますのは總て一夜の中に起つたことなのです。

昔プルヂアにアンドルッチョ・ディ・ピエトロといふ馬商人が居りました。ネープルスでは馬が廉く買へると聞き、彼は財布に五百圓の金貨を納めまして、數匹の馬を買ひに出掛けました。彼はまだ彼の屬する教會の塔の見えなくなる程遠方へ一度も行つたことがなかつたものですから、ネープルスへ行くにも他の數人の仲間と連立つて出立したのでした。ネープルスへ着いたのは或る日曜日の晩でした。翌日になると宿の亭主に道をきいて馬市場に參りますと氣に入つた馬が數匹居ましたが、値段の折合が付かなかつたので一匹も買ひませんでした。併し拂ふ金が無くて買はぬと思はれるも強腹(ごうはら)なものですから、時時上衣の下から財布を引張り出しては、まあ馬鹿らしいではありませんか、通行の人達にお金を見せびらかしてはゐたのです。丁度彼がそうやつて見せびらかす爲に財布を手に持つてゐた時に、一人のシシ

リアの婦人が通り掛りました。彼女は稀に見る美人でありましたが、非常に同情心に富んで居りまして誰でも彼女の愛を求める者には極く安値に愛を賣るといふ質の女でした。それがアンドルッチョの知らぬ間に傍を通りまして、彼の財布を見るなり心に思ふやう『あのお金がみんな私のだつたらどんなに嬉しいだらう。』其儘行過ぎて仕舞ひました。

扨て此の賣春婦には一人の老婆(らうば)が伴つて居りましたが、其の女も矢張りシシリア人でして、アンドルッチョを見るなり美人に別れました。若者は彼女の知人であつたので彼の許に走り寄ると、親し氣に彼を抱いて挨拶しました。娼婦は老婆を見送つてゐると、澤山お金を持つてゐる若者と談話(はなし)をしてゐますから、立止つて待つてゐました。アンドルッチョは知人とては一人もない都へ來て老婆(ばあさん)に抱かれたので吃驚してよく〳〵見ますと、やつと見覺えがあつたので、彼の方でも出來る丈けの好意を返しました。老婆は、あなたに逢つたのは大變嬉しい、宿屋へお訪ねしますよ、と云つたかと思ふと、それ以上何にも云はずにさつさと連れの方へ行つて仕舞ひました。そこで馬商人は彼方此方へ行つて馬を買ふ掛合をしたのですが、遂に其の朝は一頭も買ひませんでした。

娘の方では馬商人の財布に非常に惚れ込みまして、何とか彼奴(あいつ)を騙(だま)して全部でなくとも少しでも捲上る工夫はないかと腦漿を絞つて居る處でしたから、老婆に向つて極く要心深く、彼の人は誰で、何處か

ら來て、何をしてゐるのか、どうして彼と知合になつたのかと訊ねました。善良なる婆さんは何の疑心も抱くことなく、恰かもアンドルッチョ自身に聞く程詳しく物語りました。自分は彼の父親に使はれてゐたのだ、彼の父は最初ペルヂヤにゐて後にシシリイに來たのだと告げ、猶彼が今ネープルスへ來た目的をも物語りました。

狡猾な娘は、アンドルッチョの家族のことや、彼の親戚の名前等に就て悉く聽取りまして、それを彼女の計畫の實行に利用せんと心を極めました。家に歸ると、老婆が馬商人に逢ひに行くことが出來ないやうに一日も掛る仕事を言附けて置いてから、自分と同種類の或る娘の處へ行きました。其の女は彼女の召使の役目をしてゐて、こんな使を果すには充分よく仕込んであるのでした。夜になつて其の女をアンドルッチョの處へ遣りますと、丁度いゝ具合に宿屋の入口で彼に逢ひました。女は彼を呼止めまして、若しか正直なペルヂヤ人で此の宿に泊つておいでのアンドルッチョといふ人を御存じではないでせうかと尋ねました。自分がそうだと彼が答へると少しわきへ彼を引張つて行つて、『あの、此の町にゐらつしやる大變美しい或る御婦人が、若しお厭でなければ是非あなたにお逢ひしたいと云つてゐるのですが。』之を聽くとアンドルッチョはすつかり自惚れて仕舞つて、自分が餘り容貌の美しい青年だものだから、きつと其の婦人が自分に戀したのに違ひないと思ひまして、何時でも御孃樣の都合のよい時にお伺ひします

と即座に答へました。『貴婦人はあなたをお待ちして居りますから、いつでも御隨意の時にお出でになつて宜しいのです。』と召使は答へます。『そんなら御一緒にお伴しませう。』そう云つて本當に、誰にも行先を告げずに彼は出掛けました。

彼は小さな財布のお伴となつて、マルペルタヂチ街にある、美しき貴婦人とやらの家に行きました。そこは名前を聞いた丈けで、あゝ彼處かと判る名譽な場所なのですが、若いアンドルッチョはそんな事とは露知らず、立派な婦人に逢ひに立派な場所へ行くものと思込んで、彼の女に從つて其の恥づべき場所に遣つて行つて、階段を上りました。使の女が女主人を呼んでアンドルッチョの到着を知らせますと、賣春婦は直ぐに梯子段の上に出迎ひに現はれました。婦人は若くて美しい上に背丈もすらりとして、立派な着物を着て、何處もかも上品な趣味を以て身を飾つて居ります。未だ青年が上り切らぬ中に女は兩手を擴げて二三段驅降り、彼の首根に抱付いて、恰で餘りの愛しさ可愛さに物も云へないかのやうに、暫らくは其儘無言です。やゝあつてわつと泣出したかと思ふと、彼の額に所嫌はず接吻をして、啜泣きで聲も途切れ途切れに、『おゝ可愛いアンドルッチョ樣、本當によくいらして下さつたわね。』

『私もあんたに逢ふのが嬉しいです。』とアンドルッチョは、斯く熱烈に迎へらたのを驚いて答へました。女は彼の手を取つて、一言も云はず大廣間を通拔けて、自分の部屋に彼を連れて行きました。室には薔

薇や橙の花、其他の香料の香りが滿ちて居ります。華麗な寢臺や、美しい家具も見えるし、綺麗びやかな着物も釘に懸つてゐます。こんな物を見るのは全く初めてですから、彼はこの派出やかさに度肝を拔かれて、非常に身分の高い貴婦人に違ひないと思ひました。寢床に近い長椅子に二人並んで腰を下すと女は彼に向つて云ふやう。

『可愛いアンドルッチョ樣、あなたは吃度私がこんなに泣いたり抱付いたりするので驚きなさつたでせう。あなたは私をご存じないんですし、恐らく私の名前さへ聞いたことが無いでせうから、それも無理とは思ひませんわ。でも私があなたの姉だと申上げたなら尙更吃驚なさるでせう。私は死ぬ前に是非兄弟達みんなに逢ひたいといつも願つてゐたのですが、神樣の御情で其の中の一人でも見ることが出來ましたから、もういつ神樣がお召しになりませうとも本當に喜んで死ぬことが出來ますわ。あなたは多分此の事に就ては何も御存じないでせうから、簡單にすつかりお話し仕ませう。

あなたのお父さんで同時に私のお父さんでもあるディ・ピエトロ樣が、暫らくの間パレルモにおいでになつたことはあなたもご存じでせう。生れ付き大變に善良で、優しい、親切な方だつたものですから、直ぐに此の町で澤山の親しい人が出來まして、中には今でも生存中の人もあります。彼を敬愛した人が澤山あつた中にも、貴族の生れで、或る立派な御身分の人の未亡人であつた私の母が、非常に彼を愛す

るに至りまして、親兄弟の思はくも構はず身分をも忘れて彼と親しく同棲致しました結果、遂に産み落しましたのがこの私でございます。

其の後父は都合上パレルモを去つてペルヂアに歸らねばならぬ事になりまして、母と未だ極く幼少な私とを置いて行きましたが、それから以後全く死んだとも生きたとも便りがないのでございます。生みの父を尊ばねばならぬといふことがなかつたら、私は父の所行をうんと責めたでせう。母に對してそんな酷いことをするし、召使とか身分の賤しい者の子ではあるまいし、立派な貴婦人の子の私をも少しも愛さないなんて。母は彼の人柄を十分呑込める程の永い知合でもないのに、心弱くも自分の身體から財産までみんな父に捧げたのですもの。併しそんなことを云ふのはもう止しませう。濟んで仕舞つた間違ひを責めるのはいと易いことです。それをよく仕直すのが難かしいのですからね。

母は私の父から見棄てられましたけれども夫からの遺産が澤山あつたものですから一生懸命幼い私の世話を致しまして、私が大人になるとゲルガンチ家の非常に立派な或る紳士の許に私を嫁がせました。其の人は私達を喜ばす爲にパレルモに住居しました。彼はゲルフ家の熱心な味方だつたものですから、チャーレス王との間の密使の役を仕りました。ところが未だ彼の計畫が實行に至らぬ中にその事がアラゴンの王様フレデリックの耳に入つた爲に、丁度私はシシリィ第一の婦人にならうとしてゐる時であつた

のにそこを逃亡せねばならぬことゝなりました。財産の中出來る丈けは持去りましたが、それは全財産に比べれば極く少しに過ぎません。此のやうにして止むなく地所や邸宅に別れて此の都に避難しました。此方へ參りますとチャールス王は、私共の損失も彼の爲ですから、それを償つて呉れました。私共に町の住宅と田舍の別莊とを下さいまして、夫に十分の手當を下さることは、あなた御自身御判斷出來ませう。可愛い弟よ、これで私が當地に參つた理由が分つたでせう。そして今日あなたに逢ふことが出來たことはあなたの愛情よりも、神樣のお蔭なのです。』斯く云つて再び彼を抱擁して額に接吻を浴びせました。

アンドルッチョは此の巧みな作話を、少しも氣まりの惡さうな樣子もなく、極めて安々と自然に婦人が上手に物語るのを聞きました。そして自分の父が本當に昔パレルモに居つたことを思出し、つい易々と氣に入つた女なら誰とでも連絡を作りたがる若い人々の不品行や、自分だつても同じことを仕たに違ひないといふことから判斷したり、又恐らく婦人の涙や、愛情の表現、接吻等に動かされて――アンドルッチョは難なく婦人のいふことを全部信じました。『不思議にお思ひになるに違ひありませんが、私はお話を承つて全く驚きました。あなたといふ人を全然知らないんですからね。父は曾て一度もあなたの事もあなたのお母さんのことも云つたことがないのです。よしあつたにしても私は確かに聞いたことはありません。併しこゝにあなたの樣な美しい姉樣を發見した喜びに變りはありません。此の面會が

私に與へて呉れた愉快は迚も御想像出來ない程です。それが思掛けなかつた丈けに一層嬉しいのです。どんな人だつて、どんなに身分の高い人だつても、此の樣な發見を喜ばずにはゐられません。當地に一人として知人のない、小つぽけな商人の私に取つては尙ほの事です。ですが何卒一つのことを聞かして下さい、あなたどうして私の此の町に來たことをお知りになつたのですか？』

『今朝知つたのです。時々私の所へ參ります或る立派な婦人で、ペルヂヤとパレルモとで暫らくの間あなたのお父樣に使はれてゐた人から聞いたのです。併し私自身でお宿へ出掛けて行くよりはお迎ひを上げた方があなたの爲に宜しいと思つたのです、そうでなければ私から行つたのですが。』

斯う云つてから、女は彼の親戚の名前を次から次と擧げて、その安否を問ひました。アンドルッチョは一々返答をして、事實不確かなこと迄も、彼女の云つたことは皆本當だと愈々信じました。

彼等の談話が長引く中に大層暑くなつたものですから、婦人はギリシアの葡萄酒や糖菓等を取寄せて青年を饗應しました。間もなく夕食時に近くなりましたのでアンドルッチョは宿に歸らうと身繕ひしますと、婦人は彼を引留めて、歸るなんてと吃驚仰天の樣を裝ひました。『あらまあ、私にはあなたがちつとも私を愛してゐらつしやらないのが分りますわ。初めて逢つた姉の家に居ながら、急いでそこを出て、宿で夕食を上らうとなさるのだもの。でも私はそんな事は許しませんよ。否でも應でも私と一緒に夕御飯

を食べさせますよ。残念なことに夫は今留守ですけれ共、私だつて十分のお夕飯を上げる位のことは出來るんですからね。』

『それはあなたの誤解ですよ。私はあなたを姉として出來るだけ敬愛してゐることを確言します。併し若し私が此處に居りますと、皆は一晩中私の爲に晩飯を食べずに待つてるでせうからね、人を待たして置くのは禮儀に叶つたことではありませんからね。』

『まあ厭だ！　あなたを待つてるない樣につて使にやる者が私の處には一人もゐないとでも思つてらして？　いつそお連の方々を此方へご招待してお夕飯を上げた方がいゝと思ふわ。そうすればあなたの御好意が皆に通じて喜ぶでせうし、あなたが此處へ泊らないでも歸りの連れがありますか。』

アンドルッチョは、姉さんがどうしてもお夕飯を一緒にしろと仰つしやるのなら何とでもお考へ通りに仕ますが、仲間は今夜呼びたくないと云ひました。女は大變嬉しいと云つて、彼を待たない樣に宿屋へ使者をやつたやうに見せ掛けました。

種々の物語をして後彼等は晩食に就くと、上等なご馳走が澤山出まして、美人は暗くなるまで夕食が手間取る樣にし、夜になつて食卓の上が片附けられてからアンドルッチョが歸らうとしますと愛情深い姉は又云ひました。『どんな事があつたつて私そんなことはさせませんよ。でもネープルスといふ町は誰で

も夜になつては危險で外へ出られない所なのです。旅の人は殊にさうなんです。それに先刻お使に、お夕食もお泊りも此方でなさいますと宿屋に云つてやつたのですから。』と云ひますと、單純なアンドルッチョは女のいふ事を全部信じまして、おまけに彼女と一緒にゐるのが大變愉快なものですから、もう歸る抔とは云はず、まんまと罠に掛つて了ひました。

又もや種々なことを長い間話してゐる中に、僞の姉はもう十二時近いのを見ると、一人の少年を傍に侍らして置いてアンドルッチョを彼女の部屋に殘し置き、自分は召使の女と共に別の室に退りました。土用のことで非常に暑いものですから、一人になるなりアンドルッチョは寛（くつろ）がうと思つて、着物をすつかり脱いで了ひ、ズボン迄も取去つて寢床の側に置き、胴衣丈けになりました。用を足し度くて堪らなくなつたので少年に便所を問ひますと、部屋の片隅の戸口を指示しました。併し不幸にも彼が踏板に一歩入れるや否や、板の兩端と柱と結付けてゐる釘が前以て拔いてあつたから堪りません、彼は板諸共に便所の中に落ちて了ひました。隨分高い所から落ちたにも拘らず、幸にして怪我はしませんでしたが、忽ちの中に全身は臭い汚物に漬（つか）つて了ひました。事件の經過が皆樣によくお分りになる樣に、此の便所の構造を申上げませう。丁度家と家の間にあるやうな極く狹い通路に、二枚の垂木（タルキ）を渡して、それに二三枚の板を懸けて踏場をこしらへたものです。アンドルッチョはこの板と一緒に眞逆樣に墜落したのです。

此の不潔な場所に落ちて彼がどんなに不愉快であつたかお察し下さい。で彼は大聲に少年を呼びましたが、少年は彼が墜落すると直ちに女の所へ報告に行つたのです。女は直ちに部屋に走込んで、アンドルッチョの衣服を探しますよ。青年は盗まれはせぬかといつも金を持歩いて居りましたから、直ぐに見付かりました。それが欲しいばかりに女は策略を廻らして、パレルモ生れの人間だと云つたり、ペルヂヤ人の娘だと嘘を吐いたりしたのです。お金を手に入れるや否や、最早や嘘の弟なんかのことは少しも考へず、便所の戸口を閉めて仕舞ひました。

アンドルッチョは少年が少しも返事を仕ないものですから、一層大きな聲を出して叫びましたが相變らず何の答へもないので、今時分になつてやつと、自分は瞞されたのではないかと疑ひ始めましたがもう後の祭りです。どうしたら此の恐ろしい場所から逃出すことが出來るでせう？　彼は手探りで出口を探しますと、便所は唯低い壁で街と塀がしてある丈けなのを知りました。それで難なく壁に攀上つて街に出ますと、其家の入口が直ぐに見付かつたのでそこへ眞直ぐに進んで行つて直樣戸を叩き、叫び、力の限り手で押して見ましたが何の甲斐もありません。今となつてはもう彼が一杯食はされたのに何の疑ひもありませんから、眼に涙を溜めて彼は獨語ちました。『あゝ！　ほんの一寸の間に五百圓も失くして了つたかなア？』同樣のことを幾度も愚痴つてから、彼は再び戸を叩き、有りつたけの大聲で叫び始めま

すと、彼の騒ぎが餘り激しいものですから近所の人達は皆目を醒しまして、一體何事が始まつたのか知らんと起出しました。例の賣女の下女の一人が窓を開けまして、今寢床から起きて來て半分眠つてる様な振りを裝ひながら、不機嫌な聲で叫びました。『誰だい下を叩いてゐるのは？』

『私ですよ。あなた知らないんですか、アンドルッチョですよ。フルール、ドリイ夫人の弟の。』

『お前様はね、呑み過ぎたんだから家へ歸つてお寢みよ。そして明日又おいでな。アンドルッチョなんて私ちつとも知らないわ。あなたの云つてる寢言みたいなことまるで何が何やら分りやしないわ。だから彼方へ行つて、私達を眠かしておくれよお願ひだら。』

『何だつて！　俺の言ふことが分らないと？　だが貴様にはちやんと分つてる筈だ。だがシシリィの兄弟をそんなに早く忘れたら忘れたでいゝが、兎も角俺が二階に置いて來た着物と金を返せ、そうすりや喜んで行かあ。』

『お前本當に夢を見てるんだよ、馬鹿野郎。』といつたかと思ふと狡猾な笑ひを漏らして窓の戸を閉切りました。

アンドルッチョは今こそ彼の不幸の全體が分つたので、殆んど絶望の餘り、頼んで取れないなら腕づくで取つてやらうと決心しました。そこで彼は呪つたり惡態を吐いたり、有りつ丈けの聲で怒鳴りました。

それから大きな石を一つ取つて、一層力を入れて戸を叩き、打ち壞して入るぞと脅かしました。近所の人々は彼の騷ぎで眠を醒されて、彼が婦人に惡戲をしようとしてゐるのだと思つたし、その騷ぎを聞くのが厭にもなつたので、各自に窓の所へ出て、見知らぬ犬が一匹街を通ると澤山の犬が鳴き咆えながら後を追ふやうに、聲を揃へて叫びます。『この夜中に來て、立派な婦人の戸口でそんな侮辱的なことを云ふのは全く恥辱だぞ。後生だからお前さん彼方へ行つて、我々を安眠さして吳れ。何か此の婦人に不服があるなら明日又おいで、そしてこの嫌らしい騷ぎで私等の耳を破つて吳れるな。』アンドルッチョは姿も見ず聲も聞かなかつたのですが、女の情夫の一人が、其の家に來合せてゐたのです。そして今近所の人達の言葉をきくと元氣が出て來まして、窓に走り寄つて恐ろしい威張つた聲で叫びました。『そこにゐるのは何奴だ？』

アンドルッチョは上を見ますと、よくは分りませんが、常習の殺人犯見たいな男がゐます。髯むぢやで、今眠から起きたせいか眼を擦り擦りしてゐます。『私は此の家の御婦人の弟なのです。』とアンドルッチョは男の恐ろしい聲に吃驚しながら答へました。すると向ふは此の言葉の終るを待たず、一層荒い脅迫的な聲で、『畜生！　醉拂ひ！　今降りて行つて本當に動けない程ぶん撲つてやるぞ、こんな騷ぎをしやがつて人の安眠を妨害しやがると。』かういふと直ぐ窓を閉めて了ひました。

他の近所の人達で、今物を云つた男が何様な男だか知つてゐる人々は、アンドルッチョに向つて親切に『どうか君、歸り給へ、殺されない中に。直ぐ歸り給へ、それが最上分別ですよ。』と云つて呉れました。

アンドルッチョは彼を脅かした男の恐ろしい聲と、狂暴な面付とが怖くなつてゐた時なので、親切な隣人の有難い忠告の意味が呑込めまして、金を失くしたことを悲しく思ひ落膽しながらも、少女が導いた同じ道を通つて宿屋の方へ歸つて行きました。併し自分の身體から發する惡臭に迚も堪えられないものですから、海へ行つて身體を洗つた方がいゝと考へまして、通りを左に折れてカテルラ街に出ました。それから町の一番高い所に來ますと、薄暗い提灯を持つた二人の人が自分の方へ遣つて來るのが見えます。巡廻の警吏か、又は惡漢かも知れぬと恐れたので彼は、二人を避けようとして片側にあつた一軒の古い空き家の中に身を忍ばせました。すると直ぐ後から、まるで彼の後を追ふかのやうに、二人の男も這入つて來ました。彼等は彼の直ぐ傍に立止つて、幾つかの鐵の道具を地面に下すと、それを檢査し始めました。此の色々な道具を調べながら、一人の男が仲間に向つて、『一體何だらう？　俺は生れて此の方こんな厭な臭ひは嗅いだことがないね。』と云つて、四方八方に提灯を向けて見ますと、不幸なアンドルッチョが眼に入りました。『そこにゐるのは誰だ？』と云つても返事がないので、提灯を持つて傍へ寄つて見ますと、全身汚ない物だらけなものですから、どうしてそんな風になつたのかと訊ねました。憐れ

な男は幾らか氣が強くなつて、彼の不幸な災難を物語りました。すると二人の見知らぬ男は、一體そんな罠が懸けられるものかと考へて見た末、それは炬火(たいまつ)と綽名の付いたスカラボンの家に違ひないといふことになりました。『君、君は金を失くしたけれども、便所に落ちた爲に家の中に歸れなかつたことを神に感謝しなけりやならないよ。そうでなかつたら、金を失くす斗(ばか)りか眠つてる間に首をちよん切られたかも知れないからね。口說いたつて仕方がないぢやないか？　彼奴に取られた金を奪返さうとするのは空の星を引下さうとするのと同じで到底出來ないことだ。だが君がそれを一言でも喋つたといふことが彼奴の耳に這入りや君は大丈夫殺されるぜ。』

斯う云つてから二人は一寸の間相談をして、扨て云ひました、『俺達のいふ事を聽給へ。俺達は本當に君を氣の毒に思ふよ。だから若し君が今俺達の遣らうと思つてることを手傳つて呉れゝば、取られたよりもつと餘計の分け前をやるがな。』

アンドルッチョは絕望してゐるので、何でも喜んで遣らうと云ひました。扨て丁度其の日にネーブルスの大僧正フィロッポ・ミニュトロの葬式があつて、非常に高價な衣服を纏ふて指には五百圓以上もする紅王(ルビー)の指環を篏めて埋められたのです。彼等は之を盜まうといふ彼等の計畫をアンドルッチョに告げました。彼は思慮よりも慾が勝つて彼等と共に大會堂の方へ出掛けました。併し彼が餘り不快な臭ひがする

ものですから、中の一人が、『迚も臭くつて堪らないから、何うにかして此奴を洗ふことは出來ないかね？』と云ふと、對手は答へました、『それや譯ないさ、すぐ傍に井戸があるから、どうせ井戸なら繩とバケツが付いてるだらう。そこへ行つて洗やいゝぢやないか。』

其處へ行つて見ると成程繩はありましたが、バケツがないので、途方に暮れました。そこで仕方がないので、馬商人を繩で縛つて井戸の中に吊下げて、全身隈なく洗つて仕舞つたら釣瓶を引いて引揚げて貰ふといふことに決りました。處がやつと彼が井戸の底に下りるか下りないかに、一隊の警官が或る惡漢を追つて大變疲れたのと喉が渴くのとで、水呑みに井戸の所へ遣つて來ます。アンドルッチョの仲間はそれを見るなり、捕まつて牢に入れられては大變と直ちに後をも見ずに逃失せました。お廻さん等が來た時にはアンドルッチョはもうすつかり洗つて了つてゐました。巡査は劍や、帽、戟等を地面に置いて繩を引張り始めますと、重いものですからバケツに水が一杯入つてゐるものと思つてぐんぐん引上げます。井戸の口まで來るとアンドルッチョは繩を放して素早く緣に跳り上りました。お巡さんらは之を見ると仰天して、惡魔でも引き上げた積りになつて、足の續く限り早く逃げて了ひました。アンドルテョは又それを見て吃驚して了ひ、若し緣にしつかり摑つて居らなかつたら再び井戸の底に轉落して死んだか、酷い怪我をしたに違ひありません。ところが地面に下りて見ると彼の仲間の持つて來たのでない武器が澤

山あるので猶一層驚きました。今度は彼の方で何が何やら分らないので恐くなつて來て、逃げることに心を極めました。併し何方へ逃げたらいゝか分りません。すると直に二人の仲間に逢ひました。彼等は彼を井戸から引上げる積りで戻つて來る所だつたのですが、彼の姿を見て甚く驚きました。どうして出て來たのかと訊かれて彼は、誰が引上げたのか俺も知らぬと答へました。すると彼等は、彼等の逃げた理由を語り、きつと巡査共が引揚げたのに違ひないと云ひました。

併しもう眞夜中を餘程過ぎてゐるものですから、三人の者は餘計なお喋りをして暇を潰さずに、直ちに教會に行き、中へ這入り込むと眞直ぐに大僧正の墓の所へ行きました。それは大きな大理石の石板で蓋がしてありましたので、道具を使つてこぢ開けて、人間一人通れる位に持上げました。それが濟むと今度は誰がその窖に下りて行くかといふ問題が起りました。『俺は厭だ』と一人が云ひますと、もう一人が、『俺も御免だ。アンドルッチョにさせよう。』

『俺はそんなことは仕ない。』と彼は答へました。

『厭だつて吐すのか？　厭もくそもあるか、這入れ。這入らなきや打殺すぞ。』

馬商人は、此の二人は脅す通りに仕兼ねない人間だと思つたので、それ以上云はれるを待たず墓の中に這入つて行きました。彼は下りて行きながら心の中で『此の惡黨奴等は俺を瞞そうとしてゐるらしい

だから俺が奴等にみんな遣つて仕舞ふ様なへまなことをすれば、きつと俺が窖から出切らない中に奴等は逐電して俺は空手で置いてぎぼりになるんだ。だから初めに俺の分を取つおく方がいゝ。」彼は彼等の云つて居た指環のことを思出して、墓場の底へ達するなり第一番に大僧正の手からそれを抜取つて安全な場所に隱し、それから十字權標、法冠、手袋、僧正服等を皆剝取つて、大僧正をシャツ一枚の裸にして皆相棒に遣つて仕舞ひ、もう取るやうな物は何もないと云ひました。彼等は確かに指環がある筈だからよく見ろと幾ら云つても、善良なアンドルッチョは、どうしても無いと云つてきかないのです。併し二人の惡漢はアンドルッチョより未だ上手ですから、ぢやいつまでも探してやがれと云つゝ、アンドルッチョが探してる振りをしてゐる間に、石板を支へてゐた突かい捧を取去つて、彼を墓窖に置いた儘逃亡して仕舞ひました。アンドルッチョの憐れな有様は想像が出來るでせう。彼は幾度か頭や肩を使つて蓋を上げようと仕たのですが、凡て無益でした。遂に彼は苦痛と疲勞の爲に氣を失つて、大僧正の死體の上にぶつ倒れて了ひました。二人がそうしてゐる所を見ると全く何方が死人たが見分けが付かない位でした。やがて正氣に返ると彼は、何れにしても免れぬ殘酷な二つの運命を歎き悲みました。それは卽ち、此の墓窖の中で饑餓と悲歎の爲に死んで了ふか、然らざれば此處にゐることを發見されて死體盜賊として死刑に處せられるか、この何れかの運命を逃れぬからです。

彼が斯く身も世もあらず憐れな思ひに耽つてゐる時に、敎會內を步く足音を聞きました。すると彼は、之はきつと自分や仲間の二人が來たのと同じ目的でやつて來た泥捧に違ひないと思つて、恐怖は更に加はりました。此の連中も墓場を開いて石蓋を持上げると、誰も進んで這入る者が無いので、先刻と同じ爭論を起してゐました。すると惡漢の一人の坊樣が、爭ひを止めて云ひました『君達はみんな實に意久地なし連中だ。だが俺は死體なんかちつとも恐くないから大喜びで這入つて行く。』彼は直樣地面に腹這ひになつて、穴の方へ背を向けながら、先づ一本宛兩足を入れて、それからいゝ具合に全身を入れようとしました。アンドルッチョは彼等の談話をすつかり聞いたので少し大膽になつて直ちに起上ると、坊樣の片足を摑んで力の限り引張りました。無論坊樣は恐怖の呻きを發して、『逃れんと身を踠きました。恐ろしさに氣絕せん計りになつてゐたのですが、それでも殘りの力の有りつたけを集合してやつとの事で穴から出ました。そうするともう墓の蓋をすること抔は忘れて仕舞つて、恰で百匹の惡魔に追かけられてでもゐるかのやうに逃げて行く彼の仲間の後を追ひました。アンドルッチョは此の不意の事件の轉廻を極度に喜んで、一刻も猶豫せず墓から出ると、指環を懷中した儘直ちに敎會を去りました。長い間彼は當て途もなく街をさ迷ひ步いた揚句に、明方になつて港近くにゐたので自分の所在が分り、宿屋へ歸りました。宿屋の亭主や仲間の連中が、一晩中彼のことを心配してゐたと云ふと、彼は何事も包隱さず

つかりあつた事を物語りますと、亭主は直樣ネープルスを立去ることを極力彼に勸めました。彼は直ちに彼の勸告に從ひまして、立派なルビーの指環を持つてペルヂャに歸りました。指環は彼の失つた金を充分に償つて吳れました。

第六話

ベリトラ夫人は二人の子供を奪はれて、二匹の山羊と共に或る島に居たが後で。ルニジアナに行くと息子の一人は其の土地の或る紳士に使はれてゐたが、主人の娘と一緒に居る所を發見されて牢屋に入れられる。シシリイ人がチャールス王に反逆した時に、彼女は息子に逢ふ。息子は主人の娘と結婚する。弟にも逢つて再び皆立派な身分になる。

紳士淑女達はフィアメッタの語つたアンドルッチョの災難を大變面白く聽いた。そして話が終ると女王の命令に從ひエミリアは斯く語つた。

運命の樣々な變轉は誠に殘酷で悲しうございますが、普通運命の微笑を見て慰められる私共の心は、其の冷酷を見ては奮起いたします。ですから幸運な人に取つても不運な人に取つても此の樣な物語を聽くことは厭にならないだらうと私は考へます。何故と申して幸運な人はそれに依つて警告を與へられ、

不運な人は激勵を受けるからです。それでもう既に此の題目に就て立派な物語が澤山語られましたけれ共、私は尚ほ一つのお話を申上ます。それは涙を誘ふと共に又眞實な物語です。そして成程終りは幸福になつては居りますが、その途中に永い、辛い困難が續いて居りますので、後に來る幸福もそれを償ふに足らないと思ふ程なのでございます。

皆樣、皇帝フレデリックの歿後、マンフレデイがシシリイ島の王位に卽きました。此の王樣の侍從の中にカペースといふ一人のネープルスの紳士がありましたが、彼は非常な財産家で凡ての人から大層尊敬されて居りました。彼はシシリイ島の總督となり、矢張りネープルス生れの貴族でベリトラ・カラッチヨラといふ婦人を後室とされました。彼が未だシシリイの總督であつた時、チャールス一世はベネベントの戰に勝利を得て、爲めにマンフレヂは戰死し、シシリイ人は征服者を歡迎して王に戴きました。カペースは最早や島人の愛着も信義も賴り無きを見、又先王の敵の臣下となることをも欲しませんでしたので、逃亡の準備をしました。然るに島民等は早くも彼の計畫を嗅付けて、他の數人の熱心なマンフレヂ黨員と共に彼をチャールス王に引渡しました。

ベリトラ夫人は、チャールスがシシリイ島を占領するや、事態の急激な變化を知り、夫の身の上が何うなつたかも分らないし、若し夫が死刑にでも處せられるとすれば自分も同じ運命を分けねばならぬ恐

れがありますから、財産を捨てゝ生命の安全を計らねばならぬと考へまして、丁度妊娠中であつたにも拘らず、リパリ行の船に乘込みました。連れて居るのは唯一人、やつと八歳ばかりになるゴツフレヂといふ息子丈けです。無事にリパリに到着しますと一人の男の子が生れたので、彼女はスカツキアトール卽ち「落人」と名け、一人の乳母を雇つて再び乘船し、乳母と二人の息子とを連れてネープルスの親類の許へ行かうとしました。ところが天は彼女に災して、大暴風雨の爲彼女の乘れるガリイ船はポンゾ島に吹着けられました。そこの小さな灣に入つて順風の來るを待つて居りました。他の乘船者等と共に陸地に上つて、或る人目に掛らぬ場所を見付けると彼女は悲しい夫の運命を歎き始めまして、それからは毎日船員や乘客の目を逃れては其の淋しい場所へ行つて充分に歎き悲みました。或日のこと、例の如く夫人が其處で歎いて居ります中に、不意に一艘の海賊船が現はれまして、何の雜作もなくガリイ船を捕獲し、乘込んでゐた人達を皆連れ去つて仕舞つたのです。

ベリトラ夫人はいつも程の時間を歎きくどいた揚句、濱邊の我子の所へ戻つて見ますと、そこには何もないので、どんなに驚いたでありませう！　併し直ぐに事情を推察して海の方を彼方此方見廻しますと少し先の方に海賊船が捕へた小舟を引連れて行くのが見えました。ベリトラは最早や、何の疑ひもなく丁度夫を失つた如く、可愛い二人の子供をも永久に失くして了つたのです。彼女の悲みを想像して御覽

なさい！　唯一人置去りにされて、自分の身が何うなるかも分らず、微かな聲を上げて子供と夫の名を代り代りに呼びつゝ、遂に海岸に氣を失つて倒れて仕舞ひました。そして近くに誰も助けて呉れる者が居ないものですから、永い間氣絶の儘倒れて居りました。やがて正氣に返ると涙は瀧の如くに頰を傳ふて流れます。立上ると、恰で悲歎の爲に狂氣の如くになつて、洞穴から洞穴を驅廻り、涙に咽びつゝ子供を呼んで居ます。呼べば返つて來る望みでもあるかのやうに。併し幾ら歎いても益無きことを知り、徐々と空に擴がつて來る夜の暗が怖くなつて來ると、自然に自分の身の上を考へるやうになりまして、毎日歎きにやつて來た小さな洞穴に戻りました。非常な心痛に加ふるに絶えず恐怖に襲はれてそこで一夜を過しましたが、やがて夜は明放れました。もう一晝夜も食を取らないものですから迚も腹が空いて堪らないので、餓死するよりはと草を取つて食べました。やつと空腹が滿されると又もや不幸な未來を考へて泣出しました。かうして悲しい考へに耽つてゐる時に彼女は、一匹の山羊が近くの洞穴へ這入つて行つて、少し經つと又出て來て森の方へ歸つて行くのを見ました。獸を見ると彼女は好奇心を起して立上り、今山羊の出て行つた場所へ行つて見ました。すると生れた計りの二匹の仔山羊がゐます。夫人は近頃お產をした計りで未だ乳が出るし、子供を奪はれて與へない爲に溜つて困つてゐた所でもあつたものですから、直ちに一つ一つ腕に抱上げて乳を差付けますと、小さな獸共は厭がりもせず、本當の母

親でもあるかのやうに吸付きました。そしてそれからはもう夫人と親山羊との間に何の差別もなくなりました。

この二つの乳呑子は或る意味に於ては、不幸な憐れな夫人に取つては友達であり、慰籍でありました。彼女は母山羊同様、唯草を食べる時とか、小川に水を呑む時とかに子山羊共から離れる丈けで絶えず傍におりました。そして人間に救はれることも出來ず、其の場所を去る望みもないので、彼女はそこで一生を過しそしてそこで死ぬ決心をしました。時々は夫のこと、子供のこと、昔の幸福な生活等を思出して甚しく泣くことはありましたけれども、こんな生活をしてこんな荒地に住んでゐる中に徐々と、彼女自身も野生の女のやうになつて仕舞ひました。友とするものは野獸以外にないやうな生活をしてゐれば、誰でもそうならずにゐられるでせうか？

ベリトラ夫人は數ヶ月を其島で暮しました。するとピザからまた一艘の船が偶然彼女の上陸した小さな港に這入つて來て錨を下し、數日間滯泊して居ました。この船中にはコンラド・ド・マレスピニといふ侯爵が、非常に淑徳高く信仰深い夫人を伴つて乘つてゐました。此の二人はパグリア中の聖地を悉く巡拜して、今や歸郷の途中でありました。或日彼等は氣晴しの爲に、數人の下僕と二三匹の犬とを連れて島を散歩しました。そしてベリトラ夫人がいつも居る洞穴の近くへ遣つて來ました。二匹の仔山羊はも

う大きくなつて森の中で勝手に草を食べて居りましたが、犬共は之を見付けると追かけました。そこで仔山羊は逃げて、直ちに洞穴に隱れようとしますと、犬も後を追つて來ます。ベリトラ夫人はそれを見ると棒を執つて立上り、彼等を追拂はうとしました。そうしてゐる處へ、犬の後をついて來た侯爵と夫人とが洞の所へ遣つて來ました。此の日に燒けて、痩せて、毛むくぢやらになつた女を見て一行がどんなに吃驚したか皆樣想像出來るでせう。ベリトラ夫人も吃驚したのは御同樣です。人々は犬を宥めて洞穴から追出しました。そして婦人の傍に近寄つて、一體あなたは何誰か、この荒地で何をしておいでか、是非きかして下さいと云ひました。彼女は深く追及せられる迄もなく自分の名前、身分等を告げ、不幸の委細を物語りました。

彼女の夫と親密な間柄であつた侯爵は、甚く彼女の話に動かされ、此んな無人島で一生を終らうといふ決心を飜すやうにと言葉を盡して說きました。彼は、又よき時節の來る迄あなたを知人の所へ連れて行かう、否自分達と一緒に居てもいゝと云ひ、更に、自分達の妹と思つて待遇すると約束しました。そう云つても尙ほ婦人が服しないものですから彼は、女は女同志といふことがあるから妻の方が成功するだらうと思つて彼の夫人を置いて去りました。そして自分では僕共に向つて着物と食物とを持つて來るやうにと命じました。

侯爵夫人は二人切りになると立派に仕事を成遂げました。先づ第一に婦人の悲みに同情し、それから彼女の不幸を共に泣き、それから、可成り骨が折れましたけれ共、着物を着せ食物も食べるやうにと納得させました。不幸な婦人は自分を知つてゐる所へは決して行かぬと斷言してゐましたけれども、侯爵夫人は柔しく賴んだり强ひたりして、遂に彼等と共にルニジアナに行くことを承諾させました。そして若しお望みなら、二匹の仔山羊と母山羊とも一緒に連れて行かうと云ひました。山羊共は旣に歸つてゐた、ベリトラ夫人に幾度となく抱付くものですから、侯爵夫人は一方ならず驚いてゐたのです。

風の具合がよくなるや否や、ベリトラ夫人はコンラド侯と夫人と共に船に乘りました。山羊共をも連れて行きましたが、ベリトラ夫人は自分の本名を何處でも知らさぬ爲に、カヴリハラ(山羊飼)と自分を名付けました。順風に追はれて彼等は程なくマグラ河口に到着し、そこで下船して、コンラドのお城に入りました。ベリトラは此處で寡婦の喪服を着つゝ、コンラド夫人の相手をして、極めて貞淑な謙遜な生活をなし、依然三頭の山羊を大層可愛がつて世話しました。

ベリトラ夫人の乘つて來た小舟を捕獲した海賊等は、ベリトラ丈けは眼に入らなかつた爲めに置去りに仕たのですが、他の捕はれ人等をゼノアに連れて行つて、海賊船の持主等は獲物(えもの)を分配しました。そして二人の子供と乳母とはガスペリノ・ドリアといふ人の持物となりました。彼は彼等を自分の家に連れ

て行つて奴隷として樣々の卑しい仕事をさせました。乳母は主人より離れたことを甚しく悲みまして、自分並に二人の子供の不幸な地位を歎きました。併し奴隷となつた今幾ら泣いても無益なことを思ひ、貧しい女ではありましたが物の分つた思慮深い質でしたから、先づ出來る丈け諦めを付けようと決心しました。次には子供の現在の身の上を考へますと、彼等の本名を知らせるのは危險で不利益だと思ひました。それに何日か知ら運が向いて來て、子供達が長生する中には昔の身分に返ることも出來るかも知れないので、其の時節の到來するまでは何人にも彼等の身分を知らさぬ事に心を極めました。そこで彼女は皆に向つて二人を自分の子供と稱し、長男のゴッフレヂをヂャンノット•ヂ•プロシダと云ひました。併し小さい方の子供の名前は變へる必要もあるまいと考へました。けれどもゴッフレヂには彼の名前を變へた理由をよく云含め、本名が分つたら非常に危險である譯を話して、一度ならず幾度となく心に銘じさせました。少年は分別のある子供でしたからよく乳母の訓戒を守りました。斯くて二人の子供は乳母と共にガスパリノの家で忍從の生活を送りました。汚い着物を着、靴の如きは實にぼろ〳〵の物を穿いて、極めて卑賤な業を仕て居たのです。

然るにゴッフレヂのジャンノットは十六歳になりますと、斯かる奴隷の身分に到底適はぬ氣高き精神を持つて居りますから、遂にガスパリノの家を逃亡しまして、アレキサンドリア行の小船に乘込んで方

々の國々を放浪しましたが仲々出世の緒に摑りません、遂にガスパリノの許を出てより四年計りの月日は經過して、彼は美しい青年になりました。そして彼が死だとのみ思つてゐた父親が、チャールス王に捕はれの身となつて、今猶ほ生存してゐることを聞きました。彼は運命の玩弄物となつて最早や永い間所々を放浪してゐる中遂に伊太利ルニジアナに這入つて來て、偶然の機會からコンラド・ド・マレスピニの僕となり、大層忠實に仕へたものですから、非常に可愛がられました。前申した通り彼の母のベリトラはコンラド侯夫人の侍女となつて居りましたから、二人は時々面を合せることもあるのですが、別れてより此方長い年月が經つて兩方共變つて居るのでそれとは氣が付きません。

ジャンノットがコンラド侯に使へてゐる中に、スピーナと呼ぶ彼の令孃が、ニッコロ・ダ・グリニアナといふ人の未亡人となつて、父親の家に歸つて參りました。未だ若い、やつと十六歳計りの、美しい、活潑な娘でしたが、直ぐにジャンノットを目に付けました。ジャンノットの方でも同じ目が向ふを見る。程なく二人共深く戀慕ふ仲となりました。其の中に彼等は互の情熱を滿足させる手段を得ました。斯樣にして何人の鋭い眼にも悟られずに數ヶ月は續きました。徐々慣れて來ますと少し大膽になり過ぎまして、こんな場合に是非必要な用心を怠るやうになりました。或る日の事、人々が木立の日蔭を散歩してゐる時、彼等二人は他の仲間から離れまして、急ぎ奥深くの方に參りますと、もう人々はずつと後れて

仕舞つたものと思ひまして、氣持よい柔かな芝生に坐りました。そこは花や、こんもりした枝等がすつかり覆被さつてゐたものですから、彼等は愛の甘い談話に身を委ねました。ところが其の酬ひは高價なものでした。先づ侯爵夫人が二人を見付けて叫聲を擧げ、彼等を驚かしますと、父侯爵も走付ける。侯爵は娘が斯かる賤しい身分の者を選んだことを怒り、又僕の不義を憤つて、召使に二人を縛つて城の牢屋に入れろと命じました。彼は唯々憤激に驅られた餘りに、二人共不名譽な死樣をさせやうと決心したのです。そして若し夫人が彼の意を知つて、それを止めなかつたならば本當に實行したでせう。夫人は成程娘には嚴しい罰を加へねばならぬとは思ひましたが、娘を殺すといふ樣なことは思つても慄然とします。彼女は力の限りを盡して夫の怒を宥めました。『最初の怒の赴く儘に身を任せることは狂人に等しいことです。それにあなたの樣なお歲でありながら、我と我が娘を殺し、奴隷の血を以て手を汚すが如きことを仕たなら、世間の人からどんなに嫌らしく思はれるでせうか。それに何もあなたの正當な憤怒を滿足させる爲だからと云つて、人殺しをなさるにも及ばないでせう、他に刑罰の方法は幾らもございますから。』夫人は猶ほ言葉を盡して、彼等を殺す計畫を捨てるやうにと頼みました。そこで侯は彼等を永久的に入牢せしむることゝしました。彼等は別々に牢に入れられて、唯生命を保つに必要な丈けの食物を與へられる計り。かくて彼等の過失をとくと後悔するやうにさせられました。こんなに

引離された彼等の辛さは皆様御想像出來ませう。互に手紙を取交すといふ悲しい滿足さへ禁じられたのです。彼等は互に享樂した喜びを奪はれて何れ程溜息を吐き、悲歎の淚を流したことでせう。この恐ろしい有樣になつてもあの喜びを忘れることが出來なかつたのです。

不幸な戀人達は一年以上も牢屋の中で暮しまして、侯爵はもう彼等の事抔忘れて仕舞ひました。其時に、アラゴン王のピイタアは、プロシダのジョン王の陰謀の助けを借りまして、シシリイの人民を叛亂せしめまして、チャールス王の島を奪つて仕舞ひました。マレスピニ侯は之を聞きますと、自分はジベリン黨ですから非常に喜びまして、自分の歡びを家族全體に分ち度いといふ願望から、其れを祝ふ爲に大饗宴を催しまして、城内は狂氣亂舞の大騷ぎです。ジャンノットは番人の一人から此の饗宴の理由を聞きますと、深い溜息をして云ふやう。『俺は何といふ不仕合せなのだらう。俺は十四年以上も、殆んど絕えず乞食を仕ながら、世界を放浪して步いて、こんな革命を待つてゐたのだ。そして今やつと革命が起つたと思へば、俺は牢屋にゐて、放免される望みもないのだ。』

すると之をきいた番人は『一體お前なんかゞ王樣達の爭ひに何の關係があるといふのだ！　それとも何かシシリイの王冠に文句でもあるのかい？』と冗談半分に云ひました。

『俺はお父樣がシシリイで占めてゐた地位を思出すさへ胸が裂けるやうな氣がするのだ。俺があすこの

國を立去つたのは極く小さい時分だつたけれ共、マンフレヂ王御存生の時には、父がシシリイの總督であつたことを歷々と覺えてゐるのだ。』とジャンノットは答へました。

『君のお父樣は誰だい?』

『今になればもう打明けたつて心配はないから、俺の父親の名前を云つて聞かしてやらう。父の名はアリゲット•カペースと云つたのだ。いや、若し今でも生きてゐればそう云ふのだ。そして俺の本名はジャンノットではなくつてゴッフレヂ•カペースなのだ。何うして俺は自由になれないんだらうなア。シシリイへ歸ればうんと出世が出來るのに。』

番人はそれ以上彼に何も訊ねないで、直樣談話の模樣を主人に告げました。侯爵はそれを聽いても何でもない樣な素振をしてゐましたが、併し心では之はベリトラ夫人に確めて見ようと思ひました。そこで彼は夫人に向つて、若しやあなたの子供の一人はゴッフレヂといふのではないかと尋ねました。夫人はそれは長男の名前だと云つて、涙を流しつゝ、若し今生きてゐれば二十二になるでせうと云ひました。侯爵は自分の監禁してゐる男が、死んだと――少くとも永久に見失つたと――思はれてゐる子供であるといふことを半ば知りまして、一人も殺さなかつたことを喜び、自分及び娘の名譽を回復することが出來るかと祕かに祝しました。併し尚一層事實を確むる爲に、少しも急かずに、自分の知つたことを深く祕

密にして置いて罪人を呼寄せ他人を退けて、自ら彼の過去の生涯に就き殘る所なく取調べました。青年の返答は、彼がベリトラの息子であることを十分に證明しましたから、そこで彼は云ふ樣、『ジャンノット、君は俺の娘のスピーナに依つて君が俺に與へた悲むべき恥辱のことは十分承知して居るに相違あるまい。俺は君を親切に、否友誼を以て遇した積りだ。然るに君は忠實にして從順なる僕とならずして、最も不德義な忘恩を以て俺に報ひたのだ。若し君が誰か他の人に對して此の樣な罪を犯したのだつたらきつと殺されたに違ひないといふことを君自身認めねばならん。然し俺はそれ程嚴しく罰する氣にはなり得なかつたのだ。そして俺は殺し得なかつたことを喜ぶ。君の云ふ所に依れば君は立派な紳士の子であり貴族の婦人から生れたのであるから、もう隨意に君の不幸を打切にして、獄舍を出て宜しい。そして私の娘の名譽を恢復して君の過失を償ひ給へ。君は娘を愛し、娘も君を愛したのた。御存じの通り彼女は立派な有利な結婚をして數日經たぬに未亡人となつたのだ。君は娘の性質も、財產も、兩親も皆知つてゐられる。君自身の財產に就ては俺は今は何も云ふまい。扨てそこで、若しよかつたら、君達が互に感じ合つた不法な戀を、今度は正式なものにし給へ。私は君達の結婚に贊成する。そしていつまでも好きな丈け私の家に留つてゐて宜しい。私は君達を自分の子供として扱はう。』

ジャンノットは、悲歎と幽閉との爲に殆んどそれと見分けれらぬ程樣子が變りましたけれ共、併し彼

の生れに適はしい自尊心と高貴な感情とに變りはないし、娘に對する愛情に變りもないので、コンラド侯の申出た結婚を熱心に希望しました。併し唯コンラドの怒りを恐るゝ爲に此の申出を承諾したと思はれてはならぬと思ひまして、氣高い心からかう云ひました。『閣下、若し私が閣下の御機嫌を損ねるやうな事を致しましたとしても、それは決して卑劣な心からではありませぬ。私はお孃樣を愛したのです。今でも愛してゐるのです。そして未來とてもいつまでも愛するでせう。それは私が愛する價値を認めたからです。そして、たとへ冷たい無感覺な人から云つて私のお孃樣に對して仕たことが間違つて居たにしましても、それは青春とは附物の過失でありまして、若い間は到底免れ難いのであります。年老ひた人達も彼等の若かつた時分のことを想起し、自己の弱點を以て他の弱點をも測つて見たならば、私の過失とても夫程甚だしい物とは思はれまいと信じます。彼等とてもそれが輕蔑や惡心の底から出たのでなく、有餘る愛情から出たのだといふことを承認するでせう。私が一目スピーナ樣を見ましてからといふものは、閣下が唯今私に仰つて下さつた結婚といふことが私の絕えざる願望であつたのです。若し閣下の御機嫌を損じ、拒絕を受ける心配さへ御座いませんでしたら私はとうの昔に閣下にお願ひしてゐた筈なのです。併し若し閣下が私を賜らうが爲に心にもない事を仰つしやるのでしたら、何卒こんな殘酷な御冗談はお止めになすつて下さい。でないと私は無益な望みの爲にいつまでも引づられて居りますから。

私は喜んで牢獄に歸ります。そして私の受くべきどんな難儀でもぢつと堪へます。併し假ひ閣下が何の樣な苦難を私にお加へなさらうとも、私は斷じてお孃樣を愛しますし、又お孃樣のお父上たる閣下を敬愛致します。』

氣高い斷乎たる調子でかう述べますと、コンラドは非常に驚き且つ喜びました。此男は高貴な感情を持つて居り、娘に對する愛も眞劍なものだと思つたからです。彼は直ちに立上つて彼を抱擁し、種々滿足の意を表し、祕かに娘を連れて來るやうに命じました。令孃は色蒼ざめ痩衰へて、青年と同じ位に變つて居りました。そして侯爵一人の面前で、二人の戀人同志は再會の喜びに淚を流し、優しく抱き合つて互に變らぬ誠實を誓ひました。明日とも云はず其日の中に結婚の契約は內密に取結ばれまして、コンラド侯は力の限り新婚の二人をして彼が加へた悲慘な經驗を忘れさせようとしました。彼は此事に就ては何人にも告げず、必要な物又は彼等を喜ばす物は悉く妻にも相談なく整へて遣りました。そして數日經ちますと、もうベリトラ夫人に嬉しき報知を語つてもいゝ時だと考へまして、彼女が思ひに沈んでゐる機を見て云ひますには、『夫人、あなたの御長男と私の娘の一人とを結婚さしたいと思ふのですが、あなたは何とお考へなさいますか？』

『今迄より百倍も尊敬し感謝すると申すより他に言葉は御座りませぬ。私の生命よりも大事に思つてゐる

る者を取戻して下さるのですから。それにお話しの様にしてお連れ戻し下さるとしますれば、私は生返る心地が致します。』かういふと涙は瀧の如くに頰を傳ふて、それ以上言葉が續きませんでした。『そして俺の妻、お前は斯の樣な婿殿に就て何と云はるゝな？』と云ひますと、母親は、『ベリトラ樣の息子は立派な紳士ですから私に何の不服がありませう。私はどんな婿樣でもお心任せでござります。』と答へました。『宜しい、では直ぐにお前樣方を喜ばしてあげませう。』

彼は直ちに若き夫婦の許に赴きました。彼等は最早や牢舍ではなく、結婚の日以來別室に閉籠つて居たのです。彼等は痩せも幾分癒つて元の美貌に返り、二人共美服を着て居ります。侯はゴッフレヂに向つて『あなたはもう隨分幸福になつて居られるが、此處で若しお母樣に逢へれば此上の幸福は無いと思ふでせうな？』

すると婿は答へて、『私は母親があのやうな不幸に逢つて未だ生きてゐるとは思ひません。併し萬一まだ生きてゐるとしますれば、母に再會する喜びは迚も口では云へません。母の勸告と援助を得ますればシシリイに於ける私の財産の一部なりとも取戻すことが出來るかと思ひます。』

そこで侯爵は二人の母親を呼びました。彼等の驚喜は御想像に任せます。彼女等は花嫁に向つて、コンラド侯が遂に彼女の運命に同情せられて、ジャンノットに婚はして呉れたことを祝しました。ベリト

ラ夫人は侯爵の云はれたことで心は希望で一杯ですから、此の若き花婿を凝つと見詰めますと、子供の時分覺えのある顔の特長が分りまして、何も云はずいきなり彼の首に抱き付きました。餘りの可愛さ嬉しさに言葉を發することも出來なかつたのですが、遂に氣を失つて息子の腕の中に倒れて仕舞ひました。ゴツフレヂも或る不思議な本能に依つて、直ちに之が自分の母だと分りまして、愛と喜びの餘り自分も極めて柔しく母を抱きました。彼は幾ら母を接吻しても仕足りないのです。人々はやつとの事で母親を彼から引離して、彼女の氣を取戻そうとしました。併し母親は侯爵夫人及び娘の介抱によつて氣絶から意識に返ると、又もや息子の首玉にしがみ付いて、涙と接吻に交つた愛情の言葉を繰返しました。息子の方でも歡喜と愛で有頂天になりながら、最も篤い尊敬と感謝とを表しまして、彼等は數限りなき愛の印を取交しましたので、之を見て居る人々も大變滿足しました。それから互に今迄の樣々な苦みや悲みの物語を語り合ひました。侯爵は親類知己に娘の婚禮を知らせますと、人々は此の緣組を祝しました。彼は壯大な饗宴を催して結婚を祝賀しました。

　ゴツフレヂは機會を選んで二つのことを舅に賴みました。「閣下は私に種々とお慈悲を給はつた計りでなく、母にも隨分御盡力下さいました。お邸へお連れ下さつた上常に何かとお世話下さつたのですから。そこで今母と私の幸福を完全なものに致します爲に、先づお願ひ致したいのは私の弟を呼寄せて頂くこ

とです。弟は、既に申上げました如く、ゼノアでガスパリノ・ドリアの奴隷となつて居るのです。それから第二には、誰かを遣はしましてシシリィの現在の國狀を視察した上、私の父親が何うなりましたか、死んだか生きてゐるか、若し生存してゐるとすれば、どうしてゐるか、それを調べさして頂き度いのです。』

コンラド侯はゴツフレヂの望む通りにしようと云つて、信頼するに足る熱心な忠實な男を二人即座に派遣しました。ゼノアへ行つた方の者はガスパリノに逢つて、命令通りに、彼の主人がゴツフレヂ及母親に對して爲した事を殘り無く告げ、落人と乳母とを引渡して呉れるやうに侯爵に代つてお賴みすると申しました。ガスパリノは聞く事毎に驚いて、其の賴みは當然と思ひ、『マレスピニ侯のお爲とならば何んな事でも致しませう。侯爵の名聲は存じて居りますし、最も尊敬してゐるのですから。が併しあんたのお賴みに應じる譯には參りませぬ。と云ふのは、成程私の所には一人の子供と女とが十四年間使はれて居りますが、それは本當の親子なのです。併しそれで宜しいとならば遣しませう。ですがどうか私の傳言だと云つて侯爵に申上て下さい。ジヤンノツトを信用なさるな、彼は嘘吐きで惡人ですから、ゴツフレヂ・カペースと名乗るのは旨く侯爵に取入らんが爲だと。』

から答へてから彼は使者に禮儀を示す爲に食事をするやうに云置いて、彼が食事をしてゐる間に祕か

に乳母を側に呼んで今聞いたことに就て手短かに訊ねました。乳母はシシリィの革命のことは既に知つてゐまして、アリゲット・カペースはまだ生存してゐるかも知れない、そうとすれば何も怖いことはないと考へたので、何事も包み隠さず悉く有りし次第を物語り、今まで隠してゐた理由をも告げました。ガスパリノは乳母の話と使者の話と寸分違はず合ふので、乳母のいふことは本當であらうと思ひましたが、賢明な人ですからそれ丈けで止めず、更に何回も使者と乳母とに問ひ糺して見ますと、愈々事實に相違がありません。今まで子供に對して殘酷な取扱ひを仕たことを後悔しました。今は子供がカペースの息子に疑ひありませんから、罪の償ひとして、直ちに彼を自分の娘の一人に娶せました。娘は若くて美しい上に、彼は澤山の財産を與へました。結婚のお祝ひが濟んでからガスパリノは娘、婿、使者、乳母等を伴れて船に乘り、程なくレチに到着致しますと、侯爵及び家族の人達から大歡迎を受けました。亡くなつたと思つてゐた子供に逢へた母親の嬉しさ、永い間別れてゐた兄弟同志再會の喜び等は私が説明しないでも皆樣は容易に想像が付くでせう。斯く目出度き事件の落着を見た乳母の愉快も之に劣りませぬ。又侯爵夫妻、令孃、ガスパリノ等の歡びとても同じで御座います。

扨て凡ゆる良き事の與主である神樣のお慈悲には限りがないもので、シシリィに派遣した男の齎らした嬉しい報知に依つて人々の歡喜は更に完全なものとなりました。人々が食卓に就いて今食事を始めた

計りの所へ忠實な使者が歸つて參りまして、アリゲット•カペース卿は御健在でゐらせられる、そして從前より以上の位置に居られるといふことを披露したのです。彼の話をかい摘んで申しますと、チャールス王に對して反逆を始めると、怒り狂ふ人々は一團となつてカペース卿の牢獄に押寄せ、番兵を殺して卿を救ひ出し首將に立てゝ、佛蘭西人を悉く追拂つた。かくて彼はピーター王の御寵愛一方ならず、王は彼の財產及び名譽ある位階を凡て取返して下された、との事です。更に使者は言葉を繼いで、此の譽高き將軍は私を大層親切に迎へて呉れましてゝ、捕はれの身となつて此方一度の便りも聞かぬ奧方やお子樣の報知を聞くと非常に喜ばれ、數人の者を迎へに遣ると仰せられて、其の人達は私と一緖に上陸しましたからもう程なくお見えでせう、と告げました。

此の知らせを聞いた人々の喜びは迚も申述べられません。侯爵は數人の賓客を伴ひ、遠來の人を迎ひに出まして、比類なく歡迎しました。直ちに食卓に就く樣にと招じましたが、立派な使の人達は先づ居並ぶ人々に向つて挨拶を爲し、マレスピニ侯夫妻に向つて、ベリトラ夫人及びゴッフレヂに對する數々の親切を主人に代つて謝し、カペース卿は何事でも侯爵御夫妻の御用に立ちますと仰せになりました、と云つて今度はガスパリノに向ひ、『私共の主人に取つては總領と同じに可愛い御次男を今まで御世話下さつたことを主人に告げましたら、吃度あなた樣にも御禮申しませう。』と云ひました。それより彼等

も饗應の席に就きますと人々は出來る限り行屆いた世話をします。祝宴は數日の間續きまして、それも濟みますと早く夫に再會したくて堪らぬベリトラ夫人は、二人の息子と、息子の嫁達と乳母とを從へて、夫の寄越して吳れた船に乘込みました。マレスピニ侯夫妻は港まで人々を見送り、涙の中に別れを告げました。風の都合もよく一行は程なくパレルモに到着しました、アリゲット・カペースはもう夢中に喜んで彼等を迎へます。彼等は永く幸福に暮しまして、彼等に樣々のお惠みを與へ給ふた天の神を愛し絕えず感謝を捧げ、忠實に仕へたそうでございます。

第七話

バビロン王は彼の娘をアルガルヴ王の嫁にやる。途中種々な事件が起つて、四年の間に方々の國で姬は九人の異つた男の手を渡り、遂に父王の許に歸り、最初妻にならんとして出發したアルガルヴ王の處へ處女といふことにして嫁ぐ。

若しエミリアの話がも少し續かうものなら、恐らく婦人達の總てはベリトラ夫人の餘りの不幸に泣出して仕舞つたに違ひない。物語が終ると女王はパムフィロに向つて次を語るやうに命じたので、彼は次の如く話した、

美しき淑女達、我々人間には何うすれば一番いゝのか中々分りません。例へば、金さへあれば安樂に愉快に生活を送ることが出來ると空想して、神樣どうか富を與へて下さいと絶えず祈つてゐる人々を見受けます。併し慾には限りのないもので、彼等は金を獲る爲にはどんな困難も危險も恐れず遣通しますが、併し頓てそれが手に入ると、今度は其の財産の爲に生命を輕んぜられて他人の手に掛つて死ぬやうなことがよくあります。或る者は又卑賤より身を起し、權力を得て大なる幸福に達せんと數々の危險な戰鬪を爲し、朋友や兄弟の屍の上を乘越えて遂に王位と王權とを得たとしても、そこには多くの心配や苦勞が群り集ふばかりでなく、王の食卓には金のコップに毒の混るものだといふ事が、自分が殺されてやつと分るやうな有樣です。又多くの人々は過度の體力、美貌、其他同樣の長所を得んと望んで、遂に生命を失つたり、又は慘めな不具者となつたりして、あとになつてやつと、自分が無益な望みを起した事を知るのです。併し私は人間の欲望を悉く列擧する積りではありませんから簡單に申しますと、つまり幾ら欲望を滿足さした所で決して人間は不幸を免れるものではないから、若し我々にして正しく生きんと欲するなら、我々が眞に必要な物を知つてゐて、夫れを與へることの出來る唯一人、卽ち凡ゆる良き物の與主である神樣の授けて呉れる丈けの物を有難く受取つて滿足してゐればよいといふことなのです。

併し我々男子が時々多くを望み過ぎる如く、御婦人方も、殊に或る一點――美しくありたいといふ望

み――に於て甚だしいので、自然とあなた方に授けられた美で滿足せず、極めて精緻な技巧を以てそれを增さうとなさるものですから、私は皆樣に、或る若きサラセンの貴婦人が餘りに美しかつた爲に、四年の間に九人の異つた男子の腕に陷つたといふ不幸なお話を申上げませう。

昔バビロンの君主でベミナダブといふ王樣がありましたが、存生中に成された事で殆んど一として仕合せよからぬはありませんでした。數人の子供のある中に、アラチエルといふ姬がありまして、其の縹緻の優れて美しいことは當代に比ひ無き程でありました。するとアルガルヴの王樣が、口々に讃めそやす姬の美しき噂を聞いた丈けで、深く思ひを寄せるに至りまして、彼女を妃に欲しいと申込みました。アルガルヴ王は、アラビア人がバビロンに侵入して來た時、ベミナダブに援助して侵入軍を擊退したことがありますから、王は恩を謝するによき機會と思つて、直ちに此の申込を承諾して姬を遣る約束をしました。そこで一艘の戰船を艤裝し、姬には旅裝美々しく出立たせ、澤山の男女の婢僕を附けて、彼女を未來の夫の許へと送り、凡ゆる人間の運命を支配なさる神に娘の身を託して旅立たしたのです。王女がアレキサンドリアの港を發つ時には天氣はよし風も順風でありました。そして數日の間は順調に航海を續けたのですが、サルヂニアの沖に差掛るや大暴風が起つて、船は激しく搖れるものですから、アラチエル及び他の人々はもう迚も助からないと思ひました。併し船の運用宜しきを得た爲に、二日の間は何う

か此うか暴風に堪えることが出來ました。然るに三日目の夜に至るや荒れは一層激しくなつて、船長にも今彼等が何處にゐるのか分らなくなりました。雲は深く空を閉してゐるし、夜は暗し、船は全く風のまに〳〵漂はされてマヂヨルカ島の方へ吹付けられ、船體は裂けて大きな漏口が出來て仕舞ひました。人々は此の逃れ難き危難を見ると、自分丈け助かればいゝと思つてボートが下されるや役員、水先案内、水夫等は我先に之に乘込みます。後に殘つた人々は、初めに乘つた人達が劍を拔いて防がうとしても構はずどや〳〵と乘込んだのです。然るにボートに乘りさへすれば死を免れると思つて無暗に澤山の人が乘つたものですから、其の重みの爲め遂にボートは顚覆して乘つてゐた人達は皆海底に沈んで仕舞ひました。

アラチエルと侍女等とは、誰も助けて吳れようとする者が無い爲に船中に取殘されまして、恐ろしさの餘り殆んど氣を失ひ乍ら、今にも浪に呑まれて了ふかと思つて居りました。ところが、船はもう殆んど二つに破れて、所嫌はず水は裂目から侵入してゐましたけれ共、遂にマヂヨルカ島に近い或る砂濱に猛烈な勢で吹上げられたものですから、恰で勢鋭く弓を放れた矢が突刺さる樣に、ドンと砂の中に突立つたのです。そして一晚中風と浪とに曝されながら、それでも尙ほ形を保つて居ました。

明方に至つて暴風は止み海は穩かになりました。王女が餘りの恐ろしさの爲に陷つた氣絕から甦つた

時には太陽は既に地平線上に出て居りました。王姫は自分が何處にゐるのやら、生きてゐるのか死んでゐるのかさへ確とは分らず、ふと眼を見開いて頭を擡げました。そして極く微かな弱々しい聲で、一人一人僕の名を呼びました。併し幾ら呼んだとて聞える譯はありません、彼女の呼んでゐる僕等はもう此の世の人ではないのですから。誰の姿も見えず、誰の返事も聞えないので吃驚すると同時に、又もや新たな恐怖に襲はれましたが、前夜のことを思出し、自分がまだ船の上にゐるのを知ると、殘れる限りの力を奮ひ起して立上りました。何といふ光景を見ることぞ！　姫の侍女達は皆甲板の上に散らばつて倒れてゐます。永い間彼等の名を呼んだ末、一人々々に振動かして見ると、暴風の恐怖の爲に生殘つてゐるのは幾人もありません。彼女の驚愕は到底申述べられません。併し心を落付けまして、未だ呼吸あるらしい者を激しく搖起しますとやつと起上りました。不幸な婦人達は船には一杯水が入つてゐて砂の上に乘り上てゐるのに男は一人も居らず、誰も助けに來人がないものですから、姫と共に溜息を吐き、泣き始めました。

もう眞晝頃になつてゐますが、海にも濱にも人つ子一人見えません。運よくも丁度其の時、ペリコン・ド・丼ザルゴといふ一人の紳士が數人の馬に乘つた僕を從へて、彼の別莊より來る途中、此の海岸を通り掛りました。砂上の難破船を見るや直ちに彼はそれが昨夜の暴風の爲だと知りまして、一人の

召使に、彼の難破船に行き船中の模樣を見て知らせろと命じました。僕はやつと船中に入つて見ますと、美しい若い娘と侍女等とが船首の方に横はつて居りましたが、彼を見るなり一度に泣き出して何うか憐んで下さいと賴みます。併し互に言ふことが少しも分らないのに氣付きまして、婦人達は今度は身振手眞似を以て彼等の遭遇した災難を說明しました。

僕は凡ての樣子を調べると主人の許に歸つて報告をしました。そこで貴族は婦人達及び其の貴重な所持品を陸上に揚げさせて、彼の別莊の一つに人々を伴ひ彼等の不幸を慰めようと力を盡しました。彼は程なくアラチエルの立派な服裝や、他の婦人達か非常に鄭重に仕へる有樣等からして、彼女が身分の高い娘に違ひないと思ひました。姬は色蒼ざめ悲歎に沈んで、元氣がなく、恐怖と疲勞との爲に美を損はれて居たに拘らず、ペリコンは彼女の稀に見る美しい目鼻立をいくら嘆美しても飽きない程でありました。實際彼は大層姬に心を奪はれまして、苦しまだ夫の無い身ならば、そして夫婦にならねば愛して貰へないなら、彼女を妻にしようと決心しました。彼自身は美しい、立派な氣高い容貌の人でした。少しそゝつかし家の方でしたけれ共、併し戀ほど男の態度を柔げるものはありませんから、彼はアラチエルに對しては極めて鄭寧でありました。そして非常に注意深く彼女の世話をしたものですから數日ならずして姬はすつかり元の元氣と美しさとを恢復しました。そうなればペリコンは愈々彼女に對する思ひ

ば増すばかり、互に言葉の通じないのが一層もどかしくなつて來ます。自分の溢れる愛を娘に通じたいのです。それで彼は顏付、身のこなし、注視等で自分の心持を分らせようと努め、有る限りの方法を用ひて切なる願ひを遂げさして吳れと誘ふのですけれど、全く其の甲斐がありません。アラチエルはいつでも彼の心に從ふことを拒むのです。禮儀の心から姬が極く柔しく斷れば、ペリコンの情熱は尙更燃え上るのみです。姬は若しか彼が暴擧にでも出はしないかと恐ろしくて途方に暮れました。今ゐる所の風俗習慣より判斷して見て、此處は基督敎國に違ひない、して見れば回敎國の自分の身分を人に知られて決してよい事はないと思ひまして、姬は勇氣を以て身を鎧ひ凡ゆる不幸と戰ふ決心を定め、今は三人ほか殘つてゐない侍女等に向つて、自分がバビロン王の姬であることはよく〳〵それを云ふのが利益であると見極めの付く迄は決して何人にも告げてはならぬと云含めました。更に自分は未來の夫、アルガルヴ王に對して飽く迄操を守らうと固く決心してゐるから、お前達も十分氣を付けて名譽を保つ樣にと誡めました。侍女達は姬の淑德を非常に賞讃しまして、出來得る限り御希望通りに致しませうと約束をしました。

ペリコンは戀の爲に身も食はれる思ひがして、愛する者がかく身近に居る丈けに、彼の不幸は一層甚しかつたのです。歎願も注視も何の役に立たぬを知ると、暴力に訴へるは次として先づ策略を用ひること

に心を極めました。アラチエルは宗旨に依つて禁じられてゐる爲に今迄一度も葡萄酒を飲んだことがなかつたのが、一度味つて見ると非常に甘美な味ひなので、それからは勸められる儘に喜んで飲むことをペリコンは氣が付いてゐました。それに酒は普通戀の歡樂の取持役であることを思ひ出しまして、之に依つてアラチエルを征服しようと考へました。先づ彼は戀を思切つた態に見せかけて、數日後に至ります と大饗宴を催すといふ口實の下に美事な晩餐の用意を命じ、知己朋友を招待致しましたが、勿論姫も其中に居ります。彼は給仕人に向ひ、誰でも彼女の給仕をする者は數種の酒を混ぜて置き、婦人が飲み干すそばから此の混合酒を注げと命じました。給仕人は彼の命じた通りに致します。何も知らぬアラチエルは、此の酒が實に口當りよく飲欲をそゝるものですから、いつになく飲み過しまして、いつか不幸の事も打忘れ、心は浮立つて來て、人々がマジヨルカ風に踊るのを見ると、自分もバビロン風に踊らねばならぬと思つて人々に交つて踊り出しました。ペリコンは之を見ると愈々自分の望みの叶ふ時が近付いた氣がしました。彼は猶ほ新らしい御馳走や酒を持つて來させまして、祝宴は眞夜中迄續きました。頓て客が皆退くと、彼は自分一人でアラチエルを彼女の寢室に連れ行きました。（それから先は申上げるを遠慮して省畧します。譯者）

今迄何事も知らなかつた若きアラチエルは此の初めての遊び事が大層心に叶ひまして、親切な保護者

の誘ひに早く從はなかつたことを後悔した程でありました。其後はペリコンが强ひるまでもなく、姫の方から誘ふことさへありました。勿論まだ言葉は分りせんから樣子でですが、それは口で云ふ程よく通じます。

二人の戀人が斯くの如く愉快な生活を送つてゐる間に、運命の神は彼等を妬みまして、最も殘酷に彼等の邪魔をしました。アラチエルに夫として一人の王樣を與へ、戀人として一人の貴族を與へたのを以て滿足せず、更にも一人の志願者を玆に立たしたのです。ペリコンには二十二歲になる一人の弟がありましたが、彼は立派な體格の、美しい薔薇の樣に元氣な青年で、名をマラトといひ、兄の別莊から程遠からぬ或る港に住んで居りました。彼は偶然アラチエルを見まして彼女の美に打たれ、直ちに猛烈に彼女を戀し始めました。女の自分を見る目にも厭な樣子はないから、彼女のお氣に入るも譯ないことと己惚れまして、唯自分の幸福を邪魔するものは兄の警戒だと思ひました。實際兄は非常に女を愛してゐて一刻も彼女から目を離さないからです。そこで彼はそれに打勝つ爲に極めて惡い計略を案じまして、實行に取掛りました。彼は先づ第一に二人の若いゼノァ人の商人の所へ行きました。彼等は一艘の船を持つてゐて、順風の來次第ロマニアのシアレンザに向つて出帆しようとしてゐる所でした。彼は彼等に向ひ、明日の晩一人の婦人を連れて來るから、君等の船に乘せて吳れと約束を定めました。そこで萬事の手筈(てはず)

を定めて置いて、翌る夜彼は何も疑わぬ兄の家に行き、自分の計略をやらせる爲に選んだ數人の友をその附近に忍ばせました。自分は秘かに家の中に這入り込み、アラチエルの寢室に隱れて居りますと、程なく彼女は戀人と共に還つて來ました。やがて二人が眠つたと思つた時豫て定めて置いた通り彼は外に出て、仲間を引入れ二人の戀人の休んでゐる部屋に導きました。惡漢共は一分も躊躇せず眠れるペリコンを刺し殺し、少しでも聲を立てたり反抗したりすれば殺すと脅し乍ら、泣いてゐるアラチエルを擔ぎ、尙ほ室にある高價な品を悉く奪つて、誰の目にも入らぬやう姬を連れ去りました。港に着くとマラトは彼等に禮を云ひ、姬を連れて船に乘り、順風に追はれて出帆しました。

美しき姬の不幸な狀態は容易に想像出來ませう。此の災難は最初の不幸を思出させるので一層心を傷めました。然るに彼女を捕へた男は姬を慰める方法を見付けました。何ういふ方法か知りませんが、兎に角それが大層利目がありまして、彼女は直ぐに悲みを忘れ、最初の戀人を忘れて了つた程でありました。姬がすつかり幸福になつたと思つてゐる時、何處までも彼女を思ふ儘に飜弄しようとしてゐる運命は、又もや新らしい災難を用意してゐたのです。

前にも申しました通りアラチエルは、唯驚く程美しい丈けではなく、其の目に何とも云へぬ柔かな氣持のよい所があつて、見る人の心を直ぐに誘惑して仕舞ふのです。それだもんですから、船の持主の二

人の若い商人が又もや深く姫を戀するに至りまして、仕事なんか皆打つちやらかして姫の機嫌を取り始めました。尤もマラトには氣付かれぬ樣に絕えず氣を付けてゐたのです。其の中二人共同じ目的を抱いてることが互に判りました。そこで彼等は相談をして、女を手に入れたら二人の共有にしようと、まるで戀を、分配することの出來る商品かお金でもあるかのやうな風に話を決めました。或る日のこと、船が快速力で走つてゐる時、何にも知らぬマラトが船尾の方で新鮮な空氣を吸ひ乍ら凝つと海を眺めてゐますと、二人は彼の傍へ行つて、後ろから引捕へ、海の中に拋り込んで了ひました。彼が甲板から墜落したのを誰も氣付かぬ中に船は早や一リイグも先へ進んでゐました。先づ殺した二人が騷ぎ出して人人に知らしたのです。此の新たな不幸を聞いてアラチエルは再び泣きました。すると二人の船主は遣つて來て慰めます。慰めた處で言葉は殆んど分りはしないのですが、兎に角彼等は柔しい親切そうなことを口から出任せに云つたのです。實際姫はマラトの死亡よりも自分の不幸の方を餘計歎いて居たのです。そこで色々とお爲めごかしや熱心な世話でもう、大概慰めることが出來たと思ふ、と二人は其の室を退きまして、……………………望むものですから爭論が起つて、徐々言葉が暴くなり、それから脅し文句となり、遂には小刀を引拔いて斬合を始めましたが誰も引別ることが出來ません。やがて離れた時には一人は卽死し、も一人は大怪我をしましたが死なゝか

つたのです。一人として頼りも味方もないアラチエルは此の樣な慘劇の原因をなしたといふので二人の船主の親戚朋友等の怒りを買ひ、何んな酷(ひど)い目に遭ふかと恐ろしく、重なる不幸に大層悲歎に暮れました。然るに怪我人の經過もよく、船の進行も速く、頓てアレンザに到着しましたので、姫は心配してゐた危難から逃れました。憐れな男はアラチエルの愛を受け得る程に恢復してはゐませんでしたが、相變らず彼女の面到を見て、自分の宿泊してる宿に一部屋を宛てがつて呉れました。

アラチエルの驚くべき美貌の噂はシアレンザの町全體に擴まりまして、人々は物數奇から皆見に來ます。丁度其當時シアレンザに來て居られたモレア公も、それを聞いて姫を一目見ますと、噂に勝る美人ですから、それよりは彼女のこと以外何事も考へられぬ程強く戀して了ひました。そして彼女の最近の災難の話を聞くと、彼は直ちに此のゼノア人から女を取らうと思ひました。怪我人の親戚等は公が姫を戀してゐて、何んなことを仕てでも自分の物にしようと決心してゐるのを知りますと、病人や自分達が暴行に逢ふよりも一そ好意を以て獻上した方がいゝと思ひまして、公に女を進呈することにしました。勿論公は喜んでそれを受けました。アラチエルとてもそうなれば危險の恐れが無くなりますから、公と共にそれを喜んだのです。

公は姫の本當の身分を知りませんが、其の堂々としたこせつかぬ態度や、際立(きはだ)つた容顏(かほかたち)等より推して

必ず身分高き者に相違ないと思ひました。それが爲一層愛情が加はりまして、唯一時の思者としてでなく、本當の妻であるかのやうにもてなします。此の思ひ遣りのある待遇に姫は過ぎし不幸を打忘れ、生れ付の快活に返つたものですから凡ゆる魅力を恢復し、美しさは以前にも增した光彩を放つに至りまして、モレア公の領地ではこの美しき愛妾の噂で持切りです。

扨て希臘のアゼンス公がアラチエルの美しき噂を傳へ聞きまして、是非彼女を見たいと思ふに至りました。彼は今が花ならば眞盛り、容姿美しく、モレア公とは血縁であり親しき友でありました。そこで彼を訪るる口實の下に澤山の立派な從者を伴ふてシアレンザに赴きますと、身分に適はしき有ゆる尊敬を以て迎へられました。到着後數日にして、わざと談話を婦人の美といふ事に持つて行きますとモレア公はついアラチエルの事を云ひました。するとアゼンス公は問ふて、『本當に噂ほどお美しいのですか?』

『いや、もつとです。御覽になれば分るでせうが。』

『何時でも御都合の宜しい時に拜顏の榮を賜りたいものですな。』

『今直ぐお目に懸けませう。』とモレア公は答へて、直ちに婦人の部屋に案內しました。アラチエルはいつか對面せねばならぬ此の名士のことは既に知つて居りましたから極めて鄭重に迎へました。そして有りつ丈けの魅力と快活さとを働らかせました。二人は姫を間にして坐りましたが、十分に物語をして樂むこ

とは出來ません、姫に判る言葉を極く少し話したばかりで、何も話さなかつたと云つた方が正しい位なので、唯彼女の美しさを讃へる丈けで滿足しなければならなかつたのです。アゼンス公は之が實際人間であらうとは殆んど信じられぬ位で、幾ら見惚れても飽きません。心臟の皷動は旣に傷を負ふたことを告げてゐるのに彼は自分の魂の中に戀の毒虫が忍込むんでゐるのに氣が付かないのです。そして自分ではこの樣な美しいものを見てゐればそれで十分愉快で滿足なのだと思つてゐるが、實際は動きの取れぬ程我身を縛る手械足械を作つてゐるのだとは知らないのです。かくて忽ち彼は最も熱烈な戀の奴隷となりました。

姫の室を去るなり公爵は今見た美を悉く思起して、モレア公は世界一の幸福者だと思ひました。其事ばかりで頭腦は一杯になり、不幸な情熱の爲に血緣といふことも打忘れて、如何なる危險を冒さうとも此の高價な寶を奪ひ去らうと決心し、此の目的を果す爲には正義や理性の觀念は悉く足下に踏蹂つて、唯成功の手段を見出さうとしました。他によき工夫もないので彼はモレア公の侍僕のシューリアンといふ者を買收して、眞夜中に出立出來る樣に馬や荷物の用意をさせました。彼は武裝した上に一人の仲間を伴つて、彼の侍僕の案內でモレア公の寢室に忍び入りました。姫は眠つて居りましたがモレア公はシャツ一枚になつて、海を見下す窓に行つて、外氣を吸つてゐます。アゼンス公は仲間に手筈を囁いた後そつ

と窓に歩み寄り、劍を以てモレア公を刺し通し、死體を窓から投げ出しました。館は非常に高く、海岸に立つて居たのです。公の窓下は丁度海浪の爲に倒壞した數棟の家屋で亂雜を極めてゐるので誰も通行する者がありません。それが爲に公爵の死體が破損物の上に落ちた響は何人の耳にも入らなかつたのです。之は元より豫想して居たことなのです。

之が濟むと公の仲間は、用意して來た一本の繩を懷中から取出しまして、出來る丈け丁寧に待僕に向つて語を交しながら、不意に相手の首にそれを捲き付けて、一言をも發する餘裕を與へず窓ぎわに引摺つて行つて之を絞り殺すと、同じく窓から投げ棄てました。

公は誰も知らぬ間に此の二つの殺人を行つてから、燈火を取つて、まだスヤ〳〵眠つてゐる姬の寢所に行き、起さぬ樣にそつと近づいて凝つと眺めました。その寢姿の美しさ、晝間盛裝してゐる時よりも百倍もの隱れた魅力が現はれて居ります。唯つた今殺人を犯し、手には未だ戀敵の血が滲んでゐることも打忘れ、彼は姬の傍に寄りました。（省畧）

一時間近くを姬と共に過した後、既に仲間が館の中に入れて置いた數人の部下を呼入れて、一言も叫ばせぬ樣にして、女を攫び去らせました。自分は這入つた時と同じ戶口から出て、馬に跨り、部下の者共を引連れてアゼンスに向ひました。併し彼は既に妻帶の身ですからアゼンスの都にアラチエルを伴ふ

ことが出來ません。そこで附近の別莊に連れて行つて、不幸な姫を奧深く閉ぢ込めまして、皆十分に彼女を尊敬し、命令に服し、何なりと欲しいといふ物を差上る樣にと人々に命じました。

翌る日、モレア公の待僕等は正午まで待つても公が起きても來ず、朝から何の音沙汰もないので、部屋に這入つて見ますと、主人も愛妾も姿が見えないので、さては數日を田舍の方でお暮しになる爲にこつそりと行かれたのであらうと思つて安心しました。其の又翌る日になつて、町中馬鹿で通つてゐる一人の白痴が、壞れ家の間をぶら付き乍ら公爵の死體と裏切者シューリアンの屍を發見しまして、シュウリアンの首に繩が付いてるのを面白がつてそれを引張り廻し、遂に町を引摺つて歩きました。數人の人が之は公の待僕であると知つて、それを引張つて來た所へ、馬鹿を案內に行つて見ると公の死體がありました、人々は深く公の無殘な死を傷み立派な葬式をして葬りました。そして此の二重の殺人の下手人は誰かと詮索した結果、アゼンス公が突然姿を消して逃走したことからして、自然と彼が殺して姫を奪ひ去つたのだといふ正しい判定に達しました。人々は直ちに公の弟を以て主君に立て、我々は何んな御助勢でも致しますから此の恐ろしき行動に復讐して下さいと請ひました。新らしき領主は、數箇の確な證據に依りて、アゼンス公の犯罪に相違ないと信じまして、直ちに親族及び味方の諸領主の助けを借りて一軍隊を組織し、アゼンスに向つて進軍の用意をしました。アゼンス公の方でも此の事を知るや直

ちに防戰の準備をなさんと方々の領主に助力を賴みます。コンスタンチノープルの王樣は娘をアゼンス公に嫁がせてあるものですから息子のコンスタンチンと甥のエンマヌエルとに澤山の兵隊を附けて援軍に遣はしましたので公は大喜びです。彼の妻公爵夫人は愛する兄と再會の機會が得られたものですから尙一層喜びました。

斯く戰鬪準備最中に公夫人は兄と從兄とに內密に面談するによき機會を得ますと、二人を自分の部屋に呼んで、目に一杯淚を湛へつゝ、此の戰爭の眞の原因を告げ、夫は自分が何も知らぬと思つて見知らぬ婦人を手に入れ、之と罪深き關係を結んで自分を侮辱しようとしてゐるのだといふことを話しました。自分は之が爲に何んなに心を惱ましてゐるか知れない、何とか救ひの道を敎へて吳れと二人に賴みますと、二人の若き貴族はもうずつと以前から凡ての樣子は知つてゐたので力の限り夫人を慰め、直ぐにいい具合に仕ませうと云ひました。そこで彼等は夫人に其の外國婦人の住居を訊ね、それが分るや直ちに引退りました。

彼等はこの新らしきヘレンとも云ふべき婦人の美しい噂は幾度も聞いてゐて是非見たく思つてゐましたから、公爵に向つて、御愛妾に一目お逢はせ下されと賴みますと、先にモレア公が女を彼に示した爲にどの樣な目に逢つたかといふことも忘れて、公は見せませうと約束したのです。そこで彼は美しき婦

人を匿つてあるお城の美麗な庭園で大宴會を催す命を傳へ、翌日極く少數の從者を從へて二人をそこへ連れて行きました。

アゼンス公自身に起つたことが又もやコンスタンチンの身に起つたのです。彼は食卓に就いてアラチエルを一目見るなり、其の美に仰天しました。彼は飽かず姫を眺入り、斯の樣な完全に美しき人の爲ならどんな恐ろしい罪を犯しても少しも罪とは云はれぬと心の中に思ひました。彼は此の一回の會見ですつかり戀の焰に燒盡され心を奪はれて仕舞つて、もう戰爭の事杯は全く念頭に無く、自分が彼女に戀したことは誰にも感付かせなかつたに拘らず、心では唯アラチエルを奪ひ去る手段のみ思ひ廻らしてゐました。彼が猶も其の計畫を成功す可き方法を頻りと思案してゐる中に、敵は既にぐん〳〵アゼンスに向つて攻寄せて來たので、此方も進軍す可き時となりました。そこでコンスタンチンを始め他の諸將はモレア公の侵入を防ぐ爲め各軍隊を率ゐて戰線に向ひました。

コンスタンチンは全く戀の目的に心を奪はれて居りますから、義兄が戰に出て愛妾の傍に居らない今なら譯なく望みを遂げられると思ひまして、アゼンスに歸る口實を作る爲にわざと虛病して、公爵の許諾を得て自分の位置を從弟のエンマヌエルに讓り、軍勢をも彼に委ねて一人立返りました。姉の許に歸ると彼は、彼女の夫の不信實を罵つて彼女の嫉妬と憤怒を燃立たせました。そしてあなたに對する侮辱

に復讐する爲めに此の女をアッチカより奪ひ去つて永久に邪魔を取除いて上げませうと云つた。夫人は此の熱心な申出の眞の動機を知りませんから、唯自分の爲ばかりを思つて呉れるものと合點しまして、アラチエルを誘拐することは大變嬉しい、唯自分が之に少しでも關係したことが夫に知れないといふことさへ確かなら、と云ひました。コンスタンチンは、大丈夫です、ちらす迷惑は掛けません、と保證してすつかり安心させた後、秘かに一艘の船を武裝し、確實な船員を乘込ませて、アラチエルのゐる城の前に寄せて置樣に命じ置き、自らはほんの二三人の部下を引連れてお城に赴きました。姫と僕等とは鄭寧に迎へました。夜になると彼は一緒にお庭を散歩しませうと誘ふと姫は喜んで承諾し、二人の待女を從へて庭に出ました。コンスタンチンは何か公爵からの內密な傳言でも云ふ振りをして姫を傍に引行き、話をしながら丁度濱邊に通ずる門の所へ來ました。一人の相棒が既にその門を明けて置いたのでそこから合圖をすると、船は岸近くに來ました。コンスタンチンは姫を抱き上げて僕共に渡すと、彼等は素早く彼女を船に搬び入れました。それから彼はついて來た公の待僕等に向つて、『誰でも少しでも動いたり聲を立てたりすると生命はないぞ。俺は公爵の愛妾を連れて行きたくはないのだが、唯俺の姉に對して加へられた侮辱に復讐する爲にかうするのだ。』

彼は船に來て泣き悲しむアラチエルの側に來るや直ちに出帆を命じました。斯くて夜明けにエヂナに

到着して上陸しました。コンスタンチンは數日をそこに滯在して、餘りに美しき爲に遭遇する重ね〴〵の不幸を痛く歎く姬を極力慰めようとしました。程なく十分滿足に彼女を慰めることが出來るやうになりますと再び船に乘つてキオス島に着しました。皇子は姬を失くしたり、父王の怒りに觸れたりすることを恐れたものですから、此の島ならば何の危險もないと考へまして、其處に定住する決心を定めました。姬は尙ほ時々は不幸な運命を歎きましたが、併しコンスタンチンの力强い慰めの爲に不幸もいつか忘れまして、此の新らしき住居も大變愉快になつて參りました。

斯くて二人の戀人同志が愉快に月日を送つてゐる中に、當時オットマンの玉座を占めて居つたオスベック王は絕えずコンスタンチン王と戰を交へて居りましたが、或る時スミルナへの航海の途中、若きコンスタンチンがキオスの島に於て、彼の奪つて來た一人の婦人と共に日夜淫樂に耽り耽溺生活を送つてゐるといふことを耳にしました。彼はコンスタンチンが全く守備なく、碌な兵力もないのを知つてゐましたから、之を突然に襲擊してやらうと思ひました。そこで數隻の輕船を武裝し、自ら一隻に乘じて出發し、夜に至つて軍勢と共にキオスに到着しますと、何の抵抗もなく町に侵入しました。誰も彼も寢てゐる最中ですから、大部分の住民は敵の來たことも知らぬ中に捕虜になつて仕舞ひました。少しでも抵抗した者は殺され、そうでない者は非常に澤山の分捕品と共に船に連れ去られました。それからオスベ

クは町に火を付けてスミルナに歸り、直ちに囚人を悉く彼の面前に引連れさせて檢査しました。美しきアラチエルも其の中に居りましたが、彼は姫の美しさに依つて直ちにそれがコンスタンチンの情婦であることを察し當てました。彼はこんな愛くるしい婦人が思ふ儘になることを喜んで、自分は征服者としての權利を使行せねばならぬと思ひました。彼は若く精力絶倫の男でありましたから、共に寢所に入るといふ事のほか何の儀式もせずに姫を彼の妻とし、斯くて數ヶ月を過しました。

之より以前コンスタンチン王はオットマンのオスベックに對抗する爲にカッパドシアの王バッシャと同盟の約を結び、オスベックを挾擊する計畫でありました。併し此の同盟の返報としてバッシノの要求する過度の條件を容れることが出來ないと考へた爲めに、王は右の計畫を實行しないでゐたのです。然るに王子が慘酷に虐殺されたことを聞くや最早や一刻の猶豫もなくカッパドシア王の要求を悉く容れて、全軍を率ゐてオスベックを襲擊せんことを依賴し、自分も同じく準備に取りかゝりました。

オスベックは其の計畫を知るや、斯かる强力な王から兩方一度に攻められては堪らぬと思つて、直ちに全軍を召集し、バッシノ王に向つて急速に進軍しました。アラチエルの身は或る誠實な友に預けてスミルナに置いて行つたのです。數日の後バッシノと會戰しましたが、彼の軍隊は全滅して仕舞ひ、自身も戰死しました。カツパドシアの王は勝に乘じてスミルナに向つて進軍しまするど、住民等は彼の軍勢

に對つて何の抵抗も出來ませんから急ぎ彼を出迎へ、如何なる條件を課せられようとも征服者に服從する旨を申出でました。

オスベックが夫人を託した友といふのはアンチオカスと云つて、もう可なりの年配で、此の男なら十分信頼するに足ると王は思つたのです。併しどんなに歳老つてゐたつて、どんなに德が高いといつたつて、美しい眼に抗ふことが出來るものですか！ アンチオカスも彼女を見ては戀に落ちて仕舞ひまして、王より受けた信義を破るとは知りつゝも夫人に言寄つて見ました。彼はアラチエルの國の言葉を話すことが出來たのです。彼女はもう三四年も自分のいふ事をよく分つて貰へる人と話したことが無いものですから、彼と談話を交すのを大變喜んだのは寧ろ當然です。それが爲二人は程なく親しくなりまして、徐徐と親密の度を加へ、遂には戰塵の中にあるオスベックに對する義理をも忘れるやうに至りました。斯くて彼等が戀人同志の甘い快樂に耽つてゐる中に、その喜びはオットマン王の敗戰及び戰死の報道に依つて破られました。それのみか戰に勝つたバッシノが掠奪の爲にスミルナへ進み來ると聞き、彼等は唯凝つとそれを待つことの不利なるを思ひまして、オスベックの置いて行つた貴重品を悉く携へて、秘かにスミルナを逃れローデスに行きました。

ロオデスの島に來て間もなくアンチオカスは重病に陥りました。彼等がスミルナからロオデスに航海

する時、サイプラスから商用にてロオデスに來た一人の商人と道連れになりましたが、それ以來彼はアンチオカスの無二の親友になりました。アンチオカスは自分の病篤きを知り、迚も恢復の見込はないと信じまして、自分の財産を悉く彼の商人に譲り、愛する婦人を託さうと心を定めて二人を呼寄せ、扨て云ふやう、『私は死にます。近頃殊に私に取つて樂しくなつた此世を去るのは悲しいことですが、併し私の最も愛する二人の人の腕に抱かれて死ぬと思へば、或る意味に於ては滿足して死にます。親しき友よ、私は此の不幸な婦人をあなたのお世話に委ねます。どうか彼女を見捨てないで、私に示して下すつたと同じ友情をどうぞ懸けてやつて下さい。あなたは吃度彼女を敬愛して私の願に應じて下さるものと思ひますから、私の財産は總てあなたにお譲りします。友よ、本當に私はあなたが彼女を見捨てはなさらぬと安心して居ます。私は生存中あなたには非常な友愛を示し、墓の向ふへ行つても變らない積りですから、それに對する返報の印として、彼女の身をよく守つて下さい。それが私に取つては最も嬉しいのですから。それからお前、愛する可愛き者よ、私が死んだ後も私を忘れないでお呉れ。何うか貞操を守つて、私が此世に於て古今未曾有の美しき婦人に愛されたことを、彼の世で自慢することが出來るやうにしてお呉れ。そこで二人の友よ、若しもあなた方二人が、最も神聖な物凡てにかけて、私の右の頼みを叶へてやると約束して下さるなら、私は全く幸福に死にます。』

臨床の人が悲しさうな溜息や弱々しい聲で斯ういふのを聽きますと、サイプラスの商人もアラチエルも泣出して仕舞ひました。併し氣を取直して樣々と彼を慰め、決して死ぬやうなことはない、けれど若しもそんなことがあれば、總て彼の望み通りにすると約束しました。然るに彼の病を癒す方法とては無く、程なくアンチオカスは死亡したので、盛大な葬式を行つて之を埋葬しました。

商人はロオデスに來た用事が果てると、もう永らく國外に居たので故鄕に歸り度くなり、サイプラスに歸る用意をして、サラセンの婦人アラチエルにも一緒に行くか何うか訊きました。彼女は、若しあなたが私を妹として扱つて吳れるなら喜んで行かう、『それが亡き友に對するあなたの義務なのですから、』と答へました。商人は御希望通りに仕ませうと約して、併しあなたを侮辱する者があつてはならぬから自分の妻といふことに仕て置きますと云つたのです。そこで乘船しますと、船首の小さな一室を宛てがはれました。夫婦といふ譯になつてゐるのですから、何處までも夫婦らしくせねばならなかつたのです。おまけに少しでも嫌疑を受けない爲に、狹いのを我慢して一つの寢床に寢たのです。すると惡魔がそこに待伏してゐて、出發の際には豫想してゐなかつた事が持上つたのです。……………………

……………………………………………………………………

……………………忽ちの中に嫉妬家のアンチオカスにした約束も忘れて仕舞ひました。始めは

……………………………………………………。』商人の故鄕のバツフアに到着す

ると彼等は、形丈けは元々通り夫婦でないことになりましたが、其の實夫婦の特權を用ひずに過した日は一日もないのです。

然るに又更に新らしい出來事は彼女を待つてゐました。例の商人が用事あつてアンネニィに行つた留守中、一人の老紳士がサイプラスに着きました。此の人は誠に不運な人でありまして、非常に立派な思慮深き人であつたに拘らず、サイプラス王の爲に殆んど悉くの財產を費消して了つたのです。或る日のこと、彼はアラチエルの住家の傍を通りながら窓から姬を見ますと、其の美しさに打たれて暫時立止つて眺めて居りました。すると何處かで女を見たことがある樣な氣がしながら、何處だか思出せないのです。アラチエルは丁度その時自分の運命の移り變りを考へて、いつになつたら此の災難が終りに近づくのか分らないで、ふと我に返ると此の男の立止るのが眼に入りました。そして彼女の方でもよく向ふを見ますと、彼が以前父王の宮廷に於て非常な高位を占めてゐたことを想起しました。すると兩親や身內の人達、又は約婚の夫に逢へる希望が起つて參りまして、主人の不在を幸ひ、大聲に紳士を呼びました。名をアンチゴノといふこの異國の人は、呼ばれると直ぐ家に入り、姬の室に通ると、姬は狼狽の色を顏に現はしつゝ、あなたはファマガスタのアンチゴノ樣ではありませんかと云ひますと、「ハイ奧樣、左樣で御座います。そして私もあなた樣を知つてゐるやうに思ひますけれ共、何處でお目に掛つたか思出

せないのです。失禮ですが、あなたは何誰でございますか？』姫は何にも答へず、いきなり彼の胸に縋つてわつと泣出しました。アンチゴノは此の有樣に少からず驚きましたが、姫はやがて氣を取直し、あなたは私をアレキサンドリアで見たことはないか、と尋ねましたので、よく〳〵見ますと、それがずつと前に海底の藻屑となつたと誰しも思つてゐる、王姫アラチエルであることが判りました。彼は王女に適はしき敬意を表しようとしますと、姫はそれを押止めて自分の傍に掛けさせました。そこで彼は頗る鄭重に姫の其處に來つた謂れを尋ね、エヂプト全國では彼女がずつと以前に確かに溺死したものと思はれてゐる由を述べました。

『私は今まで送つて來たやうな生活を仕なければならなかつたのな、ら一層溺死してゐた方が增しだつたのです。お父樣だつてそれをお知りになれば、きつとそう仰つしやいます。』と云つて又もや激しく泣きました。

『姫君、無用のお歎きはお止めなされませ。そしてどういふ目にお遭ひになつたのか、どういふお暮しをなさつたか、私にお話し下さりませ。さうすれば多分、天のお助けに依りまして、どうにか取返しの方法も御座いませうから。』

『アンチゴノ樣、あなたを見てゐるとお父樣を見る樣な氣が致します。それで父に對する子としての愛

情が、あなたから姿を隠す可き時に却つて自ら進んであなたにお目にかゝる樣に私をしたのです。私はあなた程逢つて嬉しい人は幾人もありません。ですからあなたをお父樣の積りになつて、他の人には誰にも云ふべきでないこと迄すつかりお打明けしませう。若し全部聽終つた上で何うにかして私が元の身分に返れると思ふなら何卒そうして下さい。若しそれが出來ないと思ふなら何卒私に逢つたことも、私から話を聞いたことも、決して何人にも云はないで下さい。』

それより彼女はマジョルカ島で難船した時から今日彼に逢ふまでに遭遇したことを殘らず涙の中に物語りました。アンチゴノもそれを聞いて涙を流し、少時考へた後云つた、『姫君樣、あなたの永年の御災難の間、誰にも本當の御身分をお知らせにならないのですから、私が貴孃をお父樣の許へお連れ申せば、きつと以前にも増して姫樣をお愛しなさいます。アルガルヴの王樣とても同じことでございます。私の言葉を御信じなさいませ。』

アラチエルはそうする手段を尋ねますと彼は其の方法を姫に説明して、一刻の猶豫もなく直ちにファマゴスタに歸りサイプラス王に謁見して云ふやう、『陛下、陛下は若しお心さへ向きますれば、極く手輕に陛下の御威光を増すことが出來る斗りでなく、陛下の爲に全財產を失ひましたる私に取つても大なる利益になることを爲さることが出來るのでございます。』すると王は、『それは如何にして？』とお問ひな

されたのでアンチゴノは答へて『アレキサンドリアの王姫がバッファの港に御到着なされたのです。この方は非常に美しいので名高い方でございますが、難船の爲數年前に溺死したものと思はれてゐたのです。姫は貞操を守る爲に永い間樣々の憂き苦勞をなされて、今では非常に貧窮の狀態にゐられます。唯今は甚く父王の許に歸りたがつて居られますので、若し陛下のお力に依つてお返し下さるならば、アレキサンドリアの王樣は決して斯かる御恩をお忘れにはなるまいと存じます。』

サイプラスの王樣は生れ付き親切な寛大な方でありましたから喜んで彼の願ひを容れ、姫を宮廷に呼んで、國王及び王妃は極めて鄭重に彼女を迎へました。姫は數々の危難に就て問はるゝ質問に對し、一々アンチゴノが敎へた通りに旨く答へます。かくて數日の後彼女は男女數多の附人を從へて、アンチゴノ指導の下に父王の許に送られました。永久に失くしたと思つてゐた娘を見た王の歡びは迚も言葉には盡されませぬ。アンチゴノ及びお附の人々をばいとも丁寧に歡待しました。

姫が數日休息した後に王は、姫が難船を逃れた次第や、此の永の年月何の便りも仕なかつた理由等を娘自身の口から聞きたいとお望みになりました。アラチエルは賢いアンチゴノの敎へを暗記してゐて、かう答へました。

『お父樣、船がアレキサンドリアを出て三日ばかり經ちますとね、恐ろしい暴風雨の爲に船は押流され

穴だらけになつて、エイグ・モルトといふ西海岸の或る所に夜中吹上げられました。侍女等は何うなりましたか全く存じませぬ。私は死ぬかと思つて氣を失つてゐたのですが、夜が明けまして氣絕から甦つて見ますと、船は二つに壞れて砂洲に乘上げて居ります。正午頃になりますと百姓共が難破船を見付けまして、走つて來て何でも持つて行けるものは攫つて行きました。後には附近の人々が皆やつて來て、私と、他に二人の婦人が板の間の隅に橫はつてゐるのを見付けて陸上に連上げました。數人の男が憐れな婦人達を別々な方角に搬び去つて仕舞ひました。其の後どうなつたか私は知りません。私を陸に引上げた二人の男が私を連れ去らうとして、幾ら私が泣いても抗つても構はず、腕を取つたり髮の毛を摑んだりして引張り乍ら、遂に或るお城に私を入れました。其處へ入ると直ぐ四人の騎馬武者の近付くのが見えました。すると今迄私を無理に引張つてゐた二人は急に私を離して足の續く限り早く逃げて了ひました。騎馬の人達は立派な、地位の高い人の樣に見えましたが、私の傍に驅寄つて何か云ひました。私は返事を仕ましたけれども向ふの云ふことは私に分らず、私の云ふことは相手に通じないのです。暫らく仲間同志何か相談してゐましたが、私にいろ／＼な身振りを示すので私も出來る丈け身振りでそれに答へますと、やがて一人が私を馬に乘せて或る尼寺に連れて行きました。尼寺に居る人々の仕事は、國の掟に依りまして、唯神に祈ること丈けでございます。尼樣達は大層親切に私を迎へて吳れまして、

私は此の人達と共に彼等の守護聖人で國の人達の大層尊ぶ方に熱心に祈りました。暫らく經ちまして少し言葉が判る様になりますと尼様達は私の身分や、國を問ひましたけれども、私は若しや彼等の宗教に反することを告ぐれば男といふ者の決して入られぬ其處を追出されると思つて、私はサイプラスの或貴族の娘で、クリイトに居る約婚の夫の許へ行く航海の途中難破したのだと語りました。尼様の首長は住職といふのですが、其人が私にサイプラスに歸りたくはないかと尋ねましたので私は、其の他に望みはないと申しました。住職は私をサイプラスに送つてやると約束したのですけれど、私の身分を大層心配しまして、危難に逢はせ度くない所から、惡人の手に落ちては大變とサイプラスの人に私を託する氣になれないのです。こんな具合でいつ迄經つても歸れそうもなかつたところが、二人の佛蘭西の紳士が參りまして、サイプラスまで私を連れて行つてやると云つて呉れました。此の人達は妻を伴つてエサルレムに行く所であつたのです。エルサレムには此の人達の神と崇むる人が、ユダヤ人に殺された後葬られた聖墓があるので、それに詣る爲なのです。紳士の一人は住職の血縁の人だつたものですから住職は私の身を二人の紳士及び其の夫人に託して、どうか此婦人をサイプラスの父親に渡して呉れと頼みました。航海中此の紳士及び婦人達から受けた親切は迚も一々云ふことは出來ません。有りと有らゆる禮儀を以て私を扱つて呉れたのです。航海は極く順調でしてやがてバッファに上陸しますと、私はそこが自

分の生れ故郷と云つたのに、知つてる人とては一人もないので本當に當惑しました。私を連れて來た人達は住職との約束がありますから、手づから私を父に渡さうと思つてゐるのですが、私は彼等に何と云つていゝか分りません。ところが運よく、丁度上陸した時に、きつと神様が私の極り惡さを氣の毒にお思ひになつたのでせう、アンチゴノ様を海岸によこして下さつたのです。私は直ぐにアンチゴノ様が分りまして、紳士達に分らぬやう故意（わざ）と私共の言葉で呼かけまして、何卒私のお父様といふことになつて下さいと頼みますと、彼は直様私の意を了解しました。そして優しく私を抱いた後、親切な人達に篤く禮を述べて出來る丈け鄭重に饗應致しました。數日後アンチゴノ様は私をバッフアからサイプラス王の宮廷に伴ひますと、王様は御覽の通り、お父様も私も十分に感謝せねばならぬ程立派に私を父上の許に送り届けて呉れたので御座います。私の話に細々した點が抜けて居りますれば、幾度も私から災難の話を聞かせられたアンチゴノ様が喜んでそれを補つて呉れますでせう。』

するとアンチゴノは王に向つて云ふやう、『陛下、只今お姫様のお話しになつた事は私が幾度も承りましたのと全く同じで御座います。姫様をサイプラスにお連れした貴族達の話もそれと同じで御座います。唯姫様は一つのことをお忘れになりました、と申すより多分御謙遜からわざとお抜きさなさつたのでせう。と申しますのは姫様が尼寺に居られました時には、他の尼僧達は悉くお姫様の行ひを賞讚致し、氣高い

御氣象を慕ひまして、お別れの節杯は非常に悲しがりまして涙を流したそうでございます。紳士達が姫樣の御貞淑を賞讚した言葉を其の儘こゝに繰返すと致しますれば一日かゝつても云ひ切れない程でございます。でございますから陛下、彼等の物語りましたること及び私の目で拜見しましたる事を綜合いたしますと、陛下は凡ゆる國王の中で最も美しく、立派な、そして貞淑なお姫樣を持つてゐると誇ることがお出來なさるので御座います。』

王は之を聞いて大層喜ばれまして、神樣が娘に對して爲し給ふた幾多のお惠みに何日の日か報ゆることが出來ますやうにと祈りました。數日の後王はアンチゴノに澤山の贈物を與へてサイプラスに歸る暇を賜りました。尙ほサイプラス王に吳々も宜しくとの傳言を賴み、自ら謝意を述ぶる書簡をも彼に託しました。勿論折を見て大使をも送り、サイプラス王が自分に對して示した友愛の印に適はしい贈物をする考へです。

彼は以前遣りかけたこと——即ち、姫とアルガルヴ王との婚姻——を成遂げることを今でも望んでるたので、今迄の出來事を殘りなく報告しまして、昔の心に變りがないなら花嫁の迎ひを寄越してもよいと云送りました。先方の王樣はアラネエルの猶ほ生存せるを聞いて大いに喜び、直ちに使者を遣つて、絕大の歡喜を以て姫を迎へました。斯くて次々と九人の戀人を持ち、幾千度も彼等と枕を交した王姬はま

んまと處女になり濟して王の寢床に入りました。そして實際處女であると夫に信じさせて、永く二人睦じく生涯を送りました。それ故にこそ、唇は接吻に依つて色も香も失せることなく、恰も月の如くに幾度でも新らしくなると世間でいふのです。

第八話

アンジエール伯爵は無實の罪を受けて佛蘭西を追放され、二人の子供をイングランドに殘してアイルランドに行き、見知らぬ人として歸つて見ると二人の子供は非常に立派になつてゐる。自らは普通の兵士としてフランス王の軍に入り、寃罪の明りが立つて元の地位に復す。

淑女達はアラチエルの災難の話を聞き乍ら幾度となく溜息を吐いた。其の溜息の本當の理由は私には分らない。中には姫の不幸を憐むのでなく、彼女の度重なる婚姻を羨んで溜息を漏した者もあるかも知れない。それは兎も角として、人々はパンフィロの最後の言葉を大層面白がつて笑つた。女王は話の終るを見るや今度はエリザに話をするやうに命じた。エリザは喜んで命に應じ、語つた。

今日のお話の題目は非常に撰擇範圍が廣うございまして、一度でなく十度廻りましてもお話の出來ぬ方はないでせう。それ程運命の氣まぐれは數限りなく出たら目なのです。併し私は其の數多の實例の中

から唯一つ丈けをお話し致しませう。

ロオマ帝國の主權はフランスの手よりドイツの手に移りまして、それが爲め此の兩國間には拔くことの出來ぬ憎しみが生じまして、絕えず戰爭が行はれるに至りました。フランス王は單に自分の領地を守る丈けでは滿足せず、更に其の範圍を擴張せんと欲しましたが爲に、全國の軍勢を集合しまして、皇子と共に大軍を率ゐて敵に對つて進軍致しました。併し彼は此の遠征に出づるに先ち、留守中帝國の統治を爲す者を任命し、不時の出來事又は騷亂に備へて置かねばならぬと考へまして、此の役目をアンジエールの伯爵ウォルタアに託することにしました。アンジエール伯は王の家臣の中でも極めて正しい、最上の智慧者でありました。彼は又戰術にも非常に長けて居りました。皇帝は誰よりも彼を誠實な人間だと思つて之に賴つたのか、それとも彼を以て戰爭の疲勞に堪ゆるよりも平和の安息に適した人間と思つてしたのかそれは分りませんが、兎に角萬事の政を彼に委ね、陸軍中將の稱號を與へて巴里に止めて置かれたのでした。

伯爵は先づ自分に委ねられた難かしい職分を極めて念入りに處理しました。彼は全權を與へられたのですから、誰に相談するにも及はないに拘らず、重大な件に就ては用心深く、一々之を王妃及び皇太子妃に諮りました。右の兩妃は彼の手に預けられてあるのですけれど、彼は常に目上として敬意を表し、

決して彼女等に對して自分の權力を振廻さう杯とは仕なかつたのです。彼は齢四十に達し、立派な體格、世に類なき美しき容貌を持つて居りました。背丈は高く、歩き振りも氣高く伸りして、其上當代無二の學識才能ある人で、衣服も高き趣味と優雅とを示して居りました。

彼はフランス總督に任ぜられてより程なく不幸にも愛妻に先立たれまして、あとには未だ極く若い息子と娘とが殘りました。

彼は總督としての職務上屢々王妃及王世子妃に謁見しなければなりませんでしたが、世子妃の方は彼と言葉を交すを大層喜ばれまして、いつも鄭重に彼を迎へて居りました。然るに遂には彼に對して大變優しい好感を抱くやうになつたのです。彼の德や良き性質等を賞讃する機會に多く接するに從ひ、愈々彼に對する好意は增して、遂に我が心を制するを得ず深く彼を戀慕ふに至りました。自分の若さ、元氣さ、身分のよいこと其他の事情、それに伯爵のやもめであること等を考へて見ますと、伯に自分を愛させることは雜作のないことの樣に若き妃には思はれるのですけれど、唯恥かしさの爲めに戀を打明けることが出來ないのです。併し此の羞恥感もいつの間にか妃は押殺して了つて、も早や謹愼の聲に耳を傾けなくなつたのです。

或る日自分一人切りの折を見計らひ、何か重大な話があると云つて伯を呼びました。伯爵は妃のそん

な心とは露知らず、遣りかけた用務を捨てゝ出頭しました。伯は招じらるゝ儘に妃の傍の安樂椅子に掛けて、扨て何御用でお招きになつたのですかと云つても妃は返事をしないのです。伯が再び問ふと、婦人は戀と恥づかしさの爲に面を紅くし、眼には一杯涙を溜めて身を震はせながら、唯溜息を吐いたり、途切れ途切れに何か云ふ丈けで、伯には何が何だかちつとも分らないのです。遂に妃は情熱の爲に少しく大膽になつて申しました『懷かしき友よ、あなたは隨分樣々な經驗を積んでゐらしやるのですから、世の中の男女がどんなに誘惑に對して心弱きものであるか、殊に婦人が男子方よりどんなに弱いものであるか御存知でございませう。正しい判官の眼から見ますれば、罪の輕重はそれを犯す人の身分に依つて定まるのでございます。例へば同じく戀をして樂むに仕ましても、毎日働らいて生計を立てゝ行かねばならぬ貧しい婦人と、何でも欲しい限りの物を持つてゐる金持の婦人とでは何方の罪が重いかといふことになりますれば、誰しも貧しい婦人と申すでせう。ですから私自身と致しましては、假りに其の樣に萬事思ふ樣になる婦人が戀の熱情に導かれたとすれば、それは當然恕さるべきことで、其上賢明で立派な愛人を選ぶことが出來るなら十分立派に申譯が立つと思ひます。私の場合には此の要件が凡て備はつて居りますし、其他にも私が若くて夫が留守であるといふやうな、當然戀に落ちねばならぬ特別の理由が澤山あるのですから、あなたのお眼から私の熱烈な戀を御覽になつても十分尤もと思はれるに違

ひありません。誰だつて常識のある人ならそう思はねばならないのですが、若しあなたもそれに御同意だとしますれば、もう餘計なことは申上げないで私の事情をお打明けしますから、あなたの御忠告と御助勢とを願い度いのです。私は告白せねばなりませぬが、夫の不在の爲に私は戀の誘惑を却けることが出來なかつたのでございます。戀の力は偉大なものでありまして、啻に弱い女ばかりでなく、强氣な男の方達迄がそれには隨分負けたのです。將來とても變りがないでせう。それに私は御覧の通り安樂に怠惰な生活を送つて居りますものですから、つい戀の喜びに耽り、進んで熱烈な戀をしようとしてゐるのでございます。こんなことが人に知れては極く良くないことは承知してゐますが、それを秘密にして置くことが出來るなら少しも差支へはないと思ひます。それに愛は私の肩を持つて呉れまして、私の樣な婦人に必要な反省力を私から奪はぬのみか、反對に十分思考の餘地を與へて呉れまして、戀人の選擇に本當に愛される價値のある人としてあなたを示し賜ふたのでございます。何故なら、あなたこそフランス中で最も美しい、最も親むべき、愉快且つ賢明な騎士だと私は思ふからです。私に唯今夫がない如く、あなたにも奥樣がおありなさいません。ですから何卒、私はあなたを非常にお愛し申してゐるのですから、私を拒みなさらないで、私の若さが、火に解ける氷の樣に、あなたの爲にすり減らされて行くのを憐れと思召し下さいませ。』

妃は之まで云ふと、未だ云ひたいことは澤山あつたのですけれども、涙の爲に續けることが出來なくなりまして眼を落し、悲しさに堪えられぬ如く伯の胸に泣き崩折れました。然るに伯爵は極めて潔白な騎士ですから、妃の馬鹿氣た戀情を嚴しく窘めまして、自分の胸に倚りかゝらうとする妃を押退け、私はそんなことをして御主君様を辱めるくらゐなら一層ズタ〳〵に身を切り訶まれた方が増しだ、他人だとてそんな事をすれば容赦はせぬと斷乎として云ひました。

妃は之を聞くと、戀は忽ち猛烈な憎惡に變じまして、『アヽ此の下らない騎士奴が、それで私の切なる願ひを嘲弄した積りなのか？　恐ろしや私を滅ぼすかも知れぬ。私の方が先に汝の生命を取つてやる、でなければ此國から追放してやる。』と叫びながら不意に兩手で髮の毛を掴んで引つ掻き亂し、着物の胸を引裂いて、出來る丈け大聲に喚きました、『助けて！　助けてエ！　アンジエール伯が私を汚すヨウ！』

伯爵は之を聞くと、自分が如何に良心に疚しい處がなくても、廷臣等の嫉妬の爲に妃の惡意ある訴への方が信用されるに違いないと思ひまして、急ぎ妃の部屋を出で、出來る限り速く宮殿を立去つて家に歸ると、誰にも何の相談もせず直ちに馬に跨つて、二人の子供を兩脇に掻き乘せて全速力でカレイに逃れました。

婦人の叫びを聞いて朝臣等は悉く飛來り、騷動の理由を妃から聽きますとそれを全部信じたのみなら

ず、伯爵が隨分永い間あんなに身なりに心を用ひたのは之が爲だつたのだと斷定を下しました。人々は火の如くに怒り、彼を捕へんとして伯の家に驅付けて見ますと、彼の姿が見えないものですから財寶を掠奪し、邸宅を打ち壞して仕舞ひました。國王と息子の王子の耳にも、軍隊中に擴まつてゐる通りの噂が入りまして非常に憤り、伯爵及び彼の子供等を永遠の追放に處する宣告を下し、生死に拘らず之を捕へて王に引渡す者には莫大の褒賞を與へる旨を布告しました。

不幸な伯爵は、逃走した爲に却つて罪を身に引受けた形になつたと思ひましたが、兎も角誰にも認められずにカレイに到着しまして、直ちに英國(イングランド)に渡り、極く見すぼらしい身なりを致してロンドンに向ひました。都に着くと二人の子供に向つていろ〳〵と敎訓や戒めを與へましたが特に次の二點に就てはよく心に銘じさせました。卽ち第一には、我々親子には何の罪もなくて此の樣な不幸に陷つたのであるけれども、それに凝(ぢ)つと堪へること、第二には、自分の生命が大事と思ふなら決して誰にも自分達の生國や親の名を云はぬやう注意すること、です。息子のルイは九歲、娘の丼オラントは七つ計りでありました。彼等は歲の割にしては父親の訓戒をよく了解しまして、後年に至つてそれを行動に現はしました。身分を一層旨く匿す便宜上伯は彼等の名を變へて少年をピエロー、娘をジャンネットと名けて、一同フランス乞食の風をしてロンドンの都に入り、物貰ひをしながら街をさまよひ步きました。

扨て或る朝相變らずお布施を乞ふ爲に或る教會に參りますと、英國王に仕へる或る主要な將官の夫人が丁度教會から出て來て、伯と二人の子供とが慈悲を乞ふてゐるのを見まして伯に向ひ、お前の國は何處か、子供はお前の子供かと訊ねました。彼は答へて、私はピカルディから參つた者でして、極惡人の長男奴が犯した罪の爲に國を逃亡したのです、と云ひました。同情に富んだ婦人は少女を見ますと、美しくつて行儀がよく、惹付ける魅力があるものですから大層氣に入りまして、『ねえお前樣、私に娘さんを預ければ世話して上げますよ。私この娘が好きになつたんです。立派な娘になれば、相當な時期にはお嫁にやつて上げませう。』

伯爵は大層この申出を喜んで、直ちに承諾し、涙ぐみながら娘を婦人に渡して、是非宜しくお世話下さいと熱心に賴みました。

娘の爲には身の落付所が出來ましたから、今度は何處か他所へ行つて幸運を探すことに心を極めまして、伯はピエローを伴ひ途中食を乞ひつゝイングランドを通抜けまして遂にウエールスに參りました。それ迄來るには徒歩の旅に慣れぬ彼等に取つては、實に永い永い時日を要し、もう疲れ切つてゐたのであります。

此のウエールスにも英國王の支配に屬する將軍が一人居りまして此の地方の總督となつて居りました

が、隨分金を浪費してゐました。伯と息子とはこの將軍の住居せる町に來まして屢々邸宅の前に至り、時にはお布施を求めて庭に這入つて行くこともありました。總督の息子はよく他の子供とそこで樣々な遊戯をして遊んで居りましたが或る日のことピエローもそれに加はりました。すると何をしても彼の技倆が非常に優れてゐるのが總督の目に止りまして、其上少年の態度動作が氣に入つたものですから、彼れは誰の子かと尋ねられました。するとそれは時々門前へ食物を貰ひに來る或る貧しい男の子だといふので、早速父親を面前に連れさせまして、此の子供を吳れぬか、よく面到を見てやるが、と云ひますと伯爵は之程望ましいことはありませんから、別離の悲みで心は引裂かれる樣ですけれ共喜んで承諾しました。斯うして息子も娘も片が付いて了ひましたので彼は英本土(イングランド)を去ることに決心し、アイルランドに向つて進み行きました。そしてスタンフオードに着くと其地の或る貴族に使はれの身となりまして、極めて不本意乍らも永い間そこに馬丁の役を勤めて居りました。

扨てお話變つて、今では唯ジヤンネツトといふ名で通つてゐる弉ォラントは、背丈も高く美しくなりまして、彼女を救つて吳れた婦人の大のお氣に入りで御座います。それ計りか彼女の立派な素行の爲に婦人の夫からも尊敬せられます。尙ほ家中の者、否彼女を知れる限りの者は大層彼女を尊敬致しました。本當に誰でも彼女を見ては讃嘆せずには居られないのです。彼女の擧止態度を見れば誰でも、どんないい

所へお嫁に行つてもいゝと思ふのです。併し夫人は娘の云ふ通り身分卑しき者だと信じて居りますから、誰か同じ様な身分の者に嫁がせたいと願ひました。併し淑徳には必ずその酬ひを與へ、他人の犯した罪惡の爲に罪なき者の苦むを欲せぬ天の神は、彼女より位の低い者や、彼女の尊き身分に適はしからぬ様な人の所へは丼ォラントを嫁にやることをお許しにならなかつたのです。

丼オラントを救つた親切な貴族夫妻には息子が唯一人ある丈けだつたものですから、二人の可愛がることは一通りではありません。そして實際また息子はそれ程愛せられる價値があつたのです。肉體的にも精神的にも優秀な特質を數多持つてゐて、同じ年頃の青年より遙に勝れてゐたのです。彼はジャンネットより六歳の年長でしたが、彼女を大層敎養ある、優雅な、美しい娘と思ひまして、絶えず彼女の方に氣を取られて居ります。彼女と一緒にゐると非常に嬉しくて、遂には他の婦人のこと等は何も考へられぬ程無中になつてジャンネットを戀するに至りました。併し彼女が極めて身分の賤しいことを考へまして、彼女を自分の嫁にと父親に賴むことが出來ぬは愚か、その感情を打明ける勇氣すら出ないのです。〳〵こんな卑賤な者に思ひを掛けたといふので父に叱られると思つたからです。そこで彼は注意して此の熱情を押匿してゐましたが、抑へれば抑へる程戀情は激烈になつて悲歎に身を食はれ、遂に大病人になつて仕舞ひました。醫者には此の病氣の徴候も原因も全く分りませんから、之は迚も癒らぬと見限つて了

つたのです。兩親は息子の哀れな有樣に悲歎に暮れ、どうか病氣の原因を知らして吳れと淚ながらに賴みます。併し彼は唯、何だか身體が太儀だと答へたのみ、後は深い溜息を吐いてゐます。ジャンネットも兩親を慰める爲に一生懸命彼の看護をして居りましたが、或日のこと、丁度或る若い賢い醫師が病人の脈を取つてゐる時に病室に這入つて來ました。すると病人は娘を見るや否や非常に昂奮して來まして、急に脈が速くなつたのです。病人は何も云はず、何の感情も表はしませんでしたが、鼓動の高まつたのを感知した醫者は、之は只事でないと思ひまして、何時まで此の速い脈が續くか確かめる積りで其の儘手を握つて居ります。ところがジャンネットが部屋を去るなり病人の脈は平常に復したのです。慣れた醫師は、少くとも之で病原の一部は發見し得たと思ひまして、一層事實を確める爲に、猶ほ靑年の拳を握つた儘、何か用事を賴む振りをして又もジャンネットと呼ばせました。ジャンネットが姿を現はすや否や再び病人の脈は高く打出して、娘が居なくなるまで續いてゐたのです。そこで醫師は、もう病氣の眞因に就ては疑ひなしと思ひまして、兩親の許に赴き、人拂ひした後云ふやう、『御息子樣の御平癒は私の技では叶ひませぬ。ジャンネット樣のお手に依らねば駄目です。これは間違ひのない徵候に依りまして私が發見致しましたので、私の判斷出來ます限りでは、恐らく若い御婦人自身も何事も御存知ないのです。私が申上げる迄もなく、取る可き手段は御存知でありませう。唯私の云ふことは、若しも息子樣の

生命を大事と思ふなら、直ぐ樣治療に取掛らねばならぬといふことです。そうでないと御令息の生命は私には保證出來ませぬ。若し現在の樣な虚脱狀態が續けば、世界中の何んな藥を用ひても生命をお救ひすることとは出來なくなりますから。』

兩親は之を聞きますと吃驚仰天しましたが、併し息子の病氣が不治のものではないと聞いて大變喜びました。ジャンネットを息子の正式の妻にしないでも何うにか方法は付くと思つたのです。そこで醫師が立去ると直ぐに彼等は病人の許に行つて、母親は云ひました、『可愛い我子よ、私はまさかお前が自分の望みを私に隱したりなんかするとは思つてゐませんでした。殊に生命に係るやうな望みを私に匿さうなんて全く思はなかつたのです。何んな事だつてそれが人間の道に外れたことで無ければ、私がお前の爲に仕てやらない事なんか世界中に一つもないといふことを信じなければいけませんよ。お前はきつとそれは信じてゐると思ふがね。それだのにお前は私に心を打明けて吳れなかつたのね。けれども神樣はお前の狀態（ありさま）を憐み、お前を死なしたくないとお思ひになつて、お前の病の原因（もと）を私にお告げになりました。それは戀の病に外ならないのです。何故それを私に打明けるのを恐れたのですか？　これがお前程の年頃の若い人達には有り勝ちの恕さるべき弱點だといふことを私が知らないと思つたの？　それが爲にお前に對する私の愛が薄らぐとでも思つたのですか？　それどころですか、尙一層可愛くなりますよ。

それは當然の戀心ですから、それが無かつたら心配しますが、あれば私は大變嬉しいんですからね。ですから私に打明けてお云ひなさい、あなたの思つてゐることをすつかりね。そしてあなたを深く愛してゐるお母樣に任せなさい、身を削る憂鬱を棄てゝ唯治くなることばかりお考へなさい。何でもきつとお前の望み通りにしてあげますから。恐れや内氣を止めて大膽に私にお話しなさい。お前の戀の相手を手に入れるのに何か私に役に立てるかどうか見ませう。私が出來る丈けのことを仕てあんたの手助けをしなかつたら、世界中で一番酷い母だと私を思つたつて構ひませんよ。』

息子はこの言葉を聞き最初は少し恥かしい思ひを仕たが、母親の親切に力付けられ、戀人を得るに母程有力な人はないのを思ひまして、臆病心を捨てゝ云ひました。

『私が戀をお隱ししたのは唯、大槪の人は年を取ると自分達の若かつたことを忘れるものだからです。併しお母樣は之に就ては大變分つてゐらして思遣りがおありの樣ですから、戀人を私に得させると約束して下さるならあなたの發見なさつたことは眞實ですと自白し、其の人の名をも打明けませう。そうして下さりさへすれば私は生返るのです。そして私の幸福は皆お母樣のお蔭です。』

母親はジャンネットの從順を少し當てにし過ぎまして、彼女の貞操が自分の計畫の邪魔にならう杯とは夢にも思はないで、早く思ひ切つて愛する人の名を云ひさへすればいゝのですと息子に云ひました。

『では申しますが、それはあなたのジヤンネットです。ジヤンネトッの美しさと比ひ稀な良き性質とを見ると愛しないではゐられないのです。自分の愛情を相手に知らす望みはなし、彼女を私の妻にすることをあなたはお許しになるまいと思つたものですから、誰にも、ジヤンネット自身にさへ思切つて戀を打明けることが出來なかつたのです。それが爲に御覽の樣な狀態に陷つて仕舞ひました。併し若しあなたのお約束が何うにかして成功しなかつたら、私はもうきつと永く生きないものと覺悟なすつて下さい。』

母親は息子が今は慰めを要する時で、抗ふべき時ではないと思ひまして、『息子や、お前の病氣が唯それ切りの理由なら、ちつとも心配には及びません。唯治くなる事丈け考へて、萬事は私にお任せなさい。お前の滿足のいく樣に私は取計らひますから。』と微笑やかに云ひました。

青年は希望に充ちて、直ちにぐん〳〵快方に向ひました。母親も息子の元氣付くのを見て喜び、早く約束通りにしてやりたかつたのですが、扨て何うしてしたものかそれが分らないのです。ジヤンネットの貞操を非常に尊敬してゐるからです。併し遂に娘を試して見ることに心を極めまして、冗談のやうに、お前に愛人があるかと訊ねました。するとジヤンネットは面を紅めて、私はそんなもの〻必要を認めません、それに、國を追放され、他人の親切に縋つて生きてゐる自分の樣な娘が、戀のこと杯考へるのは似合はしからぬことでございますと答へたのです。すると婦人は、『でもね、お前みたいに愛嬌のある美

しい娘が一人も情人(いゝひと)が無いなんて殘念ですわ。私に一人心當りがあるから、お前も仕合せになれると思ふよ。』

『奥樣、恐らくお父樣は今でもあの時分の通りでせうが、あんな貧しい狀態から私を引上げて頂いて、恰で實の娘の樣に育てゝ下すつたのですから、奥樣のお望みとならば何んなことでも默つて服從せねばならぬ樣に思ひますけれ共、之だけは何卒お許しを願はねばなりませぬ。尤も眞實に其の方に私を娶せて下さるお積りでしたら、それならば夫として愛を捧げまする。私が兩親から受繼ぎました遺產としては私の名譽の他に何にも無いのでございますから、私は死ぬ迄それを愼深く守らねばならず、又守る決心でございます。』

夫人は此の娘を息子の嫁にしよう杯とは、毛頭思つて居りませんから、此の答へは夫人の待ち望んでゐたのとは全く違つて居ります。心の中では娘の云ふことを正しいと認めずには居られませんでしたけれ共、それかと云つて事柄は非常に重大な、息子の生命にも拘ることですから、そう易々と思切る譯には參りません。そこで驚いた調子で更に云張りました、『それではジヤンネット、お前は假令、あの通り若くてお美しい王樣御自身がお前の美しさに心を寄せて、お前の愛を求められたとしても、お前はそれを拒絕するといふのですか？』

ジヤンネットは躊躇なく答へて、『たとへ王樣が暴力をお用ひになりましても、私は貞操を破るやうなことには決して應じませぬ。』

夫人は娘の淑德と決心とに感じまして、それ以上强ひることを止めましたが、併し試して見たいと思ひまして息子に向ひ、お前の病氣がすつかり治くなつたら、機を見てお前とジヤンネットと二人切り部屋に置いてあげるから、試しにお前の愛を打明けて御覽、私にはお前の代りに娘に話をするなんて恰で遣手婆の樣な役目は出來ないから、と云含めました。

青年は此の言葉を聞いてすつかりがつかりして仕舞ひ、母が約束を守つて吳れないのを知つて又もや元の狀態に後戾りしました。母親は息子が又もや日々に惡くなるのを見ますと、以前より一層息子の生命が心配になり、今となつては色々な斟酌は悉く打棄てゝ有りの儘を包まずジヤンネットに語りました。然るに娘の操正しき決心は到底動かすことが出來ないのです。そこで幾ら骨折つても無駄であつたことを夫に告げますと、二人の者も遂にジヤンネットを息子の妻にすることに決心しました。之を實行するには可成り殘念な思ひを仕たのですけれど、息子が悲歎で死ぬのを見るよりは、身分の低い（と彼等の思つてゐる）者にでも結婚するのを見る方が增しと思つたのです。ジヤンネットは神を忘るゝ誘惑に陷らなかつたことを神に謝しました。此の樣な配偶はジヤンネットに取つても光榮なのですけれど、それ

でも尙ほ本名を明さず、ピカルヂィ土民の娘と常に云つてゐたのです。病人は直ちに精力と元氣を恢復しまして、結婚の時には自分を世界一の幸福者と思ひ、全身心を擧げて其の喜びに浸りました。

話變つてウエールス總督のお城で家來となつたピエローも成長して、これ又妹と同じく、主人の寵遇を獲ました。善良な性質や、美しき容貌の爲に人々から持てはやされます。槍を使ふことに掛けては彼に比敵する者なく、凡ての軍隊的競技に於ても他を壓し、一言で云へば萬人から敬慕されて居りました。

人々は彼をピカルディのピエローと呼び、島中に其の名は知れ渡りました。娘を見捨てなかつた神は、兄をも見捨てはなさらなかつたのです。お蔭で其の地方に勃發して住民の半數を奪ひ去つた傳染病にも罹らなかつたのです。生殘つた人々の四分の三は其の近邊を立去つたものですから、國中人影なく殆んど無人の境の如くになりました。總督も、夫人も、息子、甥、其他身内の人達は悉く傳染病に倒れ、此の名家に生殘つたのは唯總督の娘一人でした。此の若き婦人は身内の人達の財産を悉く受繼ぎました。そして疫癘の終熄した時にはもう夫を迎ふるによき年頃となつて居りました。ピエローは絕えずお側に在つて出來る丈けの世話を致します。娘は感謝と、尊敬とが一緒になつて、ピエローを戀するに至り、彼と結婚するが最上と思つて僅かに殘つた信頼するに足る人々に相談しまして、自分の全財産を捧げて、彼を人々の主君としました。程なく、英蘭土（イングランド）の王様は總督將軍の死の通知を受け、幸運なるピエローの

偉大なる才器及び勇氣のことを聞くと、將軍の保持してゐた凡ゆる位階權力を彼に與へました。アンジエール伯の二人の子供の幸運は右の通りでありました。伯は子供達が幸福になつてゐることは夢にも知らず、自分に取つてはもう亡きものと見做して居たのです。

不幸な父親が巴里を出でてより早や十八年は經過いたしまして、彼は樣々な憂き艱難をして、今では歲は取るし苦勞で身體も利がなくなつたので、子供達が何うなつたか知り度くなりました。歲と艱苦とで姿形は全く變つて居りましたが、併し絕えず身體を使つてゐるものですから、怠惰に暮してゐた若い時分よりは却つて剛健に敏捷になつてゐたのです。彼は此の年月世話になつてゐたアイルランド人の許を去り、極めて貧しく、大層見すぼらしい粉裝（みなり）をしてウエールスに參りました。ピエローを置いて行つた町に來て見ますと息子は其の地方の總督になつてゐるのです。併し未だジヤンネツトの成行が分る迄は自分の身分を知らさぬ方がよいと思ひましたので、更に旅を續け途中何處にも止まることなく頓てロンドンに着しました。

其處へ着くと彼は、さり氣ない態を裝つて、自分が娘を托した夫人は何うなつたかと問ふて見ますと、ジヤンネツトを息子の嫁にしたとのことです。此の知らせを聞いて彼は甚（いた）く喜びました。今二人共子供が生きてゐて、かくもいや榮ゆる身の上になつてゐるのを見れば、今までの凡ゆる艱離は何でもないと

思つたのです。併しなほ娘に逢ひ度く思つて、貧しい身なりの儘でジエームス・ラミエンス卿の宅に行つて、邸前を行つたり來たりしてゐます。若主人は彼を見ると貧しい老人を憐れと思つて、一人の召使に向ひ、家に連れて來て何か食物を與へる様にと命じました。ジャンネットは早や數人の子供が出來て、長子は八歳計りになりました。みんな美しい陽氣な子供達でしたが、伯の物を食べるのを見て周圍を取卷き、彼に抱付き始めた様は、恰でお祖父さんだといふことを何かの虫が知らしたかのやうです。彼の方では之が眞實に自分の孫達だと知つて、自分の方に引寄せて非常に可愛がつたものですから、子供等は家庭教師が呼びに來ても伯の傍を離れようとしないのです。遂にジャンネットが自分で出て來て、先生のいふことをきかないと非度い目に遭はせると脅しました。叱られて子供達は泣出しまして、此の親切な人は先生よりも可愛がつて吳れるから此の人の所に居たいと云つたものですから、ジャンネットも伯爵も堪らなくなつて笑ひ出しました。伯は既に立上つて、父親の様にではなく、立派な貴婦人の前に出た貧乏人の様に、敬禮をしようとして居りました。それでも彼はかうして娘を見た時秘かな喜びを感じました。併し娘の方では伯が餘まり變つてゐるものですから少しも氣が付きません。其の筈です。歳は取つて髮は白くなる、長い頤髯は生える、酷く日には燒けてゐるで、昔の彼とは似ても似つかぬ姿になつてゐるのです。ジャンネットは子供達が老人から離れるのを厭がつて泣出すのを見ると、暫時の間

老人と一緒に居さして呉れと教師に賴みました。そうして子供が老人と遊んでる所へジャンネットに對して好意を持たぬ舅が其の家に歸つて來ました。そして家庭教師が右の事情を述べるのを聞くや云ひました、『一緒に遊ばして置くさ、どうせ碌なことはないのだ！　母親とそつくり其の儘だ。彼女(あれ)は乞食の子なのだからな、子供が乞食に交り度がるのに何の不思議もないさ。』伯爵の耳にも此の惡言は自然入つたので彼は氣を惡くしましたが、今迄とても樣々な侮辱に堪へた如く、唯肩をすくめて我慢しました。

子供の父親は子供等が大層乞食の老人と一緒に居たがつたことを聞くと、實際そんなにいゝ心持はしませんでした。併し彼は子供を愛してゐて、泣かしたくないと思つたものですから、若し老人に其の氣があるなら家に止めて置いて、何でも仕事をさせる樣にと命じました。老人は答へて、私は大喜びで止ります、併し今迄の生涯に慣れた仕事と云つては、たゞ馬の世話をする事丈けです、と申しました。そこで彼は一匹の馬を預つて世話することになり、暇(ひま)な時は何時でも子供達と遊んで過しました。

既に今迄申上げた通り運命の神が此の樣にアンジエール伯と二人の子供達とを導いて居た間に、フランスの王樣は數回に渉つて獨逸と休戰の條約を結んだ後崩御になりまして、息子の王子が代つて王位に卽きました。此の方の妃が伯爵追放の原因となつたことは御記憶でせう。扨て最後の休戰期が滿了しますと、又もや新たに激烈な戰爭が始まりまして、フランス王と血緣の間柄である英國王は援軍を送りま

した。指令官としてはピカルヂイのピエローといふ一人の將軍と、或る他の將軍の息子であるジエームス・ラミエンスとを派遣しました。アンジエール伯も、追放以來一度も身分を明しませんから彼の郛に從つて馬丁として出征しました。そして數ケ月を陣營に過しましたが未だ誰も彼を見分ける者はありません。身分こそ極めて卑しけれ、彼は戰爭には非常に經驗を積んでゐますから、時々意見を述べてお役に立ちます。軍指令官は彼の意見を採用したのです。

新王妃は永く王冠の榮譽を擔ふことが出來ませんでした。戰爭中大病に罹つて數日經つと死去せられたのです。死が近附くを悟りました時彼女は過去の罪惡を後悔しまして、當時非常な聖人と世人から慕せられてゐるルウアンの大僧正を呼迎へて、心からの懺悔を致しました。自分がアンジエール伯を訴へた罪は無實であるから、何卒其の由を王に告げ給はれと、事實を殘り無く物語り、更に自己の惡心を飽く迄十分に披瀝して置く爲に、數人の最高顯官に對しても同一のことを述べ、伯爵と子供達とが今猶ほ生存して居るならば、あなた方も大僧正と共々力を倂せて、彼等に元の名譽と財產とを戾してやる樣に王樣に願つて下さいと依賴しました。

王は妃の死を聞き、その懺悔の樣子を詳しく知るや、自分の犯した不正やアンジエール伯の受けた不當な恥辱を思つて深く心を惱まされ、直ちにラツパを呼鳴らして陣營及び國中に觸れしめて曰く、不幸

なるアンジエール伯及び其の子息に就て何なりと報告を爲す者には莫大の褒賞を與ふべし、今や王妃の懺悔に依りて、伯を追放したる罪の全く寃罪なりしこと分明せり、依つて伯爵父子に對する不當の恥辱を償はん爲め、從前の名譽財産を悉く與ふべし、と。

陣營でも此の報告に依つて非常に騷ぎ立つて居りましたが、アンジエール伯も之を聞くと主人のジエームス卿の許に行つて、何卒ピエロー殿まで私をお連れ下さい、フランス王のお探しなさる人を御覽に入れませうから、と云ひました。やがて三人一所に顏を合せると馬丁の身なりをしたアンジエール伯は、今王の前に出て名乘りを擧げようとしてゐるピエローに向つて云ひました。『ピエロー、お前は茲に居られるジエームス卿がお前の妹の夫であり、一文も持參金の無い丼オラントを娶つた方だといふことを知つてゐるか？　今こそ私は娘の持參金を遣らねばならぬと思ふので、お前の妹でありジエームス卿の妻である丼オラントに關する報告は是非ジエームス卿にお願して王樣のお約束の賞金を納めて貰はうと思ふのだ。それから終りに、お前の父である私、即ちアンジエール伯を連れて行つた者に王樣が遣ると仰つしやる賞金も矢張りジエームス卿の受くべきものだと思ふ。』此の言葉を聽いて殆んど狂氣せん計りになつたピエローは、心を留めて其の人を見ますと、姿形こそ非常に變つては居りますが、見覺える所がありまして直ちに跪き、父の膝を抱いて、歡喜の涙を流しつゝ云ふやう、『お父樣、あゝ懷かしいお父樣！

再日再會する事が出來て本當に嬉しいです！』ジエームス卿も之を見て非常に驚き、何を云ふ事も爲す事も出來ません。老人が自分に使はれてゐる間に、思遣りのない酷い取扱ひをした事を思出しまして、伯の足下にひれ伏して赦しを請ひました。伯は柔しく彼を立上らせて、鄭寧に抱擁しました。それから互に積る艱難の話をしまして、息子と聟とは適當な服裝をする樣にと云つたのですけれども、彼は現在の姿を少しも變へないで王の面前に出たかつたので固くそれを拒みました。そこでジエームス卿は國王の許に至り、若し本當に約束通りの賞金を與へるならアンジエール伯と、伯の息子及び娘を御前に伴ふことが出來ると云ひました。王は直ちに三種の立派な贈物を持出さしめて、約束通り連れて來れば直ぐに之等を與へると仰せられました。そこでジエームス卿は馬丁の仕着せを着た舅を案內して來て、云ひました。『陛下、伯爵をお連れ申しました。それから、』とピエローを指して、『此方は御令息でございます。娘御は、之は私の妻でありますが、此處には居りませんが、數日內にはお目に懸けまする。』

王は暫らくの間凝つと伯爵を眺められた後、老年、孤獨、艱難等の爲に容姿は變つて居りますが、伯爵といふことが分りまして、有る限りの喜びと親しみとを現はして彼を迎へました。同時に命令を下して、伯に適當なる衣服を賜はり、身分に適はしき從者、馬其他を下されました。又ピエローにも樣々とお心を用ひられ、ジエームス卿に對しては斯かる喜びを齎らして呉れたことを謝しました。王はジエー

ムス卿に向つて、どうしてあなたの舅があなたの馬丁になるやうになつたのか、どんな出來事から伯の娘を娶る樣になつたのかと其の由來を尋ねられまして、答へを聽くと約束の賞與を彼に給はりました。伯は聟に向つて云ふやう、『王樣の下さる此の立派な高價な賜物を受取つて下さい。そして何うか忘れずにお父樣にお言傳を賴みます。あなたの子供——つまり私の孫——は、母方から云へば決して身分の賤しい者ではありません、とね。』

ジエームス卿は直ちに書簡を英國に送り、妻を巴里に呼寄せました。ピエローとても同樣です。彼等は永らく此の都に滯在した後、王の許しを得て歸國しました。アンジエール伯と別れる時には非常に悲しがつて涙を流しました。伯はフランスに殘り、以前の財產を總て取戻し、最高の地位に上げられ、彼を知れる限りの人々より以前に倍する尊敬と愛とを受けて餘命を送りました。

第九話

ゼノアのベルナールはアンブローズの爲に瞞されて金を取られ、罪無き妻の殺害を命ずる。妻は男の姿に變裝して逃れ、アレキサンドリアの國王の侍僕となり、欺瞞者に逢ふ。そこで夫をアレキサンドリアに呼寄せ、アンブローズは適當な報復をなし、再び婦人の姿に返りて夫と共に莫大の富を携へて故鄕に歸る。

エリザの悲しい話が終ると、美しく立派な女王フィロメナは一寸考へて、『あとは私とヂオネオ様丈けですが、ヂオネオ様にはお約束がありますから要求通り最後に話して頂くことに致しまして、先づ私からお話ししませう。』と云つて、語り始めた。

數名の伊太利商人が巴里に參りまして同じ所に宿を取り、いつも一緒に食事をして居りました。或夜夕食が濟みますと、平常より陽氣になりまして、戀の冒險の話をし始めましたが、いつか談話は各自の女房のことに及んで來ました。すると一人が云ふのに、『嬶の奴どうやつてゐるか知らないがね、俺丈けはよその女と不義をするいゝ機會さへあれば大喜びでそれをすることは確かたね。』

『俺も同じことさ。』と今一人の男、『そして嬶も俺の例に倣つてゐると思ふよ。兎に角俺がそれを信じようが信じまいが、事實に變りはないだらう。』

三人目の男もそれと殆んど同じことを云つたのです。そして彼等の女房共も夫の留守の間を幸に、仕たい放題のことをしてゐるに違ひないといふことになりました。ところが中に唯一人、ゼノアのベルナール・ロメランといふ男は、自分の場合は別だと思ひまして皆の者に向ひ、有難いことに自分の女房丈けは伊太利國中で最も貞淑な、何から何までよく備つた女だと斷言しました。彼は妻君の種々な特長を數へ上げて、歳は若し、陽氣だし、姿は良し、家事には熱心、女としての嗜みは何一つ欠けて居らず、お

まけに食卓に侍る時の雅かさ手ばしこさはどんな給仕も及ばぬほどだと、言葉を極めて讃め立てます。更に乘馬に長けてゐること、鷹馴しの巧みなること、讀み、書き、算盤から萬の商法に通じてゐること迄詳しく說立て、凡ゆる美點を賞め讃へた後にやつと談話の題目に返つて、あれ程操正しい貞淑な女は世界中にない、たとへこの私が十年留守にしやうと、いや一生留守にしやうとも、夫に對して不義を働かう杯とは夢にも思はないだらうと云ひました。

此の最後の言葉を聞くとピアゼンザのアムブローズといふ青年はどつと計りに腹を抱へて笑ひ出して、ベルナールを嬲つてやらうと思ひ、その樣に稀代な女房を授かるとは、皇帝陛下の特別の思召しででもありますかな、と尋ねました。するとベルナールは少々氣を惡くして、いや此の御惠を賜はつたのは皇帝ではない、皇帝よりもずつと權能ある神樣のお陰なのだ、と答へました。今度はアムブローズが云ふやう、『君が自分でいふことを十分信じて云つてゐられるのだといふことは、僕は少しも疑はないがね。併し失敬だが、君の樣に廣言するといふことは、つまり君が此の事柄の性質を全く知らない證據なので、若し虛心淡懷に事實を眺むるなら君の考へも變つて來ると思ふのだ。ところで僕等は最初妻のことを惡く云つたが併しそれは必らずしも僕等の妻が不貞で君の妻が貞淑だといふ譯ではないのだよ。唯我々は一般に男女の心に就てよく知つてゐるからそれであゝ云つたのだ。之に就て少し僕に道理を云は

して吳れ給へ。神の造り給ひし萬の生物の中、男子が最も完全なものだといふことは本當だらう？　そして誰だつてそれが眞實だといふことを知つてゐるだらう？　女子は二番目に過ぎないのだ。男の方が勇氣もあり、精力もあり、確りしてゐるが、女は臆病で、弱薄だといふことは誰でも認めなければならない。此の相違の理由及び原因を云ふことも出來るが、そんな議論は今必要がないし、時間が掛るから止さう。そこでそれは定つたことゝして、然らば其の樣に意志の强固な、强い確りした男子でさへ、彼を誘惑し又は彼の情欲を挑發する凡ての婦人とは云はないが、兎に角自分の好きな婦人に對して感ずる欲望を抑制することが出來ないならだね、男が凡ゆる方法を講じて女を手に入れんとし、機會ある每に口說立てれば、本來心の弱い女がどうしてその誘引、世辭、贈物其他戀人の使用する有りと付ゆる策略に永く堪ゆることが出來るだらう？　君は女が何時までも抵抗すると思ふかね？　君はそう思ふ振りをするかも知れない、併し僕は君が眞にそう思ふ程の鈍物とは迚も信じられないのだ。君の妻君が何んなに尊敬すべき人であるにしても、矢張り他の婦人同樣、肉と血の塊りに過ぎない。彼等と同じ情熱、同じ欲望、同じ誘惑を感ずるのだ。そして他の婦人達が每日それに負ける如に、君の妻君だとて、貞淑な人だとは思ふが、矢張り誘惑に負けることは極めて有り得ること、有りそうなことだ。少しでもそういふことがありそうだとすれば、あんなに斷乎として否定することはよもや君にも出來ないだらう。」

『私は商人で哲學者ぢやないんだから、商人として君に返事をするが、成程君の云ふことは不貞操な女達の場合に當欲まるかも知れない。併し私は、淑德高き婦人といふものは、御存じの通り絶えず女を誘惑しようとしてゐる男なんかよりは、ずつと確りしてゐて、心を動かされないものだといふことを主張する。そして私の妻が其の一人であることを全然確信する。』

『成程な、夫に不義を働らく度每に女の額に一本宛角でも出て來るとしたら、不義する女も非常に少くなるだらうと僕も思ふ。ところが實際は貞淑なものと不貞操な者とを判別する印が何もある譯ではないから、惡いことをすれば必らず名譽を落すとは限らない、事實が露見した時丈けだからね。だから必らず秘密が保てると思ふ者はきつと情欲の赴く儘に行ふだらう、又そうするのが大いに悧巧といふものだ。そこで僕が考へるのに、夫に忠實に貞操を守つてゐるのは、一度も口說かれたことが無いか、自分から先に口說いて見て撥ね附けられた者丈けなのだ。僕のみならず誰でもそう思つてゐる。之が本當だといふ無數の證據を知つてゐなかつたら僕だつてこんなに斷言はしないのだ。僕は大膽に云ふがね、若し僕がその善良にして淑德高き婦人たる君の妻君に附合へば、僕が非常に多くの女としたと同じことを、僕とするやうに妻君を說き落すに手間暇は取らぬ積りだね。其の女共だつて皆君同樣貞淑を自慢してゐたんだからね。』

『之は幾ら議論したつて限りはない、』とベルナアルは怒つて云つた『無限に兩方で主張したり反對したりする丈けだ。だがそんなに君が婦人の徳に對して偏見を抱き、一人も君を撥附けることが出來ないと思ふなら、君の有りつ丈けの手管を用ひて僕の妻を誘つて見給へ。成功したら僕の首をやらう。若し失敗すれば一千圓僕によこすのだ。』

アンブローズも激昂して來て『僕が勝つたつて君の首なんか僕に何の役に立つものか。だが若し君が本當に僕が實行出來ない事を云つてると思ふなら、僕の一千圓に對して五千圓賭け給へ。その方が君に取つては首よりもずつと輕いだらうからね。そうすればお望み通りになる。君は別に期間を定めなかつたけれ共、僕はゼノアへ行つて、出發の日から三ケ月以内に君の妻君を自由にする。そして其の證據として、何か妻君が最も大切にしてゐる品——實際君がそれを見れば事實を否認出來ないやうな印となるものを持歸ることにする。そして唯君の名譽にかけて、此の事に關しては一言たりとも妻君に書送らないといふことを約束して貰ひたい。』

ベルナールは、宜しい承知したと云つて、居合せた他の商人等が、之が恐ろしい不幸の原因となることを知つて此の賭を止めさせようと全力を盡したに拘らず、二人共それに熱中してゐて、凡ゆる諫言を却けて遂に賭の箇條を證書にして仕舞ひました。取極が濟むとベルナールは巴里に殘り、アムブロースは

ゼノアに行きました。彼はゼノアに着いて數日經つと、極く內々に婦人の住居を尋ね、其の生活振りをも殘りなく訊きますと、ベルナールの云つた通り、否それより以上に立派ですから、之は少々厄介な仕事に引掛つたと思ひました。併し彼は何うか斯うか、婦人の家に始終出入りしてゐて大變婦人と關係の深い或る貧しい女と知合になりまして、他に仕樣もないものですから其の女を金で買收して、彼が自分の工夫で巧妙に造り上げた一つの箱に入るから、それを婦人の、寢室に運び入れて吳れと賴みました。老婆は旅に出る樣な風を裝つてベルナアルの妻に向ひ、此の箱を數日の間預つて下さいと賴みますと、夫人は喜んで承知して寢室に持込みました。アンブローズは眞夜中頃になると、もう夫人は寢入つてゐると思ひまして、箱から出ました。箱は中から開くやうになつてゐたのです。夜の燈火が付いてゐるので其の明りで彼は部屋の中をよく見ました。掛物、繪畫、其他內部にある物を悉く十分記憶に刻み付けました。それから寢床に行つて見ますと、夫人は側に小さな娘を抱いて、二人共ぐつすり眠入つて居りますから極くそうつと母親の「着物を搔き分けて肉體」を見ますと、其の美しさは又一層です。肉體に何か秘密な印でもないかと何處から何處まで十分氣を付けて眺めると、左の胸に小さな黑子が一つあつて、數本の金毛で取卷かれてゐるのを見付けました。之を見屆けると彼は、再びそつと衣をかけましたが、非常に强烈な或る慾情を感じないではゐられませんでした。其の强い感情の爲に彼は、生命を賭しても

夫人の寢床に入らうといふ樣な誘惑に襲はれたのですが、翻つて夫人の非常に貞淑なことを考へるとその勇氣が出ませんでした。彼は再び室中をよく調べますと大きな衣裳棚が開放してありますから、そこから財布、帶、指環、色の褪めた衣服等を取出して彼の箱に入れ、自分も再び其の中に這入つて音を立てぬやうに內側から閉りをしました。そして豫定通り二晩其の中で過したのです。三日目になると老婆は約束通り箱を取りに遣つて來て、元運び出した所へ持返りました。そこでアムブローズは狹い箱から出て老婆には禮をやり、ベルナールの妻ジネヴラ夫人の部屋から取つて來た物品を持つて巴里に歸つて參りました。約束の三ケ月よりずつと早く歸つて來たのですから、賭け事の立會人であつた商人等は皆まだ同じ宿に居ました。彼は皆を呼んで、彼等の前でベルナアルに向ひ、自分は計畫を首尾よく成就したから賭に勝つたと告げました。嘘を吐いてるのでない證據に彼はジネヴラ夫人の寢室の有樣を間違ひなく述べ、壁に掛つてる繪を擧げ、更に盜んで來た指環其他の品物を見せて夫人が自分に呉れたのだと云ひました。

ベルナアルは少しく狼狽しながらも、部屋は彼の云ふ通りであり、寶石類も妻の物であることを餘儀なく承認しました。併しそんな色々な品物はアムブローズが召使から買ふことも出來るし、部屋の模樣や、寢床、其他の家具裝飾とても召使の說明を聞けば分ることだから、何かもつと確實な證據が無くて

は と云ひました。アムブローズは之に答へて、『今見せたり話したりしたので充分な筈だと思ふが、もつと確かな點を聞きたいと望むなら云はうが、君の妻君は左の胸に黒子があつて、美しい金糸のやうな毛が五六本それを取卷いてゐる。』

ベルナアルは之を聞くと心臟をグサツと刺された樣、賭に負けたものと信じまして約束の金をアムブローズに渡し、直ちにフランスを出發してゼノアに歸り、町から數里離れた別莊に留りました。彼は妻に對して此方へ來るやうにと手紙を認めまして、一人の確かな僕にそれを持たせ、馬に乘せて連れて來いと命じました。更に彼は其男に向つて、途中淋しい場所へ來たら、情用捨なく夫人を殺して、それが濟み次第歸つて來いと云ひ附けたのです。

使の者はゼノアに着くや直ちにジネヴラに手紙を渡しました。妻は夫が歸つたと聞き、大層喜んで手紙を受取り、翌日になると迎へに來た男一人を伴つて夫の許へと出發しました。兩側に森の茂つた、深い淋しい谷間に來ると使の男は、命令を遂行するに極く適當な場所と思ひまして、隱し持つたナイフを引拔き夫人の腕を捕へて云ふには、『奥樣、神樣に靈魂を預けるお祈禱をなさい。あなたはこゝで何うしても死なねばならんのですから。』

夫人は仰天して叫びました。『まあ何ですつて！　お前が私を殺すなんて、私が何をお前に仕ました？

だが一寸その酷い計畫を止めて、私を殺す前にどうか私に聞かしてお呉れ。私の何んなことがお前の氣に觸つて私の生命を取らうとするのか、それを話してくれ。』

『奥樣、私の氣に觸つたのではござりませぬ。又旦那樣のお氣に觸つたのかどうかも私は存じませぬ。併し旦那樣は容赦なくあなたを殺すやうに私にお命じになつたのです。そして若し命令通りに仕なければ私を絞め殺すと脅しなすつたのでございます。私が何んなに旦那樣に御恩になつてゐるか御存知でゐらつしやいませう。私には御命令に背くといふことは全く出來ないのです。神も照覽あれ、之は全く私の好まぬ行ひなのでございます。そして奥樣の御運をお氣の毒に存じます。併し私は命令に從はねばなりません。』

ジネヴラ夫人は泣きながら『ねえあなた、私は私の守護天使(まもりがみ)を始め八百萬(やほよろづ)の聖人を證人として誓ひます。私は決して決して、夫に對し彼から此の樣な扱ひを受くべき事をしたことはありません。私の生命を助けて下さい。そして主人を喜ばす爲とは云ひながら人殺し杯をしないで下さい。私の心の奥の奥底を立割つてお前に見せたいと思ひます。そうすればお前にも私の無實が分つて私を可哀想と思ふでせうから。併しそうする譯にもいきませんから、私はいゝ工夫を話しませう。私の生命を救つて、而かも同時に主人を滿足させる方法を。私の着物を取つて、お前の帽子と上衣丈け私に下さい。そうすれば主人は直

ぐにお前が私を殺したものと信じます。お前に助けられた生命にかけて誓ひます。私は直ぐ樣ずつと遠方へ姿を消して、主人でもお前でも、其他此の國中の何人でも、私の消息の分らないやうな所へ行つて仕舞ひます。』

僕は殺人を犯すのは厭で堪らぬ所ですから直ぐに納得しました。彼は夫人の衣服を受取り、自分の汚い胴衣と帽子を渡し、夫人の所持せる小額の金を其儘持たせて、出來る丈け遠方に逃れる樣に勸めた後谷間で夫人に別れました。主人の許に歸ると御命令を遂行致しました、狼が數匹見えましたから程なく奥樣を彼等の腹の中に葬つて了ふでせう、と報告しました。

數日後ベルナアルはゼノアに行きました。ゼノアではジネヴラ夫人が急に居なくなつたので、彼は夫人を片附けたのではないかとの疑ひを受け、善良な人々全體から恐ろしい人間の樣に思はれました。

不幸なジネヴラは、兎に角生命丈けは助かつたと思つて少しく安堵し、夜迄は何うにか姿を隱して居りました。日が暮れるともう少しで殺され掛つた恐ろしい谷間に近い或る村に入りました。或家に行つて窮境を語ると其家の親切な女は大層同情して、急いで針、糸、鋏等を貸して見すぼらしい衣服を繕はせました。胴衣を短くして身體に合ふやうにし、自分の襦袢から一足の水夫ズボンを作り、長い美しい髮の毛を極く短く切つて、すつかり水夫に變裝して海岸へ行きました。するとカタロンのアンカララック

といふ一人の紳士に逢ひました。アンカラックは一艘の船を持つてゐて、それは今アルビの町に近い或る波止場に着いてゐるので、彼は港に近い或る泉に行く爲に船を出て來た處だつたのです。夫人は彼に近寄つて暫らく言葉を交し、私を使つて異れと頼みますと、彼は彼女の容貌や態度が大層氣に入つたので喜んで承知して呉れました。そこで彼は彼女を船中に伴ひ、もつとよい着物を與へました。彼女は自分の女であることも、本名をも出來る丈け注意して、現はさない樣にしてゐました。そしてシクラノ・ダ・フィナアルと自分を名けました。彼女が氣を利かして仕事をするものですから船長は喜んで、こんないゝ下僕を偶然手に入れたことを獨り心に祝しました。

船はアレキサンドリアに行く筈でありまして、程なく其地に安着しました。アンカラチックはアレキサンドリア王への贈物として數匹の鷹を持參しました。王は鄭重に彼を迎へ、數囘食事に御招きになりました。シクラノの容貌及び彼が食事の時主人に侍る態度が非常に王のお氣に召しまして、王はカタランの船長にその僕を讓つて呉れと申しました。彼はこんないゝ召使は本當に手離すのは惜しいと思つたのですけれ共、王の請を却けることは出來ませんでした。すると直ぐ樣船長と同じ樣に王も此の侍僕に惹付けられて、その印をお示しにならない日は殆んど一日もない位でした。

此の王の領内のアークルといふ町では年々一種の市が開けまして、所々方々の商人、基督教徒、囘々

教徒等が非常に澤山そこへ集まつて來ました。そして其の市の間は、多くの商人及び商人所有の貨物を保護させる爲めに、王は普通の警官及び守備兵のみでなく、有力な指揮者に一隊の精兵を率ゐさせて、そこへ派遣するのを常としてゐられました。シクラノは既に其の國の言葉を使ひ得るやうになつて居りましたが、今度の市には彼が是等の兵隊を率ゐて其處にやられまして、立派に職責を果しました。之が爲に彼は澤山の商人と交はる機會を得まして、シシリィ人、ゼノア人、ヹニス人其他に接しましたが、尙ほ母國に對する愛は强く燃えて居たので殊に伊太利人と談話をするのを好みました。或る日のこと一人のヹニス人の市場小屋に居りますと、ふと種々な寶玉類に混つて、會て自分の所有であつた財布と腰帶のあるに眼を止めました。之を見て非常に驚きましたが、其の驚愕を押匿しつゝ彼は商人に向つて、之は誰の物か、賣つていゝのか、と尋ねました。ピアセンザのアムブローズは非常に澤山の商品を或るヹニス船に乘せて當市に持つて來て居りましたが、士官の質問を聞くや進み出て、微笑を含みつゝ云ひました。『それは私のです。そして私はそれを賣ることは好まないのです。併しお氣に召したのでしたら獻上致しますから何卒お受取り下さい。』

シクラノはアムブローズがそう彼に云ひながら笑つてゐるのに氣付きまして、之は少し熱心過ぎる樣に見えたのかも知れないと思つて、落付いた聲で『多分あなたは、私が軍人の癖にこんな女の持物なん

かに氣を取られるのを笑つたのでせうな？』

『いえ、何う致しまして。私は唯、それが私の手に入つた時のことを思出して笑つたのでございます。』

『失禮だがそれを手に入れた次第を話して呉れませんか？』

『閣下、これは其の、ゼノアのジネヴラと申す或る美しい婦人と一夜枕を交しました時に私が貰つた物なのでございまして、其の時女は何うか妾に對する愛の爲に持つてゐて下さいと賴みましたんで、貰つては惡いかと思つたのでございます。ですが閣下のお氣に召したらお進呈申しませう。私はそれを見ると笑はないではゐられないのです。と申しますのは、其の女の亭主といふのが又實に頓馬な奴でして、俺の女房は決して俺以外に男をこしらへる樣な女ではないと廣言致しまして、若し私がそいつの女房を手に入れゝば五千圓此方へよこす、私が負けたら一千圓やるといふ賭をしたのです。處が私は首尾よく遣つて賭に勝つたのです。すると其の商人の奴、自分の馬鹿氣た信用をこそ罰すべきなのに、あべこべに、どんな女でも遣ることを遣つたに過ぎない妻君に責を負はせまして、不義の復讐をする積りで人を使つて妻君を殺させたさうでございますよ。』

シクラノは今ぞ容易に夫の怒つた理由を知ることが出來まして、自分の不幸は悉く此のアムブローズ一人のお蔭だといふことが分りました。此の樣な罪を罰せずに置くものかと決心しまして、表面では其

の話が大變面白かつた振りをしながら此の商人と親密になりました。そして市が濟むと、殘りの品物を總てアレキサンドリアで賣りなさいと勸め、さうすれば必らずうんと儲かると保證したのです。猶ほ目的の成就を確かにし、必要な手段方法を殘り無く廻らす時期を得る爲に、玆數年間アレキサンドリアに定住するやうに賴んで、それに要する資本其他を提供したものですからアムブローズは、さうでなくてさへ其處は澤山金の儲かる處でしたので、大喜びでそれを承知しました。

シクラノは何うにかして夫に自分の潔白の明りを立てたかつたので、彼をアレキサンドリアに連れて來る方法を考へ、近頃其の都に移住した數人のゼノア商人の力を借りて遂にさうすることが出來ました。ベルナアルは自分が呼寄せられる眞の理由は毛頭知る由もなく、其處へ來た時には可成り貧乏してゐる樣でした。シクラノの味方の一人は彼を饗應して、種々な口實を設けて彼を自分の家に引留め、目的を果すによき時機の來るを待つて居ました。

之より先仕事の準備としてシクラノはアムブローズを說いて、彼の賭事の話を王樣に語らせますと、王もそれを大變面白がりました。ベルナアルが到着しますとシクラノは、彼の云ふことなら何でもきいて吳れる王に向つて、ベルナアルの居る前でアムブローズにもう一度例の話をさして下さいと賴んで、「私には何だかアムブローズの話には何か隱してることがあるのではないか、ベルナアルが妻を有罪と

したのは輕率ではなかつたかといふ氣がするのでございます。そこで陛下が事實有りの儘を申せと御命令になりますれば、必らずそれに服するでござりませう。若しそれでも白狀せぬとならば、私には事實を吐かせる手段がありまする。』

そこでベルナアールとアムブローズとが王の御前に連れられると、王は非常に恐ろしい顏をした數人の人の前でアムブローズに向ひ、お前がベルナアルから五千圓賭で取つた話を、少しも事實を僞らずに申立てろと命じました。アムブローズが非常に信賴してゐるシクラノも其處に居りまして、若しお前が本當の事を云はなければ世にも恐ろしい拷問に掛けるぞと、怖い顏をして脅しました。こんな風に四八方から責立てられて仕方がなくなり、それに罰を受けるつたつて五千圓返しさへすれば濟むだらうと思ひまして、遂に王及び其他の面前で有りし次第を殘らず申述べました。

アムブローズが總てを白狀して仕舞ふと、シクラノは王の代理としてベルナアルに向ひ、云ふやう、

『して此の噓話の爲にお前は妻に對して何ういふことをしたか？』

『妻に侮辱されたのと、金を取られた腹立ちまぎれに、召使の一人に妻を殺せと命じました。彼の云ふ處に依ると妻は忽ち狼に食はれたそうでござります。』

總理大臣のシクラノは、斯く二人を御前に引出して吳れと願つた眞の理由をまだ王には告げてなかつ

たので、扨て王に向つて云ふやう、『陛下、此の憐れな夫人が夫の爲め又不埒な贋の戀人の爲に甚しい災難に遭つたことがお分りでございませう。一人は殘忍極まる噓を吐いて彼女の名を汚し、夫をも破滅さしたのです。そして夫は又手輕に瞞されて妻を殺させ、狼の餌食にしたのでございます。本當に二人共揃ひも揃つて立派な戀人であり夫であると云ふべきです！　二人共そんなに絶大な愛情を抱いてゐたのですから、今其の亡くなつた婦人に再會しましても、きつと何方も氣が付かないでせう！　併し陛下は正しくゐらせられますから、彼等各自に如何なる罰を加ふべきか御存知でありませう。噓吐者を罰することは私のお願ひ申す迄もありません。辿も許すことの出來ぬ大罪人ですから。ですが瞞された夫は、赦される資格のない者ではありますが、何卒御赦免が願はしう存じます。若し彼をお赦し下されば、私は唯今こゝへ彼の妻を引出すことに致しまする。』

王は總理大臣を非常に寵愛して居りますから、お前の望み通りにするから、彼の女房を呼びに遣れと命じました。妻はもうとうの昔に亡くなつたと思つてゐたベルナアルの驚きは十分想像出來ませう。アムブローズとても今では、之は五千圓返した丈けでは罪を逃れまいと思ひ始めて、其の驚きは一倍です。シクラノは忽ち王の脚下に跪き、今まで裝つてゐた男の聲を捨てゝ、泣き乍ら申します、『私が、陛下、私がベルナアルの妻、不幸なジネヴラなのでございます。此のアムブローズの惡漢の爲に酷い辱めを受

け、冷酷な夫に捨てられ、召使の殘忍な刄に委ねられて、野獸の牙に渡されんとして、六年の間男の紛裝をして生きてゐた哀れなジネヴラは私なのでございます。」斯く云ひつゝ彼女は胴衣を引裂いて胸を露はし、國王及び列席の面々に自分の女なることを示し、アムブローズに向つて彼の欺瞞を口を極めて責めたものですから、彼は恥ぢと後悔の爲に唇が閉されて一語をも答へることが出來ません。

王はシクラノが女であらう抔とは一度も思つたことがないので、是等のことを見聞して甚く驚き、恰で夢の樣な氣がしました。併し最初の驚きから醒めて、彼女の云ふことの眞實なことが分ると、ジネヴラの勇氣、行爲、貞淑等を賞讃し、彼女に美事な衣服を賜はり、侍るべき侍女をも下されました。王は又餘りに人を信じ過ぎた爲に生じたベルナアルの殘忍をも許しました。それもジネヴラが熱心に頼んだからこそなのです。ベルナアルも自分が赦されたのは、自分が召使に殺させようとした妻に對する王の寵愛篤ければこそだといふことを十分感知しまして、歡喜と後悔との涙を流し、妻の前に跪いて宥しを乞ひました。貞淑なジネヴラは直ちに彼を赦し、極く穩かに夫の過失を責めた後彼の手を取つて立上らせ、夫として親愛を籠めて彼を抱擁しました。

ピアセンザのアムブローズは彼の罪惡相應の罰を受けました。王は町の高い所に杜を立てゝそれに彼を括り付け、全身頭の頂上から足の先まで蜂蜜を塗り付けて、何人たりとも彼が全く虫けらに食はれて

を逢はせた婦人に與へられました。王は盛大な宴會を催し、ベルナアルはジネヴラの夫として招待し、彼が酷い目ジネヴラは世界一の尊敬すべき婦人として歡待しました。彼は夫人に凡ゆる賞讚の言葉を浴せ掛け、彼女に贈つた寳玉、金の器、其他の價格は一萬俩以上とのことでした。かくて彼等にゼノアに歸國するの許しを與へ、その爲にわざ〳〵一艘の船を用意せしめました。夫婦はそれに乘つて程なくゼノアに着し、澤山の財寳を持つて家に歸りました。町の人達は喜びの有りつ丈けを示して迎へました。皆死んだものと思つてゐたジネヴラは特に全市民の歡迎を受け、淑德高き婦人としていつも例に引かれました。

アムブローズは何うなりましたかといふと、其の國には地蜂や熊蜂が澤山ゐるものですから、縛り付けられた其の日の中に食ひ盡されて仕舞ひましたが、骸骨丈けは何時までも柱にぶら下つて居りますから、通行の人はそれを見る度に彼の惡性な罪惡を思出しました。之を見ましても惡人や欺瞞者は、何時かしらそれが露見して、自分が瞞した人の見る前で罰を受けることが分ります。

第十話

モナコの海賊パガニノはリチャルド・ダ・シャンヂカの妻を奪ひ去る。夫は妻の在所を知つてモナコに行き、パガニノに親しく逢ひ、妻を返せといふ。パカニノは女さへそれを望むなら返すと約束する。然るに妻は全く歸る氣がないのでパガニノの許に止り、シャンチカの死後二人は夫婦になる。

人々は皆女王の物語を賞讚した。最後の番に當るヂオネオは一段と女王の話を讃めた後、次の如く語り始めた。

私は女王の話を聞いてゐる中に、或る點に心を惹かれて、話そうと思つてゐたのとは別なお話をすることに致しました。其の或る點と申しますのは、つまりベルナアル（尤も彼丈けは旨くいきましたが）及び御同様の人達か、自分では世間をあちこちとぶらついて色々な女と好き勝手な眞似をして樂んでゐても、女房は凝つと手を膝に家に坐つてゐるなぞと、恰で女から生れ、女に育てられ、絶えず女と一緒に暮して來た我々が、女の最も好きな物は何だか知らない樣に考へてゐる頓馬さ加減なのです。私の話を聞いてゐれば、そんな手合が餘つ程の馬鹿者だといふことが分りませう。人間は神樣に作られてゐる

通りより仕方のないものだ、天性を拒むことは出來ないといふことを忘れて、女をばさも神聖なものと考へてい〻加減な法螺話を作つて獨り得意になつてる奴は、猶一層の大馬鹿者だといふことをお目に掛けませう。

昔當國ピザに大變賢明な一人の法官がありまして、身體はもう衰へて居りましたが、才智の非常に優れた人でした。名前をリッチアルド・シャンヂカと申しまして、歳老つて精力も弱つてゐるのに妻を娶らうと思ひました。判事の役目を果すと同樣立派に、彼にも未だ夫婦の役目が果せると思つたんでせうね。

そこで彼は若くて美しいといふ、二拍子揃つた婦人を一生懸命探しました。賢明で、人に說敎するぐらゐの人ですから、この二拍子こそは彼の年から考へて最も恐るべきものなのに、つい若い者と同じ望みを起したのです。するとロットオ・ガランヂといふ人の娘に望み通りのが一人見付かりました。名前はバルトロメアといひ、ピザ第一の美しい愛らしい娘で、顏色も非常に美しかつたのです。ピザの婦人と來ては多くは黃疸にでも罹つてゐるかと思ふ程黃色い顏をしてゐるのです。結婚式は盛大に愉快に擧げられました。ところが此の饗應の賑々しさに引換へて、お床入りとなつてからは頗る飽氣ないものでした。夫は若い花嫁に十分の愛の證據を與へませんでした。(省畧)

*

*

*

*

*

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

それから一年の間には結婚の快樂に耽つてはならぬ日があることを云つて聞かせ、それを十分妻に納得せしむる爲に、子供に讀方を敎へるに使ふ聖人日錄と云つた樣な本を引張り出して、此の中の聖徒に敬意を表する爲に夫婦は一緒に寢てはならないのだと敎へ、今日は何聖人の日だ、今日も何聖人の日だと云つて夫婦の務めを避けました。之等の聖日の他に彼は猶ほ斷食日を澤山加へました。斷食禮拜日、徹宵祈念、金曜、土曜、日曜、四旬齊と百日以上の增加です。實際彼は善良な基督信者が夫婦の喜びを禁ずべき日を出來る丈け增しました。恐らく結婚も法廷と同じ位の休暇が必要と思つたのでせう。それは兎も角として、此の取極めは全然夫人のお氣に入りませんでした。（省畧）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其の上、妻君の非常に當惑したことには法官は、折角自分が妻に、休日だと敎へて置いた日を、それは仕事日だなぞと何處かの碌でもない優男が妻に云ひはしないかと、絕えず嚴重に見張りを仕てゐるのです。併しシャンチカはそんなに妻に節制を强ひる償ひとして、時々氣晴しの爲、海岸の近くに彼が持つてゐる美しい別莊に連れて行きました。或る日氣分を變へる爲に平常より永く滯在の豫定で彼等はそこへ

行きました。彼はいつも同じ遊び事では妻が飽きるから今度は妻に漁を見せてやらうと思つて、數名の友を同行するやうに招きました。自分は漁船に乘つて、妻にはゆつくり漁の作業を見せようと思ひ、彼女に勸めて數名の女友達と共に別な船に乘せました。談話をしたり漁を見たりしてゐる中に知らぬ間に船はずつと沖の方に出てゐました。するとモナコのパガニノといふ有名な海賊が遣つて來て、高調に達してゐた人々の遊樂を破つたのです。船を見るなり彼は捕獲せんと向つて來ましたので、人々は之を逃れんと根限り漕ぎましたがもう間に合ひません。海賊は直ぐに一番近い婦人達の乘つてゐた小舟に追付きまして、大勢の婦人達を見るとバルトロメアの美貌に打たれました。それに比べては他の女は皆醜惡に見えますから之丈け獲れば澤山と思つて、夫の見る前でバルトロメアを自分の船に連れて行つて岸に着きかかつた夫の船を追はうとはせず、女一人を取つて沖合遙かに立去つて仕舞ひました。

そうでなくつてさへ恐ろしく嫉妬深い判官は、之を見ると非常に心を惱ませまして、怒りの餘り大聲で叫びました。彼はピザ及び方々の土地へ行つて海賊の掠奪を愬訴しまして、出來るなら海賊共を悉く絕滅したいと迄思つたのです。

一方パガニノは若く美しき捕虜を見て非常に喜び、それを手に入れたことを限りなく祝しました。そして彼は未だ獨身だものですから、何時迄も留めて置いて妻の代役をさせようと決心しました。彼は出

來る丈けよく女を世話し、言葉を極めて慰めようとしました。夫人は泣いて、自分の運命を歎いてゐたのです。夜になつてパガニノはもつと有力な慰藉法を用ひますと、それは非常に利目がありまして、美人は直ぐに夫の有難い暦のこと杯すつかり忘れて仕舞ひました。最早徹宵祈念も無ければ、斷食日もなければ、節制日もないのです。何日でも同じことなのです。此の變化が大層バルトロメアの心に叶ひまして、未だ船がモナコへ着かない中に彼女は判事のことや、彼の規則や聖徒の物語を奇麗に忘れて仕舞つて、新らしい生活振に滿足しました。彼は女をモナコに連れて來ると立派な身の廻りや其他彼女を喜ばすものは何でも與へて、相變らず彼の暦では特別な聖日なんかは一日もないことを女に證明してゐました。夜は情婦として彼女を扱ひましたけれ共、晝間は本當の妻に對すると少しも變りない敬意を表して居りました。

リッチアルドは方々探査して愛するバルトロメアの在所が分ると、自分で行つて連れて來ようと決心を致しました。こんな重大な用務を託す價値のある又は託し得べき者は誰も無いと思つたからです。そして彼はどれ丈け高い身の代金を請求されても、値切つたりなんかしないで大まかに渡して遣らうと心を極めました。そこで何かと必要な手筈をして船出しました。途中何の出來事もなくモナコに着くと、妻を見ることが出來ました。妻の方でも彼を見て、夜になるとそれをパガニノに告げ、夫が妾を迎へに

來たらかう〳〵云はうと思つて居りますといふことを語りました。翌朝リッチアルドは海賊に面會し、極く鄭寧な言葉を以て挨拶すると對手も丁寧に彼を招じます。パガニノは向ふに訪問の理由を云はせようとして、わざと相手を知らない振りをしてゐました。併し程なく判事は好機を見て、極く丁寧に彼が其處に來た理由を告げ、何卒妻を返して下されと賴み、身代金は御要求次第何程でも差上げますと附加へました。するとパガニノは落付いて微笑を漏しつゝ云ふやう、「いやあなたよくいらつしやいました。私が此處に若い女を一人連れてゐるのは全く本當です。ですがそれがあなたの奧樣かそれとも他の人の奧樣かは存じません。私はあなたを知らないのですからね。唯私の知つてゐることは、其の女がもう可成り永い間私と同棲してゐたといふことです。お見上げする所あなたは立派な紳士の樣でございますから、其の女を御覽に入れない譯にはいきません。若しあなたが御亭主ならすぐに女は見分けるでせう。そして若し女があなたの妻であることを承認し、あなたと一緒に歸りたいと申したなら、私は喜んであなたに彼女を連れて行つて貰ひませう。身代金はあなたの定める通りでようございます。あなたの禮儀に對しては私はそれ丈けのことはせねばなりません。併し若し女が、あなたの妻であることを否認したり、又はあなたと共に歸ることを拒んだりすれば、私から無理に引離さうとなさるのはあなたが非常に間違つて居ると思ひます。何故（なぜ）と申して、私は若くして精力旺盛ですから、他の如何なる男子にも劣ら

ず女に對して十分に正當な取扱ひが出來るのです。殊に彼の女のやうに、女が比類なき程の美人で愛らしいなら、それに相當した扱ひが出來ますからね。』

『私は誓つてもいゝです。彼女は私の妻です。御親切に此處へ呼んで下されば、それが事實だといふことがお分りになります。きつと私の首つ玉にかぢり付いて、抱付くでせうからね。ですから私は喜んであなたの申された條件に從ひます。』

『宜しい。ではこうお出で下さい。女をお目にかけます。』と云つて彼はシャンヂカを客間に案內して、婦人に言葉を通じました。するとバルトロメアは非常に美しい衣服（きもの）を着て隣の室から出て來て、輝く星のやうな樣子で現はれました。彼女は夫に對して全くの見知らぬ人でもあるかのやうによそ〳〵敷くお辭儀をして顏を眺め、物を云はうとさへしなかつたのです。判事は最も熱烈な抱擁を以て迎へられると思つてゐたのに、此の冷淡さを見ては非常に吃驚しました。けれども彼は、自分（わし）は不幸にも妻を奪はれてより此方（このかた）絕えず悲痛に惱んでゐた爲めに樣子が甚（いた）く變つて、多分妻でさへも私といふことが分らないのだらうと、自ら慰めて扨ていふには、『愛する妻よ、あの遊漁に お前を連れて行つた爲に私は實に酷い目に逢つたよ！ お前を奪はれて以來の私の悲歎といふものは、誰も例（ためし）がない程だつた。それだのにお前は、まるで私を知らない樣に、一語（ひとこと）も物を云はぬとは何といふ殘酷だ？ お前は夫のリッチアルド・

ダ・シヤンヂカが分らないのか？　私は此の人にお前の身代金を拂つて、お前をピザに連れ返らうと思つて遣つて來たのだ。此の偉いお方は、何程でも私の云ひなり次第の代金でお前を行かせるとお云ひなさるのだ。』

バルトロメアは微笑を漏して彼に向直り、そして云つた、『失禮ですがあなたは私に物を云つていらつしやるのでございますか？　何卒もつと確り私を御覽下さいまし。吃度私を誰かと思ひ違ひしてゐらしやるんでせう。だつて私ほんとに一度もあなたにお逢ひした覺えがありませんもの。』

『何うか自分のいふことをよく考へてお呉れ、愛する妻よ。お前こそ私の顏をよく御覽よ。そして考へて見れば私がお前の夫のリッチアルド・ダ・シヤンヂカだといふことが分るから。』

『あなたそれは御免を蒙りますわ。知らない方のお顏をそんなによく見るのは失禮ですもの。でも私があなたにお逢ひするのは今が初めてだといふことは、之丈け拜見すればもう十分分つて居りますわ。』

哀れな判事は之には恐ろしく困りましたが、之はパガニノが傍にゐるので妻はこの海賊を恐るゝ餘り心にも無いことを云ふのであらうと思ひまして、パガニノに向ひ、何うか妻の部屋へ行つて內密に談話をしたいからお許しが願ひたいと賴みました。すると對手は承知したので二人そこへ行つて席に着くなり、夫は凝つと下俯向いてゐる妻に向つて、『さア愛する人よ、愛人よ、良き妻よ、やさしき戀人よ、お前は

もう夫のリッチアルドを覺えてゐないのか？　自分の生命よりもそなたを愛してゐる夫を知らないのかね？　よくもそんなに忽ちの間に忘れられたものだね。私はそんなに醜くなつたかね？　御生だから私の顏を見てお呉れ、可愛い人よ。よく見ればきつとお前の夫だといふことが分るんだから。』

之を聞いて婦人はどつと笑ひ出し、彼が尙ほ愛の籠つた言葉を續けやうとするのを押止めて、『あなたが私の夫のリッチアルド・ダ・シャンヂカだといふこと位一目見れば分りますよ。それが分らない程の大馬鹿だと私を思つていらしやるの？　それを私が知らない振りをしたつて文句が云へますか？　あなただつて私達が一緒にゐた時分、私を蔑に扱つたぢやありませんか？　若しあなたが本當に口で仰つしやる樣に私を愛して、あなたに取つて本當に大事な人だと思つてゐたのなら、元氣のいゝ、面白いことの好きな、若い婦人が扱つて貰ひたいと思ふ樣に、私を扱つて呉れた筈ですわ。或ることを求めてゐるんだけれ共、婦人生來の內氣の爲にお願ひすることが出來ないでゐるのが分りませんの？　その私の要求を滿足させるを避けようとしたあなたの馬鹿氣た方法をお忘れですか？　女よりも法律の研究の方がお好きなら、結婚なんか仕ない方がよかつたんだわ。まあ私何を云つてるんだらう。私一度だつてあなたを裁判官だと思つたことはありませんよ。聖日や敎導會のお觸れ役だと思つてゐましたわ。だつてほんとによく斷食日やお籠り日を知つてらしたんですもの。若しお百姓さんがあなた見たいに聖日を守つた

日には、一粒の米だつて取れはしないでせう。神様は穀物のよく出來る土地が耕されないでゐるのはお好みになりませんから、私を哀れと思召しになつて、有難いことに私をパガニノの手にお渡しになつたのですわ。パガニノさん所では聖日なんていふことは少しも構はないんですよ。あなたは婦人に仕へるよりも聖徒に仕へる方が御熱心で隨分信心深くそういふ聖日には仕事を休んだものですがね。此所では金曜も土曜も、參籠日も斷食日も、あの長い四旬齋もちつとも構はず、夜でも晝でも倦まず撓まず畑で働らいて居ますわ。朝のお勤めの鐘が鳴ると直ぐ仕事に取かゝりますわ。私がこんないい働き人と一緒に止つてゐやうと心を極めるのは當然でせう。私仕事が好きなんです。ですから私若い間は彼の人と一緒に働らいて、聖日や節制日や斷食日を守るのは老年になるまで預りにして置かうと決心しました。ですからあなたは直ぐにお歸りになつた方がよう御座いますわ。即刻此地をお發ちになつて、何卒無事息災にお歸り遊ばせ。あなたは私に聖日を守らせるに及びませんし、私もあなたに勞働日を見付けて頂く必要がありませんから。

哀れなリッチアルドは胸をも剔られる思ひです。幾度か女の言葉を止めようとしたのですけれど共、他人の、おまけに海賊の家に來てゐることを思ひ、穩かに聞くが最上と思ひました。併し女の言が終ると彼はやさしい調子で云ひました。『最も可愛い妻よ。どうしてお前はそんな風に私に物が云へるのだ？

お前は自分の名譽も家の名譽も構はないのか？　お前はピザに歸つて、夫の私と正しい女らしく生活するよりも、此の男と一緒に、情婦となつて暮し、絕えず罪惡を犯してゐる方がいゝといふのか？　パガニノはお前に飽きれば一時も猶豫せずお前を戶外に抛り出すことを忘れてはいけないよ。私と一緒に來れば一生お前を愛して、わしが死ねばお前はわしの家の主人になれるのだ。お前は放縱な淫慾、恥づべく罪深き慾情の爲に名譽を捨て、お前を斯くも深く愛する夫をも捨てようといふのか？　何うかお願ひだから、愛する妻よ、心を入れ變へて夫と一緒に歸つて呉れ。私はお前を奪はれてからといふものは悲歎の爲に刻々に身を削られてゐるのだから。』

「私の名譽のことを仰つしやるのですか。併し今となつてはもう間に合ひません。本來ならば私の兩親は、私に相談もなくあなたに私を嫁がせる時に私の名譽を考へなければならなかつたのです。然るにそれに就ては少しも考へて呉れなかつたのですから、私も今は兩親の名譽を少しも氣にすまいと思つて居ります。あなたは、私の兩親や、私の名譽に就て、少しも御心配に及びませんわ。それに實を云へば、此所では私は自分をパガニノの眞實の妻と思つて居ます。ところがピザにゐる時は自分をあなたの園者のやうに思ひましたわ。あなたは心では私を蔑視してゐながら、見得の爲に私を飼つて置いて、情け用捨なく酷い目に逢はせるのだと思つてゐたのです。パガニノはそれとは反對で、私に眞實の夫らしくして

呉れます。彼の人は私を抱き、愛撫し、無數の方法で私を愛して呉れます。私があなたに對して不服をいふ理由がお分りでせう。あなたは以前よりも私を滿足さしてやると仰つしやるでせう。どうして爲さるか伺ひたうございますわ。ねえ、最後にお別れしてから勇壯な戰士にでもお成りなすつて？　お歸りなさいな、ねえ、そして生命を保つ最善の方法のこと丈けお考へなさいよ。本當にあなたを見ると餘り弱々として、蒼白くて、瘦せていらしやるので、身内の人があなたを墓に葬るのを忘れてるんではないかと思ふ位ですわ。そして最後に申上げて置きますがね、たとへパガニノが私を見捨てるやうな事がありましても、私は決してあなたの所には歸つて行きませんよ。だつてあなたはもう何んなに固く絞つたつて一滴の水氣も出ないといふことが私には分つたんですからね。ですから私が捨てられて何處へ運試しに行かうとも、あなたの所へ丈けは行かないことを保證しますよ。併し私はパガニノが私を捨てるなんていふ心配はちつとも無いんです。私はあの人の心を知つてますし、私を何れ程愛してるか知つてるんですもの。繰返して云ひますが、私は心を極めてるんです。私はお籠りも、斷食も、四旬齊もない此處に居なければならず、居ると決心してるんです。だから直ぐにお歸りなさい。でないと私は大きな聲を出して、あなたが私を辱めようとすると叫びますよ。』

リツチアルドは自分に對する殘忍なる妻の行爲を見るや、こんな自分より遙かに歲の若い婦人と結婚

したのが非常な過失であつたことを悟りまして、狼狽し屈辱を感じつゝ室を出ました。バガニノに逢つた時彼は何かごと〳〵不滿を並べましたが、此の立派な男はそれに對して一顧をも與へようとはしませんでした。

斯くて哀れなシャンヂカは、自分の目的は失敗に歸し、妻を說服することが出來なかつたのを思つて、こんな所へ來なければよかつたと思ひながら其家を立去りました。失敗に對する絕望と、妻の不貞に對する悲みとに心は一杯になり、彼は直ちにピザに歸りました。町の人達は彼を氣の毒がるどころか、面白がつて彼を嬲り彼が何處かへ行つたり、又は何かの用事で人々が彼の所に來たりする度每に、人々は先づ斯う彼に云ふのです、「判事さんや、不貞腐れな女房はそんな聖日が嫌ひですとさ」。斯うからかはるるにつけて彼の悲歎は一層增すばかり、暫らくして遂に彼の世の人となりました。

バガニノは判官の死を聞くなり、婦人が自分を深く愛してゐるのを知つてゐるので、彼女と結婚しました。結婚式をしても彼等の生活に少しの變りもないのです…………そして斷食も、お籠りも、四旬齊も守らず、愉快な生涯を送りました。

人々は此の話を聞いて橫腹が痛くなる程笑つた。淑女達は口を揃へて、ヂオネオのいふことが正しく

ベルナアルは馬鹿であると云つた。頓て笑ひが納まると女王は最早や自分の位を退くべき時だと思つて、頭上より月桂冠を取つて、それをネイフィルに冠らせながら、『親しき友よ、此の小國の統治權をあなたにお譲りします。』と云つて他の淑女達の中に着席した。するとネイフィルは斯く榮譽を負はされると、四五月の夜明(よあけ)に開いた計りの薔薇の花の樣にポッと顔赧めながら、星の樣に明るい瞳(ひとみ)を地上に落した。併し周圍の人々の新女王に對する歡迎の喝采がやゝ靜まると、彼女は氣を取直して、他の人々より少し高く設けられた席に着いて、云つた。

『私が女王に選ばれましたので、之まで皆樣が贊同して守つて來なすつた方法を矢張り續けようと存じます。御承知の如く明日は金曜で明後日は土曜でして、いづれも美味物(おいしいもの)の食べられない日で御座います。そればかりでなく金曜日は救世主の受難日、私達の爲に生命をお捨てになつた日ですから、特別の敬意を表してお話をするよりは神の榮光に祈禱を上ぐべき日だと思ひます。土曜日には我々婦人は髪洗ひを致しまして、全身を奇麗に清潔にし、處女マリア樣及び救世主の爲に斷食して次の日曜日の支度を致します。ですから土曜日とてもお話をする譯には參りません。すると其の日迄にはもう四日此處に居た譯になりますから、誰か訪ねて來るのを防ぐ爲には場所を變へた方が宜しいと思ひまして、私は既に或る場所を選定して置きました。そこで日曜に其處へ參りまして、晝寢が濟んで集まりましたら、今度は

人間の遭遇する數多の出來事の內 或る特 別な場面を選ぶ方がよいと思ひまして、私は次の題を出さうと思ひます。樣々な人が自分の非常に欲しいと思つてゐたものを、智慧策略を用ひてそれを手に入れるとか、又は一度失つた物を奪返すとかした話です。皆樣此の題目をよくお考へになつて、それに關係のある有益な、少しでも面白いお話をして下さい。ヂヲネオ樣丈けはお約束に依つて御隨意の題目を選んで差支へありません。』

人々は女王の言葉を賞讃し、彼女の提議に贊成した。そこで女王はマジョルドモを呼んで夕食の時を命じ、彼女の主權期中の萬事の命令を與へてから立上つて、皆樣何處なりとも御隨意の場所へ行つて御遊び下さいと云つた。

紳士淑女達はそこで庭園に散々(ちりぢり)になつて暫らく遊んだ。それから集まつて愉快に晩食の席に着き、それが終るとエミリアは舞を踊つた。パムピネアはそれに對して歌を唱ひ、他の人達も之に和した。

唄

私が欲しいと望むもの、

デカメロン

私でなくて誰が歌はう？
來れ天のお客、やさしいキューピッド、
私の有ゆる喜びの源よ、來れ！

そして近頃陰氣な私の立琴に、
悲しい調べで歎くのを止めさして、
樂しい強い喜びを吹込んでお呉れ、
御身の嬉しい焰に私が燃えてる間。

最初私の眼の前に、熱烈で、
快活な、若い戀人を連れて來たのは御身だつた。
男らしい總ての德を備へた、
やさしい力強い辯舌を持つたお人を。

とは云へわたしが最上の、望みを託するは次のこと

二人の心と願ひは優しく合致してゐて、

喜びは共通で同じです。

彼人(かのひと)の戀は私のと同じに眞劍で固い。

キユーピツド、私がこの世でこんなに幸福(しあはせ)なのは、

みんな御身のお蔭です。

信頼する天の神よ、

來らんとする物に永遠の安息を與へ給へ。

人々は猶ほ幾つかの唄を唱ひ、舞を舞ひ、樂を奏した。就寢の時が來ると女王は人々を各自の室に燈火を持つて案内さした。そして後の二日は女王の云つた通りに過して、日曜となるのを人々は熱心に待つた。

三日目

日曜日の曉は既に旭日の光に普く照し出された時、女王は床を起き出でて他の人々をも起さした。執事は既に必要な物は凡て新らしき場所に送り出して仕舞つて、人々を迎へる準備を整へてあつたが、女王及び他の人々が出發しようとしてゐるのを見ると、殘りの物を悉く荷造りさして、荷物並に婢僕等と共に徒歩で紳士淑女の後に從つた。

女王は他の紳士淑女達と共に、人も滅多に通らぬ路を靜かに歩んで行つた。路は美しい草や、昇る朝日に開いた奇麗な花が掩ひ被さつてゐた。ナイチンゲールを始め、諸々の小鳥は愉快に囀つてゐた。面白く談話し、笑つたり戯れたりしながら西の方に歩むこと二哩ばかりにして、一寸した丘の上に建つてゐる大きな美しい館に着いた。内部に這入つて調べると大廣間も部屋々々も淸潔に掃除が出來、裝飾も行屆いて、萬事缺くる事なく設備が整つてゐたので、人々は其の美しさと整頓さを讃め、所有主の結構さを賞した。更に下に降ると氣持のよい廣々とした中庭があり、穴藏には精選した酒があり、美麗な冷たい水は至る所にあるので人々の喜びは一層增した。

それより人々は散歩の足を休める爲め、中庭全體を見渡す廻廊に着席した。廻廊には凡ゆる季節の草

や花が飾つてあり、執事は甘味なる料理や見事な酒をそこで人々に供した。

それから館の横手に、垣を以て廻らされてゐる庭園を開かせると、其の全體の光景の美しさ立派さに人人はもつとよく調べ度くなつた。長く、廣く、そして眞直ぐな步道が四方八方に通じて居り、その上には葡萄の蔓が優しいアーチ形の花綵をなしてゐて、其の豐富な收獲を忍ばせたが、今が丁度花盛りだものだから其の甘い香氣は花園一杯に滿ちてゐた。それに他の花の香りも混つて何とも云へぬ芳香を發するので、身はさながら東國の香料産地に居る心地がした。路の兩側は白、赤、色とりどりの薔薇やジャスミンで仕切りがしてあつて、朝の花園に蔭と香氣を與へるのみでなく、烈日の下に於てでも其處を步む者に日光を防いで呉れた。其處にある種々樣々の草花を一々列擧したり配置樣を說明することは一通りの業ではない。此の地方の氣候にて生育する草花にして此處に無いものはないと云へば充分であらう。此の庭園で最も氣持のよいのは、綠樹蔭暗き中央にある大きな芝地であらう。百花爛漫咲亂れ、周圍には杉や淡綠色の橙の樹が立並び、未熟成熟の果物は生り溢れ、花も咲いて、心地よき樹蔭を作り、甘美なる芳香を放つた。此の芝地の中央に美しく刻んだ純白大理石の泉盤があつて、其の眞中の臺には一つの立像があり、それから(自然にか人工的にかは知らぬが)水車をも易々と廻す程の高い噴水が吹上つてゐた。高く上つた水はバチャバチャと愉快な音を立てゝ泉盤中に戻り、餘つた水は地下管に依つて芝地の周

園の小溝に出る。すると今度はそれが他の要求を充たし、庭園全體を灌漑して再び元流れ出した所に返ると二つの水車を廻して館の主人に莫大の利益を與へてゐる。斯くて清い透明な流れとなつて低地に注ぎ下るのである。紳士淑女達は美しき草花、稀らしい灌木や植木、庭園を潤す噴水や小川等を此上なく愉快に思つて、若し此の世に樂園があるならば、此の庭園と同じにしか想像出來ない、之れ以上の美が加へられようとは思へないと、異口同音に云つた。

人々が種々な物を見て樂みながらそちこちと散歩したり、香り床しい花環を作つたり、互に聲を競ふ小鳥の囀りを聞いたりしてゐる中に、更に別な美觀を發見した。それは最初人々が樣々の美しい物に氣を取られて氣付かなかつたのであつた。つまり皆の者は、無數の異つた動物が園の中にゐることに氣付いた。彼等は互に指差ししては、ほら此處に飼兎が穴を掘つてる、そら其處に野兎が遊んでると騷ぎ立つ。向ふに牝鹿がゐるかと思へば、他方には若い赤鹿が草を食べてゐる。其他無數の人馴れた動物が居て、平氣で走り廻り遊び廻つてゐるので、一層其の場所を氣持よきものとした。人々は思ふ存分歩き廻り彼れ此れを見て廻つた後、噴水の邊りに食卓を設けさせ、女王の求めに應じて幾つかの唄を唱ひ、少しく踊つてから、卓に就き豪奢な食事を供せられた。食事が濟むと立つて、再び樂を奏で、歌を唱ひ、舞を舞ひ等してゐる中に大層暑くなつたので、女王は休みたい者は皆行つて休息することを許した。許しに

從つて休息に行つた者もあつたが、他の者は其の場所が非常に氣に入つて、休息に行きたい抔とは思はず、他の人が寢てゐる間其儘殘つてゐて本を讀んだり、將碁を指したり、碁を打つたりした。正午を過ると人々は皆立上つて冷水を以て顏を洗ひ、女王の命に依つて芝地に集まつた。そしていつもの樣に噴水の邊りに坐つて、豫め定められた題目に關聯した物語を語らんとして女王の命を待つた。最初の命令はフイィロストラトに降つたので、彼は斯く語つた。

第一話

マセツト・ダ・ラムポレツチヨは啞の振りをして尼寺の園丁となり、尼僧達の寵愛を得、金持となつて歸る。

親愛なる淑女方、世には愚かな人達があるもので、若い婦人が白い面紗を取去つて黑い頭巾を被れば其人はもう女でもなく又女の慾情を感ずることもない抔と、まるで尼樣になると石にでも化するかのやうに信じてゐる者があります。そして萬一にも此の意見に違ふやうな事柄を聞かうものなら、最も忌はしい罪惡が自然に對して行はれたかのやうに驚愕して了つて、自分達は自由勝手に振舞つて差支へない

のだけれどもそうは仕得ないのだといふことや、無爲と孤獨が齎らす强い誘惑の事なんかは考へても見ないのです。それと同様に世には又、鋤や鍬、粗食や土の勞働の疲れ等が情慾を消して了つて、男女の事杯は知的にも道德的にも厭はしきものに思はれて來ると信じてゐる者もあります。けれどもこんなことを信じてゐる人は皆間違つてゐるといふことを一層明かに示す爲に、私は女王樣の御命令の範圍を外れないで一つの短い物語をしませう。

此の附近に或る尼寺がありましたが、そこは尼達の淸い生活に依つて多少は知られて居りました。併し此の話の爲めに、少しでもその名聲が低下したりしないやうに名を指すことは止めませう。扨てまださ程古いことではありません。此の尼寺には院長共でたつた九人しか尼樣が居りませんでした。此の尼僧達は何れも若盛りでした。そこには又其美しい庭園の世話をする善良な男が一人居ましたが、自分の給金が不滿になつて來た爲に、執事の所へ行つて勘定を濟ませると故鄕のラムペレッチョへ歸つて行きました。彼が村へ歸つて來るのを迎へた人達の中に、强壯で頑丈な勞働者でマセットといふ男がありましたが、其男は彼に向つて一體こんなに永い間何處に行つて居たのかと尋ねました。するとお人好しの男は、彼の名前はヌトといふのでしたが、直ぐに話して聞かせました。マセットは又、君はどんな役目を其の尼寺でして居たのかと訊きました。するとヌトが答へて云ふのに、

『己れは尼達の爲に大きな美しい菜園を作つてゐたのだ。おまけに時々薪を取りに森へ行つたり、井戸から水を汲んで來たり、其他そう云つた種類の事を數限りなく仕たのだ。ところが女共は極く少し切り給料を呉れないもんだから己れは靴直しの拂ひさへ碌々出來ない始末だ。猶ほ其上には、彼奴等は皆若いものだから俺の眼から見ればまるで正眞正明の惡魔に取つ憑かれでもしたやうだ。どんなことをしたつて氣には入らないのだ。俺が時々庭で仕事をして居れば一人が來て之は此所に置けと云ふ、すると他の奴が來てそれは其所に置けと云ふのだ、するとも一人の奴は俺の手から鋤を奪ひ取つて叫ぶのだ、『それはそうするんぢやありません！』それで、もう本當にくさ〳〵して了つて、遂々職を辭して庭を出たのだ。何をして居るんだか、まるで自分の仕てゐることが分らないんだ。それで出て來た譯なのさ。ところが未だあるんだ。執事の奴、俺が出て來る時に、誰か適當な人があつたら、代りに寄越して呉れと頼むのだ。それで俺はやらうと約束はしたが、併し假令神樣に憎まれようと儘よ、誰がそんな人間を探すものか、向うへ送り届けるなんて以ての外だ。』ヌトの此の談を聞くとマセットの心中には是非其の尼樣達の側へ行つて見たいといふ強い願望が起つたので、もう他の事は何にも考へることが出來ませんでした。なぜならば彼はヌトの談に依つて、ヌトは何んなことでも望み次第の事を尼達とすることが出來たのだといふことを悟つたからです。若しヌトが何にも云はなかつたら斯かる秘密は發見し得なかつた

のだといふことを考へて、斯う云ひました。『本當に君は出て來ていい事をしたよ。そんなに大勢の女の中に唯つた一人男が居たのでは何が出來るものか。それと同數の惡魔と一緒に居る方がまだ增しな位だ。なにしろ女なんてものは十に九つは自分が何を欲してゐるのか知らないんだからね。』

併し談が終るとマセットは、尼達に奉公するやうになれる手段に就て考を廻らし始めました。といふのは、彼はヌトの云つたやうな仕事は凡て自分に出來ると信じてゐたから其の點では不安はなかつたのですが、唯危ないのは、自分が若くて容貌が美しいから向ふで却けられるだらうといふことでした。けれどもそれに就て十分に考慮した末、彼はかう決論しました。

『其所は此所からは餘程遠いから誰も俺を知つてゐない。そこで假りに俺が啞の眞似をして行つたらきつと俺を雇つて呉れるだらう。』

彼は秘かに此の考への實行されさうなことを信じて、肩に一丁の斧を負つて貧乏人の風をした儘、誰にも行先を告げずに、尼寺指して出發しました。彼が其所に着いて許しを得て門を入ると、偶然にも前庭で執事に出逢ひました。彼は啞がするやうに身振り手眞似で以て、神樣の愛の爲に何か食べる物を呉れ、若しお望みならお禮として薪を割つてやらうといふことを執事に向つて賴みました。執事は直ちに彼に食物を與へ、程なく彼の前に薪を持つて來ましたが、それはヌトには割る事の出來なかつた物でし

た。マセットは大層力が勝れて居たから間もなく其の薪を皆割つて了ひました。執事は森へ行く用事があつたのでマセットをも伴ひ行き、そこで彼に木の枝を切らせ、自分の見てゐる前でそれを驢馬に負はさせ、それからそれを尼寺に運搬するやうにと身振りで呑込ませました。マセットは命令通り仕ました。執事は尙ほ彼にさせたい仕事があつたものだから其後數日彼を止めて置きました。ところが或日のこと尼僧院長が彼を見て、あれは誰かと執事に尋ねました。

『院長さま、』と執事が答へて云ひました。『此れは憐れな男です、聾で口が利けないのです。二三日前に此所へ物を貰ひに來ましたから、勿論私は呉れてやりました。そして仕て貰はねばならぬ仕事を澤山させました。若し彼が菜園の仕事を知つて居て、自分でも止つてゐたいと望むなら、至極よい下僕になるだらうと信じます。それに私達は丁度かういふ人間を必要としてゐるのです。此男は頑强ですから必要なことをするには持つて來いです。のみならず、此男は若い婦人方に戯れるなぞといふ心配が要りませんからな。』

『全くお前の云ふのは眞實だよ。それぢや仕事が出來るかどうかを見て、若し出來るなら此所に留めて置くやうにしなさい。靴を一足と古い着物を幾枚かおやりなさい。それから彼の機嫌を取つて喜ばしといて、何か旨いものを食べさせるがいゝよ。』

執事はさう致しませうと云ひました。そこからそんなに離れて居らなかつたマセットは、庭を掃いて居るやうな風を裝ひながら此會話をすつかり聞いて獨り嬉しく思ひました。

『俺を置いて見ろ。前例のない程立派に畑を耕して見せらあ。』

執事は既にマセットが仕事をよくするのを承知して居るから、唯身振りを以てそこに留まつて居る氣があるかどうかを尋ねると、彼も亦身振りでさうしたいと答へたので彼を雇ふことにして、お前は菜園で働かねばならぬと告げて、彼の爲すべき仕事を敎へて仕舞ふと、尼寺に屬する他の業務に係はる爲めに彼を一人殘してそこを立去りました。

每日彼が仕事をして居ると尼樣達は彼の後ろへ來て、(人々が啞に對してよくやるやうに)彼には少しも聞えないのだと固く信じてゐるものですから、彼を嘲つたり、此上もなく猥らなことを云つたりしました。院長の方でも、彼は耳も口も役に立たないから心配はないと思つてゐたので、そんな事は少しも構はなかつたのです。併しマセットは如何に馬鹿にされても知らぬ顏で通し、尼樣達のそんな不行儀をも見ぬ振りで居ました。そして樣々な氣まぐれな命令に對しても、先の男の樣に腹を立てることなく、九人の尼樣のいふことを一々よく聞いて、一生懸命畑を耕しましたから皆の者から非常に可愛がられました。(以下削除)

斯くて此の聰明なる男は永く尼僧達の寵愛を受けて或特別の用務を致しまして金が可成り溜りました、もう徐々歳も老いて來たので毎日の御用に堪えなくなりまして鄕里に歸らうと思ひ、或日のこと尼寺の院長さんの所へ參りまして、今迄の沈默を破つて言葉を發して、何うかお暇を下さいと云つたのです。院長は今まで啞と思つてゐた男が口を利いたので驚いて、何うしたのかと尋ねると彼は、『院長さん、私は本當に啞だつたのです。が、生れ付ではありません。病氣で舌が廻らなくなつたのです。ところがつい今日、又舌が役に立つやうになつたのです。それで眞心から神樣にお禮を申してゐる次第でございます。』

院長は彼の言を信じました。そして故鄕に歸ることを許されました。敎會にやつて來る近隣の人々は、あんなに永い間啞であつたマセットが再び物が云へる樣になつたといふのも、これ皆尼樣達の御祈禱のお蔭であり、尼寺の守護聖徒のお恵みであると云ひ擴めたので、世間の人もそれを信じて有難がりました。

斯くてマセットは、青年時代を有効に使用する先見の明を持つてゐた爲に、年を取つても何の心配もなく澤山の金を持つて故鄕に歸りました。そして、之といふも皆荊棘の冠を戴かせられたる基督樣の爲し給ふたことだと云ひました。（譯者曰く此物語は大に省略せねばならぬ個所がありましたので聊か骨拔きとなりました）

第二話

アヂラルフ王の別當の一人は、王の代りとなつて王妃と臥す。アヂラルフはそれを知り、犯人を見付けて、彼が眠つた振りをしてゐる間に髪の毛を切る。然るに別當は自分の仲間の別當等の髪をも悉く同様に切つて、罰を逃れる。

淑女達が時には顏赧らめ時には微笑しつゝ聞く中にフィロストラトの話が終ると、女王はパムピネアに次を語る樣に命じた。そこで彼女は語つた。

知らぬ顏で濟した方がよいことを故意と無分別に發いたり、放つて置けばよいことを穿議立したりして犯人を出せば、それで自分の恥辱を隱すことが出來ると思つてゐると、却つて恥を增す樣なことはよくあります。私は丁度之とは反對の一例を申上げて、此の事實を證明しようと思ひます。マセットには劣るかも知れませんが、それでも可なり悧巧な一人の男と、或る偉い王樣の思慮深い行爲のお話でございます。

ロムバルヂーの王樣アヂラルフは、代々の主君の例に倣ひ、パヸアを以て國の主都と定め、皇居をそこに置かれました。先王ゴタリの妃チユードリンを皇后とされました。王妃は大層賢い、聰明にして温

順なる美人でありましたが、何うも男運の悪い方でした。二度目の夫が彼の思慮深き方法と善政とに依つて國事萬端を安定せしめたので、國内全く平和に繁榮に赴きましたところ、帝室附の一人の馬丁が王妃に深く戀するに至つたのです。彼は容姿秀麗にして背丈も國王と丁度同じ位でした。生れこそ卑しうございましたが、王の馬丁役を勤める丈けの資格は十分ありますし、下素役には似合はぬ思慮分別を持つて居ります。王座と厩との間には無限の距離があるから、若しも自分の戀情が人に氣付かれようものなら何の樣な目に遇ふか知れぬと思ひました。そこで彼は非常に注意して何人にも語らぬことゝし、自分の感情が目に現はれてはならぬといふ用心から、王妃のお顏を見ることさへ差控える程でした。欲望を滿足させ得る望みは全くありませんが、それでも其の樣に身分高き人に戀を寄せたといふことを自ら誇つて居りました。役目ですから王妃に對しては出來る丈け注意してよく仕へ、后のお氣に入ると思ふことは何でも他の馬丁達よりも遙かに心を籠めて熱心に勤めます。王妃の方でも乗馬の際には多く彼の預つてゐる馬に召しますので、彼の喜びは一通りではありません。此の樣な殊遇を示されると馬丁の自惚れは一層增長いたしまして、女王の足か衣服にでも觸れることが出來ようかと、出來る丈けいつまでも鐙を押へて居ます。一寸でも觸れば非常な喜びなのです。併し何うしても戀を完することが出來ないのを知ると、一生懸命それを忘れようとしました。併し戀といふものはいつもそうですが、望みが薄

ければ薄い程、戀情は愈々募つて熱烈になつて來るものです。此の不幸な馬丁もそうでした。彼は最も酷たらしく苦み惱んで、此の熱情を心の中に抑へ付けようと試みました。それでも猶ほその情火を消すことが出來ないので、遂には此の苦痛より逃れる爲め自殺しようと決心しました。併し之といふのも女王に對する愛の爲であるといふ事を、わざと面當てに妃に知らせる樣な方法で死なうと思ひました。併し何うせ死ぬのならば、何んな方法を講じてでも先づ自分の願ひを遂げて見ようと心を極めました。がどう遣つたらよからう？ それは決して易しい業ではない。王妃に戀を打明けるといふ樣なことは迚も馬鹿氣たことだ。少しも滿足は得られないで、身を滅ぼす丈けだ。手紙を遣るといふのもそれと同じく問題にならない。すると戀には思慮のあるもので、王妃と共に臥す一つの策略が彼に思浮びました。尤もそれとて人に見付かれば生命を失ふは知れて居りますが、生命なんかはもうどうせ始めから捨てる決心です。彼は王樣が毎晩は女王の許に行かれぬのを知つて居りましたので、一度王樣の身代りとなつて行かうといふ大膽な計畫を立てたのです。そこで成功の道を確める爲に、王は如何なる方法に依り、如何なる服裝をして女王の寢室に行かれるかそれを見ようと思ひました。斯くて宮殿内の王と王妃の寢室を隔ててゐる大廣間に身を隱して數晩窺つて居りますと、王は一枚のマントにくるまつて、片手に杖、片手に燭臺を持つてお部屋を出で、眞直ぐに王妃の寢室に行くと一言も云はずに杖を以て一二度戸口を

叩きました。すると直ぐに扉が開いたのです。そして女王附の一人の侍女が王の手から燭を取つて、中に案内します。馬丁は王の再び出て來るまで待つて居て、王の部屋に歸る時間をも確かめました。

馬丁は王樣の右の遣り方をすつかり呑込んで仕舞ひますと、今は唯その身代りとなる方法のみを考へました。彼は先づどうかこうか王のマントに似たものを一着求めまして、一本の臘燭とステッキとを手に入れ、厩の臭氣の爲に女王に見破られては大變と湯に入つてよく洗ひ全身に香料を塗つて、夜に至るを待ち大廣間に隱れました。人々が寢沈まると彼は、今こそ我が望みを遂げるか、然らざれば死刑に逢つて人々を驚かしてやるかする時が來たと思ひました。彼は持參の火打道具で火を點し、マントに身を包み、片手に燃ゆる臘燭を支へつゝ女王の戸口に行つて二つ叩きました。一人の侍女が扉を開き、眠た氣に半分眼をふさぎながら彼の手から燭を取りました。彼は素早く王妃の寢床に行きますと彼女は既に眠つてゐますから、會釋もなく傍に寄りましたが一言も口は利きません。何も知らぬ王妃は今晩は王が機嫌が惡いのだと思ひました。王はよく腹立ちつぽくつて、そんな時には一言も物を云はず、人にも云はせぬ性分ですから、后の方でも何も云ひません。馬丁は此の沈默を利用いたしました。王妃の方では王の不機嫌か却つて自分の好都合になつたのを驚きました。遂に彼は此の樣に愉快な場所を離れるのは大變辛かつたのですけれ共、若しいつまでも居れば…………後の苦痛となるも知れぬと思ひま

して、此の大膽な戀男は起上つて、再びマントにくるまり燭を取つて、素速く音をも立てずに我が寢所に歸りました。そして獨り思ふやう『誰にも見られず、侍女にも女王にも氣付かれなかつたとは俺は何て運がよかつたのだらう。何といふ愉快！　何といふ婦人だらう！　美しい皮膚！　女王の處に比べれば此處は何といふ固い不愉快な寢床だらう！』

王は夜中眼が醒めて再び眠入ることが出來ないものですから、どうせ眠れぬなら女王の所へ行かうと思召されまして、后の寢室にお出でになりますと、それは馬丁が去つた斗りの時だつたので、王妃は此の二度目の訪れに甚く驚かれました。室に入つて后を抱くや、后は吃驚して叫ぶやう『陛下、まあお珍らしいこと。たつた今お歸りになつた斗りでは御座りませぬか。それにいつもよりも殊更長くおいでになつたのに、又いらつしやるなんて！　……

…………。』

之を聞くと王は雷に打たれた樣に感じました。そして即座に、誰か不敵な奴が予の代役を勤めて、后を欺いたのだと悟りました。彼が二度來たと思つて侍女が驚いた處を見れば、后も侍女も之を知らぬのだと思ひまして、分別のある人丈けに、二度來た振りを裝ふを以て最上と考へました。愚かな人間なら

ば直ぐに大騒ぎをして女をも悲ませ恥を攙めたのでせうが、アヂラルフ王は用なきことを云つて后が知らずに仕たことを悲ませるにも及ばぬと思ひまして、安からぬ心を押隱しつゝ、如才なく云ひました。

『后よ、そなたは予には一夜に二度の訪れが出來ないと思つたのか？』

『いえ決してそんな風には思ひませんけれども、でも陛下を思ひまする餘り、御注意をお願ひせずに居られぬのでございます。』

『あゝそう、ではそなたの忠告に從つて此度は此の儘歸ると仕よう。』

王は自分に對してかゝる侮辱を加へるとは憎い奴と激怒し、吃度見付け出して罰しようとつゝ立上り、マントを着て、部屋を出でました。王宮内の誰かの仕事に違ひありませんから、宮中に仕へてゐる者を皆調べさへすれば分ると思ひました。『誰にもせよ此かる不敵な行爲を犯した奴は未だ昂奮してゐるに相違ない。犯した危險の恐ろしさを思つて、心臟は異常に高く鼓動打つてゐるに違ひない。』そこで王は燈火を手にして宮殿の部屋々々を殘らず調べますと、人々は皆ぐつすり眠入つてゐます。頓て歸らうとする時、ふと馬丁の宿舍に行かなかつたことを思出してそこへ行きました。王の寢臺に侵入した大膽な漢子は、王が入つて來るのを見るともう自分は駄目だと思ひました。するとさなきだに既に速まつてゐた心臟の活動は恐怖の爲に一層激しくなりました。そして若しも自分が發見せられたなら、王の正しき怒りの爲に

直様生命を取られるに違ひないと思ひました。併し王様は武器を持つて居らぬ様だから、まあ自分の運命が何うなるか待つてゐて見ようと決心しまして、眠つてゐる風を装つて居ました。王は部屋の片隅から調べ始めるとみんな眠つてゐます。ところが犯人の寝床に來て見るとそ奴の心臓が猛烈に高鳴してゐるので『此奴が悪漢だ』と心に思ひました。併し少しも人を騒がせずに復讐を成遂げる考へでしたから、翌朝其の男を見分けることが出來るやうにと、鋏を以て悪漢の片鬢を挾み切りました。其の當時は皆な髪を長く刈つてゐる習慣だつたのです。斯く爲し終ると王は寝室に歸りました。

馬丁は斯く易々と逃れやうとは決して思ひ掛けなかつたので、王が斯く自分に印を付けゐ以上は之れには何か計畫があるに違ひないと思ひました。そこで、肝太き上に狡猾な男でありましたから、直ちに起上つて馬の毛を剪るに使ふ一丁の鋏を厩から取出しまして、眠つてゐる仲間の頭をば、自分が剪られたと同じに皆耳の上で刈取つて、何人にも見付からずに自分の寝床に歸りました。

アジラルフは朝早く起出でて、宮城の門の開かぬ中に總ての下僕を御前に召しました。見ると馬丁共の頭がみんな同じに剪り取つてあるものですから一方ならず呆れました。犯人の方で此の様に巧妙な奸計を用ひ様とは豫期しなかつたので、此の悪漢奴、身分は低いが中々奸智に長けた奴だわい、と思つて、智慧比べで自分が負けたことを認めない譯にいきませんでした。此の上犯人を發かうとすれば一騒

動起るし、さすれば王としての榮譽をも傷けねばならぬと思ひ、他の人には分らぬ樣、當人に丈け理解の出來るやうな云ひ方で、お前が王妃と同衾する爲に用ひた詭計を予は見破つたぞといふ意味を傳へて、犯人に譴責を加へてやらうと思つて云ふやう、

『お前達の頭を刈つた奴に云つて置くが、秘密を固く守れ、そして二度と再び同じ場所に歸るな。でないと恐ろしい拷問に掛けて殺すぞ。』之が若し他の人だつたら恐らく、犯人を見出す爲に總ての馬丁を拷問にかけるか又は牢屋に入れたでせう。然しそうしたところで其の結果は唯、誰でも、殊に王に於て隱したいと思ふことを、世間に知らせる丈けに過ぎないでせう。確かに復讐丈けは出來ますが、其の代り妻に非常な恥辱を與へ、自分の不名譽を增大したでせう。

人々は王の言葉を聞いて吃驚し、何ういふ意味だらうかと思案しましたが、その謎の判るのは狡猾な馬丁丈けです。彼はアジラルフの生存中は十分注意して誰にもそれを語りませんでした。そして王の與へた忠告に服從して、一度冒した危險を二度と冒さうとは仕ませんでした。

第三話

或る婦人が或る美男を戀して、懺悔と良心の呵責の假面を被つて、ちつとも氣付かれぬ樣に或

る僧侶を利用して戀の取持役をさせる。

パムピネアの話が終ると人々は皆馬丁の大膽と智略とを賞し、王の深慮を讃へた。女王はフィロメナに次の話を物語る樣に命じたので、彼女は始めた。

私は或る美しい婦人が僧侶を計略で瞞したお話を致しませう。世間のことを知つてゐる人は誰でも之は面白いとお思ひになるでせう。殊に此の坊樣といふ愚かな人々は、何でも世の中の智慧や日常生活に就ては他の人々よりも御自分達の方が賢いと思つてゐるのですが、實際は普通の人よりずつと劣つてゐるのでございますから、此のお話は一層面白いでせう。坊樣なんていふ者は理性も教育もなくつて、丸で豚見たいに他人の費用で飼はれてゐるのでございます。皆樣、私が次のお話を致しますのは、女王樣の御規則に從ふ爲ばかりではありません。私達婦人は餘りに迷信深いために坊樣を直ぐ信用致しまして易易と思ふ儘に彼等に引張り廻されますけれども、其の坊樣なる者が、實に頓馬で、男の人に欺かれるのみでなく、我々婦人にでさへも譯なく瞞されるものだといふことを示す爲にお話しするのでございます。

私共の都フロレンスは皆樣御存知の如く、眞劍な戀愛よりは遊び半分の艶事の方が盛んな所でございますが、少し前、此處に一人の婦人がありまして、自然から有る限りの最も尊い賜を授かつて居りました。機智、優雅、美貌、靑春——實際、女の飾りとなる物は悉く備つてゐたのです。婦人の名は申

無上の命令で空を動かし
星を動かす全能の神が、
わたしをこんなに活潑に、
愉快な性質にこしらへて、
貴い完全の模範にして呉れた。
それに私は蔑まれ、

戀も吐息も甲斐ないわたし、
歎くに何にか無理あらう？

わたしは以前好きなお方から、
やさしく戀を言ひ寄られ、
遂には彼に從つた。
可愛いお方の希望も思ひも、皆なわたしのものだつたのに、
あの神聖な恍惚の、時は忽ち過ぎ去つて、

愛する人はもう居ない。
　戀も吐息も甲斐ないわたし
　歎くになにか無理あらう？

意地くね曲つた輕薄な、
別な男がわたしを口說き、
程なくそれが愛しい方の耳に入り、
嫉妬の炎燃え立たせ、
歎くわたしを不實に棄てた。
わたしの縹緻は誰でも賞める、
愛しいお方も忘れは得まいと、
其の時わたしは思つたけれど。
　戀も吐息も甲斐ないわたし、
　歎くになにか無理あらう？

永遠に彼の日よ呪はれよ、
花嫁にならうとて、
元から私によく似合つた、
黒の喪服を脫いだ日よ、呪はれよ。
お嫁なんかにならずに死ねば、
三層倍も仕合せな乙女であつたのに。
　　戀も吐息も甲斐ないわたし、
　歎くになにか無理あらう？

曾てわたしの一番愛しい戀人だつた友よ、
今天上の聖徒等と、
德の果實や戀の果を、味ひ在す愛人よ、
聽いて下さいわたしの祈願！
今あなたのゐらつしやる、快い休息の閒に、

私のことを思つて下さい、哀れな悲しい娘のことを。
自然から負はされた、生命(いのち)の借物を返す時、
再び逢つて永久に離れますまい！
　戀も吐息も甲斐ないわたし、
歎くに何にか無理あらう？

ロウレッタが唱ひ終ると、人々は心々(こゝろ〴〵)に其の解釋は違つてゐたけれ共、口を揃へて賞讃した。王は松明(たいまつ)を持つて來させてそれを芝生や草花の間に置かせ、歌は星の沈むまで續けられた。そこで王は最早や休息の時ですと云ふと、人々は互に夜の挨拶をして寢所にと退いた。

四日目

太陽は既に星といふ星を悉く空から追ひ拂ひ、夜の濕つた水蒸氣を地上から發散せしめた時、フイロストラトは床を起き出でて人々を呼ばしめ、皆一緒に美しい庭園を散歩した。朝飯時になると夕食と同じ場所で食事を爲した。例の如く晝休みが濟むと人々は再び美しい噴水のほとりに集まつた。そこでフ

つた事はないので見た覺えさえない位ですから、私にはあなたの仰つしやることが何が何やら少しも分りませんと當然答へたのです」ところが信心深い懺悔僧の方ではそんな言譯なぞに少しも耳を藉さないで、『何にも知らない振りをしたり驚いて見せたり仕たつて駄目です。私は何事も皆知つてるんだからな、否認しようとしてもだめだよ。何にも知らぬ隣近所の人の噂なんかで聞いたんぢやない、當の婦人から直接聞いたんだからね。大變口說いて居つたぞ。こんな愚かな仕業（しわざ）は全くあんたに不似合な斗（ばか）りではなく、何の益にもならんのだ。此の婦人は淑德と禮節の化身と云つてもいゝのだから。それ故どうか頼むから、婦人及びあんた自身の名譽のために、彼の婦人を構ひなさるな。』青年は又もや辯解仕ようとして、婦人は吃度自分を誰か他の人と思ひ違ひしてるのに違ひないと云ひました。すると僧侶は、『何と云ひまぎらさうと思つても駄目だよ。他の人のことを云つてるとは如何にしても思へぬ程君の姿形（すがたかたち）を詳しく說明したんだからな。』

善良な敎父程單純な男ではない若い貴族は、此の濡衣（ぬれぎぬ）の底には何か秘密があると悟りましたから、少し恥入つた樣子をして、將來は決してそんな惡戯（いたづら）は仕ませんと云つたのです。僧に別れると直ぐ彼は其の商人の家の前を通りました。すると婦人の方では若しか男が通るかと窓に立つて見てゐたのですが、頓て彼の來るを認めるや、きつとあの人には私の坊樣に云つた事の本當の意味が判つたに違ひないと思

ひまして、非常に嬉しい樣子を顏に表はして見せました。青年は通り掛りに女の顏を見て、彼女の目を凝つと注視すると、確かに自分の想像は當つてゐたと感じました。それからといふものは彼は絕えず其の街を行つたり來たりしてゐるので婦人は大滿足です。そして色々な目付や身振をしては、青年の推察の間違ひないことを保證してゐました。

悟りの速い婦人は程なく、先方も此方を思ふ樣になつたと思ひました。併し猶ほ一層熱烈に戀させる爲に自分の愛をもつと確實に知らして遣らうと思つて、又もや例の坊樣の處へ懺悔に行きました。そしてまだ懺悔を始めない中にわつと計りに泣出しました。善良な僧はそれを見て大層心を動かされて、又何か困つた事が出來たのかと尋ねました。すると婦人は『あゝ！　尊い敎父さま。私はいつぞやお話したあなたのお友達の人を又訴へに參つたのでございます。本當に彼の人は神樣に呪はれてゐるに違ひありません。吃度私を苦めに生れて來たのだと思ひますわ。ちつとも止めずに私を跟け廻して、永久に心の平和を失はせる樣なことを私にさせようとするのです。そんな事をすればもう私は二度とあなたの足下に跪いて懺悔する勇氣もなくなりますわ。』

『何ですと！　未だ彼奴はあなたのお家の前を通るのですか？』

『前よりもつと酷いんですわ。私があなたに賴んで叱らせたのを復讐する積りかと思ふ程です。以前

は一日に一度以上通ることは滅多になかつたのに、今では一日に七八回も行つたり來たりするんですもの。でも唯表を歩いたり私を見たりする丈けで滿足してゐて呉れゝば有難いんですが、或る女の手を借りて私の處へ帶だの財布なんかを圖々しくも送つてよこすんですよ、私がそんな物が無くて困つてでもゐるやうに。彼の男の無禮には私本當に腹が立ちましてね、神樣に對する恐れや、あなたに對する尊敬から堪へてはゐましたけれど、そうでなかつたら私どんなことをしたか分りませぬ。でもあなたが其の人のお友達だもんですから、あなたの爲に我慢しました。そして誰にも云はない中にあなたにお話しようと思つたのです。最初私は帶と財布を使の女に返しましてね、何うか間違ひなく向ふの人に渡して呉れと頼んだのですが、併し斯ういふ云ひなり次第になる女つていふものは何でも手當り放題自分の物にすることを考へました。殊に其の使の女つていふのは其の贈物を自分で取つて仕舞つて、向うへ行つて奧樣が受取りましたと云ひ相な女でしたからね、其の二品を取戻してあなたの處へ持つて來る方がいゝと思ひましたの。これがそうですわ。何うか彼の人に返して下さいな。そして云つて下さいまし、私はあなたの贈物も要らないんだつて。それから若し今迄の樣にいつになつても私を跟け廻すのを止めなければ、何んなことに成らうとそんな事に頓着なく夫や兄弟に告げると云つて下さい。あんな人の爲に私が少しでも非難される位なら、公然彼の人を非難侮辱してひどい目に逢はしてやる方が増しですから。

尊い教父様、こんなことが續くなら私がさうしたつて少しも惡くはないでせう？　私が怒るのも少しも無理はないでせう？』

僧は非常に高價な財布と帶とを受取つて云ひました、『いや奥樣、あなたがお怒りなさるのは少しも不思議はありません。それは名譽ある貞淑な婦人としては全く正當な立派なことです。此の間彼の男を叱りましたら、もうお後は追はないと約束したんですがな。然るに私の懲戒も意に介せず相變らずお家の周圍を徘徊したり、其の上無鐵砲な贈物をしたりするなら、きつと存分に叱責しましてもう二度と御迷惑を掛けさせないやうに致します。私の忠告を守つて此の事に就ては身内の何誰にもお話しなさるな。若しも騷動でも持上りますと、其の原因となつたあなたが後悔せねばならぬ事にならうも知れませんから。あなたの御名譽に就ては御心配なさるな。事件がどの樣にならうとも、あなたの貞操に就ては神及び人間に對して私が證人になります。』

婦人は此の言葉に滿足を得た樣子をして、話題を轉じました。此の坊樣に限らず、僧侶といふものが皆慾張りなことを婦人は知つてゐたものですから、金を與へる口實として斯う云ひました。『此の間中幾晚も續けて私の身内の者が夢に現はれましてね、お母樣も見えましたの。皆の悲しい苦し氣な顏を見ると私には、彼等が未だ地獄に惱んでゐて、神の御前で樂しく暮してゐないのか分りました。どうか人々

の靈魂の休まる樣にお祈りが仕て頂きたうございます。神樣が彼等を地獄の火炎から救出して下さる樣に、人々の亡魂の爲にグレゴリィ聖人の彌撒(みさ)を四十回唱へて頂たいのでございます。』かう云つて一摑みのお金を僧に渡しますと、彼は少しも遠慮せずに受取りました。そして又もや信仰を捨てないやうに婦人に說得した上、彼女に祝福を與へて去らせました。

婦人が去るや愚かな僧は道具に使はれてゐるとは露知らず、例の男を呼びにやりました。青年は僧の怒つた顏を見て直ぐ、これは何か婦人に就ての話だなと悟りまして、一言も口を挾まずにすつかり聞いて仕舞ふと、相手の婦人の思はくも了解出來ました。馬鹿な坊樣はありとあらゆる非難譴責を青年に浴せて侮辱し始めました。『君は眞面目腐つて、もう決して此の婦人を追はないと云つたんぢやないか。それだのに失敬千萬にも贈物なんかするから、婦人が怒つて突つ返すのだ。』すると青年はもつと判る樣に說明させようと思ひまして、『僕が婦人に贈物をしたつて?』と云ひました。『そうさ、仕ないなんて云つたつて駄目だぞ。君に返して吳れと云つて私に寄越(よこ)したのだ。この惡魔(モンスタア)奴(め)。これを見給へ、知つてるだらう?』

『こうなつちやもう一言もありません。』と青年は恥入り狼狽した態で答へました。『私が惡かつたのです。そして此の婦人は見上げた手剛(てごわ)い人ですから、もう私の名譽にかけて必らず迷惑はかけません。』

そこで僧は彼に財布と帶とを渡して、今度こそは誠實に約束を守れと云ひ聞かせました。青年は之からは今迄とは行を改めると約束して、婦人からこんな愛の證據を貰つたことを喜びつゝ立去りました。此の贈物の一層嬉しかつたことは、帶に、「我が汝を愛する如く汝も我を愛せよ」といふ格言が記してあつたのです。彼は直ちに婦人によく見える場所へ行つて、其の美しい贈物を受取つたことを示しました。婦人は戀人が仲々智慧があつて、事件が着々と進行するのを大變喜びました。今は唯十分に望みを遂げる爲に、夫の留守になるのを待つ計りです。

ところが程なく婦人の熱心に待望んだ機會は來て、夫の吳服屋は商用でゼノアに行かねばならぬことになりました。夫が出發すると直ぐに婦人は懺悔僧の許に行つて、いろ〳〵と搔口說いた末、『尊い敎父樣、私はもう〳〵我慢が出來ないといふことを申上げに參りました。もう何んな事になつたつて構はない、お約束を破つて凡てを身内の者に告げる積りです。あなたのお友達は本當に惡魔の化身です。今朝夜明前に彼の人の仕たことを申上げても迚もお信じにならないでせう。何うまあ嗅付けたか知りませんが、夫が昨日ゼノアに行つたことを早くも知りまして、まあ到頭無禮にも私共の庭に這入り込みまして、私の寢室に接近してゐる一本の木に昇つてね、窓を開かうとするんでございますよ。丁度私の室に入らうとする時に私は物音に眼を醒ましまして、何事か知らんと床を起出でました。私が「泥棒!」と叫ば

うとしますと、此の惡漢は自分の名前を明かして、後世一生のお願だから、敎父樣のことをも考へて、騷がずに逃して吳れと賴むのです。それで私は和尙樣の爲に何も云はず窓を閉めました。それから一度も姿が見えませんから吃度立去つたのでせう。それで敎父樣、私は此の樣な侮辱をも我慢せねばならぬものか何うかお伺ひするのでございます。私はもう堪へる氣はありませんし、彼の男もその時見たいにいつもそう易々と追つ拂へるとは限りませんからね。今迄あなたのお友達と思つて餘り堪へ過ぎたものだから、それで吃度彼の男は大膽になつてこんな侮辱を私に加へるんですわ。初め私の仕ようとしたことを敎父樣が許して下さつたらこんな事にはならなかつたのです。』

すると善良な敎父は大變狼狽して云ひました。『だが奧樣、確かに其の男なのですか？　誰かと間違つて居られるんではないですか？』

『まあ敎父樣としたことが、私は間違ひ度いと思つたつて間違へない程よく彼奴を知つてゐますわ。自分で名前を明かさないつたつて判つてゐるんですもの。』

『私も彼奴の仕たことは大膽不敵な罪惡だと認めねばなりません。あなたが窓を閉めて、彼奴の不埒な目的を阻止せられたのは全く正しいことです。あなたの貞淑は幾ら賞讚しても足らん位ぢや。併し神はあなたの名譽の難破を防いで下すつたし、あなたは二度迄私の忠告をお用ひなすつたのだから、もう一

度私のいふことを聞いて貰へまいかね。彼奴の無禮な仕業を御親類に告げる前に、もう一度私から彼奴に云はして下さい。そうすれば幸に彼奴の恥づべき情慾を抑制させることも出來るかも知れぬからね。若しそれで正氣に返らすことが出來んやうなら、もうおさらばぢや。どの樣にでもあなたの御自由になさいませ。』

『聖い和尚樣、お希望通り此度丈けはお委せ致しませう。併し斷言して置きますが、之が最後ですよ。もう決してあなたに不平を訴へに參りませぬ。』婦人はかう云ふと、非常に怒つてゐるかの樣にそゝくさと其處を立去りました。

婦人が去るか去らぬに、戀人の青年は何か新らしいことが持上つたかと遣つて參りました。すると僧は直ちに彼を密室に伴つて、彼の破廉恥なことや嘘吐きのことを、言葉を極めて譴責しました。併し青年はもう此の信仰厚き懺悔僧の非難にはすつかり慣れ切つて居りますから平氣の平左です。構はず喋らして置いて、早く眞相を知りたいと思ひました。そこで彼は僧に語らせようと、驚いたらしく好奇の眼を見張つて見せましたが旨くいかないので、『敎父樣、こんなにお腹を立たせるやうな事を何を私が仕ましたか？恰であなたの云ふことを聞いてると、私が救世主を磔刑にでも仕たかと人は思ひますよ。』

『そうだとも、君はそういふ惡漢だよ、君の破廉恥な欲情を以て新たにイエス基督を磔刑にした樣なも

のだ………そしてまあ此の惡者の落付てゐることは何うだ！ 人が見たら雪の様に純潔な男だと思はう。そう思はないにしても、少くとも其の罪はずうつと以前犯したので、もうすつかり忘れてゐるのだとでも思ふだらう。此の汚らはしい惡魔奴、世界一の淑德堅固な婦人に對して加へた侮辱をよもや忘れはすまいが？ 今朝夜の明けぬ時分何處に居たか、それを云はつしやい。』

『自宅に居ましたよ。そして自分の寢床に眠てゐましたよ。』

『自分の寢床にゐたと。だがお前は女の寢床の中に居ようとしたのだがそれが旨くいかなかつたのだ。』

『判りました。もう早や和尙樣のお耳に一件が發れたと見えますな。』

『そうさ、御亭主が留守だからつて、あの婦人が大手を擴げてお前なんかを迎へると本當に思つたのかいお前は？ 何としたことだ！ 昔はあんなに品行の嚴正だつた私の親友のお前が、そんな人間になつたとは迚も信ぜられな位いだ。夜中にうろつき步いたり、木に攀ぢ昇つて名譽ある婦人の寢室に忍び込まうとするんだからな。お前氣でも狂つたのではないか？ うるさく附き纒へばあの聖徒の様な婦人が遂にお前の心に從ふと思ふのは、正氣の沙汰ではない。婦人は咀虫の様にお前を憎み嫌つてゐるのが判らんのか？ 確かに夫人は世界中で一番お前を嫌つてゐるのだ。それだのにお前は、愛させようとしてゐるんだからな！ たとへ又先方でお前を嫌つてる樣子を見せないにしてもだ、私があれ程戒めて

あるんだし、私にした約束から云つても、遠慮せねばならんのだ。今迄の處は親類の者に云はぬ様に婦人に説得してあるから、君も非度い目に遭はずに濟んでゐるのだ。併し今後猶ほ止めないやうなら、もう勘辨しないでもいゝ、いや勘辨なさるなと迄私は勸めたのだ。それを承知の上で、何とでも勝手にするがいゝわ。もうお前の辯護をするのは飽々したからな。此の上婦人を苦める様な馬鹿なことをすれば、婦人が兄弟に云ひ附けたつて、私は最先にそれを讃めてやる積りだ。』

青年は婦人の意を悟りまして、出來るだけ僧を宥めました。『いや私は本當に馬鹿でした。併し決して二度とそんなことは仕ません。あなたにもう是以上婦人の小言を聞かせません。今からは婦人の德を認めませう。私の仕たことを親類に云はぬ様にいろ〳〵と婦人を宥めるにお骨折り下さつたことを厚く御禮申します。そしてきつと御忠告を役に立てませう。』

彼は本當にそれを役に立てました。婦人が自分に逢ひたがつてゐることは確かだと思ひましたから、翌晩庭園に忍び入りまして、指定された樹を攀ぢ上つて窓から入りました。婦人は勿論眠もやらず待ち焦れてゐた處ですから大喜びで彼を迎へました。初めて互に愛の言葉を交しつゝ、何も知らずに取持役を仕たお人好しの坊様を笑ひました。そして別れる前には、今度は懺悔僧の手を借りずに逢へる手段を相談して、それからは屢々不義の逢瀬を樂みましたが、極く注意深く仕たので誰にも氣付かれませんで

した。

第四話

ドン・フェリイスはブッチョ「坊」に、苦行をして救はれる方法を教へ、ブッチョ「坊」が其苦行をしてゐる間に、彼の妻と愉快な時を過す。

フィロメナの話が終ると、ヂオネオは言葉を極めて婦人の機智を賞した。女王は今度はパムフィロに向つて云つた、『そこでパムフィロ様、何か面白い逸話をお談仕て愉快を續けて下さい。』パムフロは速座に快諾して次の如く語つた、

女王様、世の中には自分が天國へ行かうと一生懸命骨折つて、却つて自分でなしに他人を天國に送る様な人はよくあります。それは兎も角として、此の近邊に近頃そういふ事があつたので、私はそれを之から申上げようと思ひます。

聞く處によりますと、聖ブランカヂオの近くにブッチョ•デ•リニエリといふ立派なお金持の男が住んで居りました。此の男は精神上の事に全く沒頭して居りまして、フランシス派の坊樣達といつも宗教を論じてゐたものですから、遂に人々からブッチョ「坊」と呼ばれるに至りました。精神生活に就ては此の通り

熱心ですし、家庭の足手纏ひとては一人の妻と女中ほか居ないので何の心配苦勞もないものですから、彼はよく教會に參りました。そして「我等の父よ」を唱へたり、說教を聽いたり、彌撒に出で、信者の歌ふ讃美歌には必らず加はり、斷食を守り、我身を苦めて街路掃除夫のやうに呻きました。彼の妻はイザベラと云つて、未だ若い二十九歳の婦人でしたが、若々しく生々としてゐて、丸々肥つて居りました。ところが夫はこの通り信心家で、おまけに老人ですから、時々厭と思ふ程非常に長い斷食を強ひて守らせられました。時には又眠たくて仕方がないとか、夫に何か談話でも仕たい時に、彼は基督の一代記を話して聞かしたり、アナスタシアス僧正の說教とか、マリイ・マグダレンの悲歎とか、其他これに似た事を說いて聞かしたりするのでどれ程有難迷惑か知れません。此の頃ドン・フエリイスといふ聖ブラシカジオの修道院に屬する一人の坊樣が巴里から修業を了つて歸つて參りました。彼は若い美男子で、機才に富み、科學上にも深い造詣を持つて居たのです。ブッチョ「坊」は大層彼と親密になりました。僧の方でも此の男の氣質を呑込みまして、何んな疑問でも易々と解いて呉れますし、大層崇高相にも見えますから、ブッチョ「坊」は彼に懺悔をしてからといふものは、晝食と云はず夕食と云はず、始終彼を家に招待します。妻君も此の僧がブッチョ「坊」を大變親切にして呉れますから、彼の僕の如くになつて、快く鄭重にもてなしました。僧はこんな風に絕えずブッチョ「坊」の家を訪れて、肥え太つて生々した女房を見るにつけて、

夫の大なる缺點を埋合す工夫もがなと考へ始めました。氣を付けて見てゐると、自分が妻君を思つてゐるやうに、妻君の方でも同じ感情を抱いてることが程なく分りました。そして好機の來るや否や直ちにその心持を夫人に傳へますと、向ふも十分氣が向いてることを知りました。そこまでは難なく運んだのですが、實行の段になつて礑と行詰つて仕舞つたのです。婦人は自分の家でなければ、まさか僧侶と他所で逢ふ譯にいきません。ところが其の家にはブッチョ「坊」が居て、長く家を明ける様なことは殆んどありませんから之も駄目。そこで學僧は失望の餘りすつかり沈み込んで仕舞ひました。然し幾度も訪問する中に彼は、ブッチョ「坊」が家に居ても少しも疑ひを受ける心配なしに、望みの遂げられそうな方法を考へ出しました。そこで或日ブッチョ「坊」に向つて云ふやう、『ブッチョ「坊」、私は幾度もそう思つたのですが、あなたの唯一の願ひは聖者になるといふことなんですな。だがあなたは此の目的に對して廻り道をしてゐられる樣に私には思はれる。もつとずつと近道があるのです。法王や偉い僧正逹はそれを知つてゐて、其の道を歩いてゐるのですけれども、俗人には知らしたくないので大秘密にして置くのです。といふは、僧職にある坊樣逹は主として喜捨に依つて生活してゐるのですから、若し俗人が勝手に聖人になる道を歩いて、お布施も何も仕ないやうになつた日には自分逹の顎が干上るからです。併しあなたは私の親友ですし、隨分度々私を饗應して下さつたから、世界中の何人にも告げずに、私の傳授に從ふなら、

其の道をお教へしませう。』

ブッチョ「坊」は是非其の秘法を知りたいと思ひまして、それを教へ給はれと最も熱心に歎願し、あなたのお許しがなければ如何なる人にも告げませぬと誓ひ、その法を行ふとなれば固く戒律に從ひ規則を守ると云ひました。

『それをお約束なさるとならば、お教へ仕ませう。そこで先づ承知して置かねばならぬことは、聖い博士達の說に依れば、祝福を得んと欲する者は、私が之からあなたに說明する滅罪の苦業をせねばならぬといふことです。併し此の苦行をしてからは今の樣に罪を犯してはならぬとは云ひません。私は斷言しても宜しい。今まであなたの犯した罪は、此の滅罪の苦行に依つて悉く淸められ拭ひ去られるのです。更に苦行以後に犯した罪惡とてもそれが爲に地獄に落ちる樣なことはなく、たゞ聖水を以て洗えば卽座に淸淨な身になることは、現在輕い罪に於けると同じなのです。そこで最も肝心なことは、此の滅罪を遣らうとする者は、先づ熱心に罪の懺悔をするといふことです。次には斷食をして、斷食が濟むと四十日の間は最も嚴重な節制を守らねばなりません。此の期間には仇し女に近づくは元より、自分の妻たりとも觸れてはならないのです。それから猶ほ、家の中に何處か一晩中天を仰いでゐられる場所を見付けて日が暮れるとそこへ行くのです。其處には大きな一脚の机を置いて、苦行者は足を確り地に付けて直

立してゐる時それに背を凭せて、兩腕は磔刑の形に横に伸してゐなければならぬのです。尤も腕には何かの支へをしたければしても差支へありません。斯様にして少しも位置を變へずに、朝まで天空を凝つと見詰めるのです。若し貴方が學者だつたら、私の敎へる祈禱を時々繰返さねばならんのですが、あなたは學者ではありまんから「我等の父よ」を三百遍と、「慶たしマリア」を三百遍、何れも三位一體尊崇の爲に唱へるのです。そして空を見詰めてゐる間は絶えず天地の創造主たる神の御事を思ひ、今自分が立つてゐる様に十字架の上に立たせられた主基督の受難のことを考へてゐなければいけません。斯くて朝の鐘が鳴つたら、隨意に着物を脱いで寢床に入つて眠つても宜しい。それから午前中に敎會へ參つて、少くとも三つの彌撒を聞き、「我等の父よ」を五十遍、「慶たしマリア」をもそれ丈け唱へなさい。それから商賣に行つて、正直に取引をし、晝食が濟んで夕方になつたら敎會の晩拜式に列して、私が書寫して上げる祈禱を其處で上げるのです。それを省けば何の役にも立ちません。でそれが濟んだら、又初めつからの通り天を仰ぐのです。私も之をやつたのですが、若し貴方が私の敎へた通りに遣り拔けば、苦行の期滿つる時には永遠の福祉に就て素晴らしい奇蹟を見るでせう。ただ其の間常に眞の信心を心に抱いてゐることが肝要です。』

『これはそんなに辛いことでもなし、期間だつてそう長くはありせん。私に十分行れます。ですから今

度の日曜から始めることに致しませう。』とブッチョ「坊」は云ひました。

例の如く僧に別れて家に歸ると、女房に丈けは話してもよい許しを得て居ますから、妻に其事を殘りなく語りました。夫人は學僧が夫を一つ場所に朝まで立たして置いて動かさない理由を直ぐに了解しました。併しそれは可成りいゝ誤魔化し法だと思ひましたから、此の事に限らず何んな事だつてもあなたの靈魂の救はれる爲ならば妾は喜んでお手傳ひします。そしてあなたの贖罪の行に神の恩寵のありますやう妾も共々斷食致しませう、と夫に向つて云つたのです。併しそれ以上のお附合は御免と思つたのです。斯く談が決まつて日曜になると、ブッチョ「坊」は愈々苦行を始めました。すると僧は主婦と相談の上今では夫といふ邪魔がありませんから、毎晩澤山の飲食物を持參して夫人と晩食を共にし、翌る朝ブッチョ「坊」が寢室に歸つて來る迄はイザベラの傍を離れません。ところがブッチョ「坊」が滅罪の場所と選んだ所は妻のイザベラの寢室の直ぐ隣りで、間には唯薄い壁がある丈けです。それで或る夜ブッチョ「坊」が「我等の父よ」を百遍唱へ終つた時、何だか隣室に物音がした樣な氣がしたものですから、祈禱を止めて今迄の姿勢の儘夫人を呼んで、お前何をしてゐるのかと訊くと、頓才の利いたイザベラは、

『あらあなた、私一生懸命よ。』

『何だつて！　何ういふ譯だ？』

すると（實に惡い女房ではありませんか）妻はから〳〵と笑つていかにも陽氣に答へるのです。『まあ、白ばつくれて何を云つていらしやるの。斷食すると夜眠れないつて、一千度も仰つしやつたくせに。』

ブッチョ「坊」は成程妻は斷食の爲に眠れないで、それで床の中で動き廻つてゐたのだと本當にそれを信じました。そこで云ふのに、『ねえお前、だから斷食しない方がいゝつて云つたんだよ。それだのにお前は自分から進んで仕たんだから、もう斷食のことは考へないで、眠ること計り考へなさい。………………………………………………』

『そんなこと御心配なさいますなよ。私の事はよく私が承知してゐますから。あなたはあなたのお勸めを一生懸命なさいな。私もそうしますから。』

ブッチョ「坊」は何も答へず、再び『我等の父よ』に取かゝりました。それからといふもの僧とイザベラとは他の部屋を寢室に選んで、ブッチョが滅罪をしてゐる間中そこで不義の歡樂に耽り、翌朝僧が歸ると夫が苦行から戻つて來ぬ先に、妻は自分の床に歸つて居りました。

斯くブッチョ「坊」は滅罪の苦行を續け、僧とイザベラは不義を續けてゐる中に、女はよく僧に向つて云ひました。『ブッチョが苦行するお蔭で私等は天國に行けるのね。』實際夫人はあんなに長い斷食を夫に強ひられてゐた揚句ですから、大層此の變化が氣に入つたらしく、ブッチョ「坊」の苦行が濟んでからも、何

處か場所を選んでは學僧と逢つて食事を共にしました。之で私が初めに申上げた言葉と合ふでせう。ブッチョ「坊」は自分が天國へ行く積りで苦行しながら、却つてその道を教へた僧侶と自分の妻とを天國に送つてゐたのです。

第五話

貴人リチャルドは、フランチェスコ・ヹルジェレシに乘馬を贈る條件として、誰の耳も屆かぬ處で彼の妻君に談をさして貰ふ。彼は何とも返事せぬ妻君に代つて返事までも引受け、遂に有りふれた結果となる。

パムフィロの物語の結末を聞いて淑女達は同意を表した。それが濟むと女王はエリザに次を語る樣に柔しく命じた。エリザは持ち前の少し唐突な調子で語り始めた、――

自分計り物識りで、他人は何も知らぬと己惚れてゐる人が譯山あります。それで人を嘲弄してゐる積りでゐると、後になつて豈圖らんや自分こそ嘲弄されてゐたことが分るやうな場合がよくあります。ですから私は、何の用もないのに亂暴にも他人の智慧試し抔をする者は大馬鹿だと思ひます。併し私の說に贊成しない者ぁ世間にはあるでせうから、女王の御命に從つて、ピストイアの或る騎士の身に起つた

事をお談仕ようと思ひます。

伊太利ピストイアのヱルジェレシの家に屬する騎士で、フランチエスコといふ男がありました。大層なお金持で、智慧の優れた何事にもよく通達した人でしたが、同時に又無限に慾の深い人間でした。此の男がミランの市長として赴任せねばならぬことになりまして、身分柄必要な準備は悉く整ひましたが、唯一つ自分に相應する立派な乘馬が無いのです。方々探しましたが氣に入つたのが見付からないものですから、少々焦れ氣味です。扨て當時ピストイアにリチヤルドといふ一人の青年がありました。生れは賤しかつたのですけれ共大變な金持で、非常に見掛けの立派な身の廻りを飾立てる男だものですから、普通誰でも彼を「貴人」と呼んで居りました。彼はもうずつと以前から、フランチエスコの美しい妻君に戀焦れてゐたのです。彼がフランチエスコの妻君に惚れてゐることは世間周知の事實ですから、或日のこと或人がフランチエスコに向つて、「貴人」が立派な馬を持つてゐるからあすこへ行つてあなたが讓つて吳れと賴んだら手に入るでせう、あの男はあなたの奧樣を非常に慕つてゐますから、と云つたのです。そこでフランチエスコは慾張心が動いて、心では「貴人」が無料で自分に進呈して吳れゝばいゝと思ひつつも、使者を遣つて、あなたの乘馬を賣つて吳れませんかと問合せたのです。「貴人」は之を聞くと喜んで云ふ樣、『あなたの全財產を投出しても私の乘馬をお賣りすることは出來ません。併し次の條件を御承

知下されば、それを贈呈致しませう。つまりそれをお渡しする前に、あなたの見てゐらつしやる前で奥樣とほんの二三言談話をさして頂きたいのです。併し談話の言葉が、奥樣の他には誰の耳にも聞えない丈けの距離は置いて欲しいのです。』騎士は慾に心を引かされ、一方で彼奴を嬲つてやらうとも思つたものですから、喜んであなたの條件を容れませうと云つたのです。それから「貴人」を館の客間に殘して置いて妻の部屋に行き、駿馬が譯なく手に入る次第を述べ、お前は私と一緒に來て「貴人」のいふことを聞いて吳れと云ひました。だが決して一言も云ふな、何とも返事をするな、と注意を與へたのです。夫人はそんな事は大反對でしたが、夫の利益になることならばと喜んで承諾し、リチヤルドのいふことを聞くためにフランチェスコに從つて客間に參りました。リッチアルドは再び主人に敬禮をして、部屋の片隅へ行つて夫人の傍に腰かけました。そこは誰にも聞えない處ですから、扨て云ふには、『氣高き夫人よ、私があなたの美しい緻縹を非常に戀慕つてゐることは、もうずつと以前からあなたもお氣付きのことゝ信じます。あなた程美しい方を、確かに私は他に一人も見たことはありません。御樣子の優美さ雅かさ、比ひ稀なる御高德等は、私が敢て申上げる迄もありません、何んな男子の心をも捕へるに十分です。私があなたを愛する程強く熱烈に女を戀した男は曾て一人もありません。そんなことを口でくど〳〵述べる必要はありません。いや、更に私は斷言します。私の下らぬ生命が此の四肢五體に宿つてゐる限りあ

なたを愛します。否もつとです。彼の世へ行つても現在の樣に熱烈に愛することが出來るなら、私は永久にあなたを愛します。あなたが種類を問はず如何なる物を持つてゐられるにしても、それは本當にあなたの物と申すことは出來ません。私及び私の所有物總てこそ眞實にあなたの物なのです。私の愛を一層確かに證明する爲に申さねばなりませんが、私の力で出來る事を何でもお望み次第御命令下されば私はそれを非常なお惠みだと思ひます。唯命じて下さりさへすればいゝのです。私が云付ければ誰でもすぐに服從するのですから。私はあなたのご緻縹に嘆願します。私の心の平安、私の幸福、健康を司るのはそれなのです。他に何にもありません。それ故私は賤しい僕としてお願ひします、親愛なる戀人よ、あなたに私の靈魂の救はれる道はあなたのお情の他にありません。私の魂はたゞあなたに對する愛と、あなたに愛してもらへるかといふ希望丈けに生きてゐるのです。何卒今までの樣な無情を私にお示しにならないで、あなたの物である私を憐んで慰めて下さい。私が之ほどあなたの御緻縹を慕つてゐるのを御覧になつて、何卒私があなたの爲に生きてゐるのだと云ひ得る樣にして下さい。それでもあなたの氣高いお心が私の願を叶へて下さることが出來ぬとならば、私は屹度死ぬでせう。そして私が死ねば、あなたが私を殺したんだと云はれるでせう。併し私の死亡があなたの名譽を損ずる損じないは別としましても、あなただつて時々は良心の呵責を受けると信じます。時々はあゝあんなことを仕なければ良かつたと後悔

なさるでせう。心を責められる時には思ふでせう「あゝ！　可哀想なリチャルドに同情を寄せなかつたなんて、私は何といふ悪い女だつたらう、」と。併し幾ら後悔したつて取返しは付きません。一層悲歎を増すばかりです。ですからそんな事にならない様に、今なら私を助けることが出來るんですから、よく物事をお考へになつて、私を殺す代りに私に同情して下さい。私を世界一の幸福者にするも、世界一の不幸者にするも、あなた一人のお心にあるのですから。併しあなたに御迷惑を掛けることは欲しません。若しどうしても愛して下さることが出來ぬなら、私もこの様に立派な價値ある戀の報ひとして甘んじて死にませう。が、若しもやさしい嬉しい御返事を下さるなら、すつかり度を失つてあなたの前に震へてゐる私の沈んだ元氣を引立てゝ下さるのです。私は救はれるのです。』かく云ふと二三滴の涙を溢し、深い溜息を吐いて夫人の答へを待つて居りました。

今まで彼が武術を見せ、小夜樂を聞かせ、其他彼女の愛を得べき有ゆる手段方法を盡しても、曾て心を動かしたことのない夫人が、今此の熱心な戀する男の言葉に深く動かされて、今まで一度も經驗したことのないこと——即ち、愛する、といふことを感じ始めました。夫の命令がありますから口は利きませんでしたけれ共、それでも「貴人」には、夫人が物が云へたらその返事を仕度さうな樣子が有々と分りました「貴人」は暫らく待つてゐても返事がないので初めは驚きましたが、すぐに夫フランチェスコの

計略を見破りました。夫人の顔を見ると、時々彼をチラリと見ては溜息を抑へてゐる樣子ですから、彼は急に元氣が出て、やゝ反身になつて新らしい策を立てました。それは夫人の代役をすることで、夫人に聞かして置いて自分で返事をするのです。『リチャルドさま、私は本當にあなたが大變熱心に眞面目に私を愛してゐて下さることはずつと以前から知つて居りました。それが今あなたの仰つしやることを聞いて一層明かになりましたので、私は滿足でございます。實際滿足すべきが當然ですもの。若し私があなたに對して時に冷酷であつたとしましても、私の心の奧底も私の顔付と同じだと思つて下さいますな。それ處ではありません。私はいつもあなたを愛して居たのです。他のどの男の人よりも愛してゐたのです。でも世間を恐れ、惡い評判を避ける爲に、あゝ振舞ふ必要があつたのです。併し今こそ私があなたを愛してることをはつきりお知らせして、私に對するあなたの愛に報ひなければならない時が參りました。ですから何卒元氣をお出しになつて、氣をお引立てなさい。御存知の如くフランチェスコはミランの市長に親任の爲出發する所です。そしてあなたは唯私を愛するが故にこそ御立派な乘馬を夫に贈りなさるのですから、私はあなたに對する愛情の爲に、眞心よりお約束します。あの人が出發したら、必らず二三日中に私の處へおいで下さい。そうすればゆつくりお逢ひすることが出來ます。ひよつともうきりお話しする機會がないかも知れませんから今申して置きますが、庭に向いた私の窓から二枚の白

布が吊下つてゐるのを御覽になつたら、其の翌る晩に、誰にも認められない樣に十分御注意して、庭の戸口からお出下さいまし、私お待ちして居りますから。其處で邪魔なしに一夜戀を語り明かしませう。』

貴人は夫人の代りに斯く語り終ると、今度は自分に返つて云ふやう、『愛する夫人よ、あなたの親切な御返事を承はつて私は喜びに溢れる程です。餘りの嬉しさに何とお禮の言葉も口に出ない位です。たとへ思ふ通りに申上げられたとしましても、御親切に相當する程十分に感謝することは迚も出來ませぬ。ですから私のお禮申上げたいと熱望することは、思ひ遣りの深いあなたの御推察に任せます。たとどの樣なことでも躊躇なくあなたの御命令に從ふと申すばかりです。私にそれ程のお惠を授けて下さるのですから、私は力の及ぶ限りを盡して、それに報ゆる積りです。それは保證します。今の處これ以上申上げることはありません。愛しき夫人よ。神があなたに喜びを賜ふやうに、それ迄私はあなたを神の御手にお預けして置きます。』

夫人は斯く云はれても一言も發しませんでした。そこで「貴人」は立上つて主人の許へ行くと、騎士の方でも彼の立上つたのを見てやゝ出迎へて、微笑みつゝ云ひました、『どうです、私はよく約束を守つたとお思ひでせう？』

すると貴人は、『いゝえそう思ふものですか。あなたは奥樣と談をしてもいゝと約束なさつたのに事實

は石像と談をさせたのです。』

フランチェスコは之を聞くと大喜びです。之迄とても妻君を尊敬してゐたのですが、今は一層いゝ女房だと尊敬の念を増しました。そして云ふのに、『そこで、あなたの御乘馬は私の物になるのでせうな？』

『えゝさうです。併し折角お許しを得てもこんな結果になるんだつたら、あんなことを頼まないで奇麗に呈げて仕舞へばよかつたと思ひます。まあ斯うなつたのも皆な神樣の思召です。あなたは馬を買つたと云へるでせうが、私は何の得るところが無かつたのだから賣つたことにはなりません。』

騎士は之を笑ひました。そして今では乘馬が手に入りましたから、數日經つと、市長職に就く爲にミランに向つて出發しました。何の束縛も無くなつた夫人は、「貴人」の言葉や自分に對する彼の愛を思ひ出し、自分の爲に立派な馬まで人に遣つて了つたことを考へたり、時々彼が窓下を通るのを見たりすると、獨り心に思ふやう、『私は何をしてゐるんだらう？　何故私は靑春を空に費してゐるんだらう？　夫はミランに行つてゐる。半年の間歸つて來ない。何時此の留守の間の埋合せがして貰へるのか知ら？　私がお婆さんになつてからだわ。それに貴人見たいに立派な戀人が何處にあらう？　私は一人つ切りだ。誰も恐れる必要はない。面白い思ひの出來る時にして惡い法はないわ。今見たいな好機が年中ある譯ではないし、誰にも分る筈はなし。よし又分つたにした處で、機會を利用してから後悔する方が利用しなか

つたことを後悔するよりいゝわ。』から決心しまして、或日のこと貴人の云つた通りに、二枚の白布を庭に面した窓から下げて置きました。貴人は之を見ると大層喜びまして、夜になつてから竊かに庭の戸口に忍んで行きますとそれは開いてゐました。もう一つの扉を通つて家の中に入りますと婦人は彼を待つてゐたのです。彼の入來るを見るや婦人は立つて來て、非常に鄭寧に迎へました。彼は幾度となく夫人を接吻して、頓て二人は二階に上り、……………………………ました。之は最初の逢瀬でしたが、決して最後ではありませんでした。夫のフランチェスコがミラン滯在の間中、否、彼が歸つて來てからでさへも、貴人は時々訪ねて行つては、互に喜び合つて居たのです。

第六話

リチャルド・ミヌトロはフィリッペロ・フィギノルフィの妻に戀し、その夫人の嫉妬深きを知つて、彼女の夫と自分の妻と或る娼家で密會の約束になつてゐると告げる。夫人は夫に逢ふ積りで其處へ行き、夫と同衾してゐるものと思つてゐると、それがリチャドであることが分る。

エリザの話が終ると、女王は貴人の智略を讃めた後、今度はファンメッタに次なる物語を爲すやうに命じた。ファンメッタは滿面に笑を湛えて、『大喜びで致します、女王樣』と答へて、かく語つた。——

私共の都フロレンスには何でも無い物はありませんし、何んな事柄に就ても話題になる實例は澤山にありますが、私は暫らく此の都を去つて、エリザ樣同樣、私達とは別な世界で起つたお話を少し計り申上げませう。卽ちネープルスに飛びまして、其處の或る貞操堅固な凡ゆる情事を蔑み嫌つてゐた婦人が、彼女を戀する男の機略に陷つて、未だ戀の花を知らぬ中に戀の果實を味ふに至つたお話を致します。それは皆樣に將來ある事に就て要心を敎へ、同時に事件の面白さで皆樣を樂ませるでせう。

當伊太利國中でも最も古い、そして恐らくは最も美しい都ネープルスに、リチアルド・ミヌトロといふ一人の靑年がありました。生れは貴族で、名高い大資產家でありました。此の靑年には旣に非常に美しい愛嬌のある夫人があるに拘らず、別に他の一人の婦人を戀するに至つたのです。此の婦人は名前をカテラと云つて、もうずつと以前からネープルス第一の美人と一般の人に認められてゐたのです。彼女の夫はフィリッペロ・フィギノルフィと云つて、生れはミヌトロと同じ貴族でしたが、貞淑な夫人は世界中の何物よりも深く彼を愛し尊敬して居りました。

リチャルドに此のカテラ夫人に戀しまして、夫人の好意と愛とを得るに足るかと思はれるあらゆる手段工夫を試みましたが、總て水泡に歸して少しも望みは遂げられないものですから、殆んど絕望の淵に沈みました。それでも情熱ばかりは抑制することが出來ないので、何の生きてる樂みもなく、と云つ

て死ぬ方法を決心することも出來なかつたのです。こんな氣持を續けてゐる中に或日のこと親しい婦人達に逢ひますと、そんな戀は捨てゝ仕舞ひなさいと勸められました。幾ら骨を折つたつて無駄なのだ、カテラは夫のフィリッペロの他には全く何物も眼中にない程深く愛して居て、おまけに非常に嫉妬深くつて、小鳥が一羽空中を飛んで行つても夫を自分の手から攫つて行きはしないかと思ふ程なのだ、といふのです。リチャルドはカテラの嫉妬深いことを知ると、彼の目的を遂ぐべき計略を不意に思ひ付きました。そこで彼は、カテラに對する死身の戀も、他の別な婦人に移つた樣な風を裝ひまして、それを證明する爲に、今迄カテラに對してのみ示した御機嫌取りや熱烈さを悉く此の新らしい婦人に示し始めました。暫らくそうして居ますと、ネーブルス中の人が皆――カテラ迄が――今ではリチャルドの戀してゐるのはカテラでなく、此の第二の婦人だと思ふ樣になりました。彼は非常に熱烈に此の第二婦人を追つかけたものですから、一般の人がそれを事實と認めたのみでなく、カテラ自身もすつかり信じて仕舞ひまして、以前には彼に戀されてゐると思ふ爲に彼の前に出るといつも恥ぢらつて打解けなかつたのが、今ではもう平氣になつて、彼に逢ふ度每に、他の人にするのと變りなく雅かに打解けた樣子で挨拶する樣になりました。

扨て季節は大層暑い時分でありましたので、ネーブルスの習慣に依りまして、澤山の紳士淑女が海濱

へ避暑に參ります。リチャルドはカテラも友達と一緒に其處へ行つたことを知ると、自分も仲間を連れて出掛けました。カテラの方の團體から幾度も招かれたので、彼は厭さうな振りをして出掛け、行つてからもちつともカテラと一緒に居たくない樣子をしました。程なく婦人達は、カテラも一緒になつて、リチャルドの新らしい戀のことをいろ〳〵揶揄(からか)つたり、冷かしたり仕始めました。彼は其の事を云はれて大變弱つた風を見せますと、人々は一層面白がつて嬲つたのです。其の中に斯かる場所の習ひとて、婦人達は二三人づゝ彼方此方(あちこち)に散らばりまして、カテラとリチャルドと、少しの仲間が後に殘りました。するとリチャルドは、カテラの夫の或る戀愛事件について何氣もない樣に一寸口を滑(すべ)らしますと、案の條カテラは急に激しい燃ゆる樣な嫉妬を起しまして、リチャルドの云つた意味を是非知りたいと思つたのです。彼女はもう居ても立つても堪らなくなつたものですから、遂にリチャルドに向ひ、あなたが現在最も愛してゐらつしやる御婦人の利福の爲に、何うか今フィリッペロに就て仰つしやつたことを明白に聞かして下さい、と頼んだのです。するとリチャルドは、『あなたは私の戀してゐる人の爲と仰つしやるので、さうなると何んなことでも否とは申されません。併し私は喜んでお話しますけれども、次の條件を守つて下さらないと困ります。つまり私の之から申上げることが確かに眞實であるといふ證據の上らない中は、あなたの夫にも、其他何人にもそれを告げないと約束して下さい。そこで御都合が宜しけれ

ばそれを見居ける方法をお知らせしませう。』

婦人は喜んで此の要求を容れました。リチャルドの云ふ事は眞實だと思つたものですから、秘密は固く守ると誓つたのです。そこで誰も他人の居らぬ場所へ隱れて、リチャルドは云ひました。『若し私が以前の樣に今あなたを戀してゐたら、私はあなたに苦痛となる樣なことは迚も云ふ氣になれないでせう。併しその戀はもう消失せましたから、平氣で何でもお話しすることが出來ます。フィリッペロは私があなたを戀したのを怒つたのか、それとも私があなたに愛せられたとでも誤解して怒つたのか、それは何れか私には分りませんが、何れにしても私は怨恨を受くることは彼に對して實際何もしないのに、彼は私がそれを仕たとでも思つてでせう。それと同じことを私に對して仕ようとして好機を覘つてゐたのです。つまり私の妻を弄ばうとしてゐるのです。聞くところに依りますと、彼はもう長い間こつそりと私の妻に幾人も使をよこしては口說いてゐたのだそうです。これは妻自身の口から聞きました。妻は私の指圖通りの返事をやりました。然るに今朝家でですね、私が此方へ來る前に、一目見て怪しい職業の者と知れる女と妻が何やら懇談してゐるのを見付けたのです。そこで私は妻を呼んで、あの人は何の用で來たのかと詰りました。すると妻は云ふのです。『フィリッペロさんのお使なんです。きつとあなたが私に遣らせなすつたあの返事を見て、私が思ひ通りになると思つたんでせう。私の決心が聞きたいといふので

す。そして、私が望むなら、此の町の或る待合で密會する樣に取計らはう、是非々々頼む、さうして呉れと強請(せが)むのです。何うして貴夫(あなた)がこんな下らない交渉を私にあの人とさせなさるのか私にはちつとも譯が分りません。私丈けならもうとつくに打切りにしてゐるんですのに、』と。もう斯うなつては少しひど過ぎます。私は放つて置くべきでないと思ひました。あなたの忠實な愛情に對する報ひが何んなものだか、お知らせしなければならないと思つたのです。曾てはその愛の爲に私がも少しで死にさうにさへなつた程貞淑なあなたに對して餘りですからね。併し私の云ふことが作り事でない證據に、あなた自身の目で見屆けられる樣にと思ひまして、私は妻に言付けて下婢にかう返事をさせました。喜んで明日の正午頃、人々が眠つてゐる時分に其の待合に參りませう、と。使は此の答を聞くと喜んで歸りました。扨てそこで、私が妻を其處へやるとはあなたもお思ひにならないでせう。だが若し私があなたなら、彼が密會しようとする女の代りに自分で其處へ行きますね。そして暫らく其處に一緒にゐて、彼の望みを果たさせた上で、自分の本體を知らしてやりますね。かうすれば彼を十分辱めることも出來ますし、あなたや私に對して加へやうとした侮辱をも罰(ばつ)することが出來る譯です。』

カテラは之を聞くや嫉妬强い人の習として、そんなことをいふ人の人柄をも忘れ、策略があらう杯とは思はずに、全然信じました。その上今までちよい〳〵夫にあつたこと等をも思出しまして、カン〳〵

に怒つて仕舞ひ、吃度私はそれをやる、その位のことは譯なく出來る、そして旨くいつたらうんと辱めてやつて、今後よその女の顏なんか見れば、其の度にこれを思出して震上がるやうにしてやる、と斷言しました。リチャルドは自分の計畧の素的に上首尾に運ぶのを見て大喜悅です。そこで一層彼の女の決心を煽り立て、同時に、彼の話したことを誰にも告げない樣に注意して下さいと念を押しますと、夫人は固く信義を守つて口外せぬと約しました。翌朝リチャルドはカテラに話して置いた娼家の「やりて」婆に面會して彼の計畫を告げ、出來る丈けの便宜を計つて呉れと賴みました。主人の「やりて」婆は大變彼に快くして、彼の請を快諾し、彼女の云つたり仕たりすることに就て彼に談合しました。此の家には窓もなく光線とては少しも入らぬ一つの暗室がありましたので、リチャルドの指圖に從つて主婦はそこにいゝ具合に寢床を作りました。時分になるとリチャルドはそこに這入つて、カテラの來るのを待受けて居りました。

カテラはリチャルドの言葉を聞いて必要以上に信じましたから、全身を怒りに燃やして家に歸りました。するとフィリッペロも歸つて參りましたが、何か他に屈託することがあると見へて、いつも程妻に對して愛情を示さなかつたのです。之を見るとカテラの疑ひは愈々强固になりまして獨り思ふやう、『ほんとにまあ彼の女に全で心を奪はれてるんだよ、明日逢ふ積りで。でも大丈夫私が邪魔してやるからいゝ。』

そんなことや、彼と明日逢つた時云ふべき言葉等を考へて、一晩中碌に眠りませんでした。
　云ふ迄もなくカテラは正午になると一人の友を伴つて、リチヤルドの敎へた待合に行きました。すると「やりて」婆がゐたものですから、今日フイリツペロが來たか何うかと尋ねました。「やりて」婆はリチヤルドから習つた通り答へました。「あなた樣が彼の方とお逢ひなさる筈のご婦人でございますか？」
『そうです。私がそうなのです。』とカテラは答へました。
『では彼方（あちら）に居りますからお逢ひ下さい。』
　カテラは意に染まぬ探索ではありますが、女に導かるゝまゝに、顏全體に被布（ヴエール）をかけて、リチヤルドの居る部屋に這入つて後ろの扉に錠を下しました。リチヤルドは夫人の入來るを見るや嬉しさに跳り上り、彼女を迎へて柔しく『よくいらつしやいました。可愛い人！』と云ひました。カテラは若し一言でも物を言へば、自分がリチヤルドの奥樣でないことが夫に見破られるかと、何も云はずに…………………………、非常に嬉しい樣を示しました。
　部屋は眞つ暗でしたが、何方（どちら）も未だ本體を現はす時ではないと思つてそれを喜んでゐました。暫らく一緒にゐても相手を見分けることは出來なかつたのです。リチヤルドはカテラを…………　…………、互に口も利かずに時を過しました。…………………………遂にカテラは今こそ憤怒を存分述ぶべき時と思

ひまして、全身を怒りに燃やしつゝ云ふやう、『あゝ……女つて何といふ不仕合せなものでせう！　幾ら夫を愛してゐても實に酷い扱ひを受けるのです。可愛想な不幸な私は此の八年間といふもの自分の生命よりもあなたを愛してゐたのに、あなたつてば此の通り他所の女に無中になつて戀焦れてゐるんだもの、あなたは本當に罪人です、惡人です！　あなた今誰と一緒にゐると思つてゐるの？　あなたが永い間僞りの抱擁や外見計りの愛情で瞞してゐた女と一緒にゐるんですよ。お氣の毒ですがあなたの戀人はこゝには居ません。私はカテラです。リチャルドの奥樣ではありませんよ。此の不實な惡人！　お聽きなさい、私の聲が判つて？　本當に私ですよ。話をきいてからといふもの、早くお前の面の皮を引剝いて恥を搔かしてやらうと思つて、ほんとに千年も待たされた氣がしましたよ、卑劣な、呪はれた犬畜生！　あゝあ！　可愛想なわたし！　この年月こんな人を一生懸命愛してゐたんだ！　そして賤しい犬のお前は、よその女と一緒に居るんだと思つて、……………………、……………………「………………………………………………………………！」…………………………………………、……………………………………………………、……………………………………………………

『下等な犬奴！　でも有難いことに相手はお前の思つてる樣な他所の奥樣ではなく、お前自身の妻なのだ。……………………………………、……。でも神樣の御慈悲と私の先見のお蔭で、そんな不義は起らずに濟んだの

です。何で返事を仕ないの、この卑怯者は？　何で默つてゐるのさ？　私のいふことを聞いてゐ中に啞にでもなつたのかい？　お前の眼に指を突つ込んで目玉を引づり出したい位ゐだよ。内密でこんな惡事を仕ようと思つたんだね。神樣のお助けで、それがお前以外の人にも知れたのです。私はお前さんが思つてる樣な薄のろではありませんよ。』

リチャルドの方ではこの怨言を聞いて大喜びで、それに對する返答として一層熱烈のやうな振りをしたりします。併しカテラは更に叱責を續けて、「今更私を厭々ながら抱いたりなんかして瞞そうと思つて、汚らはしい畜生奴！　私を賺し宥めようとしたつて駄目ですよ。御親類やお友達の前であなたの罪を數へ上げなければ滿足出來ません。私はリチャルド・ミヌトロの奥樣ほど美しくないんですか、此の惡人？　私だつて立派な身分ぢやありませんか？　なぜ返事しないの、呪はれた犬奴？　あの女の何處が私よりいゝのさ？　お止しなさい、觸らないで下さい。…………………………………………………？　私だといふことが分つたものだから照れ隱しにそんなことをするんでせうが、もう默つて云ふなりにはなりませんよ。神樣のお力を借りてお前の欲情を苦めてやるんです。私はリチャルドを迎へにやつたつて文句はないでせう？　彼の人はご自分よりも私を愛して下すつたのに、私は一度もあの人を見さへ仕なかつたんです。あの人と不義したつて何の差支へもないと思ふわ。あなたは彼の人の奥樣と此

處で密會する積りだつたんだから、密會したも同然です。人が變つたのはあなたのせいではありませんからね。だから私がリチャルドさんを呼んだつて、あなたは私を責める資格はありません。』

夫人の言葉は長く、非難は手痛かつたのです。遂にリチャルドは、此の儘夫人を歸しては飛んでもない事になるかも知れないと思ひまして、自分の本體を明かし、夫人を計略に陷れたことを告げようと決心しました。そこで彼女を兩腕で押へて動けない樣にして云ふには、『生命より大事なカテラさん、怒りなさるな。唯愛してるたのみでは望みを遂げることが出來ないものですから、戀の爲に策略を設けてあなたを瞞したのです。私はあなたのリチャルドですよ。』

カテラは之を聞きリチャルドの聲と判つたものですから、寢床から飛出さうとしましたが動くことが出來ません。そこで聲を上げて叫ばうとしますと、リチャルドは兩手で彼女の口を押へて、『奧樣、濟んで了つたことはもう取返しは付きません。一生涯泣き明したつて元の通りにはなりません。若しあなたが叫んだり、他人(ひと)に話したりすれば、次の二つの結果が生じますよ。第一に（之は中々輕視すべきことではありません）あなたの名譽とお名前に傷が付くことです。なぜと申して、あなたは私が瞞してあなたを此處へ連れて來たと仰つしやるでせうが、私はそれは嘘だと云ひます。さうでなしに、お金や贈物をする約束であなたを此處に誘つたのだけれ共、思つてるた程私が約束の品を上げなかつたものだから、

あなたが腹を立てゝそんな有りもせぬ噂や非難を云擴めたのだと云ひます。世間といふものは他人のい
い事よりも悪い事を信じたがることはあなたもご存知でせう。だからあなたよりも、私のいふ事の方が
信用されます。第二には、あなたのご亭主と私の間に恐ろしい敵意が生じて、遂には私が彼を殺すか、
彼が私を殺すかつていふ樣な結果になるでせう。そうすればあなたには永久に、平和も幸福も無くなつ
て仕舞ひます。ですからどうか、最も可愛い人よ、ご自分の名譽を汚し、同時にご主人や私に危害を及
ぼす樣なお考へはお捨てなさい。欺かれた者はあなた一人ではありません。之迄いくらも有りましたし、
將來とても澤山あるでせう。それに私があなたを欺いたのはあなたの最も大事な名譽を奪ふ爲ではない
のです。あなたを愛する餘りに仕たことなのです。將來とても其の愛に變りは有りません。いつもあな
たの從順な僕です。之迄とても長い間、私自身及び私の所有物の凡てをあなたに捧げてゐましたが、之
から後は一層あなたの物に致しませう。あなたは何事にもご愼重でいられるのですから、此の事に就て
も恐らくそうだらうと私は信じます。』

カテラはリチャルドの斯く云ふを聞いて潸々と泣きました。夫人は大變怒つて、非難の言葉を澤山並
べましたけれ共、リチャルドの云ふことは全くだ、きつとそういふ事になるだらうと思ひました。そこ
で答へて、『リチャルド樣、私はあなたが私に對して實行なさつた侮辱と欺瞞に堪える力を神樣が與へて

下さるか何うかは存じませんが、此處では騷ぎ立てない積りでございます。私が愚かで、過度に嫉妬深かつた爲にこんな場處へ參つたのです。併し私は何うにかしてあなたのなすつた事に復讐しない間は、決して承知出來ませんよ。あなたは望みを遂げたのですから、もう私を行かして下さいな。お願ひですから私を歸して下さい。』

リチャルドは夫人が未だ大變に怒つてゐるのを見ますと、彼女の心を和げてからでなくては歸すまいと決心しました。そこで彼は柔しい言葉で夫人を宥め、一生懸命賴み、祈り、願ひしたものですから、遂に和解が出來て、二人は猶ほ暫らくそこに留つて居りました。遂にカテラ夫人は、…………………………………、其日よりはリチャルドに對する之れまでの冷酷さを捨て、最も熱烈に彼を愛するに至りました。そして常に極く用心に用心をしつゝ、二人は其後屢々戀に耽りました。……………………………………。

第七話

テダルドは情婦の誤解を怒つてフロレンスを去り、數年の後巡禮姿となつて歸る。情婦に對談してその誤解を解き、且つ彼を殺したといふ科を受けてゐる彼女の夫の生命を救ひ、且つその

男と彼の兄弟とを和解せしめ、相變らず夫人との馴染を續ける。

人々の賞讃の中にファンメッタの話が終ると、女王は時間を空費せぬ爲に直ちにエミリアに向つて次の話を語る樣に命じたので、彼女は始めた、――

ファンメッタ樣は前のお話でフロレンス外の土地にお出かけになりましたが、私は又私共の都に立返りませう。此の市の或る男が一度失つた愛婦を取戻した御話を申上げます。

フロレンスにテダルド・エールといふ一人の若い貴族がありました。此の青年貴族は、アルドグランヂノ・バレルミニといふ人の妻でモンナ・エルメリナと呼ぶ夫人を深く戀して居りました。態度風彩の宜しい人でしたから當然此の戀は永續しなければならない筈なのですが、意地の惡い運命が其の幸福を邪魔をしたのです。それで、初め夫人はテダルドに對して大變懇であつたのに、何うした譯か突然態度一變しまして、心から彼を嫌ふ樣子を示しました。手紙を受取らぬは素より、どんな理由があらうとも逢はうとさへ仕なくなつたものですから、青年はその爲に非常に沈んで憂鬱になりました。併し彼は深く自分の戀を隱して居たので、誰も戀の爲に彼が斯く打沈んでゐるのだとは氣が付きません。自分に何の落度もないのに斯うなつたのですから、種々巧妙な手段を用ひて戀の恢復に努めましたが、總て無駄骨折に終つたので、遂に世を遁れようと決心しました。何處かへ身を隱して了へば、自分にこんな病ひを

起させた先方の夫人に慘めな樣を見られないでも濟むと思つたのです。そこで出來る丈けの金を秘かに調達しまして、何もかも打明けた一人の友の他誰にも一言の通知をもせず、フロレンスを立退いてアンコナに參りまして、フィリッポ・デ・サンロデッチョと名乘つて居りました。其處で或る金持の商人と知合になり、其の僕となつて、主人と共に其の持船に乘つてサイプラスに航海しました。彼の態度動作が非常に主人の氣に入りまして、十分の給金を彼に支拂つて呉れるのみならず、商賣を共同事業にして、大概の取引を彼の處理に委ねました。彼は又非常に手際よく愼重に商賣を遣つたものですから、數年ならずして彼自身が羽振りのいゝ豪商として非常に名聲が揚りました。

此の商賣に係はつてゐる間も、彼は時々情ないエルメリナの事を思出しては失戀の惱みを痛感し、逢ひたくて堪らなくなることもありましたが、又思ひ返しては愈々決心を固め、斯くして七年が間は戀情に打ち克つて居りました。ところが或る日のこと、サイプラスで誰か唄を歌ふのを聞きますと、それは彼の作つた唄で、エルメリナに對する彼の愛と、彼に對するエルメリナの愛と、更に二人逢つた時の幸福とを織交ぜて歌つたものです。これを聞くと急に昔がいろ〳〵と思出されまして、エルメリナは未だ自分のことを忘れないでゐるに違ひないと思ふと彼の女に逢ひたさが胸一杯になつて、もう何うにも堪らなくなつたものですから、遂にフロレンスに返ることにしました。商賣の事を萬事取片付けて、唯一

人の僕を伴ひ、アンコナに向つて出發しました。財產總てがアンコナに到着すると、それを例の共同者の知人でフロレンスに在住する者の許に送りて、自分は僕一人を連れて、今聖地參拜から歸つた計りの巡禮の樣な姿に化けてこつそりとアンユナを出ました。フロレンスに着くと彼は、戀する夫人の家に程近き、二人の兄弟が營なんでゐる小さな旅宿に入りました。もしか夫人に逢へるかと、彼は直ちにエルメリナの家に行つて見ますと、日中だのに窓も扉も固く閉つてゐるのです。若しか夫人は亡くなつたのではあるまいか、それとも轉宅でもしたのかと氣掛りになりました。そこで打沈み乍らそこを去つて、今度は兄弟達の家に行つて見ると、四人の兄弟が皆喪服を着けて家の前に立つて居ますから大變吃驚しました。併し自分の扮裝（みなり）や人柄が以前とは全で違つてゐるから、中々夫と見分は付くまいと思ひまして、思ひ切つて一人の靴屋を呼止め、彼の人達は何故喪服を着てゐるのかと尋ねました。すると靴屋の答へに、『それは斯うい理由（わけ）です。彼の人等の兄弟の一人でテダルドといふ人が、もう長らく當地に居らなかつたのですが、十五日前に人に殺されたんです。何でも噂では兄弟の人が法廷に出て、殺したのはアルドブランヂノ・パレルミニとかいふ男だと訴へたので、其の人は逮捕されたそうです。それといふのが、殺されたテダルドは其の男の女房に惚れてゐて、こつそり歸國して女に逢はうとした爲めなんだそうです。』

テダルドは自分と間違へられる程自分によく似た男がゐるものだらうかと驚きました。そして誤つて災難に遭つたアルドブランヂノを氣の毒に思ひました。夫人は何の變りもなく生永へてゐることは分りましたが、もう夜になつたので、彼此と思案に暮れつゝ宿屋に歸りました。僕と共に夕食を濟まし、最上階の部屋の寢床に案内されて臥せりましたが、種々な考への爲に昂奮したのと、床の硬いのと、それに多分夕食がよくなかつたのでせう、夜中になつても眠付かれないのです。それで彼が眠もやらず物思ひしてゐる時、凡そ眞夜中頃と思しき頃、誰か屋根傳ひに家の中に下りて來る樣に思ひました。すると程なく扉の隙孔から明りのさすのが見えました。そこでそつと扉の隙間のところへ寄つて覗いて見ますと、非常に美しい一人の若い婦人が燈火を持つてゐると、今屋根から下りて來たらしい三人の男が其の女の方に寄つて行きます。三人は暫らく小聲で話をしてゐましたが、やがて中の一人が婦人に云ふのに、『有難い、もう之からは何の心配もない。テダルドを殺したのはアルドブランヂノ・パレルミニといふことになつて、おまけにアルドブランヂノはそれを白狀して、もう死刑の宣告も下つたのだからな。だが俺達は飽くまで隱してゐなくちやならん。若し俺達が遣つ付けたといふことが分らうものなら、アルドブランヂノと同じ目に逢ふんだからね。』斯ういふと、婦人諸共下に降りて行きました。女は今の話を聞いて大變嬉し氣な樣子でした。

テダルドは此の様子を見聞すると、人間の心といふものは何といふ錯誤に陥り易いものだらうと思ひました。第一に自分の兄弟共です。見も知らぬ他人を弟と思つて埋葬したり喪に服したり、罪もない人を罪人として間違つた告訴をして死刑の宣告させたりする。第二には法律や法官共の盲目滅法な嚴酷さです。眞相を探索するといふ口實の下に、殘酷にも罪なき人を拷問して罪に落し、而かも自ら呼んで正義の代理、神の代役と稱してゐるが、實は豈に計らんや不正の代理、惡魔の手先となつてる事が屢々ある。最後に彼はアルドブランヂノのことを思ひ、彼を救助すべき手段を案じて、獨り頭を悩まして居りました。

彼は翌朝床を起出づるや、僕を殘して唯一人エルメリナ夫人の家の方に行きました。自分の到着すべき好機が來たと思つたのです。丁度扉が開いてゐたものですから中に這入りますと、夫人は街に面した小部屋に、悲しさ辛さに堪へぬ如く床の上に座つてゐました。彼も之を見ると同情の念に絆されて涙を零しました。彼は夫人に云ふやう、『奥様、そんなにお歎きなさいますな。慰めは直き手近にありますから。』

婦人は之を聞くと面を上げて涙の中より云ひました、『お前樣、見れば知らない巡禮のやうですか、私の慰めや悩みに就て一體何を知つてゐるつて云ふの？』

『奥樣、私はコンスタンチノープルから參りました者で、あなたの悲歎の涙を喜びの笑ひに變へる爲につまりあなたの御良人を死よりお救ひ申す爲に、近頃神樣から遣はされたのでござります。』

『つい近頃コンスタチノープルからいらつしたのなら、何うして私の夫や私のことを御存知になつたのですか？』

巡禮はアルドブランヂノの災難を始めより殘らず物語つて、アルドブランヂノとは如何なる人か、幾年以前に結婚したか、其他彼に就てよく知つてゐる事柄を悉く述べました。すると夫人は彼の云ふことが一々圖星に當るものですから、すつかり驚いて了ひ、彼を豫言者と思ひ込みまして彼の足下に跪き、若しアルドブランヂノを救ひにお出で下さつたのならば、もう時は迫つて居りますから直ぐにお取掛り下さいと、一生懸命賴みました。

巡禮姿のテダルドは殊更高僧らしい風を裝ひつゝ、『夫人よ、お起ちなさい。涙を收めて私の之から云ふことをよくお聽きなさい。併し之は決して誰にも申してはなりませぬぞ。神のお告げに依れば、あなたの現在の災難は且てあなたの犯しなさつた罪の報ひとして來たのぢや。神樣は此の苦惱に依つてあなたの罪を淸めようと思召されたのぢや。それ故あなたはその罪を十分悔ゆるが肝心ぢや、でないと今よりもつと恐ろしい災難が降りかゝりますぞ。』

『聖者さま、私は澤山罪を犯して居りまして、神樣がその中の何れを悔めと仰せられるのか分りませぬ。ですから何卒、それを御存知ならば敎へて下さいませ。そうすればそれを償ふ爲には出來る丈けの事を致しますから。』

『いや夫人、誠に私は其の一つの罪を知つて居る。それ故それを聞かせよとは頼むまい。ぢやがそれを懺悔すれば、悔恨も大きくなる譯なのぢや。がまあ要點に戻つて、あなたは今迄に戀人を持つた覺えはないかな、それを聞かせなさい。』

夫人は之を聞くと、今迄誰も知らないと信じてゐたので大變驚いて、深い溜息を吐きました。尤もテダルドと間違へられた男が殺されて以來は、テダルドの秘密を知つてゐた例の友がうつかり口を滑らした爲に、多少の噂はそれに就て擴まつてゐたのです。併し夫人は全く此の巡禮を偉い人と信じまして、

『まあ、神樣は人間の凡ゆる秘密をあなたにお告げになつたと見えますね。ですからもう何もあなたにお隱し仕ようとは思ひません。成程私は若い時分に不幸な青年を熱烈に愛しました。つまり其の人を私の夫が殺したことになつて居りますのです。其の人が殺されてから私はどれ程悲み惱んだか知れませぬ。其の人がフロレンスを立去る以前には隨分私は彼に酷く辛く當りましたけれども、併し其の人が居なくなつても、永く他所へ行つてゐらしても、あんな不幸な死に樣をなさつても、何うしても私は彼の人を

忘れることが出來ないのでございます。』

『いやあなたが昔愛してゐたのは殺された不幸な青年ではない、テダルド・エールなのぢや。がお聞かせなさい、何うして彼の男に腹を立てたのか？　何か氣に入らぬことを彼がしたのかな？』

『いゝえ、決して私の氣に觸ることなんかしなかつたのです。私が腹を立てたのは、或る時私が懺悔をした憎らしい坊樣の言葉なんです。私がテダルド樣に對する愛情を告げ、彼の人との關係を話しますと、其の坊樣は本當に吃驚する樣な恐ろしい顏をして私を睨んで、若し私がそんな不義を止めなければ惡魔が私を引呑んで地獄の底に連れて行き、罪を罰する爲に私を永遠の火の中に投ずると云つたのです。それで私はほんとに怖くなりまして、もう彼の人とは親しくすまいと決心したのです。それでもう少しも取合はないことにしまして、手紙もお使も一切受付けなかつたのです。でも私は世界中の何より彼の人を愛してゐたのですから、も少しの間彼の人が執拗く私に強請んだら、私の固い決心も折れたらうと思ひます。併し彼の人は絕望して行つちまつたんでせう、まるで太陽に解ける雪の樣にいつか姿が見えなくなつたんですもの。』

『奥樣、今あなたの心を惱ますのは此の罪丈けですか？　テダルドが一度もあなたを強ひたことがないのは私は確かに知つとるのぢや、あなたが彼の男を好きになつたのは無理に好きにされたのではなく、

自分の勝手に彼の男を戀したのぢや。あんたが彼を手に入れんと欲したればこそ、彼はあなたに仕へて、あなたの親切に甘へたのだ。あなたは非常に樂しく此の戀を味つたのぢやから、假令男の方から最初戀したにしても、その戀を千倍も募らせた責任はあなたに有るのです。確かにそうだつたのだ、私は知つとる。それだのに、何ういふ動機であんなにも慘らしく扱ふ氣になられたのか？ 地獄に落ちる位ゐのことは初めから分つてる筈だ。併し濟んでから惡いことをしたと後悔したにしてもだ、不義をするのを止めさへすればそれでいゝのぢや。あんなに慘酷にするには及ばんのだ。彼があなたのものとなつて居たのと同樣に、あなたは彼のものになつて居たのだ。彼のものになつて居らなかつた間なら、何とでも自分を處置してよい譯だ。が一度彼のものとなつた物を持主の承諾なく奪ふといふことは、泥棒ぢや、恐ろしい不實といふものぢや。扨て私は僧侶だ、だから僧侶の遣り口はよく知つとる。あなたは僧侶の事をよく知らないらしいから、私は彼等の本體をお話して置かう。多少惡口になるかも知れぬがそれは皆あなたの爲を思ふ故なのだから、私を惡く思ひなさるな。昔は坊樣と云へば非常に尊い善智識であつた。が今時私は和尚だ抔と廣言し、和尚面を下げる奴は、頭巾の他には何も僧侶らしい物を身に備へて居らんのだ。其の頭巾さへ坊主らしくはない。初め坊樣の戒律を作りなすつた人達は粗い布で作つた極く粗末な見すぼらしい頭巾を被つて、僧侶といふものは俗事を蔑視して肉體を包むにもこんな粗末

な衣を用ふるといふことを證明してゐたものだが、當今の坊様を見なされ。最上等の布でこしらへた大きな、二重になつた、光り輝く頭巾を被つて、其の形とても美しい法王形に變へてゐるのぢや。此の扮裝で教會や公けの場所を、俗人見たいに何の恥づかし氣もなく氣取り歩いてゐるのぢや。そして丁度川の漁師が一網で出來る丈け澤山の魚を捕らうとするやうに、此の坊様といふ人達もその袈裟の廣い襞を以て、出來る丈け澤山の娘や、寡婦や、其他愚昧な男女を捲込み、引つ捕へようとしてゐるのです。之に計り氣を取られて他のお勤めは怠り勝ちな有様だ。そして實を云へば、彼等は僧侶の頭巾を被らず、唯その色を眞似てゐる丈けなのぢや。昔の坊様は人々を救ふことを念懸けてゐたのぢやが、今時の奴等と來ては女と金のことばかり考へてゐるのだ。彼等の熱心に望むことは唯、下らない作話や夢物語をして愚かな人々の心を脅かして、罪を淸めるには喜捨とお布施に限ると云つて聞かすこと丈けぢや。すると愚かな人々は自分の靈魂のことなんか考へずに、亡くなつた身内の人の爲にと思つて、或はパン、或は酒、或は金と種々な物を、信仰の爲に僧侶になつたのでなく懶惰の爲に坊主になつた此の人達の所へ持つて來るのぢや。勿論神様に直接お布施やお祈りをすれば罪の償ひになることは事實ですが、併しそれを受取る人間共が何んな者か一度考へて見たら、寧ろそれを自分の手に取つて置くか豚にでも投げて遣つた方がずつと増しと思ふだらう。其上坊様達は金持が中々貧乏人の様に容易く金を出さないのを

知つてるもんだから、馬鹿氣た作り話や怪談なんかを語つて貧乏人から金を絞り取らうとするんぢや、用事のあるのは金丈けさ。遊惰や贅澤に暮す人々を非難するのは、人々を女と交らせぬ樣にして置いて、自分達が女を手に入れたい爲なのぢや。詐欺や不正の所得を罰して取戻した金は此方へ捲上げて、頭巾を大きくしたり、大僧正や其他の僧正に賄賂をする足しにするのぢや。それを持つてゐれば地獄に行くと脅かして取つた其の金をね。こんな樣々な不徳が露見して非難されれば、「我々のする通りにするな、我々の云ふ通りにしてろ」と答へて、それで最大の罪惡をも云譯が出來たと思つてゐる。人々を導く神の牧者たる彼等よりも、導かるゝ羊たる一般の人の方が一層鞏固な鐵の意志を持てといふも同じではないか。斯ういふ返事をされても坊樣の望み通りに解釋しない人もありますが、大部分は彼等に都合よく解するのです。今日の僧侶が、云ふ通りに仕なさいといふのは、つまり斯うしろといふのです。彼等の財布に澤山金を入れてやつて、何でも秘密を打明け、貞操を守り、忍堪強く、他人の不正を許し、惡口を吐くなといふことなのです。勿論皆な非常に結構なことです、正しい、大變聖いことです。併し何故それを他人に云ふのか？　それは俗人がその通りにすれば、坊樣達に出來ないことが出來る樣になつて來るからなのぢや。金がなければ彼等が怠けて食つて行かれぬことは誰でも知つてる筈ぢや。若し俗人が自分の快樂の爲に金を使つてゐれば、坊樣は怠けて暮せぬではないか？　若し人々が周圍の婦人と色

事をしてゐれば、坊樣の手に女が入らぬ譯ぢや。人々が忍耐して他人の不正を許さなければ、坊樣も人の家を汚しに來ることが出來まいぢやないか。だが私がこんな例を澤山述べるのは何が爲めぢや？ いつもいつも先刻云つた樣な云譯をするからぢや。自分が尊くなく、行ひが正しくないと思ふなら、家に靜つとして居たらいゝぢやないか？ それとも德を行ひたいと思ふなら、福音書の聖い言葉を守つたらいゝぢやないか？ 基督は先づ實行してそれから說敎したのだ。彼等も先づ模範を示して、それから說敎したらよからう。俺は無數の肉慾的な好色な坊樣を知つてゐる。人妻に懇するのみか、尼樣にまで交るのぢや。聲の限り絕叫して、肉のことを非難攻擊する其の御當人がそうなんだ。もう少しよく彼等の此の種の行爲を見よう。彼等は勝手なことをする。併しそれが神の眼から見て正しいか何うかは疑問だ。そこで、坊樣があなたに云つたことが假りに本當だとしても、そして又成程夫婦としての法を破るのは非常な罪惡としてもだ、人の物を盜むといふことはもつと大罪ではあるまいか？ 人を殺すといふことは人を悲慘な身に落すよりも更に大きな罪惡ではあるまいか？ 併し男女間の罪はこれ人間の持つて生れた罪惡だといふことは誰でも認めなくてはならんでせう？ 泥棒、殺人、といふ樣な行ひは不正な動機から起るのです。既にテダルドの所有となつて居たものをあなたが盜み取つたことは先に申しました。が私は更に云ひますぞ。若しも彼が自殺でも仕たなら、彼を怒らし、彼に甚だしい冷酷を示した

あなたが其の原動者なのぢや。法律から云へば、罪悪の原動力となつたものは、下手人と同じく有罪なのぢや。彼の七年間の悲慘な放浪生活の原をなしたのがあんただといふことは否定することは出來ん。それ故あんたが彼と密通したよりも、今云つた罪の方が大きいのだ。繰返していふが、テダルドはこんな扱ひを受ける樣な落度が少しでもありましたか？　確かにない、それはあなたも既に認められた。彼は他の婦人達の前で、正直に、疑ひを受けずに出來る時にはあなたのことを賞め、讃へ、尊敬し切つてゐたのぢや。彼は財産も、名譽も、自由も――悉くあなたの手に捧げてゐたのぢや。彼は若くて立派だつたではないか？　青年のやる何事にかけても勇敢だつたではないか？　他の青年に比して美しいと云はれて居たではないか？　凡ての人から愛せられ、尊ばれ、媚びられて居たではないか？　一つも否とは云へまいが。それに何ぞや、唯一人の嫉妬家で下劣な坊樣風勢の言葉を聞いて、あゝも殘酷に彼を捨てようと決心するとは何うしたことぢや？　私には女が何うして男を輕視して、彼を避けるやうになるのか實に譯が分らん。神は凡ゆる他の動物に遙かに優る高貴さを男に與へ給はつたし、一人の婦人に愛された時には男は非常に立派な人間になり、女を無限に愛して、彼の女を喜ばせ永久に自分を愛させる爲には、何でも骨を惜まずに努めるのに！　あなたは坊樣の口から聞いたことは覺えて居られよう。そんな奴は吃度大食ひな鵜つ食ひに違ひないんぢや。そ奴はテダルドを逐ひ出して自分が戀人の地位を乘

取らうとしたんだ。して見れば之は天の配劑に反する罪惡だ。神は凡ての事を釣合よく配置して運轉してゐられるのだから、それを破らうとする者は必らず罰を受けるのぢや。あなたはそんな坊主の云ふことを聞いて何の理由もないのにテダルドを足蹴にしたから、それであなたの夫もテダルドの事で誤解を受けて災難に逢ひ、あなた自身も不幸になつたのだ。若し此の災難を逃れようと思ふなら、次のことを約束して且つ實行なさい。つまり、若し萬一テダルドが長の放浪から當地に歸つて來る樣なことがあつたら、彼を好遇し、愛し、十分親しく優しくして遣りなさい。惡辣な坊樣のいふ事を聞かなかつた以前と同じに交際なさい。』

巡禮の長い談義が終ると、熱心に耳を傾けてゐた夫人は、彼の議論は非常に正しくて自分は其の通りの罪を犯したと思つたものですから、云ひました、『神の僕の聖者さま、あなたの仰つしやることは全く眞實でございます。そしてお談に依つて僧侶とはどんな人間か大凡分りました。今までは私は彼等を神聖な人々だと信じてゐたのです。テダルドに對してあんな態度に出たのが確かに重々誤りであつたことも認めます。若し私の力で叶ふことならお云附の通りに償ひを致しませう。でもどうしてそれが出來ませう？　テダルドは永久に歸つて來ないでせう。死んだんですもの。ですから償ひが不可能とすれば、何の爲にお約束するんだか分りませんわ。』

『奥様、神のお告に依ればテダルドはまだ死んでは居らんのぢや。健全に生きて居る。そしてあなたさへ彼を愛してやれば、彼に十分あなたを愛する心はありますぞ。』

『まあ、お言葉にお氣を付け遊ばせ。私はあの人が小刀で幾所も突かれて、私の家の戸前で死ぬのを見たのでございます。私は彼を抱上げて、流るゝ涙で彼の顔を洗つたのでございます。それが爲に二人のことで悪い噂が擴まつたのです。』

『いや奥様、あんたが何と云はれようと、テダルドは確かに死んでは居らん、生きて居るんぢや。私の云つた通りに彼を迎へると約束なさるなら、直ぐに彼に逢ふことが出來ます。』

『喜んでそう致しますわ。私の夫が放免されて安泰の身となつたり、テダルドが生きてゐたりするのを見る程嬉しいことは、世界中にありませんもの。』

テダルドにはもう自分を明かしてもよい時が來たやうに思はれました。そこで夫のことに就てもつと夫人を慰めて置かうと思ひまして、『奥様、御主人の安全を保證する爲に一つの秘密をお打明けしますから、何んなことがあつても口外してはなりませんぞ。』と云ひました。夫人は巡禮の樣子から、彼を非常に聖い人と信じてゐましたから、二人は全く誰も居ない所に行きました。そこでテダルドは懐中より一箇の指環を取出しましたが、それは最後に夫人と共に過した夜、夫人から彼に與へたもので今迄大事に

保存して置いたのでした。彼はそれを示して云ふには、『夫人、これに見覺えがありますか？』

夫人はそれを見ると直ぐに分つて、云ひました『はい覺えて居ります。それはずつと以前テダルドに遣つたものです。』

すると巡禮は立上つて、直ちに着てゐた衣を脱ぎ頭の被り物を取つて、フロレンスの口調で、『私が分りますか？』

夫人は見ればそれがテダルドだものですから、幽靈でも見た樣に驚愕しまして、テダルドがサイプラスから到着したのだとは思はず、墓場から出て來たのだと思つて、恐怖に捉はれ、震へながら逃出さうとしました。するとテダルドは、『奥さん、何にも恐がるには及びません。あなたも私の兄弟共も皆私が死んだものと思つてゐますが、私は死には仕ないのです。』

婦人は幾らか安心して、彼の聲にも覺えがありますから、凝乎と注視すると確かにテダルドです。彼の女は泣出して彼の首に抱き付き、接吻して云ふやう『あゝ愛しいテダルド樣・本當に歸つていらしたんですか？』

テダルドも彼女を抱き接吻して、『奥樣、今は挨拶に熱中して居べき時ではありません。直ぐに行つてアルドブランヂノを救はなければなりません。明日の晩迄には吉報を齎らしたいと思ひます。確かに甘く

行くと思ひますが、彼が放免される見込みが付きましたら、今晩又あなたの所へ参りませう。その時種種詳しいお話は仕ます。』と云つて彼は再び衣を着、頭巾を被つて、夫人に挨拶をなし大丈夫安心なさいと云つて立去りました。そして直ちにアルドブランヂノが監禁されてゐる場所に行きました。アルドブランヂノは救はるゝ望みとては無いので、來るべき死の恐ろしさを思ひ惱んで居ります。テダルドは懺悔僧の様を裝ふて牢番の許しを得、彼の牢舍に入つて傍らに座して云ひました。『アルドブランヂノ君、私は君を救ふ爲に神様から遣はされた友人なのです。神は君の無實を憐れと思召しになつたのです。併し神を敬ふ爲に、一つ私の願ひを聞いて貰はねばなりません。そうすれば必らず明晩迄には、あなたの豫期して居られる死刑が、無罪放免になります。』

「勇ましき人よ、一面識もないあなたが私の安全について御心配下さるからは、御言葉の如くあなたは私の味方に違ひありますまい。私は死刑を宣告されてゐますが、それは實際無實の罪なのです。恐らく私は他に澤山の罪を犯した爲に、それで斯ういふことになつたのでせう。併し神様が私に御同情下さつたのなら、私は神様の爲に何なりと出來ることは致します。ですから何卒何事なりとも仰つしやつて下さい。若し救はれるとなら、吃度忠實に御言葉に從ひませう。』

『私の賴みといふは之丈けです。テダルドの兄弟を許してあげて下さい、彼等はあなたがテダルドを殺

したと思ひ込んであなたを此の樣な身にしたのです。併し彼等があなたに謝罪したなら、何卒彼等を許して兄弟友人として交際つて下さい。』

『害を受けた人でなければ本當に復讐の快味も分りませんし、何れ程復讐の念が强烈なものか分りません。併し神樣が私を救ひに來て下さつたのですから、私は快く彼等を赦して遣りませう。苦し生きて此の場を逃れることが出來たなら、努めて快く彼等に對する樣に致しませう。』

巡禮は之を聞くと喜んで、もうそれに就て何事も云はず、明日の日が暮れぬ中必らず吉報を持つて來るから安心しておゐでなさいと力付けて囚人に別れ、役所へ行つて役人の一人を傍に連れ行き、扨て云ふやう『お役人、誰でも眞理の正しいと認めることを進んで爲すのが人間の務です。殊にあなたの樣な職掌にある方はそうであらうと思ひます。罪無き者が罰せられたり、罪を犯した者が罰せられなかつたりしないやうにするのが肝要です。斯うして私が參上しましたのもあなたの名譽の爲、叉罪惡を懲罰の爲です。あなたはアルドブランヂノ•パレルミニを嚴しくお裁きなすつて、彼をテダルド•エール殺害の眞犯人と認め宣告なされましたが、之は全然無實なのです。私は今晩の眞夜中迄には、かの青年の殺害者共をあなたのお手に引渡します。』

偉いお役人はアルドブランヂノの事では大層心痛して居られた處ですから、巡禮の言葉を熱心に聽き、

何かと談合の末、眞夜中頃宿屋を襲つて、主人たる二人の兄弟と僕共とを何の抵抗する暇もなく捕縛しました。拷問に掛けて犯行の次第を訊問しようと其の準備をしますと、彼等は拷問を待つ迄もなく、テダルドを殺したのは私共ですと白狀したのです。何が爲に殺したかと問はれますと、彼が彼等の或る者の妻を口說いて、彼等の外出を幸ひに强ひて望みを果たそうと仕たからだといふのです。テダルドは遂一の樣子を知ると人々に別れを告げて秘かにエルメリナ夫人の家に參りした。夫人は夫の吉報如何といふことや、テダルドとの仲直りに就て、仲々心も安まらず、獨り待兼ねて居りますと、そこへテダルドは來て喜ばし氣に云ひました『最も愛する夫人よ、お歡びなさい。明日は必らず御主人が無事息災に歸つて來られますから。』そして有りし次第を殘らず語つて安心させました。夫人は此の思ひ掛けなき二つの事件――卽ち、本當に死んだと思つてゐたテダルドに再會したことと、夫のアルドブランヂノが災難から無事に逃れること――の爲に非常に喜びまして、愛情を籠めてテダルドを抱いて接吻しました。それより…………………、互に心から和解して喜び合ひました。夜が明けるやテダルドは自分の之より爲さんとする處を夫人に說明し、固く秘密を守る樣に戒めて起出で、相變らず巡禮の扮裝をして家を出ました。時間が來たらアルドブランヂノを救出す仕事に取かゝる爲です。晝になると役人は、もう證據は十分と思ひまして直ちにアルドブランヂノを放免し、數日後殺人の行はれた場所で惡人共の首を

切落させました。

アルドブランヂノ自身は元より、妻、知人總てが彼の放免を喜びまして、之といふも皆彼を獄舍に訪れた巡禮のお蔭であると思ひまして、彼を招待し、町にゐる間は心置なく其家に滯在する樣にと云ひました。彼は出來る丈け其の男を尊び饗應しましたが、其の男の誰なるかを知つてゐる夫人は尙更よく彼をもてなします。併し暫らくするとテダルドは、アルドブランヂノと自分の兄弟等とを和解させねばならぬと思ひました。兄弟の者がアルドブランヂノの放免を心外に思ひ、一方には又如何なる復讐を受けるかとの恐れから、武器を携へてることを知つたからです。そこで彼はアルドブランヂノに約束通りして吳れと求めますと、快く承知したものですから、そこで巡禮は、翌日大饗宴を催すべき支度を賴み、主人にはあなたの親類の御夫婦を皆招んで下さい、私は自ら出掛けて行つて、和解の印だからと四人の兄弟を夫婦共々招びませう、と云つたのです。アルドブランヂノは何とでも聖者の御心次弟と答へたものですから、彼は直ちに四人の兄弟の許に行き、打破り難き理由を數々述べて、アルドブランヂノとの友誼を恢復する爲に是非謝罪して吳れと說服しました。それが甘く出來ると、何卒御夫婦打揃つて明日アルドブランヂノの食事にお出で下さいと招きました。すると婦人達は彼の誠を信じまして、喜んで招待を受けることになりました。

そこで當日の饗食の時になると、テダルドの四人の兄弟は例の如く喪服を纒ひ、數人の知人と共に初めてアンドブランヂノの家に來たのです。主人は彼等を待焦れて居りました。そこで招待された客全體の面前で、兄弟の人達はアルドブランヂノの足下に身を投げ伏し手を突いて、彼に對して爲したことを赦して呉れと數願しました。アルドブランヂノは眼に涙を浮べて、愛情深く彼等を迎へ、一人々々に向つて挨拶をなし、簡單な言葉を以て彼の受けた害を赦しました。次には彼等の姉妹や夫人連が、之も同じく喪服を着て參りましたのでエルメリナ夫人及び他の婦人達から雅かに迎へられました。斯くて人々は食卓に就き、見事な饗應に預りまして、何事も愉快に運びましたが、テダルドの身内の者が彼等の不幸の爲に皆喪服を着てゐるので、一種のぎごちなさが一座に漲つて、何となく沈み勝ちで、折角巡禮僧の發案になつた宴會も不成功といふ感じを或人の胸に抱かせました。巡禮は直ちに之を認めまして、今こそ此の陰氣を逐拂ふべき時と思つて、他の客が未だ食事を終らぬ中に立上つて云ひました『今日の宴會は少し陰氣な樣ですが、テダルドの姿さへ見えればすつと引立つのです。テダルドはもうずつと前から皆樣の眼の前にゐるのですけれ共、お分りにならない樣ですからお敎へ仕ませう。』と云つて彼は巡禮の衣裝を脫ぎ捨てゝ、綠色の胴衣を着た姿となつて人々の前に立ちました。皆非常に吃驚して彼を見詰めましたが、彼がテダルドだと信ずる氣には中々なれません。テダルドは此の樣子を見て、親達のこと

を始め、身内にあつたこと、扨ては彼自身にあつたこと等を澤山述べました。すると兄弟や知人等は嬉し涙を溢して彼の許に走り寄り抱擁しました。婦人達及び親類無親類まで悉く彼を抱擁して喜びを述べましたが、エルメリナ丈けは仕ませんでした。アルドブランヂノは之を見て云ひました、『之は何うしたことだ、エルメリナ？ 他の御婦人達は皆テダルド様に挨拶をなさるのに、お前は何うして仕ないのだ？』

すると夫人は人々の聞く前で答へて『私があなたに再びお目に掛れたのは皆なあの人のお蔭なんですから、私は何誰にも増して心から歡迎致しますわ。でも彼の若者が殺されてからといふもの、私とテダルド様と何かあつた樣な噂が擴まつてゐましたから、それで私遠慮してゐたのです。』

『そんな噂なんか打捨ときなさい。私がそんな事を氣にすると思つてゐるのかい？ 私の生命を救つて呉れたのを見ても、その噂の嘘なことは十分明瞭に證明されてゐる。それに私は元からテダルド様を信じてゐたのだ。早く立つて御挨拶を仕なさい。』

夫人は望む處ですから直ちに夫の命に從ひました。彼女は立上つて他の人同樣に彼を抱擁して、厚く感謝しました。アルドブランヂノの寛大な態度にテダルドの兄弟達を初め、居合せた紳士淑女達は大變愉快を感じて、今迄噂の爲に或る人々の胸に生じてゐた欝憤も消散しました。テダルドは皆の人々から

祝辭を受けると、兄弟姉妹等の着てゐた喪服を無理に脱がせて、他の衣類を持つて來る樣に命じました。着物を着換へると人々は舞ひ、唱ひ、其他樣々の遊戲をして樂みました。斯くて陰氣に始まつた祝宴は大陽氣の中に終りました。客人達は上機嫌の儘今度はテダルドの家に押かけて晩餐の饗應を受け、猶ほも此の有樣で祝宴は數日間續きました。

フロレンスの市民は長い間テダルドを死から甦つた不思議な人間と思つて居りました。多くの人々は之が本當にテダルドか知らんと後になつても怪む位でした。兄弟の者迄がさうなのです。人々は中々彼がテダルドだとは信じ切れないのです。若しも殺された人間の素性が明瞭に分る事件が起らなかつたなら、恐らく永久に信じられなかつたでせう。ところが或日のこと、ルニジアナから來た數人の步兵がテダルドの家の前を通り掛り、彼が戶口に立つてゐるのを見ると、いきなり聲をかけました、『やあ何うしたんだ、ファチボロ?』

するとテダルドは兄弟共の見てゐる前で答へました、『君達はきつと人違ひをしてゐるのだらう。』

彼等は之を聞くと間の惡さうな顏をして彼の許しを乞ひ、そして云ひました、『いやあなたが我々の仲間の一人でファチボロ・ド・ボントリモリといふ男と實によく似てゐらつしやるのです。其の男は半月計り前に當地へ來たんですが、それつ切り何うなつたものか行方が分らないのです。成程、實は彼の男は私

達同樣なんですから、あなたの服裝を見て少し變だとは思つたのだす。』

テダルドの長兄は之を聞くと彼等に近付いて、其のファチボロといふ男の服裝を問ひました。彼等の答へを聞くと、殺された男のとしつくり符合するのです。其他種々な證據より被害者が確かにテダルトでなくファチボロだといふことが分つたものですから、兄弟や他の人々の疑ひも遂に解けました。そこでテダルドは今では非常な金持ですから、戀の方にも精を出して、夫人の方でも注意を怠らず、長く何の差障りもなく戀を續けました。私達も此の樣な幸運を神樣から惠まれ度いもので御座いますね。

第八話

フエロンドは或る藥を呑み、死人として埋葬され、彼の妻と通じてゐる住職の爲に墓場から出されて牢に入れられ、自分は煉獄に居るものと信じてゐる。それより家に歸り、住職が彼の妻に生ませた子供を自分の子として育てる。

エミリアの話は長かつたけれ共、事件の多い爲に人々は少しも長いのに退屈せず、寧ろ早く終つた樣な氣がした。女王は今度はロウレッタに話す樣に合圖をすると、彼女は斯く語つた、――

親愛なる淑女方、私の申上げようとするお話は事實といふよりも小說らしいものでございますが、唯

今承つた人間違ひで埋葬された人のお話から思ひ出しましたもので、生きてゐるのに死人として葬られた男が、後墓場を出て來ると、他人計りでなく當人迄が、自分は初めから生きてゐたのだとは思はず死から甦つたと信ずるのです。そしてそんな瞞著を行つた人間が、罪人として罰を受く可きが至當なのに拘らず、聖人と崇められる樣になつたお話なのです。

タスカニィの或る人里離れた所に一つの修道院がありまして、或る僧侶が其處の住職に任ぜられました。彼は凡ての點に於て大層聖い人でしたが、唯婦人と連絡を保つこと丈が例外でありました。尤もそれを遣るには非常に氣を付けてゐましたから、殆んど誰にも見付からずに濟んでゐました。それ處か、凡ての事に於て非常に德の高い正しい人として尊ばれて居たのです。扨て此の住職の知人の中に一人の裕福な田舍者がありましたが、名前をフェロンドと云つて愚かで、下品で、無教育な漢でした。住職がこんな人間と附合つてゐたのは、時々此の鈍間の信心を物笑ひの種にして樂む爲だつたのです。住持はフェロンドの妻が非常に美しい婦人であるのを見ますと、猛烈に彼女を戀するに至りまして、夜晝たゞ其のことばかり考へて居りました。ところが他の總ての事にかけては極めて拔作であるフェロンドが、妻君を愛し監督することにかけては非常に用意周到であるといふことを知りまして、僧は殆んど絕望しました。併し中々機敏な人間でしたからフェロンドを甘く抱き込みまして、遂に彼をして妻君諸共に屢

屢修道院の庭園に散歩に來るやうに手懷けました。こんな時には彼は何氣ない振をして彼等に向ひ、永遠の生命の幸福や、過ぎ去つた人々の敬神的な行ひ等に就て話して聞かせました。それが妻君に非常な效果を及ぼしまして、此の住職に向つて懺悔を仕度いといふ願ひを起すに至り、遂に夫に賴んでその許しを得ました。

妻君が懺悔をしに來たと聞いて住職は大喜びです。夫人は彼の足下に跪いて先づ斯う云ひました。『若しも神樣が私に眞實に價値ある夫を與へて下さるか、でなければ初めから夫を與へて下さらなかつたなら、多分私もあなたの御訓戒に從ひまして、仰せの如き途に進み、永遠の生命に入ることも出來たのでございませう。けれ共あの愚かなフェロンドのことを考へますと、恰で自分が後家さんか何かの樣に思はれます。でも一旦彼の人に嫁いで同棲して居ります以上は、他に夫を持つ譯にも參りませんし、それにあんな馬鹿のくせに、私が何も仕ないのに甚く嫉妬をやくんですもの、それが爲に彼の人と同棲してゐるのは本當に辛い災難ですわ。で御座いますから、他の懺悔を致します前に、此の事に就て是非少し許りの助言をお願ひ仕たいのでございます。何とかして現在の狀態を改めませんければ、懺悔したつて何の役にも立ちませんし、他の善行をすることをも出來ないのでございます。』

住職はこの訴へを聽きますと、之は愈々俺の大きな望みを遂げる運が向いて來たらしいと、ほく〳〵喜

んで云ひました。『我が娘よ、あんたの様に美しくつて聰明な婦人が馬鹿な亭主を持つといふことは非常な災難ぢやが、おまけにそれが悋氣家と來ては尙ほ一層の不仕合せとお察し申します。頓馬で悋氣と二拍子揃つた亭主では仰つしやる通りさぞ災難なことであらう。だが實のところそれを治す方法としては俺は一つしか知らない。つまりフェロンドの嫉妬を治すんぢや。こんな場合に持つて來いの治療法を俺はよく知つとるが、俺のいふことを秘密にする決心があんたになくては駄目です。』

『和尙樣、あなたの仰つしやることは死んでも誰にも話しません。どうすれば宜しいのでございませう?』

『御亭主の悋氣を治すには彼を地獄に遣らねばなりません。』

『まあ! 生きて居て行けますの?』

『先づ死んで、それから其處へ行かねばならんのぢや。だが十分苦んで、もう悋氣が治つた時分に、何卒甦らせて下されと神樣に御祈禱をすれば又生き返るのです。』

『では私は後家で居らなければならないのでございますか?』

『そうです、暫らくの間はね。そして其の間何處へも嫁入りせん樣に十分注意しなければいけません。そんな事を思ふのは非常に惡い事です。フェロンドが生返つたら、あんたは又彼の處へ歸るのだから、

そんなことをすれば以前より尚ほ酷い悋氣になりますぞ。』

『彼の人の悋氣が治つて、私が一生牢屋にゐるやうな思をしないでよくなるなら、どうともして下さいませ。私は不服は申しません。』

『さう仕ませう。だが斯うしてお役に立てばどんな報酬が頂けるのでせうかな？』

『和尚様、私の力で出來ますことなら何でも差上げます。でも私如き卑しい者があなたの様な尊いお方に何をお上げすることが出來るでせう？』

『奥樣、私があんたに仕て上げるに比敵する位のことを、あんたは私に盡して下さることが出來るのです。そこで、私はあんたを樂にして喜ばして上げるのだから、あんたも何うか私の生命と平安に係る一點を考へて頂き度いのです。』

『さういふ事なら喜んで致しますわ。』

『それではあんたの愛を私に許して貰はねばならん。その爲に私は殆んど死にかゝつてゐるのだから。』

夫人は之を聞くと仰天して云ひました『まあ！　和尚樣、何といふ事を仰つしやるのでございます？私はいつもあなたを聖人と思つて居りましたのに。尊い和尚様方は、助言を求めに來る婦人達にそんな事を頼むんですの？』

『最も愛しいお方、吃驚しなさんな。私の神聖さは之が爲に少しも減じはしないのです。それは靈魂の事ですからな。然るに今あんたに願つたことは唯肉體丈けの罪惡なのだ。併しそれは何れにもせよ、あんたの美貌の力が餘り强い爲に、私は餘義なくこんな事をするに至つたのです。そしてあんたは、天國の美を見るに慣れた聖人の心を捕へたのだから、他の總ての婦人より美しいことを自慢していゝのです。それに又、私は住職ではあるけれ共、矢張り他の人同樣人間です。そして御覽の通り未だ老人ではありません。然う心配しないで、寧ろそれを希望なさい。フェロンドが淨罪界にゐる間は、…………………………………………。誰にも疑はれる憂はありません。あなたが私を聖人と信じてゐた樣に、誰でも私をそう思つてゐますから。天から授かる御慈悲を辭退なさるな。あんたが賢くも私の勸めに從へば、澤山面白いことがありますよ。その上私は稀らしい高價な寶玉を持つて居るが、それはあんた以外には誰にも遣るまいと思つてゐるのです。だからね、生命より大事な夫人、私があなたの爲に喜んで盡さうとしてゐることを、あんたも私に爲さつて下さらんか。』

夫人は何と斷つたらよいかと思案に暮れて下俯向いて居りました。と云つてこんな申出でを承諾しては惡いと思つたのです。併し僧の方では、夫人が默つて聽いてゐて直ぐには返事仕ないのを見ると、もう半分成功したものと思ひまして、前に云つた樣な理屈を限りもなく澤山述べ立てゝ、遂にそれが善行

であるといふことを納得させました。そこで妻君は顔赤らめつゝ承諾する旨を答へましたが、先づフェロンドが煉獄とやらへ行つてからでなければ厭だと云ひました。僧は大滿足の態で云ひました、『直ぐに彼を煉獄に送りませう。唯あなたは明日と明後日と彼を此處へ來させる樣にすればいゝのです。』

斯う云つて彼は一箇の立派な指環を夫人の指に嵌めて歸しました。妻君は此の贈物が嬉しく、尙ほ今後も澤山貰へることゝ思つて喜び乍ら友達の所へ寄つて、彼の住職が素晴らしく尊い人であることを吹聽し、軈て彼等を引連れて家に歸りました。

數日後フェロンドが僧院に參りますと、住職は彼の姿を見るなり或る藥を調合しました。其の藥はレヷンチンの國で或る偉い領主から彼が貰つたもので、領主のいふ所に依ると、それは有名な山の魔法男が人を昏睡狀態に陷れて極樂を見せようとする時にいつも使つた藥品だそうです。それを呑ませる量に依つて睡眠の時間を加減することが出來て、眠てゐる間はどうしても死んでゐるとほか見えないのだけれ共、呑んだ者は何の害も受けないのです。住職は此の藥を三日位ゐ利目のある丈け取出して、それをフェロンドの氣付かぬ樣に一杯の酒に混じて呑ませました。それから彼を連れて、他の數人の僧侶と共に廻廊を散歩しながら、例の如く彼の愚鈍を嬲り興じ始めました。

程なく藥の利目が現はれて來ました。フェロンドは突然眠くなつて、立つた儘コックリを始めたかと思

ふと、遂にぶつ倒れてぐつすり眠込んで仕舞つたのです。住職は此の出來事に大變心配た樣子を示して人々に彼の胸のボタンを外させたり、顏に水を吹つ掛けさしたりして正氣に返らせ樣としました。胃から何かの煙が出るとか、そう云つた種類の疾病から起つたものゝ樣に手當を仕ましたが、何の效果もありません。脈を取つて見ると生きてる徵候が少しもありませんから、人々は確かに死んで了つたものと斷定致しまして妻君や親類に通知しますと、皆卽座に驅付けて參りました。一切り死人に對する人々の歎きがあつて、それより住持の指圖で、彼は着物を着た儘其の修道院の窖の墓に埋められました。妻君は家に歸つて、私はフェロンドの幼い一人息子を守つて一歩も此の家を動きませんと廣言しました。そして相變らず其處に居て子供の世話をしたりフフェロンドの遺產を守つたりして居ました。其夜住職は、ボロニアから其の寺を訪問に來た計りの信賴し得る一人の僧の手を借りて、二人掛りでフェロンドを窖から出し、修道僧が何か過失を犯した時に監禁する時に使ふ暗い土牢に彼を入れました。それから彼の衣服を脫がし、坊樣の衣を着せて、藁束の上に寢かして眠の醒める迄そうして置く事になりました。ボロニアの僧は住職から萬事の手筈を承つて、誰にも事件を知らさぬ樣にフェロンドの目醒めるのを待つて居りました。翌日住職は數人の僧侶を從へて、フェロンドの後家さんの所へ悔みに參りますと、彼女は喪服を着て大層悲し氣にしてゐました。僧は少しく彼女を慰めてから、約束のことを仄めかしまし

た。夫人はもう自由な身になつてフェロンドの爲に邪魔されることはないし、見れば坊樣は又別な指環を指に嵌めて居りますから、承諾致しまして、次の晩彼の方から訪れる約束が極りました。そこで約束の時間となるや住持はフェロンドの衣服を纒つて、忠實な僧を一人連れて其處へ行き、翌朝まで泊りて……………………しました。そして之を幾度となく續けて居る中に、何時か彼が行つたり來たりする姿が近隣の人の眼に止りまして、人々は口を揃へて、フェロンドが贖罪の爲にさ迷ひ步くのだと云ひました。單純な田舍の人々は種々と不思議な怪談染みた事を噂し合つて、それが妻君の耳にも入りましたが、妻君は幽靈の正體は萬々承知してゐます。

ボロニアの僧はフェロンドが幾らか正氣付きかゝつたのを見るとさも恐ろしい物音をさせながら土牢に入つて來ました。手には一束の棒を携へて來て、嚴しく彼を折檻し始めました。フェロンドは泣いたり咆えたりして何も云へず、唯かう尋ねました、『此處は一體何處ですか?』

すると僧は、『お前は地獄に居るんだ。』と答へました。

『何ですつて！ぢや私は死んだんですかい?』

『全く然うだ。』

するとフェロンドは自分のことや妻子のこと等を歎き始めて、世にも奇妙なことを口走り始めました。

そこで俗は彼に飲食物を與へますと、彼はそれを見て、『おや〳〵、死人が物を食べるのですか？』

『そうだ今持つて來た品はお前の女房が今朝夫の靈魂の爲に彌撒を上げて呉れと云つてお寺へ寄進なされた物だ。神様はそれをお前に遣れとの御意なのだ。』

『あゝ有難い女房！ 生きてゐる時は俺は本當にあれを可愛がつて、餘り可愛いものだから一晩中しつかり抱いて、接吻ばかり仕てゐたのです。……………………』

そして非常に空腹を感じたものですから飲食を始めました。すると酒が馬鹿に惡い様に思つて云ひました、『馬鹿女奴！ 何で坊様に上げるのに壁ぎわの酒を持つて來ないのだ？』

お腹が一杯になると又もや同じ折檻に逢ひました。彼は又吼えながら云ふやう、『之は一體何の爲です？』

『一日に二度宛お前を折檻せよとの神様の御命令だからだ。』

『何ういふ理由でです？』

『世界一立派な女房を悋氣するからだ。』

『あゝ！ 仰せの通り立派な女房です。眞實に可愛い奴です。蜜よりも甘いのです。併し悋氣が神様のお目から見て罪だとは知りませんでした。知つてればそんなことは仕なかつたんですが。』

『馬鹿な奴！ 娑婆に居る時に氣を付けてそれを直せばよかつたのだ。若しも再び娑婆へ歸れる樣になつたら、俺の今云ふことをよく覺えてゐて、もう決して悋氣はするなよ。』

『ぢや死んだ人でも、又娑婆に歸つて行けることがあるんですか？』

『あるとも、神樣が然う仕度いと思へば。』

『おゝ！ 若し萬一私が生返れたら、私は世界一のいゝ亭主になります。決して打擲(ちやうちやく)は仕ませんし、今朝よこした酒のことや、蠟燭をよこさないで暗闇で飯を食はした事の他は、決して叱りもしません。』

『なに妻君は澤山蠟燭をよこしたのだが、彌撒の時みんな燈(とぼ)して仕舞つたのだ。』

『そうですか、仰せは一々御尤ですから、今度歸つたら自由氣儘にさせます。ですがこんなに私に親切にして下さるあなたは何誰(どなた)ですか、お聞かせ下さい。』

『私(わし)も死人だ。併し私はサルヂニアの者だが、曾て或る師の坊の悋氣を賞讃した爲めに、お前に飲食を與へたり、一日二回宛の折檻をしたりして罪滅(つみほろぼ)しをするやうに云渡されたのだ。』

『ですが此處には私達二人の他、誰も居ないんですか？』

『なに居るとも、無數に居るんだ。併しお前には彼等の姿を見ることも出來ず、聲を聞くことも出來ないのだ。向ふでも同じく我々を見も聞きも出來ないのだ。』

『それでは我々の故鄕からは何の位ゐ離れて居るんでせうか？』

『何億萬里だかな。』

『へえゝ、實際隨分遠いんですね。ぢや迚度もう世界の外へ出てるんでせうね。』

こんな具合でフェロンドは十月の間其處に留置かれまして、其の間中住職は絶えず彼の美しい妻君を訪れて、最も愉快な時を過しました。ところが運惡く妻君のお腹に子供が宿りました。そうなると彼女の夫を煉獄から放免して妻の許に歸し、子供の父親に仕た方が都合がいゝと考へたものですから、住職は翌晩土牢に參りましてフェロンドを呼び、作聲をして云ひました、『フェロンドよ、勇氣を出せ。神樣は今お前を婆婆に返してやると仰つしやるのだ。婆婆に歸るとお前の女房に息子が出來るから、そうしたらベネヂクトと名けなさい。お前が婆婆に歸れる樣になつたのも、これ皆高德な住職樣と、貞淑な女房の御祈禱が效を奏して、ベネヂクト聖人が神樣に御執成下されたからなのぢや。』

フェロンドは之を聞いて飛立つ計りに喜んで、『神樣及びベネヂクト聖人に感謝いたします。又御住持樣と私の立派な家内にもお禮を申します。』

そこで住職は彼に與へる酒の中に、例の藥を四時間眠る丈け混入しました。彼が眠りに就くと彼の着物を着せて、又元の死體を葬る窖に入れました。夜明方にフェロンドが我に返ると、窖の隙間から此の

十月の間見たことのない明りが見えますから、本當に生返つたのだと思ひまして叫びました『出して呉れ、出して呉れえ。』同時に墓穴の蓋を頭で押しますと、そう重くも無かつたので持上りました。それで穴から出かゝつてる時に、朝の勤業を終つた坊樣達が其處へ驅け付けて見ますと、フェロンドの聲がして、墓から出て來ましたから吃驚仰天して住持の許に走せ行き此の由を告げました。

住職は今祈禱を終つて立上つたところらしい樣子で、云ひました『我子等よ。怖がるには及ばぬ。十字架と聖水を持つて私について來て、どんな奇蹟が起つたのか見ようではないか。』そこで打連れ行つて見ますと、そんなに長い間少しも光りを見なかつたのですから、當然フェロンドの顔は幽靈のやうに眞蒼です。彼は住職を見るや其の足下にひれ伏して云ひました『最とも尊き教父樣、私の得たお告けに依りますと、あなたの御祈禱と、ベネヂクト聖人及び私の家内の祈禱のお蔭で、私ば地獄から救ひ出されて再び生返つたのです。それ故私は、現在も將來もあなたに凡ゆる幸運のあります樣、神に祈りを上げまする。』

『神の力に祝福よあれ！　それでは我が子よ、お前樣に此のお惠みが授かつたのだから、行つて妻君を慰めておやりなさい。あんたが亡くなられてからといふもの、妻君は歎き通しなのだから。そして今後は忠實な神の僕になりなさい。』

「非常に有難い御訓戒です。では御免下さいませ。妻の許に歸るなり彼女を抱いて、うんと可愛がります る。」

フェロンドは斯く答へて家にと去りました。後に坊様達と共に殘つた住職は、此の奇蹟を非常に崇める振をして、僧侶一同に詩篇第五十一を眞心籠めて唱ふ樣に命じました。

一方フェロンドは家に歸りますと、誰でも彼の姿を見ては、何か恐ろしい物でも見た樣に逃げて行きました。すると彼は逃げる人を後ろから呼かけて、私は死から生返つたのですと怒鳴りました。妻君も極度に仰天した樣子を示しました。併し暫らくして彼が幽靈でも何でもなく生きた人間であることが分りましたから、人々は來世のことに就て種々と尋ね始めました。彼はそれに一々明答を與へて、彼の世へ行つてから大層悧巧になつた樣でした。彼は死んだ知巳朋友の靈魂のことを知らしたり、地獄に就て實に奇妙不思議な話を頭の中で拵へて話したり、甦る前にハンゲル・バガレル樣が自分に之々とお告げになつた抔と、有ることないことを取交ぜて皆に話して聞かせました。斯うして再び家の主人となり、妻君と同棲する樣になりましたので極く樂しく親しく暮す中、時が來て夫人に男子が出生したのでベネヂクト・フェロンディと命名しました。フェロンドが復活したことや、それに關する彼の作話等を人々は固く信じまして、彼の住職は世にも稀なる聖者であるといふ評判が高くなりました。フェロンドは悋氣の爲

に厭といふ程澤山折檻を受けたことを覺えて居りますから、住職に命じられた通り、それからは全くそれをしなくなりました。從つて妻君はその時以後は極めて幸福に彼と同棲するに至りました。――……

……。

第九話

ジレット・ド・ナルボンヌは國王の病を治し、その報酬としてベルトラム・ド・ルウシロン伯に嫁ぎ度いと云ふ。伯は厭々ながら彼女を貰ふが、遂に嫌惡に堪え兼れてフロレンスに去り、其處で或る若い婦人を戀する。その婦人と信じつゝジレットと同衾し、双兒を生ます。かくて深くジレットを愛するに至り、妻として尊敬する。

女王はヂオネオの特權を尊敬し、ロウレッタの話が終れば殘るは自分丈けと思つて、請求される迄もなく待兼ねて語り始めた、――

ロウレッタ樣のあんな面白いお話を聞いた後では、誰が話したつて迚も大したお慰みにはなりません。ロウレッタ樣が最初の話手でなかつたといふことは幸でした。あの人の後で面白く聞かせることの出來

る人は私達の中に幾人も居ないでせうからね。ですから今日之から話す人は屹度そうなりはしないかと思ひます。併しロウレッタ樣がどれ程お上手だつたにしても、私は今日の題目に就て一つのお話を申上げませう。

フランスにルーシロンの領主でイスナルド伯といふ方がありました。此の方は身體が良くないものですから、いつでもジエラアル・ド・ナルボンヌ先生といふお醫者を傍から離しませんでした。伯には極く若い、ベルトラムとふ大層美しい可愛い一人息子がありましたが、同じ歳頃の子供等と一緒に育てゝ居ります中、右のお醫者の一人娘でジレットといふのも遊び仲間に交つて居りました。此のジレットが、未だほんの小娘でありながら、歳に似合はず無限に熱烈にベルトラムを戀して居たのです。父の伯爵が亡くなりましたので、幼いベルトラムは國王の手許に引取られることになり、巴里に行きました。若い娘の失望落膽は非常なものです。其の中程なく娘の父親もなくなりましたので、ジレットはいい口實さへ付けば直ぐにも巴里に飛んで行きたかつたのですけれ共、金持で一人ほつちだといふので嚴格に監督されてゐる爲に、そうする事が出來ません。月日は經つてもう嫁入頃になりましたけれど、何時になつてもベルトラムのことが忘れられませんから、親類の者が持かける澤山の縁談を譯も理由も云はずに片端から斷りました。

一方ベルトラムの立派になつた噂を聞くに付けて、彼女の戀は日々に募るばかりです。その中ふと彼女はこんな便りを聞きました。フランスの國王が病氣になつて胸に腫れ物が出來、手術をすると其の方法が惡かつた爲に瘻になつて、大層苦み惱んで居られる。そして多くの醫者を呼んだけれ共之を治し得る者は一人もなく、反對に一層惡くなる計りだ。それが爲國王はもう治らぬものと諦めて、誰の治療をも受けぬ決心をなされた、といふのです。之を聞いて若きジレットは無上に喜びました。此の機を利用して巴里に行くべき正當な口實となし、猶ほ其の病氣が自分の推察通りの物ならば、容易に之を治癒してベルトラムを夫とすることが出來ると思つたのです。そこで曾て父親から此の種の病氣に利目があると教はつた通りに、或る藥草から藥を調製しまして、馬に跨り巴里に赴きました。

巴里に到着するや直ちに懐かしいベルトラムを蔭ながら見てそれから國王の御前に伺候して、病氣を見せて頂き度いと願ひました。國王は立派な美しい婦人を見ると其の請を斷り得ず、患部を出して見せました。娘はそれを見ると直ぐ之は治ると思ひまして、『陛下、若し御希望ならば、私は神樣の御惠に依りまして、陛下に何の苦痛も疲勞も覺えさせずに、八日以内に御病氣を治して差上げませう。』

國王は心の中に此の廣言を嘲り思ふやう、『世界一の偉い博士達が癒し得なかつた此の病を、此の小娘にどうしようがあるものか。』そこで御親切は有難いが、予はもう如何なる醫者にもかゝらぬ決心ぢやと

答へました。すると若い娘は云ひました。

『陛下、陛下は私が若い娘だからと思召して御蔑みなさるのでございませう。けれ共私は申上げますが、私は自己流にではなく神様のお助けと父上ジエラアル・ド・ナルボンヌの學問の力に依りまして、此の藥を調合したのでございます。父は生存中は有名な醫者でありました。』

すると王は心の中に、『多分此の娘は神から予に遣された者であらう。何の苦痛を與へずに、そんな短時日内に私の病氣を治せると云ふのだから、彼女の學問を試して見てもいゝではないか？』と思ひ、斯く決心して云ひました。『だが娘よ、予の決心を破らして置いて、若しも治せなかつた時は、お前をどう罰したらよいかな？』

『陛下、私に見張りを付けて、若し八日經つて御病氣が治らなかつたなら、私を火刑にして下さいまし。併し若し反對に、陛下が御平癒遊ばしましたら、私は何を御褒美に頂けませうか？』

『見れば未だ未婚の樣ぢやから、若し予の病を癒せたなら、其方を身分の高い人に嫁入らせて進ぜよう。』

『嫁入さして下さるといふことは大層嬉しいことで御座います。併し私からお願ひする人を私の夫にお許し下さいませんでせうか？　勿論王子樣や皇族の御方をお願ひする樣なことは致しませぬ。』

王は直ちに之を約束したので、若き婦人は即座に治療に取掛りました。すると未だ日限の來ない中に王は早や全く病氣平癒に至りました。そこで全快した王は云ふやう、『娘よ、其方は眞實に夫が手に入つたといふものぢや。』

『では陛下、ルウシロンの伯爵ベルトラム樣を私の夫に下さいまし。私は幼ない頃から彼の方をお愛し申して、今では世界中の何の男の方よりも愛してゐるのでございます。』

王に取つては之を承知するのは中々容易ならざる事と思はれましたが、併し一旦した約束に背くことは欲しませんでしたから、ベルトラムを呼んで云ひました、『ベルトラムよ、其方も最早一人前の大人になつたから、歸つて自分の領地を治めなさい。就ては其方の妻として一人の若い婦人を選定して置いたから連れて歸つて貰ひ度いのだ。』

『其の婦人とは誰でございますか?』

『それは私の病氣を藥で治療して呉れた此の婦人なのだがな。』

ベルトラムは婦人を見て、それがジレットだと云ふことが分りました。非常に美しくは思はれましたが、素性が自分の貴族と比較にならないと思つたので、賤しめた樣に云ひました。『陛下、では陛下は私に女醫者風勢を女房に下さるお積りなのですか? 私は生命のあらん限りは決して此の樣な婦人を妻

には致しませぬ。』
『然らば其方は、予に約束に背けといふのか？　予の病を治せば望みの夫を與へると約束したのだ。すると婦人は褒美として其方を夫に呉れと申すのだ。』
『陛下、私は陛下の臣民で御座いますから、何でも私の持つて居ります物を皆な悉くお取上げになりませうとも、或は又私に何か下さらうとも、御随意に遊ばして不平は申しませんが、此の婚姻ばかりは御承諾申上げる譯に參りませぬ。』
『だが私は是非さうしたいと思ふのだ。彼女は思慮の深い美しい婦人だ。もつと身分の高い者を娶るよりも、此の婦人と一緒になつた方が其方の仕合せだと思ふのだ。』
　ベルトラムはもうそれ以上抗ひませんでした。そこで王は此の婚禮を祝ふ爲に盛大な饗宴を催しました。軈て定めの日になるとベルトラムは、厭で堪らぬ乍らも王の御前で、自分の生命よりも彼を深く愛してゐるジレットを娶りました。之が濟むと彼は、領地に歸つて婚姻をするやうに云つて王に暇を告げ、巴里を出發しましたが國には歸らず、伊太利タスカニィに參りました。するとフロレンス人とシエンナ人と戰爭をしてゐたものですから、進んで其の軍に加はりますと、元より立派な大將ですから指揮權を與へられまして、暫らく軍務に服して居りました。

花嫁の方では彼の自分に對する態度を見て決して嬉しくはありませんでした。併し彼の領地を立派に治めたなら又愛情を得ることも出來るかと思ひまして、ルウシロンに參りました。領内の民は喜んで彼女を領主の奥方、御主人として迎へました。來て見れば長い間主人が年少であつた爲に何も彼も滅茶苦茶になつて居りますから、十分の注意と聰明とを働らかして萬事元々通りに整頓しました。それが爲に臣下の人々の親愛と好意とを得まして、彼等は斯かる立派な奥方を見捨てゝ置く伯爵を非常に非難しました。一通り領内の整理が付くと、夫人は二人の騎士を夫の許に遣して、『あなたが鄕里にお歸りなさらないのは私の爲ですか、若しそうなら私はあなたの爲に何處へなりと喜んで立去ります、』と傳へよと云附けました。すると夫は之に對して亂暴な返事をして、『何うとでも彼女の勝手にするがいゝ、私は彼女が此の指環を指に嵌める樣になり、私の生ました息子を胸に抱くやうにならない限り、決して彼の女の所へは歸らない。』と云ひました。此の指環といふのは何か秘密な功德があるといふので彼が非常に大事にしてゐて、決して指から離したことがないのです。おまけに一緒にならないで子供の生れる譯がありませんから、つまり此の條件は二つ共不可能だから、決して歸らないといふことを云つたものだと二人の騎士は悟りましたが、彼の決心の到底飜し得ないのを知りまして、彼等はルウシロンに歸り、斯くと告げました。

夫人は大層心を痛めて、何とかして右の二つの條件を成遂けて、夫を我手に取戻す方法は無いものかと思案し始めました。そこで種々と考へた揚句領内の主立つた人々を悉く呼集め、極めて柔しい愛情の籠つた調子で、伯爵に對する愛の爲に彼女の爲したこと及び其の結果を一々擧げた後、『私が此處に居る爲に伯爵を永久に放浪さして置くことは全く私の望まない處です。それ故私は心を決めて巡禮して餘命を送り、靈魂の救ひを願はうと思ひます。そこで皆樣に望みますことは、何卒各自國内を治めて、伯爵には私が地位を捨てゝ當國を立去り、二度と再び返らぬ積りだといふことを傳へて下さいまし。』と云ひました。

夫人の斯く語る間に、人々は皆泣き出して、是非決心を思ひ止る樣に歎願しましたが、夫人は聽き入れませんでした。そこで夫人は人々に暇を告げ、唯一人の下婢と身内一人とを伴ひ、金錢及び寶玉等を携へて、行先を誰にも知らせず、巡禮の姿をして出立しました。途中何處にも滯在せずやがてフロレンスに到着しました。其處で偶然或る後家さんの經營してゐる宿屋を見付け、其家に泊つて、夫に關する何かの便りを得たいものだと思ひました。

すると運よく其の翌日、夫は馬に跨り軍隊を率ゐて宿屋の前を通り掛りました。そこで宿の主婦に向ひ、わざと知らぬ顔をして、彼は誰かと尋ねました。

『あれはベルトラム伯と申しまして、外國の貴族なのでございます。世界一心のいゝお方でして、此の國では隨分尊敬されて居ります。そして此の近くの或る貧しい貴族の婦人に思ひを寄せてゐらつしやるのです。此の婦人もお人は良いのですが、何せ貧しいものですからまだ獨身でして、お母さんと一緒にゐらつしやるのでございます。』

伯爵夫人は之を聞いて一層深く計畫を廻らしました。そこでその若い婦人の名前と住居とを聞いて、或る日其の家を訪れ、一と通り挨拶も濟むと母親に向ひ、少しお話し仕たいことがあると云ひました。母親は立上つて、えゝ〳〵何卒、と云つたものですから、二人は別室へ參りまして互に腰を下した時、夫人は云ひました。『奥樣、あなたも私と同じ樣に御不仕合せの樣で御座いますね。併し今あなたは、あなた御自身の爲にも又私の爲にも利益になることをなさることが出來るのです。』

すると其家の老夫人は、正直に出來ることなら喜んで致しますと答へました。

『では私の一身は全然あなたに御任せ致します。若し御瞞しなさる樣なことがあると、兩方の目的が破れるのでございますよ。』

『何卒仰つしやつて下さい。決してお瞞し申す樣なことはございません。』

そこで伯爵夫人は始めより終り迄残りなく事情を語りました。老婦人も其中の一部分は噂に聞いて居

りました。従つて若き夫人の話を信じて、同情を寄せました。ジレットは尚ほ云ふやう、『そこで唯今申上げましたことでお分りでせうが、私が夫を私のものとするには二つの事を仕遂げねばなりません。そして若しも夫があなたの御娘様を大變慕つてゐるといふ噂が眞ならば、私を助けて下さることの出來る者は、世界中にあなた以外に一人もないのです。』

『奥樣、伯爵が本當に娘を愛していらつしやるのかどうか、私は存じませぬ。けれども彼女の事で大騒ぎしてゐることは確かです。併し何うすればお望みを達するお手傳ひが出來るのでせうか？』

『それは唯今申上げます。が其の前に、此の事にお力添へ下さるお禮のことを申して置かねばなりませぬ。見受けまする處御孃樣はお美しくつて、もう歳頃の樣でもございますね。噂では持參金が無い爲に餘義なくお手許に置かれるとか聞きましたが、若しそれが本當ならば、私に御盡力下さるお禮としまして、立派に嫁入りさせるに必要とお考へなさる丈けのお金をお上げすることに致す積りです。』

老夫人は非常に金の入用な時ですから、之を聞くと大層喜びましたが、併し貴族婦人らしい魂が有りますので『何ういふことをするのか仰つしやつて下さい。若しそれが正當で眞直なことの樣なら、心から喜んで致します。そして報酬のことは御意任せで宜しうございます。』

『誰か信用の出來る人を頼んで、私の夫のベルトラム伯に、斯う傳へるのでございます。つまりお孃樣

を愛するといふ言葉に眞實僞りがないといふ確かな證據さへ得られゝば、お孃樣は喜んで御意を滿足させる。それには伯がいつも指に篏めてゐて、大層大切にしてゐると聞く、あの指環を孃樣に贈らなければ迚も信用が出來ないと云つてやるのです。そして若しそれを送つてよこしたらそれを私に下さい。そして今度は云つてやるのです、――お孃樣は御意に從ひます、いつ何時でも御意の向き次第お出で下さい――と。そしてお孃樣の代りに私が彼の人の傍に臥せるのです。多分神樣の御惠みに依りまして、子供が出來るでせう。さうなれば、大事の指環は指に篏めて居りますし、伯の御胤より生れた子供を抱いて居りますから、夫を取戻し得て、眞の夫婦として一緒に暮して行くことが出來るでせう。そしてあなたは私の幸福の結び神となる譯でございます。」

老婦人は之は極めて重大なことだと思ひました。娘の名譽を汚す樣なことが持上るかと恐れたのです。併し飜つて、此の樣な立派な夫人が、夫と睦じくなるといふ事は非常に結構なことゝ思ひまして、助力をする約束を與へました。そして數日ならずして、最大の注意を用ひ極秘の中に厭がる伯爵から指環を手に入れました。次には娘の代りに夫人を伯と一緒に御床入れさせました。此の時に限らず老夫人は其後度々伯爵を呼んでは二人を滿足させました。併し絶えず注意して秘密の現はれぬ樣にしてゐましたから、伯爵はそんなことゝは少しも知らず、戀人と一緒にゐるのだと計り信じて、朝立去る時には澤山の

高價な寶石類を與へました。夫人はそれらを皆大切に保存して置きました。

程なくジレット夫人は神の御慈悲に依つて身重になりました。それも樣子では雙兒らしいのです。そこでもう之以上老母に心配をかけまいと思つて、云ひました。「神樣の祝福とあなたの御助勢に依りまして、私の目的は遂せられました。今はもう爲すべきことはお禮をお上げすること丈けとなりました。」

「あなたのお望みが叶ふ樣になりましたのなら、それで結構でございます。私はお禮を頂かうとしたのではありません。さうするのが正しい、爲さねばならぬことゝ思つたからしたので御座います。」

「奥樣、私はほんとに嬉しいんです。ですから何でも御望み通りの御禮が仕度いのです。あなたは當然それを受ける丈けのことを爲すつたのですもの。」

老夫人は必要の爲に止むなく、娘の持參金として一千圓欲しい旨を極く耻づかし氣に云ひました。ジレットはあれ程自分に役に立つて呉れた老母が、氣まり惡氣に少し計り求めるのを見ると、お金を五千圓と、その金額よりも多い位ゐの寶石類を與へましたから、老母は非常に感謝しました。そして最早ベルトラム伯が何うしても訪れて來られないやうに、田舍の知人の家に娘と共に引移りました。ベルトラム伯の方でもジレットが領内を立退いたと聞き、臣民の請を容れてルウシロンに歸りました。ジレットは伯がフロレンスを去つて歸國したことを知りましたが、相變らずフロレンスに止つて産月の來るを待ち、六月

滿ちて二人の男子を生みました。二人共大變父親によく似てゐます。ジレットは十分氣を付けて子供達を保育し、よき折を見てこつそりとモンペリエーに來まして暫らく滯在休息し、兼て夫の動靜をも探りました。遂に夫が十一月一日の萬聖節にルウシロンに於て大饗宴を催すといふことを聞きまして、最初出發した時の如く巡禮姿に身を變へて其處へ行きました。そして丁度賓客等が食卓に就かうとする時に夫の館に到着致しまして、矢張り巡禮服の儘二人の子供を兩腕に抱へながら、群がる紳士淑女の中を押し分け搔き分けて前に進み、遂にベルトラム伯の居る處に來ると、彼の足下に身を投げ伏して、涙の中に云ひました。『我が君樣、私はあなたの不幸な妻でございます。あなたをお館にお歸しする爲に長い巡禮の旅に出たのでございます。私は神の御前に於てあなたに御願ひ致します。何卒私が遣はした二人の騎士を通じて私にお云附けなさつた二つの條件をお守り下さいまし。御覽下さい。私が抱いて居りますのは、一人ならず二人まであなたのお息子でございます。それから此處に此の通り指環もございます。今こそ私は御約束に依りまして、あなたの妻となるべき時が參つたのでございます。』

伯は之を聞いて甚く驚きましたが、確かに彼の指環ですし、二人の幼兒は自分にそつくりですから『之は一體どうした事だ？』と云ひました。そこでジレットは有りし次第を殘らず物語りますと、伯も居並ぶ人々も皆驚きました。ベルトラムの方では夫人の云ふことが眞實といふことは分つて居りますし、

夫人が志操堅固で物事を立派に爲すのを知り、更に此の樣な可愛い二人の兒供を見るに及んで遂に心が解けまして、彼女を夫人にして吳れといふ一同の請ひを入れて、約束通り履行する氣になりました。そこで彼はジレットに對する根深い憎惡の念を悉く捨てゝ、彼女の手を取り、立上らせて改めて挨拶を爲し、彼女を彼の正妻と認め、二人の幼兒は彼の息子であるといふことを承認しました。母子に身分相應の衣服を着せることを命じた後、盛大な祝宴を行ひました。臣民一同は非常な喜びで、宴會は數日間續きました。それより彼はジレットを常に正妻として尊敬し、深く愛し大切にしました。

第十話

アリベクは女修道士となつて、ルスチコと呼ぶ一人の隱者から惡魔を地獄に閉ぢ込める法を教はる。後故鄕に歸つてネヘルバールの妻となる。

女王の話を熱心に聽いて居たヂオネオは、女王の話が終ると後に殘るのは自分丈けと思つたので、命ぜられるのを待たず、莞爾やかに始めた、——

親愛なる淑女方、恐らく皆樣は未だ如何にして惡魔が地獄に押籠められたか御聞きになつたことがないでせう。それ故私は今日のお話全體の目的から大して脫線しないで其のお話をしようと思ひます。併

し皆樣の御心が此の話を聽入れる用意をし、其の方向に豫め心を向けて置く爲に、次の事を念頭に留めて置いて頂きたいのです。つまり、戀といふものは一體に汚ならしい堀立小屋よりも立派な宮殿や大廣間に於て起りたがるものですが、併し時には深い森林の中とか、險しい斷崖の上とか、或は砂漠の洞窟の中とかに於て起らぬとは限らないのです。そこで戀の力には凡ゆる物が征服されるものかどうか之から一つ調べて見ませう。

扨て要點に戻つて申上げますが、昔バルバリィのカスバといふ町に、非常に裕富な一人の男がありまして、幾人か子供のある中にアリベクと呼ぶ美しい物事のよく出來る娘がありました。アリベクは基督の信者ではありませんでしたが、同じ町に住む澤山の基督信者が盛んに基督敎及び神への奉仕を賞讃するのを聞きまして、或日のこと數人の信者に向ひ、如何にしたら最も手つ取り早く有効に神に仕へることが出來るのかと尋ねました。すると其の答へに、出來得る限り此の世の事を思ひ棄てた者が最もよく神樣に仕へてゐるのであつて、例へば俗世を避ける爲にテベイスの沙漠に隱遁した人々の如きがそうである、と告げられました。未だやつと十四歳になつたばかりの純潔無垢な乙女は、別に之といふ目當てがあるではなく、唯無邪氣な心から或る小供らしい衝動に驅られて、誰にも知られぬ樣に翌朝竊かに家を抜出しまして、テベイスの沙漠を指して行きました。數日の後此の寂寥たる荒野に到着した時には、

すつかり疲れて空腹に惱んで居りました。遠方に一軒の小屋がありましたから其處へ行つて見ますと、一人の聖者が戸口の前に立つて居りました。彼は娘の姿を見て驚いて、誰を尋ねて來たのかと問ひました。少女は答へて、神の靈感を受けて神に奉仕する道を知りたくなつたからそれに最も適當な方法を敎へて具れる人を探しに來たのだと云ひました。聖者は娘の非常に若く美しいのを見て、若しも彼女を自分の許に留めて置いたなら、惡魔が自分を誘惑するかも知れないと思ひました。そこで彼は娘の尊い目的を賞め、草の根や、野生の林檎、棗の果等を與へて食べさせ、水をも飮ませてから、扨て云ふやう、

『娘よ、此處から程遠からぬ所に一人の聖者が居る。その人はおまへの求めに對しては私よりも良く敎へて具れるであらうから、其の人にお賴みなさい。』

そう云つて隱者は少女を其方へ遣りました。娘は敎へられたる隱者の許へ行つて、同じことを述べますと、又もやもつと先に若い信仰篤き隱者の小舍があるから其處へ行つたら良からうと云はれました。此の若い隱者は名前をルスチコといひました。娘はやがて彼の所へ來て、先に云つたのと同じことを述べました。

ところが今度の若者は、自分の道心を大きな試煉にかけて見ようと思ひまして、他の道士達のやうに乙女を追ひ返さずに、小舍の中に留めて置きました。夜になると彼は娘の爲に椰子の葉で小さな氣持の

よい臥床を作つてやつて、其處で休むやうにと云ひました。すると程なくして猛烈な勢ひで誘惑が彼を襲つて來たのです。自分は道心堅固で少しも誘惑抔恐れるに足らぬと思つてゐたのが全く思ひ違いであつたことを知ると、彼は多くの襲撃を待つ迄もなく、敗北と諦めました。そうなればもう神聖な決心も、祈禱も、訓戒もそつち退けにして、此の若き尼僧の美しさのみを考へ始め、更に進んでは、どうしたら娘に近付いて、自分を不品行な人間と思はれず、然かも欲望を滿たすことが出來るかと思案を廻らし始めました。何氣なく二三の問で試して見ますと、未だ一度も男に接したことがなく、見た儘の純潔無垢な乙女であることが分りました。それならば神樣に奉仕するといふ口實の下に、望みを遂げて遣らうと考へまして、先づ第一に長々と言葉を弄して、惡魔が神の敵であることを說き示し、次には、それ故神に仕へる最も良き方法は、惡魔を地獄に閉ぢ籠めることである。神自身が惡魔を地獄に幽閉せよと仰せられたのだから、と云つて聞かせました。すると少女は何うすれば惡魔を地獄に閉ぢ籠めることが出來るのかと尋ねました。そこでルスチコは其の方法を敎へます。(以下二頁省略)

斯くてルスチコとアリベクとが熱心に幾日かを神に仕へてゐた時、カスパの町に大火事があつて、アリベクの父親を初め家内一同が家の中で燒死しました。それが爲にアリベクは父親の財產を悉く相續することになりました。すると玆に、財產の總てを遊蕩に使ひ果したネヘルバアルといふ一人の青年があ

りまして、アリベクの未だ生きて居ることを聞き、彼女を探しに出掛けました。そして運よくも、アリベクの父親の財産が、相續人無きものとして未だお上に沒收されない中に彼女を見付けました。アリベクは歸るのを厭だと云つたのですが、男は無理に連歸つて彼女を自分の妻とし、二人で莫大の遺産を繼ぎました。併し未だネヘルバアルとお床入りしない中に他の婦人達から、沙漠ではどんな風にして神に仕へて居たのかと尋ねられますと、アリベクは、惡魔を地獄に閉ぢ籠めて神様に仕へてゐたのに、ネヘルバアルは此の樣に尊い勤業をしてゐる私を無理に連れて來たのだから大罪を犯したのだと答へました。婦人達は、『惡魔を地獄に入れるにはどういふ風にしたのですか？』と尋ねました。そこで少女は、くわしく其の方法を說明しました。人々はどつと計りに笑つて、幾度も幾度も繰返して說明さした後乙女に向つて云ひました。『まあそれならば少しも歎くには及びませんよ、赤ん坊さん。そういふ御勤めなら此處でも出來るんだからね。ネヘベルバアルは……………………あなたと一緒に神樣に仕へて呉れますよ。』

此の話が口から口に傳はつて町中に廣まりました。程なく、神に仕ふる最善の方法は惡魔を地獄に入れることだ、といふ言葉が一般の格言となり、遂に海を越えて當國まで傳はつて來て、今以て知られてゐるのです。ですから淑女諸君、あなた方の中で神の恩寵を蒙り度いと思召す方は、是非共惡魔を地獄

に封じ籠める方法を學びなさい。…………………………………………………………………………………………。

×　×　×　×

淑女等はヂオネオの話を聞くと彼の言葉を十分了解した印に何時までも腹を抱へて笑つた。暫らくしてやゝ笑ひが靜まると、女王は最早や王位を退くべき時が來たと思つて、頭上の月桂冠を取り、それを柔しくフィロストラトの頭に載せて、云つた。『今迄は羊が狼を統御して居たのですが、今度は狼に羊を統御さして上手か下手か拜見致しませう。』

フィロストラトは之を聞いて微笑しつゝ云つた。『我々男子を狼と仰せられましたが、若し私が本當に狼だつたら、ルスチコがアリベクに惡魔を地獄に封じ籠めることを敎へた樣に、私もあなた方羊にそれを敎へたでせうが、併し私はそんなことはしません。あなた方を羊扱ひにしないのですから、何卒我々を狼なんぞと恐ろしい呼び方をしないで下さい。それは兎もあれ御命令に從ひまして、此の王國を治めることゝしませう。』

するとネイフィルが答へた。『フィロストラト樣お聞きなさい。あなたは私達を敎へようと思へば、マセット・ダ・ランペレッチョと尼樣の場合の如く、先づあなた自身を敎育しなければいけません。』

フィロストラトは女軍が中々短刀直入に突つ込んで來るので、此の言葉の戰ひを氣持よく止めて、彼に委任された王國の統治に専心した。彼は家令を呼んで領内の狀況を尋ね、彼が支配してゐる期間の樣々な手配りに就て命令を與へ、人々に良き食事を供し凡てを愉快にする樣に取計らへと云附けた。之が濟むと彼は再び淑女逹に向つて云つた。

『美しき淑女諸君、不幸なことに私は物心付いてからといふものは、絶へずあなた方御婦人の中の誰か知らを戀してゐたのです。私はいつでも婦人に對して、謙遜で、從順で、出來得る限り愛する人を喜ばそうとするのですが、それが何の役にも立たず、最後には極つて誰か他の戀人と見換えられて仕舞ふのです。それが徐々(だんだん)惡くなる計りなのです。死ぬ迄屹度然うして行くのだらうと思つてゐます。そこで明日のお話の題目は、私の身の上に適はしい樣なことを選ばうと思ひます。つまり人を戀して、其の結果が不幸に終つた人の話をするのです。』

斯く云つて彼は、夕食時迄は各自隨意行動を取るべき許しを與へて散會した。庭園は非常に美麗で氣持がよかつた。殊に太陽は沈み掛(かゝ)つてゐたので人々は庭園を散歩することにして、或る者は彼等の周圍を戯れ跳(と)んでゐる仔山羊や、兎、其他の動物を眺めたり追つかけ廻つたりして遊んだ。ヂオネオとフャンメッタとは並んで芝草の上に坐り、ヂレルモの歌や、ベルジュウ夫人の歌等を唱つた。フィロメナと

パムフィロは將碁を指した。此の樣に銘々思ひ〱の遊びをして時を過したので、意外に早く夕食時になつた樣な氣がした。人々は濱水の邊りに並べられた食卓に就いて、非常に愉快に食事をした。食卓の上が片附くとフィロストラトは、彼以前の各女王の例を破らぬ爲に、ロウレッタに向つて唄と踊を命じた。彼女は答へて云つた『御言葉ですが陛下、今の處わたくしは既に此の樣に愉快になつて居られる皆樣の御慰みになる樣な唄は、他人の作つたのでも私自身のでも一寸思ひ出せません。併し何でも心に浮んだ唄で宜しうございますれば、喜んで唱ひませう。』

王は答へた、『あなたのなさることなら何だつて美しく愛嬌があるに極つてゐます。ですから御存知の儘を唱つて下さい。』

ロウレッタは美しい聲に優しい調子を交ぜて唱ひ始め、合唱には他の婦人達も加はつた。

唄

合唱

戀も吐息も甲斐ないわたし、
歎くに何にか無理あらう？

上げますまい。婦人の身内の者はまだ生きて居りますから、此の話を聞けば吃度怒るでせう。それで私は唯此の婦人がある貴族の生れだけれども、大變貧しかつた爲めに餘儀なく或る金持の吳服商に嫁がせられたといふ事丈け申して置きませう。婦人は甚く自分の生れを誇つて居りまして、此の結婚を恥辱だと思つて、何うしても夫を愛する氣になりませんでした。實際夫には少しも愛すべき點がなくつて、取柄と云つては金のあることゝ商賣の巧みなことの他には何もないのです。婦人の夫に對する輕蔑若くは無關心は非常なもので、絕對に止むを得ない場合のほか決して夫に愛を許さない決心をしました。そして誰かもつと自分の愛に適はしい男を見出して、其の埋合せを仕ようと惡い料簡を出したのです。

程なく希望通りの者を發見しました。或る日敎會に行くと一人の紳士を見ました。其の男は町に住んで居るのでしたが、其の容貌が大層氣に入りまして、卽座に男を戀して仕舞ひました。間もなく彼女の情熱は酷く募りまして、晝間彼の姿を見なかつた日には夜眠れない程になりました。男の方では自分が婦人の胸にそんな感情を起さしたとは知りませんから、全く平氣なものです。婦人は用心深いので男に手紙を遣つて戀を打明けるとか、誰か他の婦人に賴むとか、そんなことは仕ません。そんなことをすればどの樣な結果を生ずるかも知れぬと恐れたからです。併し生來非常に賢い女だつたものですから、遂に自分の名譽をも傷けないで、男に心を知らす手段を案出しました。

婦人は其の紳士がよく或る坊様と一緒にゐるのに氣付きました。其の坊様はすべ〳〵と肥太つた男でしたが、極めて規律立つた生活をしてゐて、非常に尊い人だといふ評判でした。此の坊様を自分の戀に利用すれば、相手の男と口を利くことも出來るだらうと思つたのです。そこで其の方法を熟考の上僧院に參りまして、其の坊様を呼んで貰ひ、私は是非あなたに懺悔した上でお願ひ仕たいことがあるのだ、と告げました。そして更に云ふには、『聖い敎父様、私が之から申上げることに就てあなたの御意見を伺ひ、お手傳ひをもして頂きたいのでございます。私の身内や夫のことは唯今申上げましたが、まだ一つ申上ぐべきことで申上げないことがあります。それは私の夫が、自身の生命よりも私を深く愛して居るといふことでございまして、何でも私の欲しいといふ物は卽座に私に與へて呉れます。夫は非常に金持でございますが、それ程の財産も夫は唯、私の願望を滿たし、私を喜ばす爲ばかりに用ふるのでございます。私とても夫の愛に十分報ゆることはお信じ下さいますでせう。私も夫の愛に劣らぬ程夫を愛してゐるのです。若しも私が少しでも夫の名譽を傷付けたり、夫の感情を害しやうなぞと思ひでもすれば、私は實に恩知らずな見下げ果てた女だと自分を思ひませう。そこで敎父様に申上げねばならないのですが、或る名前も知らない男の人が、きつと私がこんなに貞淑な婦人だといふことを知らないででせうが、始終私を付け覘つてゐて、何處にでも私の後をつけて歩くので本當に弱つてゐるのです。私が窓にでも、戸

口にでも、街にでも、何處へでも出さへすれば、吃度その人が現はれるのです。そんなに絶えず私を追跡してゐながら、此處へ跟いて來なかつたのが不思議な位ですわ。其の人は背丈の高い、立派な體格の顏の美しい人で、大概黑い衣服を着て、何う見ても立派な御身分の方らしいのです。そしてあなたと一緒にゐらつしやるのを幾度も見たやうに思ひます。此の樣な事といふものは得て惡い噂となりまして、貞淑な婦人も、自身に何の咎もないのに世間の口の端に掛るものでございますから、初めは兄弟を賴んで其の方に云つて貰はうかとも思つたのです。併しよく考へて見ますと、兎角若い男といふものは斯ういふ役目を冷靜に果たすことは滅多に出來ませんもので、多くは暴い言葉で打突かると相手も溫順しくは云ひ返さない。そこで罵詈雜言となり、延ゐては互に腕づくといふことになるものです。そこで私はこんな醜體を避け不幸な出來事を未然に防ぐ爲に、あなたの所へ參つたのでございます。その人は大變あなたと親しい樣子ですし、親しくなくても、あなたはお役目柄から云つて、誰でも間違つたことをする者を譴責する權利がお有りなさるからです。ですから何卒お願ひします、彼の人をよく御訓戒遊ばして、私の後を追はない樣にお叱り下さいまし。そんなに色事がお好きなら他の婦人に眼を付けて下さい。有難いことに、ここらに婦人は澤山居りますから、思はれて喜ぶ人も譯なく見付かりませう。併し私丈けは、そんなに付け覘はれるのは眞實に腹が立ちます。私は神の御惠に依つて、こんなことには全く

心を向けないのです。夫と自分に對する義務をよく存じて居りますから、と、云つてやつて下さい。』
斯う云つて仕舞ふと婦人は泣き出しそうにして頭をうな垂れました。坊樣は婦人の談話に依つて、その自分と親しい紳士といふのを思ひ當りまして、婦人の言を悉く信じました。彼は婦人の淑德高き心を非常に賞讃しまして、お望み通りに仕ようと約束しました。そして婦人が金持なことを知つてゐるものですから、喜捨といふことに就て少しく說教した上、例の如く、彼自身及び僧院の缺乏を告げました。すると婦人は彼の言葉を遮つて、『御生ですから何卒わたしの申上げたことを忘れないで下さいまし。其の人がそんな事はないと云つたら云つて遣つて下さいな。私から聞いたんだつて、私がその事をあなたにこぼしてゐたと云つて、私が其の人の仕方を非常に怒つてゐることを知らしてやつて下さいね。』
婦人は懺悔を終つて罪の恕しを受けると、懺悔僧の慈善の說敎が有益であつたことを示す爲に財布から可成り澤山のお金を出して僧侶に與へ、何うか私の亡くなつた身內の人達の靈魂の安まる樣に彌撒を上げて下さいとせい〴〵慈善振りを見せ付けて、頓て懺悔室を出て家に歸りました。
數日經つと婦人に目星を付けられた例の靑年が、いつもの樣にこの善良な僧侶の許を訪れました。僧は樣々物語の末、靑年を秘かに別室に導いて、美しい信者を覗つてゐることや、其の後を跟け廻すこと等を極く穩かに非難しました。靑年貴族は其の婦人といふのを知りませんし、其の家の方には滅多に行

イロストラトは先づファンメッタに話を始めるやうに命じた。彼女は二度命ぜられるのを待たず、かく語つた、――

第一話

サレルノの領主タンクレーは娘の愛人を殺し、其の心臓を金の盃に入れて娘の許に遣す。彼女はそれに毒を注ぎ、之を飲んで死ぬ。

王樣は今日のお話に悲しい題目を御指定になつた爲、私達は玆へ樂みに參つたのに拘らず、語るも聞くも同情の涙を誘ふやうな、他人の悲痛を物語らねばなりません。多分王樣が此の話題を御選びになつたのは、私共が數日間耽つて居つた愉快を少し控へようとの思召でございませう。併し假令王の動機がどうでありませうとも、彼の意志に背くのは私として宜しくございませんから、私は非常に悲しい出來事をお話申上げて、十分皆樣の涙を頂戴致す積りです。

サレルノの領主タンクレー公は御慈悲深い親切な主君であるといふ評判でありましたが、死ぬ間際の老年に至つて、我が娘を戀する或る男を殺害した爲に名聲を一時に落しました。一生涯に唯つた一人の娘ほか持ちませんでしたが、其の一人娘の無かつた方が彼自身に取つても娘に取つても幸福だつたでせ

う。彼は如何なる父親も及ばぬ程娘を深く愛して居りましたが、併し彼は姫を愛するの餘り、彼女が相當な年齢に達したにも拘らず、いつまでも夫を與へてやらず自分の手許に留めて置きました。其の理由は、唯娘が可愛くて迚も手離す決心になれないといふ丈けのことなのです。

併し遂に彼も諦めて、姫をカポア公の一子に嫁がせました。ところが程なく姫は夫に先立たれて父親の許に歸つて參りました。姫は容貌、姿、共に非常に美しく、若くて快活で、婦人に備はる可き有りとあらゆる美質を有して居りました。彼女は立派な壯大な御殿に、情愛の深い父親と共に生活してゐましたが、父親は自分を愛するの餘り二度目の夫を探して呉れる心は全くなさそうだし、と云つて自分からその樣な事を願ふのも適はしからぬことゝ思つたものですから、若し甘くいつたら、自分に取つて恥かしくない樣な戀人を秘かに見付け出さうと決心しました。そこで父親の宮廷に出入する多くの貴族平民に凝つと目を付けて居ります中に、遂に彼女は父親に仕へてゐるギスカアルといふ青年を選定いたしました。ギスカアルは生れこそ貴族ではありませんでしたが、心の非常に氣高い青年でしたから。姫は幾度も彼に逢ふ機會に接する毎に、愈々戀は募つて參りました。悟りの早い青年の方でも程なく自分に對する姫の心を知りまして、非常に强く心を動かされ直ちに全く戀の奴となつて了ひました。彼等は斯うして互に戀して居りましたから、姫は今では何とかしてギスカアルに内密で逢ひ度いとそれのみ望んで居

りましたが、誰にも心を打明ける氣になりませんので、望みを果たし得べき手段を男に知らせるのに、全く例のない新奇な方法を彼女は案出しました。姫は小さな紙片に、翌日彼女に逢ふべき方法と場所とを書いて、それをがらん洞の枝の中へ入れて男に渡しながら、冗談のやうに云ひました、『今晩之をあなたの召使にやつて、あなたの火を吹き起す吹竹に使はせなさい。』

ギスカアルはそれを受取つて、屹度姫は何か隱れた意味があつて自分に之を與へたに違ひないと思ひました。そこでそれを持歸つてよく調べて見ますと、程なく姫の手紙の這入つてゐる孔を發見しました。手紙には姫に逢ふべき手段を知らしてありますから彼は非常に喜んで、直ちに必要な準備を何かと整へました。

扨てタンクレーの館の片側に、何百年か知らぬ以前岩を切り開いて作つた洞窟がありました。上に小さな穴を開けて其處から僅かの光線が中に入るのでした。併し今では其の穴の上に荊棘や灌木等が一杯に生い茂つて居りまして、其の洞窟さへ何時か知ら忘れられて居ました。宮殿中の、而かも姫の居間から一つの秘密な階段が此の洞に通じて居たのです。併し其の入口には頑丈な扉が閉されてありました。此の階段はもう無限の昔から全く使はなかつたので、それのある事さへ殆んど忘れられて居ました。併し如何なる秘密をも見破る戀の力は、姫に此の扉を敎へたのです。幾日も姫は苦しみ骨折つて遂にその扉

を開き、唯一人で窟に降りて行きますと、空氣穴即ち換氣穴か頭上にありますから、出來る丈け正確にその高さを測つて、どうにかして出來たら其の穴から降つて來る樣にギスカアルに勸めたのでした。ギスカアルは此の方法を敎へられると、容易に昇降の出來るやうに一つの繩梯子を用意しました。それから荊棘を防ぐ爲に革のジャケツを着て次の晩彼の空氣穴の處に參りました。入口の丈夫な茨の根株に梯子を結び付けて中に降り、姫の來るを待つて居りました。翌る日の午後姫は眠りに就く振りをして侍女を退けて入口に錠を下し、秘密の階段を下つて行きますと其處にギスカアルが居りましたから、彼を我が部屋に連れて行つて、互に滿足を感じつゝ其の日の大部分を共に過しました。將來も誰にも見付からずこの秘密な媾曳を續けるに就て樣々手筈を決めた後、ギスカアルは窟に返り、姫は侍女等の方へ行きました。ギスカアルは窟の中で日の暮れるのを待ち、夜になつて繩梯子を昇つて家に歸りました。

かくて戀人同志は屢々逢瀨を樂みましたが、併し到底二人が望む程屢々逢ふ譯にはいきません。けれども逢ふのが困難であればある程その樂みは大きいのです。然るに悋氣者の運命の神は、彼等の幸福を嫉んで悲みに變へました。タンクレーは時々姫の許を一人訪れて四方やまの談をするのでありましたが、或る日も矢張り晝食後娘の部屋に來て見まするど、彼女は庭で侍女達と遊んで居て留守です。誰も自分の來るのを見た者はないし、娘が折角面白く遊んでるものをその樂みを破るのも氣の毒な氣がしたもの

ですから、窓は閉つて寢床の帳も引いてあるのを幸ひ、安樂椅子に腰を下して、何の氣もなく恰かも身を隱すかの樣に周圍に帳を引きました。そして程なく其の儘眠りに就きました。娘のシジスモンダは戀人が自分を待つてるのを知つて居りますから、餘り長く待たして置きたくないと思ひましてやがて侍女に別れ、戀人を窟の隱れ場から出して部屋に連れて來ると、何の躊躇もなくいつもの通り寢所に入りました。タンクレーは暫らく眠つて目を醒ましますと…………………………………たので非常に吃驚したのは無理もありません。彼は物音の原因を知つた時には、かつと怒つて思はず僕共を呼ばうとしましたが、やゝ心を靜めて、今暫らく默つて隱れてゐて、後に誰にも分らぬ樣、娘にも自身にも不名譽な風聞を起さぬ樣に此の侮辱を復讐する方が上分別と思ひました。戀人達は例の通り長い間一緒に居て、別れる時も尙ほ公が室の中にゐることには氣付きませんでした。シジスモンダがギスカアルを送り出してゐる間にタンクレーは、老年乍らも庭に面した窓から外の露臺に出て、甚だ心を痛めつゝ自分の居間に歸つたことは誰も知りません。

其の夜公は見張番を付けました。革のジヤケツを着たギスカアルは家に歸る處を捕へられ、秘かに公の面前に引き行かれました。タンクレーは彼を見るなり言葉を極めて彼を責め、あれ程目をかけてやつたのに。予にこんな侮辱を與へて恐ろしい仇で返報したのだ、予は自分の眼でそれを見たのだ、と云ひ

ました。ギスカアルは唯戀の爲とより御答へる術がありません。併し如何なる主人でもそんな言譯を聞入れるものではありません。そこで公は彼を宮殿内の一室に監禁して見張りを嚴重にする樣にと命じました。

翌る日彼は娘を訪れましたが、姫はそんな事は全く知りません。二人切りになると公は眼に一杯涙を溜めて云ひました。『娘よ、予はお前の名譽と淑徳とを固く信じてゐたから、そんなことは夢にも思はなかつたのだ。人から事實だと云はれたつて予には迚も信じられなかつたらう。お前が夫でもない男に身を任せやうな抔とは、現在予のこの眼で見なかつたら到底信じられないだらう。お前がこんな無恥な行爲をしたといふことは、予は實に身を切られる樣に悲しい。私の慘めな生命の續く限りはそれを悲まずにゐられぬであらう。だが假りにお前がこんな行ひを恥ぢないにしても、選りに選つて生れの卑しい、予が微賤から引上げてやつたあのギスカアルを相手にしないでも、予の廷臣中にもつと立派な紳士が幾らでも居るではないか？　お前に就ては予は悲しくもあるし當惑もする。どう處分していゝか、どういふ處置を取つたらいゝか分らないからだ。お前に對して常に抱いてゐた愛情は、柔しくしてやれと私に命ずる。併し娘の犯した汚らはしい行爲は、罪相應の罰を加へよと予を責め立てる。お前の下賤な戀人に就ては少しもそんな當惑はしない。予は昨夜彼を捕へさして牢に入れた。彼をどう處置するかは承知し

てゐる。だがお前のことが未だ決らないのだ。併しお前を赦すにせよ、或は予の正しい憤怒に從つて罰するにせよ、兎に角その何れかを決定する前に、其方(そち)の云ひ分を聞き度いと思ふ。』彼は斯う云ふと首を俯垂(うなだ)れて子供のやうにシク〳〵泣きました。

シジスモンダは、自分の不品行が露見してギスカアルが囚はれの身となつたと知つては、悲しさに幾度かわつと計り泣出さうとしました。普通の氣弱(きよは)な婦人ならば大概さうするのです。併し非常に氣高い心を有つて居た姫は、もう到底戀人を助ける望みはないものと思つたものですから、弱い心を抑へて、彼の生命(いのち)を助けて呉れと願はず自分も愛人と共に死なうと固く決心しました。そこで彼女は父親に向つて、何か罪を犯して狼狽してゐる婦人の樣な口調は少しもなく、眼に一滴の涙さへ浮べないで、落付いた確りした態度で云ひました。『私は何事も否定いたしません。又私達の生命(いのち)を助けて下さいとも御願ひ致しません。お願ひしたつて無駄だと思ひますから。又父上の御容赦を願ひ、父上の愛情を私の爲に利用しようとも思ひませぬ。私は唯私の名譽を守り、自分の勇氣を賴みとするばかりでございます。はい、私はギスカアルを愛しました。今でも愛して居ります。生命の有らん限り愛します。その生命ももう長くはないでせうが。そして若し死んでから後も尚ほ愛することが出來るなら、私は父上に斷言いたします。吃度死んでも愛します。私は婦人持前の浮(う)は氣(き)から戀をしたのではありません。此の青年の立派な

特質を認めたし、父上が私に二度目の夫を與へて下さるお積りが少しもないのを知つたからです。父上御自身が鐵でも石でもない如く、娘の私も鐵石でないといふことを考へて下さればよかつたのです。そしてたとへお年は召していらしても、若い時分の熱情がどれ程力強く全能なものであるかといふことも思ひ出して下さるのが至當だつたのです。あなたは若い時代に戰陣で苦しい生涯をお送りになつたとしても、それならば尙更のこと、どんな年頃の人でも、特に若い人達が怠惰な生活をしてゐればどんな心になるかよくお分りになる譯です。私は未だ花盛りの年頃でして感動もし易いのでございます。この二つの理由より私は其の要求を滿足させる爲には是非共結婚を必要としたのですけれ共、それが出來なかつた爲に、其の要求が私の心に戀の炎を燃し付けたのでありませう。それは恐らく若い婦人としては何の不思議もありますまい。長い間私は衝動を抑へて居たのですけれども駄目でした。そして到底情熱を抑制することの出來ないのを知りますと、私は愛と名譽とを一致せしむるやうに、出來る丈け注意して誰にも知られぬ樣に、身を燒く欲望を滿足させようとしたのでございます。然るにあれ程用心したにも拘らず一體どうして父上がそれを御知りになつたか存じませんが、分つた以上私は否認いたしません。併しギスカアルを愛するに至つたのは決して單なる偶然からでないことを申上げて置きます。私が他の凡ての廷臣の中から彼を選びましたのは熟考の上でございます。彼の優秀なる人物を知つて私は愛した

のでございます。仰せに依りますと、若し私が身分の高い人を愛したら、あなたは私の戀を御許し下さつた樣に思はれます。私の戀人が身分の高い立派な生れの人でなかつたといふことは、運命の落度であつて私が惡いのではありません。併し御存知の如く運命は盲目であつて、少しも出世する價値のない者を高位に引上げたり、凡ての點に於て幸運なるべき人を微賤にして置いたりすることは極く有りふれた事です。あなたは下等な偏見の奴隷になつて、運命の禍失である身分の賤しさに依つて人を責めるなんといふことはまさかなさるまいと思ひます。人類の源に溯つて御覽になれば、我々は皆な同じ祖先から生れ、同じ肉から作られ、同じ缺點を持つてゐるもので、人間に眞實の階級を付け區別を付ける第一の根底は其の人の德だといふことが御分りになりませう。最初に其の才能や美質に依つて身を拔んでた人達は貴人と云はれました。他の人達は一般の群衆であつたのです。其の後人間の心が墮落して此の自然的法則は撤廢されましたけれ共、併し全然破壞された譯ではありません。偏見の流れに身を押し流されない少數の人達の心には、賤民と貴族との眞の區別が猶ほ存してゐて、世間的の階級別では賤民でも人間として貴族たる權利を主張する人はいつでも幾人か見當ります。それ故正しく云へば、人間の德が高ければ高い程、確かに其の人は貴族として階級が高いのです。氣高い心を持つた人が貴いといふこの原則に從つて、あなたの廷臣全部を御覽になり、そして彼等の特質を御調べになれば、ギスカアルが

廷臣中の最も高貴な人間だといふことは直ぐ御分りになりませう。私がそう認める計りでなく、父上御自身の御言葉がそれを證明して居ります。父上程彼を賞讃した者はございません。そして彼は確かに彼に對する父上の御言葉を少しも辱めない振舞を爲したのです。否、御言葉よりももつと立派な行動をしたと云ふべきです。ですから若し私が此の青年を買被つたとしますれば、それはそうさせた父上が悪いのでございます。それ故私が彼を戀しても、身分が卑しい抔といふ理由で私を責める權利は父上にはございませぬ。彼の貧困を責める方が未だ相應な理屈があります。併しそれを責めれば父上御自身を責めねばなりません。あんな立派な、あなたに忠實に仕へた男子を裕福にせず、出世させなかつたのは皆なあなたなのですもの。それに貧困は少しも高貴である妨げとはなりません。唯世間的の富がないといふ丈けです。若しそうでなかつたら昔の王様や領主等の高貴さはどうなつたでせう？　彼等は多く貧しくて、奴隷上りや慾深の人々は富の中に溺れてゐたのですからね。家畜番人や、お百姓が金持になることもあれば、今は偉い金持だつた者が零落して勞働者になることもあります。金のある無しが人間の價値を決める標準にはなりません。

私の御處分に就てはどうとも御隨意になさいませ。私は少しも抗ひは致しませんから。其の御老齢になつて殘忍な御方にならうとなるまいとそれは皆な御心次第でございます。若しあなたの御手を私の

血の中にお浸(ひた)しにならつと御決心遊ばしたのでしたら、私はそれを御止め下さいとは御願ひ致しませんから御安心下さいまし。併し私は申して置きますが、あなたがギスカアルを御殺害なされば私も同じ運命に從ふ決心でございます。父上が殺して下さらなければ自分の自由意志で死にます。たゞ、もう御泣き下さいますな。どうしても御泣きにならねばならぬとならば、何卒彼方(あちら)へいらして、女々しい人達と一緒にそうなさいませ。そして私達を死刑になさつて下さい。若しそれが相當の罰と御考へならば」

之を聞いて公は娘の決心の非常に固いのを知りました。而しまさか最後に公を威嚇した樣な恐ろしいことを爲し得るとは思ひませんでした。反對に彼は、戀人を亡き者にすれば娘の戀も即坐に消えるものと思つたのです。そう思ひながら彼は娘の許を去り、今晩ギスカアルを絞殺して彼の心臟をむしり取り、直ぐに予の所へ持つて來いと命じました。其の通り實行されると彼は其の心臟を黄金の盃に入れて一人の僕に娘の許へ持たして遣り、其方(そなた)の父公爵は、其方が最も深く愛する者を失つた悲みを慰める爲に此の贈り物を爲す、といふ口上を傳へさせました。シジスモンダは旣に戀人の死を豫想しまして、必要の場合には直ぐ用いられる樣に毒藥を手に入れて居りました。父親の贈り物を見て彼の傳言(ことづて)を聞くと、確かにそれがギスカアルの心臟だと思ひました。そこで彼女は使者に向つて云ひました。『御父樣は本當に賢いことをなさいました。恐らくお父樣自身も自分がどれ程賢いことをしたか御存知ないでせう。此の

心臟に黃金の墓を與へて下さるなんて。』『そして無中に心臟に接吻して更に謂ひました、『御父樣あなたはいつでも私を愛して下さつたけれ共、今程深い愛をお示しになつたことはありません。此の心臟にこの樣な榮譽を與へて下すつたのですもの。どうか御父樣に傳へて下さい、これが私の申上げる最後の感謝でございますと。』

斯く云つて姬は再び心臟に接吻して、非常に深い溜息を吐いたものですから、彼女が飽かず眺め入つてゐる心臟が何であるか少しも知らない居合せた侍女達までが、皆な心を動かされた程でした。『おゝ心臟！ 私に澤山の喜びを與へて呉れた心臟よ、おまへはもう此の世の悲痛からも轉變からも解放されたのだ。私は幾度となく心の眼でおまへを見て讃美してゐたのに、今肉體の眼でおまへを見ることが出來るやうにした殘忍な人よ、呪はれてあれ！ おまへの一生は終つた。そしておまへは凡ゆる人間が急ぎ進んでゐる最後の場所に到着したのだ。おまへの敵でさへもおまへが黃金の墓場に這入る價値（ねうち）があると思つたのだ。おまへの葬禮に欠けてゐたのはおまへが深く愛してゐた婦人の淚だけだつた。今それを注いであげます、おまへがそんなに望む淚をどつさり注いであげます………無慈悲な御父上！………私泣かずに死ぬ決心だつたの、落付いて顏色一つ變へないで死なうと思つてゐたのだけれど、世界中で一番可愛い心臟を見ては泣かないではゐられません。えゝ、わたし泣きます！ そして神樣が私に送つて

下さつた此の心臓を涙で洗つてやりますわ。私の喜びの源であつた心臓よ、おまへに捧げる私の涙がもう出なくなつて仕舞つたら、私もおまへの後を追つて彼の世へ行きます。そしておまへを動かした靈魂と合體します。まあ私としたことが何を云つてるんでせう？　此の盃、私があなたに崇拜した心臓には、未だ戀人の靈魂がすつかり籠つてゐるのだわ。その靈魂は私の靈魂を待つてゐると私に告げる、永久に別れないやうに一緒にならうと………』

姫は溜息と、すゝり泣きと、瀧の如く頰を傳ふて、盃の中に流れ落ちる涙の爲に、それ以上云ひ續けることが出來ませんでした。彼女を取巻いてゐた侍女等は驚き感動しながらも、此の場の光景が全く譯が分りませんでした。侍女等は姫の悲歎の理由を尋ねたり、一緒になつて涙を流したりして、出來得る限り慰めようとしました。併し自分の悲みに我を忘れてゐる姫は、やがて頭を上げ涙を拭いて、確乎した心に返つて云ひました。『おゝ、愛する心臓、私はもうおまへに對する務めを果たした。此の上は私達の靈魂を元の通り結び合せさへすればいゝのです。』そこで彼女は用意して置いた毒藥の瓶を直ちに取り出しまして、それを心臓の盛られた黄金の盃に注ぎ込み、何の恐れ氣もなく滴も殘さず呑み干しました。そして直ちに寢臺の上に横はりましたが、大事な盃は猶ほ手から離さず自分の心臓にあて、戀人の心臓と自分の心臓とを固く押し付けて居りました。

侍女等は姫が何の液を呑んだのか分りませんでしたけれ共、兎も角此の有様を公に知らせました。併し彼が來た時はもう間に合ひませんでした。丁度姫が寢床に横はつた時だつたのです。彼は自ら招いた不幸を知り、娘の哀れな有様を見ては、愛と後悔の涙を溢しました。シジスモンダは呼吸も絶え〴〵に云ひました。『御父樣、わたしの爲めに泣かないで下さい。泣いても無益ですし、私は泣いて頂きたくございません。でもあなたが度々御示し下さつた私に對する愛情の片らが少しでも未だ殘つて居りますなら、表向き私をギスカアルと一緒に葬つて下さいまし。あなたは私が内密に彼と幸福を分つことを欲せられなかつたのですから。』

公は悲しさが込み上げて來て、返事をすることも出來ず、啜泣しながら部屋を立ち去りました。公の立去るや否や、姫は最早や最後も近づいたと思ひまして、依然として戀人の心臟を自分の胸に押あてた儘、侍女等に向き直つて別れを告げ、言葉の終ると共に眼は閉され、總ての意識を失つて、息が絶えました。

ギスカアルとシジスモンダ姫との不幸な運命は斯くて終りを告げました。老タンクレーの悲歎は言葉に盡されません。我と我が身の殘忍を後悔しましたがもう追付きません。彼は最も壯大なる葬禮を行つて二人を一つの墓に埋葬しました。サレルノの住民は皆深く悲んだそうでございます。

第二話

僧アルベルトは或る婦人を欺き、天使ガブリエルが彼女を戀してゐると信じさせて、自ら天使となり屢〻夜間右の婦人を訪れてゐた。其の後女の身内に發見されかゝつて窓から逃れ或る貧しき男の家に隱れる。翌日貧人は彼に野蠻人の扮裝をさせ四辻に連れて行つて公衆に曝す。彼は認められて同僚の僧二人に連れ歸られ、牢に入れられる。

フヤンメッタの物語は幾度か淑女達に涙を流させた。話が終ると王は嚴かに云つた、『私はシジスモンダ姫とギスカアルの味つた喜びの半分でも經驗することが出來るなら死んだつていゝと思ふ。それも吃驚するに及びません。實を云へば私は毎日一日の中に一千度ぐらゐ宛死ぬ程の思ひを誰かに寄せるのに何の報ひも來ないんですからね。併し自分一身にしか關係のないことを云ふのは止めませう。そこで今度はパムピネア樣に御願ひして今のやうな悲しいそして私の題目に或る點まで合ふ話をして頂きませう。パムピネア樣もフヤンメッタ樣のやうな話をして下されば、それに依つて落す涙で私の憂悶も少しづゝ慰まれませう。』

パムピネアは王の命令を聞くと、彼の期待を滿足させるよりも淑女達の望みの方に重きを置く氣にな

つて、直接王の命令に背きはしないけれども、一種の悲喜劇を物語つて人々を笑はせようと心を定めた。そして語つた、――

僞善的惡人は澤山惡事を働らいても誰も知らずに彼を善人と信ずる、といふ意味の諺があります。此の諺は今日の話題の材料を澤山私に與へて呉れます。それから又僧侶の僞善を發く手段をも與へます。彼等は長いだぶ〳〵した衣を着たり、顏色を故ら手を加へて蒼白くしたりして罪惡を隱すのです。いかにも柔しげな謙遜振つた態度で他人の持物をねだつたりしてゐながら、自分が平氣で犯す樣な罪惡を若しも人が犯さうものなら厚顏にも之を譴責します。自分達は人から物を頂戴して天國に行くがお前達は人に與へなければ天國に行かれないぞと、勝手な御說教を信者に納得させようとしてゐるのです。加之、私達こそ先づ天國に入る資格があるのに、墮落した僞善者の坊樣達が僭越にも天國の主人顏をして、死ぬ時遺贈する金高に依つて天國の特等席や下等席を人々に割當てるのです。そんなことは自己を欺かなければ出來ないことで、而かも若し本當にそんな馬鹿氣たことを信じてゐるとすれば、それを信ずる信者を欺く譯です。彼等愚僧惡僧に關して私の知つてゐることをすつかりお話しすれば、だぶ〳〵の僧衣に隱れた頓馬を澤山御目にかけることが出來ます。併しそれは餘りに橫道に外れますから、私は只、彼等が凡て玆にお話しようとする僧侶と同じ目に逢へばよいと希望して置きます。其の坊樣といふのはも

う相當の年配で、ヱニスの最も身分の高い家々に於て非常に崇敬せられてゐた人なのです。この人に就ての私の物語は、シジスモンダの死を悲んだ皆樣の御心を又陽氣にするでありませう。

昔イモラに極惡人のアルベルト・デラ・マッサといふ男がありました。實に不信不義の限りを盡した男だものですからイモラ中で彼を信ずる者は一人もありませんでした。嘘を云つて信じられぬは元よりのこと、眞實を云つても信じられないのでした。遂に此處ではもう惡事も出來ないと見極めを付けまして、彼は凡ゆる惡事の掃き溜めであるヱニスに參りました。そこで何とか方法を變へて他所で試みたことのない遣り方で惡事を働かうといふ決心です。そこで彼は如何にも正直さうな信心家らしい樣子を作つて、遂にアルベルト・デモラと名乘つてフランシス派の僧侶になりました。本當に改宗したといふ譯ではなく、唯貧窮に陷らぬ爲と、一には又宗教といふ衣に隱れて色欲を滿足させんが爲なのです。之と同じ動機から僧職に就く人間がどれ程多いことでせうか！

僧アルベルトは自分の目的を達するには隨分多くの節制禁欲をしなければならぬことを悟りましたが、併し彼は我慢してそれを履行することゝしました。其の代り適當な折が來たら全部その埋合せはする積りです。そこで彼は先づ最も峻嚴に實行し始めました。口を開きさへすれば信仰を賞揚し、斷食や祈禱を讃へて、絕えず悔悟を激賞しました。彼は決して肉を食はず、人目にかゝる所では酒を呑まず、

勤勉に聖餐を用ひ、休みの時間をも勉強に當てました。斯くして彼は僧侶仲間の尊敬を得ました。仲間は彼を非常に學問のある信心深い男と信じて、彼が説教を始める樣になると、僧正の位階を取るやうに勸めました。彼は悧巧で野心深かつたので程なく他の説教者の中でも名高い人になりました。凡ての人が彼の後を追ひ彼の説教を聞きたがつて、彼が自分の説教する眞理が全く譯が分らないのだ抔とは思ひも付きませんでした。それ程上手に彼は僞善の役を演じたのです。彼は非常に感動したらしく見せて會衆の心を興奮させる爲に時々涙を溢しました。彼の御芝居が非常に當りまして、久しからずして彼はヱニス全體の尊敬と信頼とを受ける程になりました。人々はアルベルト僧正の話ばかりしてゐる始末です。凡ての信心家は彼を以て自分の精神上の指導者と仰ぎ度いと希望し、非常に信仰の篤い人達は臨終の際に彼を呼びました。多くの人は彼を遺言執行者に任じ、或る人々は手元にある現金及び貴重品を悉く彼に預けました。ですから見付かつたり疑はれたりする恐れのない時には、此の惡漢が隨分の儲け仕事をしたことは御推察出來ませう。彼の惡事が露見する樣なことがあつても人々はてんでそんなことは信じませんから、彼は徐々惡事に勇敢になつて參ります。彼はそれ程凡ての人から尊敬されてゐたのです。フランシス派の僧侶で存生中之ほど聖者としての名聲を博した者は一人もありませんでした。アッシシの聖フランシスでさへそんなではなかつたのです。

ところがアルベルト僧正の節制は唯外觀上の行爲に止つてゐたのです。心の底には相變らずの惡心を藏してゐて、今ではそれに僞善といふ罪惡が加はつた丈けなのです。僞善は神を嘲弄するものですから之こそは最大の罪惡であつて、彼は以前より一層の罪人になつたに過ぎません。彼は元々女には目のない男でしたから、信じ易い婦人や、容易に操を破る婦人等が懺悔に來れば、必らず直ちに手に入れて了ふのです。或る日のことリゼッタ・ダ・カキリノといふ餘り賢(かしこ)からぬ婦人が彼の許へ懺悔に參りました。彼女は或る豪商に嫁いで居りましたが、夫は商用の爲にオランダに行つて暫らく留守でありました。一寸した罪の懺悔が簡單に一通り濟みますと、アルベルトは彼女に戀人があるかどうかと尋ねました。すると婦人は、ヹニスの人は皆な然うですが、見識が高く傲慢ですからぐつと腹を立てゝ、『教父樣、あなたの眼は何の爲に顏に付いてゐるんですか？ 私の樣な稀に見る美人がそう易々と戀を許すものではないといふことが見えないのですか？ 私は普通の相手で滿足するなら厭になる程澤山戀人が出來るに極つてゐますわ。併し私は實に世にも珍らしい、美人なんですからね、私の愛を受ける價値のある人の爲に大事に自分を保存して置く積りですの。わたしほど緻縹のいゝ姿の美しい婦人をあなた生れてから御覽になつたことがあつて？』未だ〳〵限りもなく自分の緻縹をほめ立てました。之は地上の美ではない天上の美だ抔とも時々口走りました。それ故僧アルベルトは此の女は確かに非常に美しいが少し頭が狂

つてゐるといふことが直ぐ分りました。そして之は持つて來いの女だと思ひまして、直ちに彼女を手に入れたくなり、この惡僧が彼女に對して非常に色慾を燃やすに致りました。併し彼は卽座に女を手馴けることをせずに、良き折の來るのを待つことにして、相變らず聖者の風を裝ひ乍ら、お前さんがそんなに自分を讃めるのは皆己惚れ空自慢といふもので、そんなことは止めなければならぬと說きました。併し女がどうしてそれで承知しませう、彼女はアルベルトに面と向つて、おまへは馬鹿だ、美しいのと醜いのとの見分けが出來ないのだと罵りました。敎父アルベルトは此の上女を怒らしては都合が惡いと思ひまして何にも云はずに女の罪を赦し、家路に歸してやりました。

數日後彼は自分を信仰してゐる一人の僧を伴つて女を訪れました。そして彼女を傍に連れて行つて其の足下に跪いて云ひました。『奧樣、私は前の日曜にあなたが懺悔にいらした時飛んだ失禮を申上げたので其の謝罪に參りました。それが爲に私は翌る晚恐ろしい懲罰を受けまして其れ以來今日迄床に就き通しだつたのです。』

『誰がそんなにあなたを罰したのですか?』と愚かな若いリゼッタが訊ねました。

『唯今申上げます。奧樣が懺悔にお出でになつた次の晚のことです。私がいつもの樣に庵室で祈禱をして居りますと、不意にパッと明りが指したので、驚いて振り向く暇もなく一人の若者が私に跳び懸りま

して、私を棒で擲つて殆んど半殺しにしたのです。私はやつと聲を上げて、あなたは何誰ですかと尋ねました。すると彼は、俺は首天使のガブリエルであるが、俺が神を除いては世界中で最も愛してゐるリゼッタ夫人の天上界に適はしき美しい緻縹をけなしたから、それでお前を折檻するのだ、と云ふのです。私の驚きは察して下さるでせう。私は彼に許しを請ひました。すると彼は云ひました。『お前が夫人の處へ行つて謝罪すれば許してやる。出來る限り努めて謝罪しろ。若し夫人が許さなければ、俺は屹度又お前の處へ戻つて來て、死ぬ迄忘れられない程手痛く打擲してやるからな。ですから何卒奥樣、私を御宥し下さい。宥して下されば首天使が私に告げた他のことをも御知らせ致しませう。』

愚なる妻は之を聞くと有頂天に喜びました。馬鹿氣た虛榮心を極度に滿足されたからで、嘘話であらう抔とは少しも疑ひません。『アルベルト僧正樣、だから私云つたぢやありませんか、私の緻縹は天上界の美しさだつて。でもそんなに酷い目にお遭ひになつては御氣の毒ね。あなたが二度と折檻されない樣に宥してあげませう。併し天使長の云つたことを殘らず私に話さなければいけませんよ。』

『私の罪を御宥し下されば何事も隱し立てはしません。併し覺えてゐて下さい。私の申上げることを決して他人に明かしてはなりませんよ。』

『少しも心配しないで仰つしやつて下さいな。私はきつと愼みますから。』

『あなたは世界中で一番幸福な婦人です。といふのは天使長のガブリエル様が熱烈にあなたを愛して居られて、あなたの機嫌を損じたり、いやそれよりもあなたを怖がらしたりする心配さへなかつたなら、もうとつくの昔にあなたの許を訪れて一緒に寢た筈だと云ふのです。彼は非常にそれを望むから、あなたさへ御承知なら何日でもあなたの都合のいゝ晩に來ると申傳へて與れとのことでした。併し彼は天使だから、天使の姿では影計りで形がないので、あなたを喜ばす爲に假りに人間の姿となるといふのです。そこで彼は何時、誰の姿であなたの許へ來たらよいか尋ねて與れと云はれたのです。彼は必らず約束を守ります。それだから私は、あなたは世界一の美人であると同時に、世界一幸福な婦人だと申したのです。』

若い夫人は何にも知らず、首天使が私に戀したといふことは大變嬉しい、私はいつでも特別に彼に歸依してゐたのだから、と答へました。そして『私は教會堂ででも又は小な御堂ででも、ガブリエル天使の御像を見さへすれば必らず蠟燭を上げましたの。何時でも御望みの時に御出で下されば、私一人つ切りで御待ちしてゐます。恐ろしい姿でさへなければどんな形をしてゐらしても構ひませんわ。』

『あなたの仰つしやることは實に要領を得て居る。ぢや私に御任せなさい、御滿足のいく樣にしますから。だが一つ御願ひがあるのですがね。あなたに取つては何でもないことで、私に取つては非常な喜び

となる事なんで、つまり天使に私の肉體を貸すのです。あなたがそれを許して下されば其の結果は、彼が私の身體に乘り移つてあなたと一緒にゐる間は私の靈魂は肉體を離れて天國に行つてゐることになるのです。』

『それは少しも構ひませんとも。私の爲にあなたは打擲されなすつたんですから、其の報酬として天國にいらつしやるのが當然ですわ。』

『では奥樣、今晩御宅の戸口を開けて置いて下さい。天使も肉體の形を取つて來るのですから、普通の人間同樣戸口から這入つて來なくてはならないのです。』

リゼッタが然うして置くと答へたので僧は暇を告げました。後に殘つたリゼッタはもう嬉しくて待ち遠で堪りません。身體が羽根の樣な氣がして足も地に着かぬ心地です。一秒々々の經つのが百年もかゝる樣に遲く思はれます。

神父アルベルトは其の夜爲すべき事の準備に取りかゝりました。天使の役目とは反對の役目を演じようといふのですから、非凡な勇氣を現はし得る樣に先づ精力を付け興奮を與へる物を食べました。日の暮るを待つて彼は忠實な僧一人を伴つて僧院を出で、或る知つた女の所へ行きました。彼はよく其の家に行つていゝ……のある時は乘馬の稽古をする習はしだつたのです。彼は其處で白い長い衣を用意して、

もういゝ時分と思ふ頃リゼッタの家に參りました。戸には只鐶が下してあつた丈けなので彼はそれを開けて、持參の白衣を身に纏ひ、二階の夫人の部屋に上つて行きました。夫人は僞天使の眩いばかり純白な姿を見て恍惚となつて彼の足下に跪きました。彼は女に祝福を與へ、彼女を立たせて、寢所に行く樣にと身振りで示しました。夫人は直ちに命に從ひ、天使は彼女に跟いて行きました。………………

……………………………………………………………………………………彼女は大喜びで、天使でさへ惚れる樣な偉大な美しさを授け給はつたことを天に謝しました。……。そして休息の合間々々には天の榮光に就て語りました。夜が明けるや僧はもう退出の時と思ひまして、又の逢瀬の手筈を極めた上お伴の僧の所へ來ました。伴の僧もアルベルトに天使の衣裝を貸して呉れた博愛的な年增女と、……………………………………ゐたのでした。

リゼッタは晝食を濟ますや直ちに神父アルベルトを訪れて、天使がブリエルより訪問を受けたことを告げました。そして彼が彼女に話して聞かした天の榮光に、自分の頭で作つた無數の出鱈目を附加へて話しました。

すると僧は云ひました。『あなたが天使の訪問を受けてどれ位愉快であつたか私には分りません。私は唯、昨夜天使が來たから私の使ひの役目が成功したことを告げますと、彼は人間には迚も想像出來ないやうな愉快な所へ私の靈を送つて呉れて、私は朝までそこにゐたことを覺えてゐる丈けです。其の間中私の肉體がどうなつてゐたかは少しも分りません。そして其の間が極く短い樣な氣がしました。』

『あなたの御身體は天使ガブリエルと一緒に一晩中私の………………居たのですわ。それが噓だと思召すなら左の乳の下を御覽なさい、容易に消えないやうな印をそこに付けて置いたんですから。』

僧はそれでは御言葉が眞實かどうか後で着物を脫いで見ませうと云つて、猶ほ似寄つたことを暫らく話してから夫人は家に歸りました。そして天使よりの二度目の訪れを待つて熱心に待つて居りますと、數日ならずして天使は來て呉れました。それから三度目、四度目、と數回續きました。そしてもつと澤山續いたのでせうが、愚かにも彼女は自らそれを止めさせる樣なことをして仕舞つたのです。

或る日のこと一人の友達とゐる時に、話題がいつか婦人の美貌といふことに移つて來ますと、勿論この愚かな若い婦人は自分が世界一の美人だと云つたのです。『若しあなたが誰が私に戀してゐるか、少しでも御知りになれば、今仰つしやつたやうなそんな婦人なんかよりも何の躊躇もなく私の美貌を御取りになるに決つてゐますわ。』

相手の友達はリゼッタの大馬鹿を知つてゐますし、誰のことを云つてるか知りたいとも思つたものですから、あなたの仰つしやることは本當かも知れない、と云つて更に、『私だけは全くそれを信じますけれ共併し他の人は誰だつて、其のあなたに戀してゐる人が誰だか分らなければ、あなたが世界一の美人だなんて信じやしませんわ。でも誰だか知りませんけれど、其の人は餘つ程美人を見分けることの上手な人に違ひありませんね。』と附け加へました。

すると愚かな婦人は云ひました。『その人を明かしては惡いと思ふんですけどね、でもあなたには何事も隱し立てしないのですから御話ししますがね。それは首天使のガブリエルなのよ、彼の人は自分の生命（いのち）ほどわたしを愛してゐますの。そして私を世界一の美人だと思つてゐるんです。少くとも此の國第一の美人だつてそう云ひましたわ。』

リゼッタの友は今にも吹き出しそうになりましたが、もつと喋らせようと思つて我慢しながら、眞面目な顏して云ひました。『若しガブリアルがあなたに然う云つたなら、彼があなたを戀してゐることは確かですわね。でも正直に云へば、天使が婦人に戀を仕かけるなんて私には迚も信じられませんわ。』

『ぢや今分りますわ。天使は其のことにかけては隨分立派なものですわ。私保證しますがね、男なんて天使に比べれば御話になりませんよ。美しいガブリエル天使と…………………私は知つたのですがね。

夫なんか彼と比較すると至で馬鹿よ。そしてガブリエルの話に依ると天國でも地上と同じに戀があるんですつて。彼が私に戀したのは、私ほどの美人が天國に居ないからだつて、自分で云ひましたわ。之で分つて？　全く分り切つたことぢやありませんか？』

友の女は早く何處かへ行つてリゼッタの馬鹿らしさを思ふ存分大聲に笑ひ拔きたくて堪らなくなりました。それ故直ぐ樣リゼッタに別れて腹の底から笑ひました。其の夜彼女は或る婚禮に列しましたがそこには澤山の婦人が來てゐましたので、人々を面白がらせようとして愚かなリゼッタの天使の戀人に就て皆に語りました。聞いた婦人達は直ちに之を家に歸つて夫に話します。夫は又別の婦人に語ると云つた具合で、それより二日經たぬ中に殆んどヹニス中の人間が皆其の話をきゝました。從つてそれがリゼッタの義兄弟の耳にも入りまして、彼等は彼女の恐ろしく馬鹿なことを知つてゐますから、之は屹度誰か色事師が天使ガブリエルと僞つて彼女を瞞してゐるに違ひないと思ひまして、其の天使の正體を見屆けてやらうと決心しました。

神父アルベルトはリゼッタ夫人に就て一般の噂を聞きまして、彼女の不注意を十分叱責してやらうと思つて或る夜彼女を訪れました。夜每に見張りをしてゐた親類の人達は彼がリゼッタの家に入るのを見て、秘かに後を跟いて行きました。彼が婦人の寢室に入つて着物を脫ぐか脫がぬに戶口で物音が聞えま

した。門をかけた扉を荒々しく叩きますから、彼は直ちに此の場の樣子を悟りましたが、出來る丈け早く窓から身を投げるより他に逃げ道とてはありません。窓は大運河に面してゐましたがかうなつては仕方なく、彼は其處から飛びました。水が澤山あつたので落ちても怪我はしませんでした。少し目が眩んだばかりです。それも大したことはなくて彼は向ふ側に泳ぎ着きまして、丁度戸口の開いてゐた或る漁師の家に逃れました。彼は漁夫に向つて彼の災難を語り、素裸體でゐる理由をも告げて、どうか生命を救つて呉れと頼みました。男は彼を憐みまして、彼を自分の寢所に寢かして出來る丈け御力添へしませうと云つて呉れました。夜が明けると漁夫は、止むを得ぬ用事があつて出かける、長くて一時間程で歸つて來るから、それ迄少しも身動きしないでゐて下さいと云つて去りました。

身内の人達はリゼッタの寢室に侵入して見ますと天使ガブリエルは既に逃げ去つた後です。そこで彼等は十分にリゼッタを叱り、監禁するぞと脅かして置いて、天使となつた僧侶の衣を持つて立ち去りました。

ところが其の事件は朝早くからもう町に喧しく取沙汰されてゐましたから、親切な漁夫もリアルトに於て此れを耳に入れました。天使ガブリエルはリゼッタと同衾してゐる處を身内の人達に襲擊されて大運河に身を投げたが、それからどうなつたか皆目行方が分らぬといふのです。之を聞くと直ぐに彼は、

自分の家に避難した男こそ必らず此の僞天使とやらに相違ないと思ひまして、家に歸るなり種々尋ねて見ると確かにそうと分りました。そこで若しお前が五十兩よこさなければ女の身内に引渡すと脅かしました。アルベルトは仕方なし彼に書付を與へますと漁夫は倚の家に使を遣つて金を取寄せました。アルベルトは金を拂つたからもう逃れられるものと思ひましたところが、漁夫は彼の僞善を甚だ憎み、未だ罰しようが足らぬと思ひました。そこで云ふやう、『天使の牧使さん、怒り切つたリゼッタの身内から逃れる道は唯一つ切りないね。今日聖マルクの辻に祭があるがね、そこへは誰でも人間を一人態にでも野蕃人にでも仕立てゝ連れて行くことが出來るのだ。だからお前さんがそう云つた姿に變裝すれば其處へ連れてつてやらうよ。つまり狩獵の儀式を催す譯なんだからね、其の式が終つたら安全な場所へお前を連れてつて適當な着物を着せてやるから、そうすればお前の連絡してゐた婦人の身内から逃れることが出來るだらう。そうしないとね、彼の人等は何でも此の近邊の何處かの家に隱れたに違ひないと思つて、お前を摑へる爲に非常に多勢の人間を見張りさしてあるんだからね、彼等に捕はれないやうに此の家を出るといふことは迚も出來ないのだ。だから俺が云つた通り思ひ切つて變裝するんだね。』

神父アルベルトはそんな扮裝をするのは全く厭でしたが他にどうしやうもありません。漁夫の巧みな辯舌に乘せられて、それより他に逃れる道がないと思つたものですから、リゼッタの身内に捕はれるこ

との恐ろしさに遂にそれを承諾しました。漁夫は直ちにアルベルトの全身に蜜を塗り、それに一杯羽毛を植え、顔に假面を被せ、首根に鎖の輪を付け、片手に棍棒を持たせ、片手には牛殺しの大きな二匹の犬を縛つた縄を持たせました。斯くの如く僧侶を野蕃人に變装させてゐる一方、彼は一人の男をリアルトの四辻へやつて、『誰でもガブリエル天使を見たい者は聖マルクの辻においであれ、譯なく見られます。』といふことを喇叭を吹鳴らして觸れさしたのです。そして彼が鎖の端を摑んで蕃人を前に追ひながら街に出ると、人々は何事かと群がり寄つて彼を取卷きました。どうした譯か誰も知りませんから、人人は口々に傍の人に一躰何んでせう、何でせうと訊き合つてゐます。かくて彼等が聖マルクの辻に達した時には、其處にもお觸れに依つて既に一杯の人が集つて居ります。漁夫は先づ狩の始まるのを待つのだと欺いて蕃人を一本の柱に結び付けました。そしてたつぷり一時間もアルベルトを放つて置きましたから、蜜を嗅ぎ付けて蠅や、地蜂は彼の身體に群り食ひ付く、人々は嘲弄するといふ騒ぎです。群集が充分集まつたのを見ると漁夫は、アルベルトの鎖を取る振りをして彼の假面を剝ぎました。そして周圍の人々に向つて『皆様、荒熊が參りませんでしたから今日は狩は止めます。併し折角皆様が此處まで御出でになつたのですから御土産と致しまして、夜毎に天下つてヱニスの婦人を慰めに來た天使を御覧に入れませう。皆様お聞き及びの美しい天使とは之でござりませす。』と云ひつゝ今假面を取去つた神父ア

ルベルトを指差しました。人々には直ちにそれがヱニス全體の尊敬を集めてゐたアルベルトなることが分りました。かく嬲り物にせられ、群集の嘲弄に曝されたアルベルトの辛さ間の惡さは想像出來ませう。人々は有らん限りの惡口雜言を浴せかけ、遂には殘酷にも、いや正當にも、彼の顏に汚物を投げ付けさへしました。町の最も身分高き人達までが喜んで彼を見に行き、彼の屈辱的光景を見て樂みました。二時間以上も彼がかうしてゐた時、遂にこの事が彼の屬する僧院に聞えたものですから、六人の僧が彼を受取りに來ました。彼等はアルベルトに一枚の大きな布を肩より被せ、彼の鎖を解いて連れ歸りました。群集は猶ほも後に跟いて來て、彼や彼の仲間の坊樣達を罵りました。

言ひ傳へに依りますと神父アルベルトは僧院に連れ戻されると牢に入れられて、非常に慘めな死に樣をしたそうでございます。斯くて稀代の惡僧は、長い間僞善に依つて全市民を欺き、信じ易き婦人の虛榮心を凌辱し、恐らくは他にも之と同じくらゐ惡辣な併し目に立たぬ罪惡を澤山犯した揚句、衆人に恥ぢを曝して惡事相當な罰を受けました。どうか此の種の人間が悉く之と同樣な目に逢ひまするやう天に祈つて置きます。

第三話

三人の青年が三人の姉妹と戀し合ひ、彼女等を連れてクリートに逃れる。長姉は嫉妬の爲に戀人を殺し、次女は姉の命を救ふ爲にクリートの領主に身を任す。それが爲彼女の戀人は女を殺して長姉と共に逃亡する。第三の夫婦は此の殺人の犯人とされて訊問を受け仕方なく犯さぬ罪を白狀する。死刑に處せられるは疑ひなしと思つて牢番に賄賂をして共に逃れてローデスに來り、貧窮の中に悲慘な最後を遂げる。

フィロメナの話が終るとフィロストラトは暫し物をも云はずに居たが、やがて彼女に云つた。「あなたの話の終りは氣に入りました。併し始めは少し面白すぎました。私はもつと悲しい方がいゝのです。ロウレッタさん、今度はあなたもつと適當したのを話して下さい。」

ロウレッタは快活に答へた。『あなたが戀人に望む處は凡て不幸な結末だとしますれば、それは餘りに戀人に對して無慈悲でございます。併し王の心に添ひますする爲に私は、戀の歡樂を幾らも味はない中に悲慘な最後を遂げた三組の戀人のお話を申上げませう。

總て罪惡といふものは之を犯す當人の不利益となるは素より、他人に迄も屢々不幸を及ぼすことは日

常の事實が之を示して居ります。併し私は、憤激の情といふものは罪惡の中でも最も有害なものであると考へます。それは抑へ樣もどうしようもなく私共を驅り立てゝ身の破滅に追ひ遣るのでございます。それは我々が他人から害を受けた時突然に起る一種の感情に過ぎませんが、我々にはそれを反省する餘裕はなくなり、その感情が凡ゆる理性を追ひ拂ひ、心の眼を眞つ暗に晦まして仕舞つて、胸の中に恐ろしい激怒を立たせるのでございます。之は男の方にもよくあることで人に依つて其の影響の受け方も千差萬別ですが、併し婦人の怒つた場合の方が害は大きいのです。婦人は男子よりも一層怒りを燃え立たせ易く、その燃え方も一層猛烈で興奮するからでございます。それも不思議はありません。一體に火といふものは輕くつて纖維の粗いものゝ方が、重くて緻密に出來た物よりも早く燃え付き易いものですが、私達婦人は男子方よりも纖維が弱々しく出來てゐるものですから直きに怒りの炎が燃え付くのです。そこで私共は生れ付きそんなに怒り易いものですが、我々の一生の道連れである男子の人達は、私共の柔和と愛情とに依つて慰安と幸福とを得るのですから若し私達が輕々しく怒りを暴發させれば不幸と悲歎とを齎らすに過ぎぬといふことを知らす爲に、私は玆に三人の青年と三人の娘との戀の御話をしませう。娘の一人の淺はかな激怒の爲に彼等總ての幸福は破れ、最も悲慘な狀態に陷つたのでございます。此の例に鑑みて、私達は怒りといふ惡德に對して一層警戒するやうに致しませう。

皆樣御存知の如く、マルセイユはプロヴンス地方に於ても最も古いそして最も重要な都市でございます。それに港でございますから、今でこそ少し衰へましたが昔は非常に商業の盛んな土地でありました。其處の商人の中に、金も土地も澤山持つたナルナルド•クロウドといふ非常な富人がありました。素性こそ卑しうございましたが、最も尊敬すべき正直な人でありました。妻との中に出來た子供の中に三人の娘がありました。男の子供は皆それよりも小さかつたのです。上の二人は雙兒で十五歲、若い一人は十四歲でした。父親は商用でスペインに行つて居りまして、母親は彼の歸り次第娘達を緣付かせる積りで萬事の用意をして待つて居りました。姉の一人はニネッタ、一人はマグダレナ、そして妹はベルテラと申しました。

扨て玆に一人の不遇な青年貴族で、レスタニヨンといふ者がニネッタを深く愛して居りましたが、娘の方でも彼に劣らず强い愛を捧げて居りました。青年は非常に快活な氣持のよい男でしたから、程なく二人は割ない仲となり、之れが爲に戀が滅ずる處か、一層熱度を增して猛烈に愛し合ふやうになりました。彼が此の樣に幸福に浸つてゐる間に、二人の青年紳士が、一人はマグダレナに、一人はベルテラに各々戀に落ちました。二人は兄弟でみなし子でしたが、兩親から多額の遺產を受繼いで居りまして、兄をフオルコ、弟をウゲットと呼びました。ニネッタの戀人は彼等の戀をニネッタから聞くや否や一つの計畫を

廻らし、彼等兄弟を利用して貧困狀態から浮び上らうと思ひました。そこで彼は彼等と近付きになつて或る時はフォルコと連れ立ち、或る時はウゲットと連れ立ち、又時に依つては二人と一緒に自分の愛人や彼等の戀人を訪問しました。かくて十分彼等の信用を得たと思ふ頃、或る日彼は二人を自分の家に招いて云ひました。『親しき友よ、私達はもう隨分親密になりましたから、私が皆樣を非常に尊敬して居ることはとうの昔に御承知のことゝ思ひます。皆樣の爲とならば自分の爲同樣に何んでも喜んで致す積りです。私はそれ程あなた方を尊んで居りますので、近頃考へてゐたことをお打明けしますから、皆で一致して取るべき手段に就ては皆樣の御決定に任せます。あなた方の御言葉や御樣子から私の推察したことが間違ひないなら、私が長姉を戀してゐる度合と同じ位ゐにあなた方も二人の娘を深く戀していらしつやるのです。若し皆樣が私と利益を共通になさる御積りなら、私は必らず最も容易に且つ愉快に皆樣の戀を成就さすべき手段を御敎へしませう。あなた方は御二人共お金持ですが、私にはそれがないのです。そこであなた方が全財產を御出しになつて一つの共通資金とし、其の分配に私も仲間に入れて下されば何處か場所を決めてそこへ行つて幸福に暮しませう。三人の姉妹には父親の財產を大部分持出させて、何處でも我々の好きな所へ一緒に來させるやうにどうにか私に出來ると思ひます。そうすれば我々は各自愛する娘と共に、世間の多くの人よりも幸福に皆な一緒に生きて行くことが出來ます。』

二人の青年は首つ丈け戀に溺れてゐる最中ですから、愛人を手に入れる方法があると聞くや深い思慮もなく、君のいふことが確かなら自分達は喜んで君の望み通りにしよう、と答へました。レスタニヨンは二人の返事を聞くやニネッタに逢ふ機會を待ち兼ねて、やつとその折を得ると、他の二人の青年と相談した事柄を話しまして、戀人と他國へ逃れた後の愉快を樣々說き立てました。併し彼女を說得するに何の雜作もなかつたのです。なぜなら戀人と全く自由に一緒になるといふことは、男よりも彼女の方が更に熱心に望んでゐたからです。彼女は此の計畫は非常に嬉しい、妹達は何でも自分のいふことなら喜んで從ふから、殊に之は嬉しがるだらうと迄云ひました。そして更に男に向ひ、出來るだけ早く凡ての準備に取りかゝつて下さいと賴みました。レスタニヨンは直ちに二人の兄弟の許に行き事の上首尾に運んだ由を告げました。そこで、彼等は逃れる先をクリート島と定めまして、之から商賣を始めるのだと僞つて財產を悉く賣り拂ひ、一艘の船を購つて秘かに之を武裝し、出發の好機を待つて居りました。

ニネッタは二人の妹が自分と同じ位ゐ戀に夢中になつて居り、邪魔の多いのに惱んで居ることを知つて居りましたから、難なく二人を承知させました。かくて彼女等は何れも出發の日を指折り數へて待つて居りました。やがて其の時となると三人の娘は骨を折つて父親の金櫃を開けて出來る丈け澤山持ち出しまして夜中に家を拔け出し、彼等を待つてゐる戀人の許に走りました。人々は直ちに船に乘り込み順

風に追はれて次の晩ゼノアに到着しました。此處で二人の兄弟は始めて戀の歡樂を味ひました。レスタニョンとても最早それに慣れては居りますが、以前にはびく〳〵して、喜びも中斷され勝ちだつたのですから、斯うして何人をも恐れず味ふ愉快は又一倍で新鮮味があります。

暫時ゼノアで愉快に過した後、彼等は必要品を悉く買ひ整へまして更に航海を續け、何の滯りもなく一週間經たぬにクリートに着き、同名の町に住居を定めました。彼等は其處で土地や別莊を購ひ、澤山の家畜や、鷹、立派な馬等を飼ひ、多くの召使を使ひ――一言で云へば富を以て購ひ得る凡ゆる物を十分備へて、樂しく暮しました。彼等は絕えず饗宴を催し、絕えず新奇な工夫を凝らしては愛人を喜ばしてゐました。彼等は實に愉快と幸福の絕頂に居たのです。

併し人は何にでも飽き、幸福にさへ飽きるものです。最も美しく可愛い愛婦でも、欲する時に何時でも意の儘にすることが出來るとなると、遂にはそう可愛くなくなるものです。丁度その樣に、あれ程ニネッタを溺愛してゐたレスタニョンが、すつかり彼女に飽きが來て、他の婦人が欲しくなつたのです。すると或る宴會で彼は一人の身分の高い婦人を見て大層心を惹かれ、遂に彼女を戀するに至りました。彼は此の新らしい戀を誰にも、特にニネッタには知らさないやうに隱して居ましたけれ共、ニネッタに取つては戀敵のその女の爲に幾度となく宴會を催したり、熱心に女の後を追つて歩いたりしたものですから、

彼に對する熱愛に少しも變りのないニネッタは非常な不安を起し始めました。それからといふものは彼が一歩でも外出すれば彼女は必らず自分で後を跟けて行くか、他の人を見張りにやりました。彼女は猛烈に男を責め、恐ろしく嫉妬深くなりまして、一寸でも氣に入らないことがあると火の樣に怒つて彼に當り散らしました。併し欲望は邪魔される程增長するものですから、ニネッタが夫と戀人の間を離そうとすればする程、愈々レスタニョンの情熱を煽り立てたのです。彼が相手の婦人から愛を酬はれたが何うかそれは分りません。併しニネッタ丈けは、噂に聞いたのか樣子で察したのか、兎に角夫が彼女に對して確かに不義を成し遂げたものと認めたのです。之が爲に彼女は最も深い憂愁の淵に投げ込まれまして、可愛さ餘つて憎さが百倍と云はうか、程なく心の底より男を憎むに至りました。そこで怒りと憎悪とに全く我を忘れまして、不實な戀人を亡き者にしようと決心しました。其の目的を果す爲に彼女は秘密な毒藥を調合するに大層熟達した或るギリシャ生れの老婆に賴み、樣々強請んだり爲藥を與へたりして毒藥を作らせて、或る夜レスタニョンが非常に醉つ拂つて彼女の復讐のこと抔全く夢にも思つてゐない時に飮ませました。藥の利目は忽ち現はれて男は其の夜の中に死にました。彼の突然の死亡を聞くや何にも知らぬフォルコ兄弟及びニネッタの二人の妹は深く之を悲みました。ニネッタ自身も人々の疑惑を防ぐ爲に大層悲しがつて見せました。併し程なく彼女の悪事も露見するに至つたのです。

其の後暫らく經つて例の毒藥の老婆は何か外の罪を犯して捕縛され、拷問に掛けられまして、色々罪を白狀した中にレスタニヨンの死亡にも關係のあることを告げて、自分がニネッタに毒藥を遣つたのだと云ひました。之を聞いたクリート公は彼の存意は誰にも告げずに、夜中六人の兵士を以て彼等フロレンス人の住宅を取卷き、ニネッタを捕へました。彼女は拷問される迄もなく罪を自白しました。フォルコとウゲットとはニネッタ入牢の理由をクリート公より聞いて非常に驚きましたが、二人の妹も其の悲歎驚愕は同じです。彼等一同は何とかしてニネッタが罪相當の罰を受けるのを救つてやらうとあらん限りの手段を試みましたが、公の決心は固くして到底成功の望みはありません。ところがクリート公は豫てより非常に若くて美しいマグダレナに心を寄せて樣々搔き口說いてゐたのですが、其度に撥ね付けられてゐたのです。マグダレナはそれを思ひ出しまして、若し自分が少し公に靡きさへすれば姉を救ふことが出來るであらうと考へました。そこで彼女は秘かに公の許へ一人の信ずべき使者をやつて、若し姉を放免して下さるなら御言葉に從ひませう、秘密は固く守つて下さい、と傳へさせました。公は此の申出でを大層喜びましたが、それを承諾するには猶ほ暫らく躊躇して居りました。併し遂に戀の力が理性と正義を征服しまして、彼は命令を發してフォルコとウゲットとを捕縛させました。彼等がニネッタの罪の共犯者であるか無いかを調べる爲、女と一緒に訊問し對決する必要があると稱したのです。そして次の夜秘

かにマクダレナを訪れました。其の時彼はニネッタを袋に入れて海に抛り込むのだと言觸らしてその袋を自分で擔いで行つて慈愛深き妹の手に渡して、若し事實が露見すれば又もや處罰しなければならぬから直ちに何處かへ落ちさせなさいと戒めたのです。翌朝二人の兄弟は放免されましたが、ニネッタはもう海に投ぜられて死んだと思ふものですから、出來る丈け姉妹の者を慰めました。マグダレナは精々姉を隱して居たのですけれど、程なくフォルコは彼女が自分の家に居るのを知つて甚だ驚き、之は不思議だ何か底があるに違ひないと疑ひを起しまた。すると彼はマグダレナに對するクリート公の戀を思ひ出し、自分の女が操を賣つて姉の生命を助けたに違ひない氣がしました。彼は其の疑ひをマグダレナに語りますと、女は事實を隱さうと思つて出鱈目の嘘八百を澤山並べました。それで納得すると思ひの外之は愈々怪しいと彼の疑ひは一層深くなり、遂には怒り出して、本當の事を云へと責めました。憐れな娘は男に脅されて恐ろしくなりまして、愚かにも姉を愛する爲にした自分の行爲を白狀して了つたのです。戀人は此の自白を聞くと激怒の爲に我を忘れて、劍を引抜くより早く無慘にも、彼の前に跪いて赦しを乞ふて居る不幸な婦人の胸に突き刺しました。彼はかくてマグダレナを殺すや直ちにニネッタの所へ行つて、極く落ち付いた調子で〝クリート公はあなたが未だ立去らぬのを知つて再び彼の面前に引張つて來いといふ命令を出したから、彼の慘虐な手の屆かぬ所へあなたを連れて行く爲に來たのだ、と云ひま

した。ニネッタは恐い恐いで胸が一杯ですから何の躊躇もなく彼と共に立退く事にして、妹達に別れを告げることをも打忘れ、日の暮れ方にフォルコと一緒に出發しました。彼等は手當り次第金を浚つて逃げたのです。そして最寄の港に着きますと、或る船に乘り込みましたが、其の後どうなつたか全く分りません。

クリート公はマグダレナの殺害を聞くやウゲットとベルテラとを捕縛させました。彼等は極力無罪を主張しましたし、考へればフォルコとニネッタの逃走こそ怪しいのですけれども、彼等は二人共に拷問にかけられました。彼等は餘り拷問の嚴しさに堪え兼ねて、止むなくマグダレナ殺害の共犯者であると知りもせぬのに白狀しました。假令無理に云はせられたにもせよ、斯かる白狀をしたからには死刑は免かれぬものと思ひまして、彼等は彼等を見張つてゐる牢番に向ひ、自分等は萬一の場合と思つて或る安全な場所に澤山な金を隱してあるから、自分達を自由にして呉れゝばそれを取出して十分御禮をすると云つて瞞し、彼諸共に夜に乘じて牢を逃れ、船に乘つてローデスに參りましたが、忽ち貧しい悲慘な狀態に零落したさうであります。

第四話

ジェルビノは祖父ギグリエルモ王がチュニス王に對してなした契約に背き、チュニス姫を奪ふ爲にチュニス船と戰ふ。船員は王女を殺す。彼は之を怒り船員を悉く屠つて、自らは其の爲に首を刎ねられる。

ロウレッタの話が終ると人々は不幸な戀人達の運命に就て各自の感想を述べた。ニネッタの嫉妬を責める者、其の他或る者はあゝ、或る者はこう、と種々な說を戰はしてゐた時、王は恰かも深い夢想から醒めたかのやうに面を上げて、エリザに次を語るやうに命じだ。彼女は始めた。――

皆樣、人が戀神に心を射貫かれるのは眼に依るほかないと信じてゐる人が世の中には隨分澤山ありま す。そういふ人は、噂で戀することもあるものだと主張する者があると、之を嘲弄します。併し私の之から申上げる御話は彼等の考への誤つてることを皆樣に證明するでせう。尤も噂を聞いただけでも戀が成立することもある代りに、それが又戀人達が不幸な死に樣をする原因となることもあるのを御知りなさるでせう。

シシリイの王ギグリエルモ二世には二人の子供がありました。一人は男の子でルッヂエリといひ、一人

は娘でコンスタンチャといひました。ルッヂエリはヂェルビノと呼ぶ一人の息子を遺して父親よりの先に亡くなりましたが、王は非常に心を用ひて此の王孫を教育したものですから、彼は凡ゆる學藝に通じた立派な王子となりまして、彼の美貌と學識とはシシリイ全土に鳴り響きました。彼の名聲は歳を重ねる毎に高まつて、遂に國外にまでも達しました。殊に當時シシリイ王の屬國であつたバルバリイ地方に於て彼の噂は喧傳せられて居ました。扨て其の地方の一部チュニスの王姫は、生れ付き名高い人々の德を非常に尊敬する性質でありましたが、此の青年に就て樣々な噂を聞く中に、彼に對して非常な好感を抱くやうになりまして、誰でもシシリイから來た人には彼のことを色々と問ひ尋ねました。ところで此の姫といふのも隨分有名な婦人でした。誰でも彼女を一度でも見た者は世界第一の美人と讚へぬ者はありません、其の上身も心も王族に最も適はしい要素を備へてゐて、容姿の美しいのと全く同じに氣性も氣高かつたのです。元々立派な人を敬愛する性質でしたから、ヂエルビノの勇敢なことや其の他の美質に就て驚嘆すべき事柄を澤山聞くものですから、最も完全なる王子として彼の事を心に描きました。そして尊敬は忽ち戀に變つたのです。姫は彼のことばかり聞きたがり、彼のことを語る時には誰が見ても姫の心が讀める程の熱心と嬉しさとを現はしました。

完全無缺な王子だといふ噂がチュニスの王宮で傳へられたのと同じに、ギグリエルモの王宮ではチュニ

ス王姫の世にも稀な美貌と高德とが大變推稱されました。そこでヂェルビノも姫の噂を聞いて非常に美しい姿を心に思ひ浮べ、之も何時か戀に陷りました。彼は是非一目姫を見たいものだと思ひましたが、チュニスに行くべき許可を祖父から得るに適當な口實を作ることが差當り出來ません。そこで彼は十分信賴の出來る一人の廷臣を代理に遣りました。『お前は好機會の來る迄其處に滯在してゐて、いゝ折があつたら王姫に逢つて、彼女の凡ゆる稀有な高德に對する私の敬意を傳へ、私が姫に對して抱いてゐる尊敬と愛とを殘りなく告げるのだ。それを聞いた時の姫の態度に注意して、それから直ぐに歸つて私に報告して呉れ。』

使者は立派に彼の使命を遂行しました。彼はチュニスに到着するや商人に化け寶石を御目に掛けると申立てゝ甘く王姫の面前に出ることが出來ました。姫がそれを見てゐる間に彼は音に聞えたヂェルビノが彼女に對して抱いた愛を告げて、若し御異存がなければ王子は姫殿下の僕となり夫となりたいと仰せられますと告げました。姫は此れを聞いて大層喜びまして使者に向ひ、自分の心はヂェルビノ殿に傾いてゐる、彼の凡ゆる優れた特質を聞いた時よりいつも彼を愛してゐたのだから、それを傳へる機會を得たことを幸運に思ふと語りつゝ、指に嵌めてゐた最も高價な指環を拔き取つて、私の尊敬と愛の保證として之を王子にやつて下さい、と云つて使者に渡しました。ヂェルビノは此の答へを聞き贈り物を得て世

界中で最も價値ある贈物を受け取つたかのやうに喜びました。そして彼は同じ使者に依つて猶ほ數回姫に手紙を送り、又多くの立派な贈り物をして、運命がよき機會を授けて呉れたなら必らず御目にかゝると約束しました。

斯くて姫とヂェルビノとが不本意ながらも滿足を得てゐる間に、チュニス王は姫をグラナダの王に娶す約束を取り極めました。そうなれば愛する王子から今迄以上に遠く離れるばかりでなく、永久に他人となる譯ですから姫の悲歎は言葉に盡されません。出來ることなら父親を棄てて、ヂェルビノの許に走り、彼の腕に身を任せたく思ひました。王子とても此の婚約の話を聞いて非常に心痛しました。そして姫が未來の夫の許に行く途中、海上で暴力を以て彼女を掠奪する手段を廻らし始めました。然るに一方チュニスの王樣は此の二人の戀愛事件とヂェルビノの計畫とを聞き知りまして、王子の勇敢なことは兼てより知つてゐますから、若し本當に暴力でも用ひられては叶はぬと思つたので、娘の出發も近付いた時婚禮の趣きをギグリエルモ王に報告して、途中の安全を保證して呉れと頼みました。それはヂェルビノに限らず誰でも娘の航海の邪魔をせぬ樣にと思つての頼みなのですが、老年のシシリィ王は孫の戀愛のこと抔露程も知りませんから、それがチュニス王の請願の原因であらうとは夢にも思はず、喜んで請を容れまして、其の證據として自分の手袋をチュニス王に送りました。先方では此の友誼の印を受取るや直

ちに姫の出發の準備が整へまして、一艘の大きな船をカルセーヂで艤裝し、萬一の場合を慮つて武器を持ち備へ付けた上出帆の日を待たせました。

航海の準備が何くれとなく運ばれてゐる間も、戀人を思ひ諦められぬ姫君は信ずべき使者に依つてヂェルビノに手紙を送つて、程なくグラナダに向つて出發しなければならぬ悲みを述べ、何卒此の機を利用してあなたが噂通り勇敢であるかどうか證明して頂きたい、それからあなたが手紙で云つた程本當に私を愛してゐるのかどうかをも見せて頂きたいと云ひ送りました。

ヂェルビノは愛する彼女を奪ひ去ることは最も望むところです。事實最初の計畫は然うだつたのですから。然るに祖父がチュニス王に對して安全の契約をしたものですから計畫を履行する事が出來ません。彼は途方に暮れました。併し戀の力は他の事柄なぞは皆打ち負かして了ひますし、加ふるに戀人の目から卑怯者と見られることの口惜しさに、遂に彼は最初の計畫を實行することに決心を固めました。彼はメッシナへ行つて直ぐに三艘のガリィ船を用意し、剛勇な兵士を澤山乘せましてサルヂニアに向つて出帆しました。王女を乘せた船が其處を通るに違ひないと思つたからです。そして彼が其の沖に着くか着かぬに早や目指す船が微風に押されて眞つ直ぐ彼の方に向つて近付くのが見えました。そこで彼は船員等に向つて云ひました。『諸君、恐らく君達の中に一人として戀の力を感じたことの無いものはあるまい。

今現在感じてゐる者もあるだらう。其の力が我々をして斯かる偉大なる行爲を計畫實行するに至らしめるのである。若し諸君が戀をした經驗があるか、或は現在戀をしてゐるとすれば、諸君は僕が諸君に期待するところをも容易に理解するであらう。僕の心は今現在最も激しい熱烈な戀に燃え立つてゐるのだそれが諸君を此處まで連れて來た唯一の動機なのだ。目的の婦人は美と德の化身なのだ。君達に其の姫君を見せてやらう。彼女は今あそこへ近づいて來る船の中に居るのだ。船には寶物が澤山積み込んであるから、我々がそれを襲撃しさへすれば譯なく獲られるのだ。それは皆な君達に上げるから分配し給へ。僕の分として欲しいのはチュニス王姫のみだ。王は姫を彼の野心の犧性にしようとするのだ。我々は此の尊き犧性を救つてやらうではないか。姫は彼女に對する僕の愛を知つて居られるのだ。彼女を迫害の手から救ひ出さう。さうすれば諸君は彼女に取つても僕に取つても幸福を齎らすこととなるのだ。勇敢にあのバルバリイ人を襲はうではないか。向ふは人數が少いし、天も我等の企てを幸ひし給ふて風を送らぬから、彼等はどうしても我々から逃れることは出來ないのだ。』

ヂェルビノはこんなに長々と喋るに及ばなかつたのです。と申しますのは此のメッシナ人等は生來盜賊を働らくことは好きなのですから、之こそ持つて來いの仕事なので歡聲を揚げて王子の言葉に答へました。直ちに喇叭を吹き鳴らして全員は處定の位置に就き、チェニス船目掛けて漕ぎ寄せます。バルバリ

ィの水夫達はメシナ人の目的を察知しましたが、迚も逃れる見込みはありませんので武器を取つて應戰の準備をしました。やがて敵船間近く漕ぎ寄せた時ヂェルビノは一艘のボートを送つて、若し戰ひを欲せぬなら降服しろと命じました。然るに艦長は答へて、斯かる使ひを受くるは思ひも寄らぬ、それはシシリィ王が我等に與へた保證に全然反してゐる、と云つて、それを證明する爲に安全保證書と王の手袋とを示し、力づくで奪ふなら止むを得ぬ、決して此方から降服はせぬと附加へたのです。此の談判中に姫は船尾に現はれました。ヂェルビノは今初めて彼女を見れば、空想してゐたよりも一層美しいのです。それ故戀の炎は愈々強く燃え立つて、船長の中立なんかは一顧をも與へず、更に第二の使者を遣つて、若しお前達がグラナダ王に嫁がうとする姫君だけでも引渡さぬなら直ちに襲擊すると傳へました。敵は之を拒絕して、一齊に矢や石を彼に向つて投じました。忽ち猛烈な戰ひとなつて、敵味方共に澤山の死人が出來ました。シシリィの王子は此の樣子では勝利も疑はしいと思ひまして、部下の兵士の勇氣を鼓舞して、サルヂニアから伴つて來た一艘の小船に火を付けて、敵船に漕ぎ付けるやうに水夫に命じました。敵は斯くと見るより降服か死滅の他に道のないことを知りまして、もう全く自暴氣味になつて仕舞ひました。彼等は恐ろしさに我が船室に避難してゐた姫を無理に甲板に引出しまして、彼女をヂェルビノに示し、彼の見てゐる前で無慘にも姫の喉を突き刺して海中に投じ、彼に向つて叫びました。

『欲しければそれ遣るわ、だが斯うして受け取るのは貴樣相當な罰だ。』

王子は此の殘忍兇惡な行爲を見ては最早や悲みの爲に自分の生命をも忘れまして、漕手を激勵して前進せしめ、敵船と接戰し、遂に之に乘り移つて、恰かも餓えたる獅子が家畜の群に突進する時は餓えを忘れて唯飽くなき怒りを滿足さす如くに、當るを幸ひ切り捨て薙ぎ倒しましたから、船は見る間に流る血潮で眞つ赤に染りました。部下も彼の例に倣つて程なく敵を皆殺しにしました。彼等の勇敢に酬ゆる爲に彼は船中の貴重品を悉く持ち出さして、船に火を付け本船に歸りましたが、此の勝利は彼に何の喜びをも與へませぬ。彼は姬の死體を海中から引上げさせまして、淚を以て彼女を洗ひました。彼はシシリイに歸るや盛大な葬式を行つて、トラパリと殆んど向ひ合つてゐるウストリアといふ小島に埋葬しました。それより最も深き悲歎に心を痛めつゝパレルモに歸りました。

チュニス王は程なく此の事を詳しく聞きまして、喪服を着た數人の使節を直ちにシシリイ王の許に派遣し、事件を詳細に報告して、斯くも大なる背信を責め、自分を滿足せしむる當然の處置を取つて欲しいと傳へさせました。ギグリエルモ王は愛孫の行爲を甚く怒り、且つはチュニス王の正當なる要求を拒む譯にいかないものですから、ヂェルビノを捕縛せしめて、死刑の宣告を下しました。臣下の貴族等は悉く彼を宥めて、王子の助命を願つたのですけれ共、彼は人々から不正不義の君主と思はれるよりも、一人

の後繼者もなくなる方がいゝと思つたものですから、遂に王子の首を刎ねさせました。
二人の誠實なる戀人は斯く悲慘な最後を遂げました。彼等は未だ戀の果實を一度も味はぬ中に、引き續いて彼の世の人となつたのでございます。

第五話

イザベラの兄弟は彼女の戀人を殺す。戀人は彼女の夢枕に立つて、彼の死體の埋められてゐる場所を告げる。イザベラは密かに其の場所を堀り返し彼の首を持ち歸つて羅勒(めばうき)の鉢に埋め、毎日涙の雨を注いでゐる。兄弟が之を知つて鉢を隱すと彼女は程なく死ぬ。

エリザの話が終ると王は彼女を賞讃した後、フィロメナに次を語るやうに命じた。フィロメナはヂェルビノと王女との不幸な戀に感動して深い溜息を吐いた後、次の如く語つた、——

諸孃(みなさん)、私の話はエリザさんの御話の樣に高い身分の人の話ではございません。併しそれが爲に少しも哀れさが減ずるとは思ひません。唯今メッシナといふことが出ましたので此の話を思ひ出したのです。之はメッシナにあつたことなのでございます。

昔メッシナに三人の兄弟の商人がをりました。父親が亡くなつた時には非常に澤山の財産を受け繼ぎ

ました。彼等にはイザベラといふ一人の妹がありました。イザベラは若くて美しく、姿の立派な娘でしたから、今迄度々緣談も申込まれたのですが、未だ何處へも嫁に遣らなかつたのです。扨て彼等の使つてゐる番頭に、ピザ生れの青年でロレンゾといふ者がありましたが、商賣向きの事一切は殆んど彼に委せてありました。彼は大層容貌の美しい人好きのする質でありましたから、イザベラはいつか彼に思ひを寄せました。男の方では之に氣付くと大變に心嬉しく思つて、既にあつた幾人かの情婦を皆此の戀の爲に振り棄てゝ了ひました。互に逢つて話をする機會は幾らもありますから、程なく二人は割ない仲となりました。彼等の戀の初まりは斯く幸福に運び、暫らくは申分なく秘密を保つて行くことが出來ました。ところが遂に運惡くも、或る夜イザベラがロレンゾの寢室に行く處を第一の兄が見付けて了ひました。彼は妹の不品行を見て非常に怒りましたが、漸く心を抑へて翌朝になるのを待ち、この事を弟達に告げました。彼等は談合の結果、暫らく之を見逃さうといふことに極めました、若し彼等が番頭の輿へた恥辱を止め、それに對して復讐をしようとして事を荒立てれば、彼等自身及び妹の名譽を失墜することになるから、それよりも、彼等に何の悲難をも受けずに之を止めさせるに良き機會が程なく來るであらうから其れ迄待たうといふことになつたのです。そこで彼等は何も知らぬ顏をしてロレンゾに對しては相變らずの信賴を示し、彼の不行跡を知つてゐることを氣付かせぬやうにしました。

併し二人の熱い戀の續けられるのを見ると、うか〳〵してゐれば妹が取り返しの付かぬ事になるかも知れないと思ひましたので、もう待ち切れなくなつて、遂に最後の手段を取ることに極めました。そこで或る日彼等は郊外散歩にと云つて番頭を連れ出しまして、非常に淋しい場所に來ると不意に襲ひ懸つて、何の抵抗をする暇もなく彼を刺し殺して仕舞ひました。人目に付かぬ中急いで彼の死體を土中に埋めましてメッシナに歸り、彼を商用で遠方に遣つたと告げました。彼を方々に遣るのはいつもの例ですから、誰も之を疑ふ者はありません。併しロレンゾが中々歸つて來ないものですから、イザベラは待ち切れなくなつて、一體ロレンゾは何時歸つて來るのかとうるさく兄達に尋ねます。或る日も非常に執拗く訊いて居りますと一人の兄が云ひました。『之は一體どういふ譯だ？　そんなにロレンゾに逢ひたがるなんて彼奴がお前の何だつていふんだ？　彼奴のことなんか二度と再び訊いて見ろ、酷い目に逢はしてやるから。』

イザベラは此の亂暴な答へを聞いて驚きました。どうしてそんな脅迫的なことを云ふのか理由は分りませんが、もう彼のことを訊く氣になりません。併し心の中では矢つ張り彼のことを思ひ、長い留守を悲んでゐたのです。彼女は夜になると幾度か彼の名を呼んで、早く歸つて此の別離の涙を止めてお呉れと祈りました。絶えずロレンゾの姿を眼の前に浮べて歎き悲んで居りますが、人にも打明けず一人身を

削る思ひに沒して居りました。或る夜のこと長い間泣いて、彼の歸りの遲いことを喞つてから、眠りに就きました。そしてとろ〳〵と眠つたかと思ふと、蒼白い悄然としたロレンゾが、衣服は破れ全身血みどろになつて姿を現はして、かう云つた樣に思ひました。

『おゝ、愛しきイザベラ樣、いくら私を御呼びになつても甲斐にありません。私がいつまでも歸らないと云つて、あなたが如何に御身を惱まし、私を責めても無益です。私はもう永久にあなたの許に歸ることは出來ないのですから。最後にあなたにお目に掛つた日に兄樣達が私を殺したのです。』

そして彼は自分の埋められてゐる場所を云つたかと思ふと姿は消えました。イザベラは眼を醒まして之は必らず正夢に違ひないと思ひまして、激しく泣きました。彼女は翌朝起き出でた時には其の事を兄達に談じようかと思つたのですが、翻つて彼等の憤怒を一層大きくすることを恐れて止めました。けれ共ロレンゾの幽靈の云つた場所へ行つて見て、彼が眞實に死んだのかどうか確かめようと決心しました。そこで老婢と郊外を散歩に行くと云つて兄の許しを得まして、眞つ直ぐ其の場所へ向ひました。先づ最近土を堀り返した樣な跡のある場所を氣を付けて探しました。そして少し持ち上つた場所を見付けて其處を堀り始め、幾らも堀らない間に懷かしい戀人の死體を發見しました。身體は未だ腐りもせず、有りし姿その儘です。悲しいかな夢は正夢だつたのです。此の無慘な樣を見て彼女の悲みは更に激しく盛り

返し、わつと計りに泣き出しましたが、此處で幾ら泣いても仕方のないことゝ思ひ返して悲しさを抑へ、死體の處分方に就て考へました。出來ればそれを攫んで行つて立派に埋葬してやりたかつたのですが、それは到底不可能なことですから、小刀を以て戀人の首を斬り離ちまして、それをハンケチに包んで老婢の前垂の中にくるませ、殘りの死體に十分土を被せて家に歸りました。彼女は可愛い首を我が部屋に持つて來るや數限りなくそれに接吻して、涙の露をふり注ぎました。それを兄達の限から隱すのに良い方法も見當らぬものですから、マヨラナ其の他の草花を植える大きな植木鉢に入れることにしまして、先づ美しい絹の布で首を包んで鉢の中に入れ上に土を被せました。それからそれに美しい羅勒の若芽を植えまして、橙の花か薔薇の絞り水、でなければ涙の水ばかりを灌いでやりました。戀しいロレンゾの遺骸が這入つてゐると思へばその鉢を幾ら見ても見飽きません。時には餘り澤山涙を灌いだものですから、鉢の草が涙の洪水に溺れる程でありました。此の樣に絕えざる涙の灌漑と、下に埋まつてゐる首よりの豐富な精分とに依つて、羅勒は目も耀くばかり美しく繁茂して、得も云はれぬ芳香を放ちました。かく一方には二人の戀人の肉と涙に依つて植物は元氣よく生長するに引きかへ、イザベラは日々に瘦せ衰へまして、目は落ち凹み、顏は殆んど骨と皮ばかりになりました。以前の美しい面影は何處へやら、極めて醜い姿となりました。三人の兄は妹の不思議な變り樣に驚いて居りますと、或る日のこと一人の

隣人が彼等に向ひ、妹様の様子を始終窓から拜見致しますに、哀れな婦人は絕えず一つの植木鉢を手から離さず、それに向つて悲歎に暮れてゐるやうですと告げたのです。そこで彼等は妹に向つて其のことを叱りましたが、甲斐もなく相變らず續けてゐるものですから、遂に秘かにそれを奪ひ去つて了ひました。彼女はそれの失くなつたのを知るや眼の色を變へて激しく返して吳れと迫りましたが、兄達はどうしてもよこしません。それが爲イザベラは非常な悲歎に陷つて、遂に重病人となりました。病の床にあつても求むるは唯あの鉢ばかりです。兄等は鉢に對する妹の愛執が餘り不審に堪へないので、中を調べて見ることゝしました。上の土を取り除けて見ますと、男の首が這入つてゐます。それは未だ腐れ切つては居りませんから、その縮れ髮に依りてロレンゾといふことが判りました。彼等の驚きは非常なものです。彼等は罪の露兒を恐れて、秘かに首を埋めて、直ちにメッシナの地を立ち退くことに極めました。かくて悲みに死なんとしてゐる妹を放つたらかして彼等はこつそりネーブルスに逃れました。哀れなイザベラは、鉢を返して返してと云ひ續けながら、遂に程なくみまかりました。世間の人は彼女の不幸な死を悼み、兄達の失踪を怪んでゐる時に、ロレンゾの埋められてゐる所へ伴つて行つた老婢の口から事件は漏れて、此の哀れな戀を語る物語が綴られました。其の始めの句はかうです。

　世にも酷い情ない人よ、

わたしの花を奪つてしもた。云々。

第六話

アンドレヴオラと呼ぶ若き婦人はガブリオットと戀仲である。或る日互に前夜の夢物語をしてゐる時、男は突然戀人の腕の中に落ち込んで死ぬ。婦人は侍婢の手を借りて死體を彼の家に運んで行く途中警吏に捕へられる。判事に事實を述べて、不當の罰を拒む。父親は娘の難を聞いて無罪の保證を立て、救ひ出す。併し彼女は世を捨てゝ尼となる。

淑女達はフィロメナの話を稱揚した。彼等は最後の唄を知つてゐたが、それの作られた原因を知らなかつたので今それが分つたのを喜んだ。話が終ると王はパンフィロに命じた。そこで彼は語つた、——

今の御話に夢といふことが出ましたので私も一つの話を思ひ出しました。之には二つの夢があります。併し唯今のは既にあつたことに就てですが、今度のは之から起らうとすることを告げるのです。そして二人の人が夢の話を互に語り終ると直ぐに其の夢が實現するのです。

扨て美しき淑女諸君、誰でも隨分色々なことを夢に見ます。眠つてゐる間は現實のやうに思はれますが、眼が醒めればそれが本當だと思ふこともあり、そんなこともありそうだと思ふこともあり、馬鹿氣

た下らないことだと思ふこともあります。時にはそれが正夢になることもあります。それだもんですから世の中には、目醒めてゐる時に見る物と同じ程度に、夢の中で見たことを凡て非常に信ずる人も澤山あります。彼等は夢のいゝ惡いで喜んだり悲觀したりしてゐます。ところが又一方には、夢の事なんかには少しも頓着しないで、夢で警告された通りの危險に遭遇して生命を失ふやうな時になつてやつとそれを信ずる人もあります。私は右の何れにも組することは出來ません。總て正夢と限らない如く、總て嘘夢とも限らないからです。それが皆な正夢に限らぬといふことは、恐らく私達は誰でも一度ならず何回も經驗してゐるでせう。皆な嘘でないといふことは既にフィロメナ樣の御話で分りましたが、先にも申した通り、私は更にそれを證據立てる話をしようと思つてゐるのです。正しい心を持ち、正しい行ひをする人は夢なんか少しも恐るゝに及ばず、行らうと思つたことを止めるにも及ばないと思ひます。併し不正な若くは犯罪的行爲をする場合には、好結果を得られる樣な夢に瞞されてはいけません。種々結構な物が手に入る樣な夢に欺かれてはいけません。そんな時には之は逆夢だぞと思つて思ひ止るべきです。だが話の方に戻りませう。

　昔ブレッシアにネグロ・ダ・ポント・カラロといふ名高い人がありました。幾人もの子供の中にアンドレヴォラといふ未だ嫁入り前の美しい若い娘がありましたが、彼女はガブリオットといふ一人の隣人を戀し

て居りました。男は生れは低かつたのですが、心の優れた容姿の大變氣持のよい青年でした。アンドレヴォラは下婢の手を借りて男に戀を打明けた上、父親の庭園で屢々彼と媾曳して互に樂んで居りました。そして死んでも別れることのない樣にと、遂に二人はこつそりと結婚して仕舞ひました。

斯くして彼等が忍ぶ逢ふ瀬を續けてゐる間に、アンドレヴォラは一つの夢を見ました。彼女はガブリオットと二人庭に居て、互に恍惚としてゐる時、不意に何だか、形のわからぬ黑い恐ろし氣な物が、ガブリオットの身體から出て來たと思ふと、彼を引つ捕へて、縋り付く彼女を拂ひ退けて、遂に彼女の胸から男を引離して仕舞つたのです。彼女は餘りの悲しさに忽ち目を醒ましまして、何でもない夢だと思はうとしますけれども、何だか不安です。そこで彼女は翌日〝今夜庭を訪れて彼女に逢ひたいと云つて來たガブリオットを止めました。ところが男はどうしても來るといふものですから、飽く迄止めれば間違つた疑ひを受けるかも知れないと思ひまして、其の夜彼を庭園に迎へました。彼等は赤い薔薇や白薔薇などを摘み取つてから、水晶の樣な噴水の邊りで休みました。暫らくの間彼等が最も愛情のこもつた恍惚の中にそこで休息して後に男は、何故來てはいけないと云つたのかと娘に訊きました。そこで彼女は前夜の夢を語つて、それが心配だつたからと云ひました。するとガブリオットは笑つて、夢なんかを信ずるのは大馬鹿だ、それは食ひ過ぎたり又は腹が空き過ぎてゐたりする時に見るもので、それに何

の意味もないことは日々の經驗で分り切つてゐるではないか、と云つて、更に附け加へました。

『若し私が一々夢を氣にするなら、今晩あなたの處へ來なかつたでせう。あなたがそういふ夢を見たからといふんぢやありません。私も昨夜一つの夢を見たんです。私は何處か奇麗な氣持のいゝ森にゐたんですね。そこで私が狩をしてゐると、牛乳のやうに眞つ白な一匹の牝鹿を摑へました。それが見る間に非常に懷いて來てどうしても私の傍を離れないのです。私も非常に可愛くなつて來たもんだから、逃げられないやうにと思つて、その首つ玉に金の輪をかけましてね、それに金の鎖を付けて、いつでもそれで引つ張つて歩いてゐました。或る日此の牝鹿が私の膝を枕に私の側に横はつてゐる時に、見るも恐ろしい饑え渇えた一匹の猛犬が何處からともなく現はれて私に飛び付いて來たのです。そして私の左の胸に咬み付いて肉を齧り取り、心臟を引きづり出して、それを啣へて走り去りました。私は痛くて堪らず直ぐに目が醒めまして、本常に傷でもある樣な氣がして手で觸つて見ました。ところが何のこともありませんから、自分ながら觸つて見たのが可笑しくなつて大笑ひしました。そんなことに何の意味があるものですか。私はこんな夢はよく見ます。もつと恐ろしいんだつて見ました。それでも何の事もなかつたんです。だからそんなことは忘れて、愉快に時を過さうぢやありませんか。』

娘は此の夢物語を聞くと前よりも一層恐ろしくなりました。けれども戀人に心配をかけ度くないと思

ひまして、出來る丈けその恐れを押し隱しました。そして自分でもそれを忘れようとして屢々戀人を抱擁しました。併しいくら氣をまぎらそうとしても駄目です。餘りに恐ろしいことを想像させられたので、絕えず何か不幸な災難が降りかゝりはせぬかと氣掛りです。從つていつもと違つて凝つと戀人を見詰めて、少しも彼から目を離しません。唯時々何か兇惡な影でも近寄りはせぬかと庭の中を見廻す時丈け外見するばかりです。かうして彼女が周圍を見廻してゐた時、ガブリオットは深い溜息を吐いたかと思ふと虫の樣な聲で彼女に向ひ、『あゝ愛する人、助けて下さい、死にそうです。』と云ふ言葉の未だ終るか終らぬ間に、早や娘の足下に倒れて了ひました。アンドレヴォラは直ちに彼を起して頭を自分の膝で支へ乍ら、瀧の如くに涙を注ぎかけて、氣も狂はん計りに一體どうなすつたのと尋ねました。併し戀人は返事をすることが出來ません。額からは冷たい汗を滴らして、喉が詰まるやうな樣子でしたが見る〳〵息は絕えました。あれ程愛してゐた戀人を失つた娘の悲歎は到底私には述べられません。彼女は男の名を呼び、まだ生命があるかと震へる手先で戀人の四肢に觸つても見ましたが、少しも動きもせず氷の如く冷たくなつてゐますから、絕望して潸々と泣きました。もう死んだに間違ひありませんので、彼女は下婢の許へ行つて啜り泣きつゝ此の恐ろしい不幸を告げました。そして今度は二人掛りでガブリオットを甦らせようと樣々骨折りましたが、遂に其の甲斐はないので、彼の死體に限りもなく涙を注いだ後彼女は、

愛する戀人を失つた以上はもう生命なんか要らない、併し死ぬ前に、自分の名譽を傷はない樣に戀人に正式な葬式をしてやる方法を見付けねばならぬと云ひました。すると女中は叫びました。『まあ飛んでもない。自殺をなさるなんて何を仰つしやるのです。そんなことをなされば此の世で引離されたやうに彼の世へ行つても、ガブリオット樣から引離されねばなりませぬ。なぜと申して、自殺すればすぐ地獄へ行くでせうが、此の人は立派な人ですから必らず天國へいらつしやいますもの。あなたは祈禱と善行とに依つて御自分を慰め、且つは此の人の魂の安息を願はねばなりませぬ。此の方の埋葬のことなど御心配には及びません。私達は何處かに埋められさへすれば、其の場所なんかは何處でも構はないのでございます。此の死體を庭園の中に埋めませう。誰もあの人が此處に來たことは知らないのですから、誰にも分る筈はありません。でなければ街へ持つて行つて置けば、夫れを最初に見付けた人が死人の親類に傳へるでせうから、そうすれば身内の者が葬式をして呉れます。』

若くて寡婦となつた娘は悲歎に沈みながらも女中の云ふことを聞いて了ふと、啜り泣きながら云ひました。『まあ何といふことを！ あんなに私の愛してゐた戀人——あんなに私を愛して呉れた夫を、犬か何かの樣に唯土に埋めたり、塵屑か何かの樣に街に放り出すなんてそんな罰の當つたことがどうして出來ませう。わたしあの人の爲に泣いたのだから、出來れば身内の人にも泣かして遣りたいの。私が其の

方法は知つてゐますわ。』

そこで彼女は下女に命じて彼女の部屋から一枚の絹の布を持つて來させまして、戀人の眼を閉ざし、頭に枕をかつた後その中に死體を包みました。そして女中に云ひました『お前に手傳つて貰はなくつちやならない。ガブリオット樣の御家は遠くはないから彼處まで持つて行くつたつて譯ありません。入口の所に置いとけば明日になつて家の人が見付けるでせう。そうされたつて身内の人達には何の慰めにもならないでせうけれど、彼の人が立派に埋葬されるといふことは私には大きな慰めになるんだからね。』かく云つて再び戀人の死體の上に身を投げ伏して潸々と泣きました。いつ迄泣いても限りがありませんので、女中はもう直き夜が明けますと云つて急き立てました。アンドレヴォラは二人が結婚した時に誠實の印としてガブリオットが彼女に與へた指環を自分の手から拔き取り、それを死人の指に篏めて、『若しあなたの靈魂が私の涙を見ることが出來るか、或は又、靈魂の去つた肉體に多少なりとも感覺が殘つてるかするならば、戀人よ、あなたの深く愛した娘が、感謝を籠めて贈る此の最後の贈物を受けて下さい。』

といふ言葉の終るか終らぬに彼女は氣絕して倒れました。頓て生氣に返るや否や、彼女等二人は布の兩端を持つて、死體を彼の家の方へ運んで行きました。然るに偶然其の近邊を巡回の町奉行の役人に見

付かつて捕へられました。此の不時の災難に逢つてアンデレヴォラは死んで了ひたいと思ひましたが、直ちに氣を取り直して云ひました『私は逃れようとしても無駄なことを知つて居ります。ですから喜んで奉行の前に出て事實を申上げませう。併し私は自分から進んで行きますから、何卒私に手をかけないで下さい。それから其の死體の被ひを決して取らないやうにして下さい。そんなことをなされば嚴罰に行はれるものと思はねばなりませんよ。』

役人は彼女を町の奉行の處に引いて行きました。彼女は判官の部屋に導かれるや昨夜の出來事を殘りなく語りました。種々訊問の後奉行は數人の醫者を呼んで、毒殺其の他の方法に依る他殺かどうか調べる爲に死體を檢査させました。すると醫者達一同は、之は他殺ではない、心臟の附近に膿瘡が出來た爲に窒息したのだ、と判定しました。奉行は醫者等の言葉に依つて娘の無罪が判然しましたが、彼女の美しさに大變心を奪はれまして、俺はお前の運命をどうにでも出來る、牢に入れようと思へばそれも思ふ儘だ、併しお前が俺の心に從ふなら無罪放免にしてやる、と云ひ聞かせました。其の他有りつ丈けの甘言を弄して說得しようとしました。ところが如何に掻き口說いても娘が承知しないものですから、卑劣にも暴力を用ひました。併し若い娘は怒りの餘り勇氣百倍しまして、儼然として彼を卻け極力抵抗して飽くまで貞操を守りました。

其の内夜も明け放れました。アンドレヴォラの父親は委細の樣子を聞きまして、數人の知己を伴ひ法廷に出頭して娘を渡して呉れと要求しました。之でアンドレヴォラは無事に奉行の强要を逃れました。奉行は自分の非行を娘に言ひ觸らされるよりもと思つて、父親に向つて彼女の貞淑をさも大げさに賞讃し、どの位る操正しいか試驗して見ようと思つて、實は俺がわざと僞つて誘惑して見たのだと告げました。そして更に、あゝ猛烈に抵抗するところが大いに俺の意に叶つたし、美しい容貌にも魅せられたから、最初の夫があんな身分卑しい者であつたことは承知してるるが、若し異存が無ければ娘御を自分の嫁として貰ひ受けたい、と申し入れました。

奉行がそれをまだ云ひ終らぬ間に、彼方の部屋に取り殘されて居たアンドレヴォラは、父親の聲を聞き付けまして二人の居る室にやつて參りました。父親を見るなり其の足下にひれ伏して泣きながら云ひました。『懷しき父上樣、私の過失や不幸のことはもう何もかも御存知の事でせうから今更申上げるにも及びますまい。唯父上に無斷で結婚いたしましたことは何とも申譯ございません。幾重にも御詫びいたします。これはいつまでも生き永らへようとして御願ひするのではございません。死なねばならぬ場合でも、父上の愛情に變りのないことを知つて、喜んで死にたいからでございます。』

ダ・ポント・カラロ氏は既に老齡に達し、其の上柔しい愛情深い人でありましたから、之を聞いて思は

ず涙を溢しましして娘を援け起し、極めて溫和な聲で云ひました。『可愛い娘よ、なる程若しそなたが私の與へる人を夫と頂いて、從順の印を示して呉れたら私は其の方を喜んだであらう。だがお前が自分勝手に選んだからと云つて私は決して腹を立てゝは居ない。たゞ何でもお前のいふ通りにしてやる父親に打ち明けて呉れなかつたのを不服に思ふ丈けだ。どうしてお前の結婚を私に秘密にしてゐたのだね？　お前の幸福になることだから、私はきつとそれを許したらうに。さうすればガブリオットが生きてゐる間に彼を私の聟とすることが出來たのだが、それはもう出來ないから、せめて死んだ今なりとも聟として扱ひたい。』

そして親戚知己に向ひ、ガブリオットに對して最後の敬意を表する爲に葬式をする準備をして下さいと頼みました。死人の身内の人達も此の事情を知りまして、若い寡婦の許へ參りました。死體は先にアンドレォラが包んだ絹の上に寢かされて裁判所の廣い中庭に安置されました。中庭は解放されてゐたものですから町の立派な人達は殆んど凡てやつて來て、ガブリオットの死體を眺め、同情の涙を流しました。それより彼の骸は數人の名士に擔がれ、立派な人々の葬式の時行はるゝ凡ての儀式を以て墓場に運ばれました。

其の後暫らく經つて、美しきアンドレヴォラにまだ思ひを焦してゐる町奉行から、娘さんを下さいと

再び父親に云つて來ました。彼は之を娘に告げましたが、彼女はこんなことを承諾するどころか、女中と二人で尼寺に隱退したいからと許しを求めました。父親は娘の意に抗ふことを欲しませんのでそれを許し、彼女は戀の務めを立派に果たした如く、宗教上のあらゆる務めを忠實に果たしました。

第七話

シモナとパスキノは互に戀し合ひ、或る日公園に密會の際、パスキノは一枚のサルビアの葉で齒を磨くよと見る間に死亡する。シモナは捕へられ判事の前で訊問を受け、パスキノの死に樣を説明しようとして、同じ葉で齒を擦ると彼女も即死する。

パムフィロの話は終つた。王はアンドレヴオラの悲みに少しも感じた樣子はなくて、エミリアに次を語るやうに命じた。彼女は直ちに始めてかく語つた。――

パムフィロ樣の御話を聞いて私も一つ似よりの話を思ひ出しました。尤も似てゐると申しましても、それはアンドレヴォラの戀人が庭園で死んだといふ點丈けなのでして、私の御話しようとする娘もそれと同じ樣にして戀人を失ひ、矢張りアンドレヴォラの樣に判官の前に引き出されるのです。併し今度は放免されるのに僞りや貞淑に依るのではなくて、死に依つて罰を免かれることになるので御座います。戀は

立派な御殿に住み度がるものであるが併し極貧の芽屋（あばらや）をも厭ふものではない、宮殿を支配する如く貧民窟にも美しき戀の花を咲かすものだといふことは、既に昨日も何誰（どなた）か仰つしやいました。私の話は之を証明するのが主眼ではありませんが、でも話しにつれてそのことも自然例証されるでせう。そこで今迄のお話は多くフロレンス以外の方々の土地で起つた樣々の事件に就てでありましたが、私は再び故郷フロレンスに立歸ります。

　近頃のことでございますが、フロレンスにシモナといふ娘が有りました。兩親は至つて貧困でしたが此の娘は大層美しくつて、身分の割には教育も行き届いて居りました。生活の爲めに餘儀なく働かねばならないので、いつも町の人に頼まれて糸を紡いで居りましたが、それでも戀を思ふ暇はあつたと見えます。彼女と同じ位ゐの低い身分の青年で、或る呉服商の番頭をしてゐる、パスキノといふ青年が、主家の羊毛を紡いで貰ふ爲に來たのが縁となり、二人は懇意になりました。青年は娘が顔も美しく心も立派なのを知ると、彼女を戀し始めまして、大層愛想よく致しますから、娘の方でも徐々彼に好感を持つやうになりました。彼はいくらか娘の心に自分を刻み付け得たと思ふと、一層萬事に氣を付けて機嫌を取りました。遂に彼の努力は成功しまして、娘は深く彼を戀するに至り、紡錘（つむ）を廻し〳〵絶えず彼のことを思つて居たのです。青年は主人の羊毛の紡ぎ方に手落ちがあつてはならぬといふ口實をつけて、そ

れも他の所なんかどうでもいゝシモナの所が一番注意を要するとでも云ひたげに、絶えず彼女を訪まれす。そして娘と一緒にゐる時は馬鹿に時間が早くたつやうな氣がしました。娘に對する戀を告げたり、戀の歡樂を稱揚したり、私の愛情に報いて私を世界一の幸福者にして下さい、そうすればあなたも幸福にしてあげます抔と、夢中になつて口說き立てゝゐるのですから時間のたつのが早い譯です。シモナは心の中では十分男の言葉に答へてゐるのですけれど、內氣の爲に彼の口說きに從ふことが出來ません。併し一方は徐々大膽になるし、一方は徐々恥かしさが除れて來ますから、遂に彼等は彼等の紡錘をこんがらかして仕舞ひました。…………………………………今後もそれを續けようと兩方共誓ひました。

彼等は互に思ひを遂げましたが、それが爲に戀が冷却するどころではなく、日々に熱度は加はるばかりです。彼等は機ある每に戀の木の果を食べましたが、思ふ程にはその機會がありません。パスキノは思ふ存分戀を語り明かすには娘の家でない何處か別な所で逢ふ方がいゝと思ひまして、或る公園のことを話して、其處ならば誰にも見付かつたり脅かされたりする心配はないと云ひました。シモナは喜んでそれを承諾して、今度の日曜の午後にそこへ行く約束をしました。やがて其の當日となるや彼女は父親に向ひまして、ラヂナといふ一人の友達と一緒に聖ガルロ寺院へ免罪を受けに行くと僞つて、友達と二人

で公園に參りました。戀人は仲間の一人でストランバ（荒繩）と綽名の付いたブッチョと一緒に待つて居りました。ブッチョはラヂナに紹介されまして、彼女の美貌を讃めたものですから、二人は直ちに仲よしになりました。そして二人が戀の話をしてゐる間に、パスキノとシモナとは公園の片隅に退きました。……

……………………彼等の身近に一本の美しいサルビアがありました。二人がこんな氣持のよい場所を見付けたことを互に喜び合ひ、又そこに來る相談をして居りました時、パスキノは何氣なしにサルビアの葉を一枚摘み取つて、歯を白く磨くには之が一番だと云つて、それで歯を擦りました。併しそれが齒齦に一寸觸つたと見る間に、彼の顔は眞蒼になり、眼はぼうっとして來て、程なく死んで了ひました。シモナは此の不意の出來事に驚いて、夢中に泣き叫びました。そしてストランバとラヂナとを呼びましたから、彼等は直ぐに馳せ付けました。見ればパスキノが身動きもせず地上にふんぞり返つてゐますから、これ又仰天しました。ストランバは友の死體が腫れて顔全面に黒點があるのを見て、『この畜生尼め！　てめえが毒を喫れやがつたんだ！』と叫びました。附近に居た人達や庭園の持主は最前のシモナの叫びを聞いて驅け付けて見ますと、死體が黒點だらけになつて腫れてゐますから、ブッチョと同じ疑ひを抱きました。けれども不幸な娘は餘りの悲しさに言葉も出ませんから、あらぬ罪を被せられても辯解することも出來ません。人々は彼女の默つてゐるのを見て愈々それに

相違ないと信じました。暫らくしてやゝ落ち付いた時、彼女は自分の無罪を主張しましたが、もう駄目です。人々は彼女を引つ捕へて奉行の前に連れて行き、ストランバや、いつか仲間に加はつたアッチシアトとマラゲボールといふパスキノの二人の友は、此の女がパスギノを毒殺したのだと訴へました。判官は直ちに裁判に掛りましたが、娘が斯かる罪を犯すべき理由が少しもありませんから之は無罪であらうと思ひまして、娘の面前で死體を檢査することゝしました。娘の申立てでは十分了解が出來ないので、もつとよく調査する積りなのです。そこで彼は例の場所に秘かに娘を連れて行つて見ると、パスキノの死體は丕でビヤ樽のやうに膨れてゐますから非常に驚いて、一體どうしてこんなになつたのかとシモナに訊きました。彼女はサルビアの繁つてゐる處へ行つて詳細に事實を述べた上、實際の有樣をよく判事に呑み込ませる爲に、丁度パキノが仕たのと同じに、サルビアの葉で齒齦を擦つて見せました。ストランバや其の他の仲間が、判事さんそれはみんな誤魔化しです、この悪黨女を火刑にして下さいと强請でゐる時に、戀人を失つた悲みや、ストランバの仲間が彼女に押し被せようとする嚴罰の恐ろしさ等で身も世もない哀れなシモナは、先にパスキノが陷つたのと同じ狂はし氣な樣子に見る〳〵變つて、遂に倒れて死にましたから、居合せた人達は膽を潰しました。

あゝ、幸福なる人々よ、同じ日に同じ戀と生命を終るとは！　同じ場所へ一緒に手を携へて行くのは

尙ほ一層の幸福です。更に死後までも戀が續いて生きてゐ時同樣に愛し合ふならば最も幸福です。併し何も分らぬ人間の裁判なんかゝら逃れたシモナの靈魂は、中でも最も幸福と云はねばなりません。運命の神はアッチシアトだとかマラゲボールの樣な、恐らく羊毛の梳き手か或はもつと身分の低いあんな人間の出鱈目な證言の爲に、彼女が無慘な目に逢ふのをお許しにならなかつたのです。そして彼女の爲に立派な道を用意して置いて、戀人と同じ死に方をさして吳れたのです。彼等の慘虐から彼女を救つて、愛するパスキノの靈に逢へるやうにして吳れたのです。

判事は此の有樣を見て驚愕し、何が何やら分りませんでした。併し暫し考へた後彼は云ひました。『此の草は毒があるに違ひない、毒草といふ譯ではないが。そこで將來何人たりとも其の害を受けぬやうに之れを堀り返して燃やして仕舞ひなさい。』

庭園の持主は判事の見てゐる前で直ちにそれを實行しました。叢(くさむら)を堀り起して見ると二人の戀人の死因が判明しました。サルビアの根(ね)元には一匹の大きな蝦蟇(がま)が潛んでゐたので、其の毒氣が枝から葉まで行亘つて居たのでした。誰も恐ろしくて近寄る者はありません。人々は澤山の枯枝を蝦蟇(がま)の周圍に積み重ねて、サルビアと一緒に燃やして仕舞ひました。

パスキノの死因に關する判事の調査は之で終了しました。二人の死體は聖ポール寺院に運ばれました。

きつとそれが彼等の菩提寺であつたのでせう。擔いだ者は「荒繩」のストランバ、アッチシアト（ふとつちよ）グッチョ、アムブラタ（間抜けな豚）及びマラゲボール（こぼし家）でした。

第八話

ザロラモはサルヹストラと戀仲であつたが母親に强ひられて巴里に行き、歸つて見ると戀人は旣に人妻となつてゐる。彼は祕かに女の家に忍び入り、その側らで死ぬ。埋葬の時サルヹストラは敎會に驅け付け、彼の死體の上に倒れ死す。

エミリアの話が終るや、ネイフィルは王の命を受けてかく語つた、――

諸孃（みなさま）、世間には自分ばかり物識りだと己惚（うぬぼ）れてゐて、其の實は人一倍の物知らずが澤山あります。さういふ人は自分の猿智慧を働かして、單に他人の意志に故ら反することをするばかりでなく、物事の自然の理法にさへ背かうとしますが、そんな僭越自恃は屢々多くの害惡を惹き起しこそすれ、未だ良い結果を生じた例（ためし）はないのでございます。扨て戀といふものは本來の性質上他の何物よりも之を强ひることも出來ませねば、又抑へることも出來ないものでございます。側（はた）から奸計を用ひたり術策を弄したりしてもそれを消し止めることは出來ません。自然と熱の冷（さ）めるを待つより仕方のないものです。それで私

は皆樣に、柄にもない悧發ぶりを發揮しようとして、要りもしない智慧を働かせた婦人の御話をしませう、彼女は運命の神から植え付けられた深い戀の根を掘り除けようとして、一人息子の戀人を奪ひ、併せて彼の生命まで奪つて仕舞つたのです。

昔、私共の都フロレンスにリオナルド・シギエリといふ大變裕福な立派な豪商があつたそうでございます。妻との間にヂロラモといふ息子が出來て程なく、彼は家のことを萬事整理して亡くなりました。併し母親及び後見人等は相變らず正直に稼業を續けて立派にやつて行きました。息子は附近の子供等と一緒に生長する中、或る裁縫師の娘で、彼と同年配の一人の少女と遊ぶことを殊に好みました。徐々年月のたつにつれて此の親しさが最も強い戀に變りまして、ヂロラモは娘と一緒にゐない時は少しも幸福を感じられない程になりました。そして娘の方でも之に劣らず深く彼を愛して居りました。

息子の母親が之を感付きまして、非常に嚴しく彼を責め叱りました。併し幾ら叱つても何の効果もありませんので遂にそのことを後見人に訴へました。身分よりも立派な者に息子を育て上げようといふ熱心から、母親は彼等に向つて云ひました。

『まあ皆樣どうか聞いて下さい。家のヂロラモは今やつと十四になつた計りなのに、近所の仕立屋の娘でサルヱストラといふのに夢中になつて戀してゐるんですよ。何とかして彼の子の情火を消し止めない

と屹度いつかこつそりあの娘と結婚して了ひます。そんなことになれば私悲しくつて死んで仕舞ふでせう。此の不幸を未然に防ぐ爲に、彼の子を何處かずつと遠方の大商人の處へでも預けたらどうかと思ひますの。思ふ女の姿を見ないやうになればきつと直きに忘れて仕舞ふに違ひありませんからね。』

後見人等は之を聞いてそれは結構でせうと賛成して、その實行方法に就ては出來得る限り盡力しようと云ひました。そこで先づ若者を呼び付けて一人が云ひました。

『坊つちやん、あなたはもう大人になつたから、商賣のことを少し習ひ始めなくつてはなりません。それに就てあなたに、巴里へ行つて暫らく滯在して貰ひたいんですがね。誰か腕利きの商人の下で商賣を勉强なされば、後になつて、私達があなたの稼業をよくやつたか惡くやつたか御分りなりませう。殊にあなたの御商賣は巴里の都とは非常に深い關係があるんですからね。それに唯商賣上の事がよく分つて來るのみでなく、巴里へ行けば人間に光澤が出て來ます。どうせあちらへ行けば直ぐ立派な上品な交際社會に立ち交りますから、あなたの人間が出來上ります。世界中で最も敎養の優れた、立派な人達のゐる都ですから、彼等の作法や擧止態度なども見習ひなすつて、それから歸つておいでなさい。』

ヂロラモは彼等のいふことを熱心に聞き取りまして、そんなことはフロレンスで凡て學び得る、僕は巴里に行かない、と卽座に答へました。後見人は倘ほ是非にと勸めたり、巴里へ行くことの利益を稱揚

しましたが、息子は何と云つてもきゝません。賴みつ賺しつ有らん限りの手段を盡しましたが彼の心を變へる事は出來ませんでした。そこで彼等も仕方なく母親に其の由を告げましたから、母親は非常にいら立ちました。彼が巴里に行かうとしないからといふのではなく、戀を捨てようとしないのに腹を立てたのです。母親は又もや酷く息子を叱りました。それでも効がないので今後は柔しく攻め落さうとしまして、何うか御願ひだから私や後見人の希望を容れて御呉れと熱心に賴んだので、遂に息子も心が折れて、それでは一年丈けフランスへ行つて來ませう、一年たつたら歸るやうにして下さいと云つて出發しました。

然るに人々は彼を欺いたのです。今日か明日かと迎ひの來るのを待つてゐる間に遂に全二年を巴里に留め置かれました。その間もヂロラモはサルヱストラのことを思はぬ日とては一日もありませぬ。離れて顏を見なければ愈々思ひは増す計りです。彼は段々との遲延に腹を立てゝ、一人でフロレンスに歸らうかとも思つたのですが、人々が直き迎ひをやる、直き迎ひをやると絕えず云つてよこす爲に、ついそれに瞞されて延々になつたのでした。

漸く歸國した時には彼の戀は以前と少しも變りはありません。早く戀人の安否を知りたいと思ひまして、逢つて話をする機會をも待ち切れず、歸るなり直ぐ彼女のことを尋ねました。然るに彼女は既に嫁入

つたとのこと、彼は愕然として失望落膽の淵に沈みました。併し過ぎた不幸は取り返しが付きません。彼は我慢するより他にしようもありません。併し離れてゐた爲に強くなり增つた情熱は、さう容易に心から根こぎにすることは出來ません。ヂロラモは迚もその思ひが消え去らうとは思へないのです。彼はまだ幸福の望みを絕つては居りませんでした。愛する婦人はまだ變らぬ愛情を自分に對して抱いてゐるに違ひないと思つたからです。それで彼は彼女の住居を探し當てまして、絕えず其の窓下を行つたり來たりしましたが、彼の當て推量は間違つてゐたのでして、サルヱストラはもう彼のことなんか全く忘れて仕舞つたやうに、彼と顏を合せても丸で他人の樣に知らない顏をしてゐます。ヂロラモはそれでも失望しないで、彼女の愛が失くなつたのなら、それを昔に返らせようとして、凡ゆる手段を講じました。そして遂に是非共サルヱストラに直接面談しようと心を極めました。そこで彼は女の家にそつと忍び入る計畫を立てゝ、或る近所の人から其の家の樣子を悉く聞き取つて、それから好機の來るのを待つて居りました。かくて或る夜、女と夫とが知人の家に行つた留守に、誰の目にもつかぬやう秘かに家の中に這入りまして、寢室に忍び入り、寢臺用の帆木綿の後ろに隱れ、戀と恐れとに震へながら待つて居りました。やがて夫婦は歸つて來て寢に就きましたが、主人が眠りに入つたのを確かめて、彼は爪先立ちをして妻君の寢てゐる寢臺に近寄りました。亭主はもう高鼾(たかいびき)ですから彼は少し大膽になつて、昔の戀人の

胸に手を當てがつて、その上に屈み懸つて小聲で云ひました。

『愛しき戀人のサルヹストラさん。若しまだ眠つてゐないなら默つて聞いておいでなさい。私はヂロラモです。あなたを崇拜し、あなたを愛さないでは生きてゐられない、否死ぬまであなたを愛する、ヂクラモです。聲を立てないで下さい、どうか。』

まだ眠つてゐなかつたサルヹストラは恐ろしさに殆んど失心せん計り、震へ聲で云ひました。『まあ私をどんな目に逢はせなさるお積り？　御生ですから行つて下さい。私を愛してゐると仰つしやるなら、其の愛の爲に、何卒御願ひですから行つて下さい。若しも夫が目を醒ませばあなたの身の破滅です。そして今迄幸福だつた私達夫婦の生活も破れます。夫は私を愛して、幸福にして呉れます。あなたは立派な人だから、私達の幸福を搔き亂すやうなことはなさらないでせうね。』

此の言葉を聞いた青年の悲痛は想像するに難く有りますまい。併し彼は女に以前の相愛を思ひ起させ、私は遠く離れてゐて顏を見なかつた爲に一層戀が募つた、若しあなたが以前の樣に愛して呉れないなら私は絶望して死んで了ふと云ひ放ちました。併し彼が如何に嘆願しても自殺すると脅かしても、何の手應へもありませんでした。それでも戀に溺れたヂロラモは思ひ切れませんでした。無理に一つ接吻すると彼の心臓は愈々燃え上りましたが、心臓の焔は身體を溫める助けにはならないので、全身は氷のやうで

す。冬だつたのです。それで彼は、そんならせめて少し身體を暖める爲に傍へ寢さして下さい、決して觸りはしない、暖まつたら直ぐ歸ります、と賴んだのです。若き婦人は可哀想になつて來まして、之以上一言も口を利いてはならぬといふ條件で、此の小さな賴み事を聞き入れました。彼女は少し傍へ寄つて餘地を作りましたので、ヂロラモは靜かにその側に臥せりましたが、此の恩典にも彼は永く浴することは出來なかつたのです。といふのは、あれ程戀してゐた、そして今尙ほ慕つてゐる女からもう愛せらないといふ悲みの爲に悶絕したのか、それとも强烈な慾情を抑へようと極度の努力をした爲に何處か内部の器官を破裂でもさしたのか、其處へ這入ると直ぐ、一言も言はずに死んで仕舞つたのです。女は彼が餘り靜かにしてゐるし、立ち去らうとする樣子が少しも見えませんので驚いて、もう行つて下さいと云ひましたが何の返事もありません。そこで手を伸べて彼を搖り起して見れば、氷の樣に冷たくなつて居りますから仰天して、觸つて見たり搖つて見たりしましたが、もう死んだのに間違ひありません。彼女の悲歎と當惑とは想像出來ませう。こんなことになつてどうしたらいゝだらう、夫に何と云つたものだらう? 併し彼女は之を他人事のやうにして夫に話して見ようと決心しました。で早速夫を呼び起しまして、知合の或る婦人にこんなことがあつたのですが、若しあなたが之と同じ窮境に陷つたらどうなさいますか聞かして下さいと云ひました。夫は答へて、

『俺ならば戀人の死體を彼の家の前に搬んで置くね。そして妻には何の罪もないのだから、彼女に對して怒つたりなんかしないだらう。』と云ひました。

『ぢや私達も今そうしなければなりませんわ。』と云つて彼の女は夫の手を取つて、ヂロラモの死體の上に載せました。夫は此の出來事に非常に面食つて、直ちに起き上り、蠟燭を點して死體を肩に擔ぎ、妻の潔白を固く信じて居りますから彼女に向つては一言も非難めいたことを云はず、死人を母親の家の前に置いて急ぎ歸りました。

翌朝に至るや彼の死亡は町中に知れ渡りましたが、どうして死んだのか誰にも分りません。ヂロラモの母親は悲しくて堪らず、數人の醫者を呼んで息子の死體を檢査させました。醫者は何の傷痕もないので、これは悲歎の餘り死んだのだと云ひました。死體は教會に搬ばれました。母親は此の地の習慣に從ひまして、全身に喪服を纏ふて、親戚知己と一緒に葬式に參列しました。

一方サルヹストラの夫は、ヂロラモの死因に就てどんな噂が立つてゐるか知り度いと思ひまして、妻を說き伏せ厚い面被(ヴエール)を被らせ、教會に行つて婦人達の中に交り込み、彼等が此の急死をどう思つてゐるか探つて來いと命じました。そして尙ほ『俺も自分で行つて、男連中の云ふことを聞いて來よう』と云ひました。

ヂロラモに對してあんなに酷かつたサルヱストラは、取り返しの付かぬ今になつて、彼女に對する彼の強い愛が分りまして、夫の右の命令を喜びました。或る意味から云へば自分が殺したとも云へる彼の青年に對して、最後の務めを果たすことが出來ると思つたからです。そこで彼女は彼衣を着、頭巾を被りまして、悲しい心を抱きつゝ教會に參りました。すると彼に對する以前の戀が再び昔の勢ひを盛り返し、彼女は全く悲歎に沈みながら、沈鬱な行列に踉いて教會の内に入りました。そして群集を押し分けて死體の安置してある場所に行きました。彼女の情なさに死んで仕舞つた憐れな男の顏を見るなり、彼女も戀人を失くした悲しさに息が詰るやうな氣がして死體の上に倒れました。居合せた婦人達は面被の爲に彼女の顏が見えないので誰だか分りませんでしたが、斯く悲しむ處を見て屹度死人の母親だと思ひまして、彼女を種々慰めて死體から引離さうとしましたが、それでも動かないものですから腕を取つて起そうとして見ると、婦人は既に死んでゐました。そこで女の面被を取つて見て、ヂロラモがあんなに熱烈に愛してゐたサルヱストラなる事を知つて、人々は一層驚きました。母親は之を見て尙ほ激しく泣き出し。他の婦人達も共に泣きました。程なく男達もこの新たな死亡を知り、夫の耳にも這入つて、彼は凡ゆる慰めを卻けて悲み歎きました。彼は餘りの悲しさに自制力を失ひまして、前夜の出來事を詳さに語りました。それで始めて人々には此の二人の不幸な戀人達の死因が分りました。ヂロラモの埋葬を

後らして、二人は同じ墓に葬られました。かくて生が成し遂げ得ないこと——永久に結び合つて離れぬこと——を死が成し遂げたのでございます。

第九話

ギグリエルモ・ロッシリオスは妻と通じてゐるガルダスタアニヨを殺して、其の心臟を妻に食はせる。妻はそれが分ると高い窓より身を投げて自殺し、戀人と一緒に葬られる。

人々が同情を寄せ乍らネイフィルの物語を聞き終つた時、王はヂオネオの特權を侵害することを欲せず、直ちに自ら語り出した、——

淑女諸君、私は一つの話を思ひ出しました。それは恐らく唯今のお話の人々に對して皆様が抱きなすつた同情に劣らない憐愍(れんみん)を呼び起すでありませう。今度はもつと身分の高い人達のことでありまして、事件も一層哀れなのであります。

誰でも知つてゐることですが、昔プロヴンスにギグリエルモ・ダ・ロッシリオヌ、ギグリエルモ・ガルダスタニヨといふ二人の騎士がありました、二人共軍事上の偉勳赫々たる人でありましたから、極の親友でありました。何處の劍道試合、馬上試合、其の他騎士の行ふ如何なる競技にも必らず連れ立つて出場

し同じ色標を着けて出る程でした。互の住居が遠くないものですから、絶えず往來してゐる内、それ程の親友の間柄に拘らず、ガルダスタアニョはロッシリオヌの大變美しい妻に激しい戀をするに至りました。彼は絶えず夫人に心を取られてゐますから、夫人も自然それに氣が付きました。夫人は彼が立派な騎士であることを知つて居りますから、彼に戀されてゐるのを感付くと非常に心嬉しく思ひまして、早く戀を打ち明けて下さればよい、若しさうなればどんな滿足でも與へてそれに報ひようと固く決心しました。夫人は長く待ち焦れるに及びませんでした。程なくガルダスタアニョは思ひを打ち明けましたから、直ぐ樣二人は極めて親密になり、最も深い愛情の印を交換し合ひました。然るに彼等が餘り繁々逢つた爲かそれとも不注意だつた爲か知りませんが、夫が彼等の不義を知つて仕舞つたのです。それからといふものは、ガルダスタアニョに對する以前の友愛は憎惡に變りましたが、戀人達は戀に我を忘れても、聰明な彼は憎みに我を忘れる樣なことはありませんでした。彼は巧みに憤怒を押し隱して居たので、戀人等は彼が嫉妬を起してゐることに氣が付かなかつたのです。併し實は彼の嫉妬は非常なもので、自分に裏切つた不實な騎士を殺さうと決心しました。

丁度其の時プロヴンスの或る場所に於て大試合が催されるといふことが一般に觸れ出されました。之は自分の計畫を實行するによき折だと彼は思ひまして、ガルダスターニョに使者をやり、試合出場の手筈

や着用すべき色標等に就て談合したいから來て呉れと傳へました。ガルダスタアニョは此の招きを喜んで、明日參上して晩餐を共にしせまうと答へました。そこでギグリエルモ●ロッシリオヌは直ちに復讐を斷行することにしまして、翌る日になるや全身武裝して馬に跨り數人の家來を引き連れて、居城から約一リイグ先のガルダスタアニョが必らず通過する森で待ち伏せました。暫らく待つて居りますと、彼が何の心配も無さそうに武裝もせず、唯つた二人の僕を從へて近付いて來るのが見えました。彼の姿を認めるや否やロッシリオヌは、恰かも狂へる人の如くに槍を構へて驅せより、「友義に背いた復讐今こそ思ひ知れ。」と叫び樣、相手の胸元に突き刺しました。尙ほ幾度も幾度も突き通し、刳り拔きましたから何で堪りませう、騎士はウンとも云はず地上に墜落して死に失せました。僕共は馬の足の續く限り速く馬を飛ばして、かくも不意に主人を殺害したのが何者であるかも知らずに、逃げ去りました。

自分の家來の他四邊に人なきを見まして、ロッシリオヌは馬から下り、小刀を以てガルダスタアニョの死體を切り開いて、其の心臟を掴み出し、それを槍旗に包んで、一人の僕に持たせました。必らず誰にも此の事を口外せぬ樣家來に命じて、若し口外すれば之と同じ目に遭はすと云ひました。かくて馬に跨がり日暮方に城に歸着しました。

夫人はガルダスタアニョが晩餐に列することを知つて居りますから、男を戀ひ慕ふ婦人の待ち遠しさ

を以て待ち受けて居たのに、夫ばかりで戀人の姿は見えませんから、驚いて其の理由を尋ねました。ロッシリオヌは之に對して、彼は明日にならなければ來ないと云つてよこした、と答へました。夫人は失望しましたが、それを面には現はしませんでした。

ロッシリチヌは馬を下りるなり、料理番を呼んで云ひました『此の猪の心臓を持つて行つて、出來る丈け上手に調理したら、銀の皿に盛つて出せ。』

料理番は命令に從ひ、出來る丈けの腕を振つてそれを非常に美味なシチウに料理しました。やがて夕食時となるやギグリエルモは夫人と共に席に就きましたが、晝間犯した罪惡が心を責めて、食慾が起りませんので、殆んど何にも食べません。シチウが出ても手を出さないのです。夫人は之に反し、其の夜は偶然持別に空腹を感じてゐたものですから、それが非常に甘味くて一人で皆な食べて仕舞ひました。

『その料理はどうだね、甘いか?』と夫は妻に訊きました。

『はい、ほんとに結構でございました。』と彼女は答へました。

『それはそうなくてはならない筈だ。生きてゐる時あんなにお前を愛してゐたのだから、死んでからお前がそれを好むのは當然なことだ。』

夫人は暫し沈默の後、『あなた何をわたくしに食べさせたのでございますか?』』と尋ねました。

『不信不義なガルダスタアニョの心臓だ。お前があれ程愛してゐた心臓だ。お前はそれを愛することを恥ぢとも思はなかつたのだ。俺は現在この自分の手でそれを引きづり出した。その心臓をお前が今食つたのだ。』

此の恐ろしい事實を聞いた夫人の驚愕は私には說明出來ません。彼女は自分の生命よりもガルダスタアニョを愛してゐたのだと丈け云へば十分でせう。彼女のか弱い心は激情の爲に打ち碎かれて了ひまして、暫らくは物を云ふことすら出來ませんでしたが、やがて氣を取り直し溜息を吐いて云ひました。

『あなたは騎士にも似合はぬ卑怯な不實な振舞ひをなさつたのです。ガルダスタアニョ樣が私を强ひたのではありません。私からあなたを欺くやうなことをしたんですから、私丈けを罸して下さるのが本當だつたのです。比ひなく優しくそして勇敢な騎士の偉い心臓を食べた後で、外の下らない食物を食べたり、他の滋養を取つたりすれば、それこそ神樣の罸が當ります!』

斯う云つたかと見る間に食卓を起つて、非常に高い窓から身を投げて、死にました。ギグリエルモは自己の非行を悟つて、甚だしく後悔すると同時に、急に恐ろしくなつて逃亡しました。翌る日には事件が細かに町中に知れ渡りまして、夫人及びガルダスタアニョの親戚知己は二つの死骸を菩提寺に運んで盛大な葬式を執り行つて葬りました。二人の墓石には碑文が刻んであつて、それは今でも讀むことが出

來ます。それにはこの二人の不幸な戀人の優れた美實を數へ上げ、其の死の由來が書いてあります。

第十話

外科醫の妻は昏睡に陷つてゐる戀人を、死んだものと思つて箱詰にする。金貸共が箱を盗んで家に持つて行く。男は目を醒して箱を出ると、盗賊として捕はれる。婦人の女中が判事に向ひ、自分が彼を箱に入れて置いたのを金貸が盗んだのだと申立てゝ男を絞罪より救ひ、金貸は罰金を課される。

王の話が終つて殘るはヂオネオ丈けとなつたので、そのことを王から注意されて、彼は語つた、——美しき淑女諸君、今日の御話に現はれた澤山の不幸な戀人達の災難には、あなた方ばかりでなく私までが涙を絞らされました。私はもう悲しくて堪らなくなつて、早く御仕舞ひになればいゝと、とつくから望んで居ました。扨て有難いことにやつと終りましたから、私はこんな慘めな話の御仲間入りは始めつから御免なのですから、陰氣な話は止めにして、明日の話題のよい前例になるやうな、もつといゝ面白い御話をしませう。

左程古いことではありませんが、サレルノにマッゼオ・デラ・モンタアニアといふ名高い外科醫があり

ましたが、もう可成り歳がいつてからになつて、結婚をしようと思ひ付きました。そこで彼は同じ町の或る若い婦人を娶りましたが、その婦人は生々して美しく、どんな青年にでも嫁入る價値は十分にあつたのです。それ故右の老醫は妻を喜ばす爲には凡ゆる方法を盡して、指環や寶玉類、美しい衣服——一言で云へば若い婦人の虚榮心を滿足させるものは悉く、買ひ與へました。ところが夫人が他の何物よりも最も望んでゐるもので、彼が與へてやらないものが一つありました。……………………………妻を冷たい寢床に獨り寢かして置いて、先日承つた御話のリッチャルド・ダ・シャンヂカ見たいに、それに關する節制といふことに就て妻に說いて聞かせました。勿論そんなことで少しも瞞し拔くことは出來ません。御說教の中にはこんなのもあります。…………………………………………………………………………

……………………併し夫人はそんなことを少しも信じませんで、夫の理屈はみんな…………………………嘘である事を知りまして、聰明で健康な婦人ですから、夫がそんなにするなら………………………………………と決心しました。そこで數人の若者を物色しまして、ルッヂエリ・ダ・ジェロリといふ美しい青年に決めました。彼は町中で一番惡性な人間だといふ評判でした。身分はいゝのですけれ共、餘り品行が惡く、度外れないたづらや、愚行、惡行をやつたものですから、親類中一人として彼に構ひ付ける者はないのです。若い夫人はそんなことはよく承知して居ますが、彼の德義なんかどうでもよく、彼の體格

の精力旺盛なのが付け目なので、彼に就ての惡い評判抔構はずに、彼を手に入れようと決心しました。そこで成る丈け彼と逢ふやうに逢ふ樣にと仕向けて、逢へば必らず彼を凝つと見て、彼に向つて笑顏を向けます。ルッヂエリの方でも彼に對する夫人の心持を感付きまして、それを確かめようとして樣々な手段を講じました。彼は女に手紙をやりました。すると女の方でもいつまでも延引してゐないで、程なく或る信賴し得る召使の巧妙な仲立ちによつて、彼とこつそり逢ふことが出來ました。…………………………夫人は此の愉快な初めての逢瀨を利用して、彼に御說敎を聞かせました。彼の非行をさんぐ〵責めて、私を愛するならば、どうか色々な惡事や、あなたの人間を滅ぼしてゐる樣々な惡習を止めて下さい、そうして呉れゝば時々御小遣ぐらゐは上げますから、と賴んだのです。ルッヂエリは生活を改めると約束しました。そして彼等は誰にも氣付かれぬ樣に屢々逢つて居りました。

戀人達がかうして不義の快樂を續けてゐる時に、夫の外科醫は足を病んだ患者の診察を乞はれました。彼は醫術にかけては中々利け者でしたから、直ちに其の病原を發見しました。それが壞疽たといふ事を患者の兩親告げて、足を全然切つて捨てるか、然らざれば數日内に死ぬでせう、尤も手術をしても助かるとは保證出來ないが、どうなさいますと云つたのです。親達は見殺しにするよりも、助かるかどうか

思ひ切つて行つて見たいと思ひまして、如何やうにでも先生の最善と御思ひになる通りにして下さいと云ひました。マッゼオは患者に到底手術の苦痛に堪ゆる力のないのを見まして、手術に取り掛る前に麻睡藥を呑まして、病人を眠らせようと心を極めました。麻睡藥の調劑法は彼一人しか知らないので、それを作る爲に手術は次囘に延ばしました。彼は直ちに此の麻睡劑の抽出に取り掛つて、必要な量丈け取ると一本の瓶に入れて、それが何だといふことを誰にも告げずに窓縁に載せて置きました。

晝過ぎになつて、丁度彼が之から患者の家へ手術に出かけようとしてゐる時に、マルフィから急使が到着して、マッゼオ醫師の或る親友の手紙を齎らしました。それには前夜大騷動があつて數人の知人が怪我をしたから直ぐ來て呉れと書いてありました。そこで彼は足の切斷を又もや翌日に延ばすことにして、急ぎ一艘の小舟に乘つて出發しました。

若い跳ね上りの妻君は翌日にならなければ夫が歸らないことを知るや、直ちにルッヂエリを呼んで、自分の部屋に入れて錠を下し、家内中が寢靜まつたら逢はうと思つて居りました。ところが部屋で待つてゐる戀人は、日中何か骨折仕事でもしたのか、それとも鹽つ辛い物でも食べたのか、恐ろしく喉が乾いて參りました。部屋の中に飲み物と云つては、マッゼオ醫師が窓縁に置いた瓶の水のほか何も無かつたものですから、彼は滴も殘さずそれを飲んで仕舞ひました。藥の利目は現はれて、彼は程なく眠入つた

のです。妻君の方は人々の見る眼も無くなるのを待ち兼ねて男の所へ來て見ますと、眠つてゐるものですから手で搖つて、お起きなさい、と低い聲で云ひました。併しそれでも男は物も云はず起きもしません。夫人は彼の寢坊が癪にさわつて來て、一層激しく搖りながら、云ひました。

『お起きつたらさ、寢坊助。そんなに眠むいんなら來なけりやよかつたのに。』

餘りひどく搖つたものですから、男は腰掛けてゐた箱から轉がり落ちました。ルッヂエリは全で死んだ樣になつてゐて、落こちても知りません。それで夫人も彼が少しも感じのなさそうなのに驚きまして、彼の鼻を抓つたり、頤髯を摑んで引つ張つたりしました。それでも何の手應へもありません。生きてる樣子は全くないので、之は死んだのではあるまいかと考へ始めました。又もや力限り搖つて見たり、一層力を入れて抓つたり、彼の指を蠟燭の火に當てゝ見たりしました。指が燃えても手を引かうともしないのです。もう死んだに間違ひないと思ひました。彼女の悲歎がどれ程であつたかは皆樣想像が付きませう。出來る丈け音を立てない樣に悲み泣きました。暫らくして泣き止むと、此の悲みの上に更に難儀や醜聞を招いてはならぬと思ひまして、名聲を維持する方法に就て考へ始めました。そこで忠實な女中の許へ行つて、手短かに事件を話した上、彼女の助力を賴みました。勿論女中も之を聞いて驚きましたが、ルッヂエリが本當に死んだとは信じられませんでした。併し自分でも一生懸命搖つたり、そこら中を抓

つて見ても全く感じる様子がありません。そこでもう疑ふ餘地はないと思ひました、死人を屋外に運び出しませうと云ひました。すると妻君は、

『此の家で死んだつていふことが人に分らない様にするにはどうしたらいゝか知ら、家の前の街にあるのを見付ければきつと私達が疑はれるからね。』

『奥様、それは御心配に及びませぬ。私今晩角の大工さんの店の前に箱があるのを見ました。きつと中に入れるのを忘れたんでございませう。若し今でもそこにあれば、私共の目的に使ふには持つてこいですわ。大して大きくはありませんが、此の人を入れる位のことはどうにか出來ませう。箱の中へ入れたら小刀で二所三所傷を付けて、殺された態に見せかけて置きませう。此の人は随分いたづらをして敵が澤山ありますから、そうして置けば、又何か悪い事をしてゐる處を見付かつて殺されたに違ひないと、誰でも容易に信じますよ。』

夫人は女中の云ふことに總て賛成しましたが、傷を付ける丈けはどんなことがあつてもしてはいけないと云ひました。そこで箱がまだ有るかどうか見に遣りますと、程なく歸つてまだあるとのことです。此の女中は肥えた頑丈な女でしたからルッチエリを引つ擔ぎ、夫人は先に立つて誰も來ないかと氣を配りながら、やがて箱の所へ行つて其の中へ死體を入れ、蓋を締めて逃げ歸りました。

扨て玆に二人の高利貸業者がありまして、つい數日前に此の大工の店の少し先に家を持ちました。稼業が稼業ですから、人の物でも何でも家の用に立つものは無暗に欲しいのです。それで例の箱に目を付けまして、夜中になつても街に出し放してあつたら取つて遣らうと相談を極めました。やがて眞夜中になつて彼等は箱を家に引いて行きました。少し重過ぎるとは思ひましたが、盜み仕事ですから往來で中を調べてゐる暇もありません。そして女中部屋にそれを下して、その儘うつちやらかして寢に就きました。

扨てルッヂエリは隨分長い間眠つたので、大概藥の利目もなくなりまして、夜の明ける少し前に目を醒ましました。まだ身體中がだるくて頭の中はどろんとしてゐますが、併し目が開いたのに何も見えませんから、之は變だと思ひまして兩手を伸して手さぐりして見ますと、確かに自分は箱の中に押し込まれてゐます。眠つてゐるんだか醒めてゐるんだか自分にも分らなくなりました。

『一體此處は何處だだらう？　これは何だらう？　昨日確か情婦の部屋へ行つてゐて、箱の上で眠つたのを覺えてゐるが、之は不思議だ。今ではその箱の中に閉ぢ込められてゐるんだ。それとも何か俺の思ひ違ひか知らん。一體どうしたつていふんだらう。何事が起つたんだらう？　醫者ん坊が歸つて來て、妻君の奴、亭主の悋氣を防ぐ爲に俺を隱して箱詰めにしたのか知ら？』

斯う思つたものですから彼は凝つとして、何か物音が聞えるかと聽耳を立てました。併し其の窮屈な

ことゝ云つたらありません。箱は短かくて狭いのに、隨分長い間同じ姿勢でゐたのですから、下になつてゐる方が痛くて堪らなくなりました。少しくつろぐ爲に彼は向きを變へやうと思ひました。すると其の拍子に箱の片側に身體がぶ突かりまして、元々斜に曲げて立てかけてあつたものですから、ドシンと床に打倒れました。恐ろしい物音に隣室に寢てゐた女共は眼を醒ましましたが、恐ろしくて聲も出ません。ルッヂエリは今の轉倒で箱の蓋が開いたのを知り、何事かあつた場合には、其の中に閉ぢ込められてゐるよりも自由の身になつてゐる方がいゝと思ひまして、狭い箱から出ました。自分が何處にゐるのか分らないので、彼は戸口でもあつたらそこから逃げ出ようとして、部屋の中を方々手さぐりし始めました。女中共は彼が歩いて手捜りしてゐる音が聞えるので、臆病な震へ聲で『誰れ、そこにゐるのは?』と叫びましたが、ルッヂエリは彼等の聲に聞き覺えがありませんから、默つてゐて返事をしません。女中共は主人を呼び始めました。併し彼等はぐつすり寢込んでゐてその呼聲を聞き付けません。誰も來て吳れないので女中達は一層怖くなつて參りまして、遂に寢床を跳びだして、窓を開くなり、あらん限りの聲を絞つて喚きました。

『泥棒! 泥棒!』

近所の人達が叫びを聞いて驅け付けて來て、或は戸口、或は屋根から、どやどや家の中に這入り込ん

だので、二人の高利貸も物音に目を醒まして、面食つてキヨロ〳〵してゐるルッヂエリを捕へました。彼は迚も逃れることは出來ないので、何も云はずに手を縛られるが儘に任せてゐました。やがて騷動を聞き付けて遣つて來た町の役人の手に彼は引渡されました。なにしろ極印付の男ですから、直ぐ樣拷問臺にかけられました。彼は早く苦みを逃れたいと思ふ心から、私は盜賊を働らく積りで高利貸の家に忍び入りました、と白狀したのです。そこで判事は彼を絞罪に宣告しました。

翌朝になると、ルッヂエリが金貸の家に盜みに入つて捕はれたといふことが町中に知れ渡りました。之を聞いた醫者の妻君と女中とは非常に吃驚しまして、昨夜のことは皆な夢ではなかつたかと思ふ程でした。夫人は戀人の身が危險なことを思つて非常に困惑しました。若し出來ることなら、自分の生命を犧牲にしてでも彼を助けてやりたいと思ひました。

御醫者さんは朝になつて家に歸つて參りますと、病人の手術をしようと思つて魔睡藥を置いた窓に行つて見れば、瓶はいつの間にか空になつて居ますから、いや怒るまいことか大騷ぎを始めて、誰も恐ろしさに側へ寄り付けない程怒鳴り散らしました。夫人の心はそんな水どころではない最つと重大な心配で一杯ですから、大層怒つた調子で夫に向ひ、瓶の水をうつかり捨てたぐらゐでそんな騷ぎをするには及ばない、水なんかそんなに大事なもんぢやあるまいし、と云ひました。すると醫者は妻君に、之が唯

の水だと思つたら大間違ひだ、それは手術用に俺がこしらへて置いた魔睡剤なのだ、と話しました。妻君はルッヂェリが飲んだに違ひないと卽座に合點しまして、

『あら然う、私ちつとも知らなかつたわ、でも又こしらへれば譯ないでせう。』

其の間に主婦の命を請けて、ルッヂエリに關する確報を探りに行つた女中が歸つて參りまして、萬事あの人に都合が惡い、知人は皆な彼を見捨てた、親類中一人として彼を助けようとする者はない、判事は明日は必らず彼を絞罪にするに相違ない、と報告して、更に、

『私大工さんに逢ひましたの。大工さんは私達が可哀想なルッヂエリさんを入れた箱の事で、誰か知らない人と一生懸命議論してゐました。その箱は俺の物だと云ひ張つてゐるのです。大工さんは屹度それが大事なんでせう、確かに盜まれたんだつて云つてゐますし、相手の人は、いやあなたは二人の高利貸に賣り拂つたに違ひない、ルッヂエリが捕縛された時に彼等の家にあつたんだから、と云ひました。すると大工さんは、「奴等が俺から買つたなんて云へば、彼奴等は惡漢だ。俺は昨夜箱を取り込むのを忘れて外に出して置いたんだ。それを奴等が持つて行きやがつたんだから、錢を拂ふかそうでなけりや直ぐに取り戾してやる。」つて答へました。それから二人で金貸の家へ行つた樣でした。私は歸つて來たのです。奥樣にも御分りでせうが、この二人の爭論から判斷しますれば、ルッヂエリはあの箱に入つた儘金貸の

家へ搬ばれたんです。でもどうして生き返つたのかそれが不思議ですわね。』

之で夫人にもすつかり事情が分りましたから、夫の云つた魔睡劑のことを女中に話した上、私の名譽を傷けないで戀人を助ける爲に、出來る丈けの力を貸してお吳れ、と賴みました。

『何でも御云ひ付け下さいまし。出來ることならどんなことでも致しますから。』と女中は答へました。

此の事で一番心配してゐるのは夫人ですから、程なく一つの工夫を案出しました。そこでそれを女中に話すと、女中も大賛成で實行する約束をしました。女中は氣がいゝ計りでなく中々賢い女でありましたから、早速主人マッゼオの許に參りまして、其の足下に身を投げ伏して、何卒私の犯した罪を御赦し下さいまし、と歎願したのです。主人には女中が何を云つてのるか譯が分らないので、お前は何の罪を犯したといふのかと訊きました。

女中は涙を流しながら、『旦那樣、ルッヂエリ・ダ・ジロロはもう一年以上も私を慕つてゐたのでございます。あの人に强ひられたのと、私にもその氣があつたのとで、私もあの人を愛するやうになつたのでございます。すると昨晩私に向ひまして、お前の御主人はマルフィへ行つて歸らないだらうから、泊りに來ると口說くものですから、私はつい彼を引き入れたのでございます。私の寢室へ參りまするなり直ぐ恐ろしく喉が乾いて堪らないと云ひます。何も喉を濕すことの出來るやうなものはありませんし、奥樣

の御部屋には水も酒もありますけれど、取りに行く譯に參りませんので、旦那樣の御部屋の窓に水の入つた小さな瓶があつたのを思ひ出しまして、それを取つて參りました。それを呑ませると直ぐに、私は又元の所へ瓶を置いて來たのでございます。旦那樣が大騷ぎをなさつたのはそれでございます。旦那樣、私は確かに惡いことを致しました。けれどもそれは誰にも有り勝ちの罪なのですから、何卒御赦し下さいまし。私は非常に自分の罪を後悔し、悲しんで居ります。旦那樣の御大事な藥を無駄にしたといふ爲ばかりではなく、其の結果が悲しいのです。その爲に可哀想なルッチエリは、生命を失はうとしてゐるんでございますもの。あの人の無罪は私がよく存じて居りますから、何卒あの人を助けに行かして下さいまし。』

お醫者は女中に對して非常に怒つたものゝ、つい彼女の情事をからかはずに居られませんでした。そして云ふには『お前は當然の罰を受けたのだ。昨夜は頑強な色男を引き入れようなぞと惡い量見を起したから、それでそんな寢坊助を引き込む事になつたんだ。いゝから行つて、出來ることなら其の男の危ない生命を救つてやれ。私はお前の仕たことは赦してやる。だがもう決してそんな男を俺の家へ連れて來てはならんぞ、さうでないと、本當に後悔するやうな目に逢はしてやるからな。』

之はよい幸先と女中は大層喜びまして、直ちにルッヂエリの牢屋へ行きまして、役人を說いて彼と內

密な會見を許されました。夫人の名譽を傷けないで彼を救ひ出すに就て、彼の述べ立てべきことを云ひ含めてから、彼女は一人で奉行の許へ參りました。奉行は非常に彼女の容貌に心を惹かれまして、申立てを聞く前に先づ一種の好感を持ちました。女中は自分の使命を成功させる爲に、いろ〳〵に骨を折りまして、やつと彼の願ひを容られました。それが濟んでから彼女は、ルッヂエリは盜賊として捕縛されてゐるけれ共、決してそんな者ではないと告げました。それからマッゼオ先生に話したのと同じことを話して、餘りよく眠つてゐたものですから私は死んでゐるとおもつて、厄介逃れに彼を箱の中に入れたのです、と云ひました。次には例の大工と、もう一人の男との話の模樣をはじめから語りまして、彼女の戀人の入つてゐた箱を、高利貸共が彼等の家に持つて行つたのだといふことを、奉行に呑み込ませました。

奉行は唯つた今娘が彼に親切であつた如く、自分も娘の爲に盡してやらうと思ひまして、外科醫を呼んで、魔睡劑を調製したかどうかと尋ねました。勿論マッゼオはしたと答へたのです。そこで箱の持主の指物師と高利貸とが召喚されました。そして手間をかけて嚴重に取調べた後、確かに高利貸が箱を盜んだのだといふことが分明しました。そこで今度はルッヂエリが、昨夜何處で眠つたかと尋ねられました。

『それは何處とも申上げられません。私はマッゼオさんの家へ、女中の處へ泊りに行つたのです。私が

喉が乾くと云つたら女が水を持つて來て呉れたので、それを呑むと眠つて仕舞つたんです。そして朝になつて目が醒めて見たら、あの家にゐて、盜賊として捕へられたのです。それつ切り知りません。」

奉行は其の事件を非常に面白がつて、幾度も彼に繰り返さした後、ルッヂエリを放免して、二人の高利貸は重い罰金を課されました。

ルッヂエリや、夫人及び女中は非常に心配した丈けに、其の喜びも絶大であつたに違ひありません。彼等の戀愛事件は其の後長く續きまして、女中がルッヂエリに數ケ所の傷を付けようと云つたことを幾度も二人は笑ひました。

× × × × ×

其の日の話は何れも淑女達を悲しませたけれ共、ヂオネオの最後の話が彼等を大層笑はせて、悲哀から甦る機會を與へた。王は既に日の沈みかゝつてゐるのを見て、もう自分の主權期も殆んど終りに近づいたと思つた。それ故彼は、不幸な戀人の不仕合せと云つた樣な悲しい題目を、其の日の慰みの題に選んだことを鄭寧に淑女達に詫びて、それから立ち上つて頭上の月桂冠を取つた。淑女達は彼が誰の頭上にそれを載せるかと興味を以て眺めてゐた。彼は微笑を漏らしつゝ、それをファンメッタの金髮の上に置いて、云つた。

『今日の悲しい遊びに對して淑女諸君に埋め合せをして上げるには、あなたが一番と思ひまして此の王冠をあなたに譲ります。』

フャンメッタの金髪は、美しい捲毛となつてしなやかな白い肩に垂れ下り、その卵形の顔は、恰かも薔薇と百合を混ぜたやうに白くて紅味をさしてゐた。眼は鷹の眼のやうに明るかつた。彼女は今まで二枚の美しい珊瑚の唇で閉ざされてゐた、可愛らしい小さな口を開いて、にこやかに云つた。

『フィロストラト様、わたくし喜んで御受けを致します。そしてあなたの今日なすつたことが良き効果を現はすやうに、私は明日の題目を、戀人がいろ／＼な困難に逢つた後、望みを遂げて幸福になる、といふことにします。何卒この話題に對して皆様用意して置いて下さいまし。』

人々は之に賛意を表した。そこで女王は執事を呼んで何かの用務を命じた。それより皆が立ち上ると女王は夕食まで隨意に遊ぶ許しを與へた。或る人達は幾ら見ても見飽きない花園へ行つた。他の人達は庭園の外で廻つてゐる水車の處へ行つた。又或る人々は思ひの儘に其方此方(そちこち)に散らばつて遊んだ。やがて夕食時になると紳士淑女は例の通り噴水の邊りに集まつて、上等な晩餐を樂しく食した。それより彼等は唱つたり踊つたりした。フィロメナが踊りの指揮をしてゐる時、女王は云つた。

『フィロストラト様、私は今までの方々の例を破る積りはありませんから、今晩も例の如く一つ唄をお

願ひしたいのです。併し私は、あなたの御唄が今日の御話同樣悲しいものだといふことを知つて居りますから、又もや長く私達の心を悲ませないやうに、最も面白いのを選んで頂きたいのでございます。」

フィロストラトは承諾して、次の如く唱つた。

唄

合唱

私ほど、憐れなものは又とない、
戀に裏切られた私ほど。

今こそ私は彼女のことを、惡くは云つてゐるけれど、
かくも哀れに傷ついた、私の心が彼女に對し、
始めて戀を感じた時は、
死ぬほどの惱みをも、
何とも思つてゐなかつた。
後には最も不實な女と分つたが、

其の時は、飽くまで完全に見えたので。
けれど、あゝ！　間違ひに氣付いた時はもう遲かつた。
　私ほど憐れなものは又とない、
　戀に裏切られた私ほど。

それは何故(なぜ)？　唯一(ゆいいつ)の望み、唯一(ゆいいつ)の
喜びだつた彼女から、私は欺かれたから。
深く愛されてゐた其の時は、
私ほど安心で、幸福者(しあはせもの)はなかつたのに。
昔の凡ゆる約束をかなぐり捨てゝ、
戀の敵(かたき)の誇りをば、慰めようとて行つてしもた。
　私ほど、憐れなものは又とない、
　戀に裏切られた私ほど。

戀に敗北してからは、
美しすぎる彼女の顏が、
私の心を恍惚と、最初に奪つた其の日をば、
私は歎き呪つてゐる。
信じ易く、戀し易い私の心は、
無限の悲みの源（もと）となつた。
　私ほど憐れなものは又とない、
　戀に裏切られた私ほど。

私の心にあるものは、
あんまり大きな悲みだ、
如何にしようと慰まれぬ、
安息の來るのは唯死のみ。
私の凡ゆる悲みが、終るのは其の時だ、

デカメロン

確かな、長い休息の來るのは。
　私ほど憐れなものは又とない。
　　戀に裏切られた私ほど。

私の苦痛を休めるには、
他に何にも術はない。
けれど、あゝ！　此の兩眼の閉ぢる時、
戀した女の胸中に、
何の惱みも起らぬやう、
永遠に幸あれ彼の女に！
　私ほど憐れなものは又とない、
　　戀に裏切られた私ほど。

けれども私の死ぬ前に、

親切なキューピッドよ、彼女の耳に知らしておくれ、
この數々の私の惱みは、
みんな彼女のお蔭だと。
恐らく彼女は今までの、態度を後悔するだらう、
そうして遂には私の戀に、やさしい報ひをするだらう。

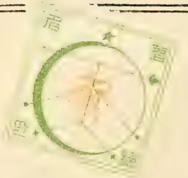
私ほど憐れなものは又とない、
戀に裏切られた私ほど。

此の唄の文句は、明かに唄ひ手の感情を表白してゐた。踊つてゐる或る婦人は顏を赤くしたが、それは夕暮の爲に隱れて、人々の目には立たなかつた。この舞踏が終つても、尙ほ人々は暫らく唄つたり踊つたりしてゐたが、やがて就寢時となつたので、女王は解散を命じた。そこで紳士淑女は各自の部屋に退いた。

上巻終り

大正十二年四月十二日印刷
大正十二年四月十六日發行

デカメロン
定價金貳圓五拾錢



譯者 大澤貞藏

發行所 東京市麹町區飯田町一丁目二番地
株式會社 天佑社
電話九段(長)一一七三番
振替東京一〇二二八番

發行者 東京市小石川區諏訪町五番地
日岐久次郎

印刷所 東京市神田區三崎町三丁目一番地
友文社

印刷者 東京市神田區三崎町三丁目一番地
檜山定吉

各巻撰擇隨意

モオパッサン全集

美貌の友（ベラミイ）

廣津和郎譯

四六大判絹布裝五三〇頁
定價二圓六十錢送料十九錢

（第五拾版）多年の禁止解けて人氣湧くが如し

第貳編（七版）前田晁譯

生の誘惑

或る特異の社會に身を置かれたる處女が幾多の情波に掀飜せられ遂に生の誘惑に身を委ぬるに至る心理狀態を描寫せるモウパッサン作品中有數の傑作なり。

紙數五〇〇
定價金貳圓九拾錢
送料金拾七錢

第參編（四版）矢口達氏譯

戀の力

中年の畫家と伯爵夫人との戀を描き其矛盾の性態を寫し夫人の容色衰ふに及んで更に其の令孃を戀ふるに至る徑路を描寫せる有名なる大長篇にして五大長篇中の傑作なり。

紙數三六四
定價金貳圓六拾錢
送料金拾七錢

第四編（四版）宮島新三郎譯

狂へる戀

本卷は中篇程度のもの狂へる戀外拾九篇を輯む何れも微妙なる心理を深刻に解剖し人間の奧底深く潛める愛慾を描破して戰慄せしむ就中狂へる戀アルマ等最も深刻を極む。

紙數四五〇
定價金貳圓八拾錢
送料金拾七錢

第五編（三版）吉江孤雁氏譯

水の上 虐げらるゝ女

現實の世界に失望し之に對する嫌惡の情を披瀝せる有名なる傑作は水の上なり、虐げらるゝ女は原著脂肪の塊と題せる彼が出世作にして肥滿女の行爲を寫して機微を穿つ。

紙數三七二
定價金貳圓七拾錢
送料金拾七錢

第六編（三版）矢口達氏譯

戀の謝肉祭

本篇集むる處總て貳拾九篇戀の謝肉祭は小間使が公爵夫人の假裝に匿れて性的戀愛の遊戯に溺るゝ事を描く其他の諸篇皆偉大なる創造力を證するに足る。

紙數四八四
定價金貳圓八拾錢
送料金拾七錢

第七編（三版）田中純氏譯

湯の町の戀

大膽なる筆致と描寫の奔放なる點に於て美貌の友（ベラミー）を凌駕すと評せらるゝ長篇にして自然主義の極致を發揮し人間の奧底を描寫して戰慄を感ぜしむる大長篇なり。

紙數四〇〇
定價金貳圓七拾錢
送料金拾七錢

第八編（三版）
中村星湖氏譯

我等の心

モ氏最後の長篇小說にして英國にて「女の戯れ」と題し、倫敦の紙價を高からしめたるものダンヌッオの死の勝利は本書を粉本とすと傳唱せらる。

紙數　二九四
定價金貳圓四拾錢
送料　金拾七錢

第九編（三版）
矢口　達氏譯

寢室の一隅

本書には寢室の一隅、ポールの戀人等人口に膾炙せらるゝ有名なる傑作十數篇を收むモ氏が人生の實想を描寫したる天才的手腕の躍如たるを見る。

紙數　四五八
定價金貳圓八拾錢
送料　金拾七錢

第十編（三版）
矢口　達氏譯

嫉妬（ピエール・エ・シャン）

曾て犯せし姦通の罪に心を苦しめながら一面に於て之れありしが爲めに人生一度の春に遇ひしを喜ぶ夫人の懺悔と兄弟に絡まる不思議の運命を描寫せり。

紙數　四五六
定價金貳圓五拾錢
送料　金拾七錢

第十一編（三版）
平野威馬雄譯

流轉する娘

本書收むる所惣て二十九篇、モウパッサンの眞價益々躍如たり、各篇何れも未だ曾つて本邦に紹介せられざる傑作のみ也。

紙數　四五八
定價金貳圓五拾錢
送料　金拾七錢

第十二編（三版）
安成四郎氏譯

妻の告白

卷頭には卷頭の妻の告白を始めとし婦人は種族を永續せんが爲のみの運命を以て生れたるに非ざる事を其夫に知らしめたる有名なる傑作無駄な美貌等を輯む。

紙數　四四〇
定價金貳圓五拾錢
送料　金拾七錢

第十三編（三版）
平野威馬雄編

罪の肉塊

若き血汐の躍るが儘憧れの生活を送る裡に罪の子生れあり噫罪の肉塊ならざる人果して幾人かある本卷にはモ氏天品の短篇十數に有名なる長篇戯曲ミユソットを添ふ。

紙數　五二六
定價金貳圓七拾錢
送料　金拾七錢

第十四編（三版）
前田　晁氏譯

女の巧み

滾々として大河の流るゝが如きはモウパッサンの短篇なり本卷輯むる所悉く代表的傑作にしてモ氏の眞價値は蓋し本卷に於て遺憾なく發揮されたり。

紙數　四二八
定價金貳圓五拾錢
送料　金拾七錢

第十五編（三版）
谷崎精二氏譯

女の一生
家庭の平和

モオ氏一代の傑作と稱せらるゝ女の一生は谷崎精二氏が譯出せるもの家庭の平和は長篇戯曲にして矢口達氏の譯出に係る他の短篇は從來發表し得ざりしものを收む。

紙數　四五二
定價金貳圓六拾錢
送料　金拾七錢

名著飜譯

ゾラ著　松本泰譯

アベ・ムウレの罪

四六判大形　定價二圓　送料十五錢

持戒堅固の青年美僧朝夕聖壇に祈禱を捧ぐ而も冷き聖壇果して何を齎すか異性の血汐に生て意義ある人生に眼覺めんと血に滲む意志の爭鬪を續け遂に征服し難き大自然力に結末を告ぐゾラの傑作中の傑作也。

ドウデエ著　八木さわ子譯

プチ・ショウズ

四六判大形　定價二圓　送料十五錢

ド氏の名作ル・ブチ・ショウズは佛文學中稀に見る藝術品にして高尚なる滑稽と豐かなる藝術味は家庭小說としても推薦せらるゝ逸品也本書はさわ子女史の流暢の譯筆を以て原文の妙を傳へて餘蘊なし。

ジャック・ロンドン氏著　和氣律次郎譯

强者の力

四六判假綴價壹圓六拾錢送料拾參錢

ジャック・ロンドンは米國が生みし唯一の偉大なる近代小說家である本書に收むる各編は彼が代表作で其天外より來る奇拔の着想と諷刺の鋭さは人々に溢るゝ計りの滿足と感激とを與へるだらう。

クヌート・ハムズン原著　水島直昭氏譯

土地の成長

四六判假綴價貳圓九拾錢送料拾九錢

世界的名譽、權威たるノウベル賞を授與せられし名著にして自然の輝きと其魅力、人の運命、成功と墮落、愛と性慾、宗教と罪惡等人間として避け難きあらゆる問題を深刻に描寫せる傑作小說也。

アルツイバセーフ著　高野槌藏譯

愛の極み

四六判洋布裝價貳圓送拾五錢

深刻なる性慾描寫と、人生に對する懷疑煩惱を最も鋭く描いたものは本篇で、渠がブルジョア文學を厭ふて新寫實主義を建設した代表作である。忠實なる直接譯で、偉大なる藝術的價値は犇と讀者の肺肝を突き刺すであらう。